

22267

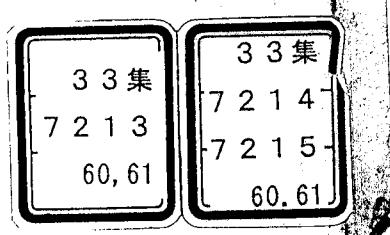
九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

蒲田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

1975

福岡市教育委員会



# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

## 蒲田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集

1975

福岡市教育委員会



れんげ草に囲まれた蒲田遺跡

## 序

本書は、昭和47年4月日本道路公団福岡支社との委託契約にもとづく、東区蒲田地内の九州縦貫自動車道建設に伴う福岡東インターチェンジ内の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

調査に当りましては、日本道路公団関係者の方々をはじめ、関係諸方面の多大なるご協力を得ましたことに謝意を表するものです。

発掘調査は、昭和47年4月から昭和48年8月までの1年5か月の長期間にわたり実施してまいりました。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように旧石器時代から弥生、古墳時代を経て近世に至るまでの包含層、住居遺構、墓地、条里遺構、敷石状遺構、各種遺物等豊富な学術資料を収録した成果報告書を上梓することができました。

本書に収録された資料が永く保存され、広く文化財保護思想の育成に活用されますとともに学術・研究の分野においても役立つことを願うものであります。

併せて年々失われてゆく埋蔵文化財について、なお一層のご理解とご協力を願ってやみません。

昭和50年3月

福岡市教育委員会

教育長 古村澄一

## 凡　例

1. 本書は、九州縦貫自動車道の福岡東インターチェンジの建設に関連して、1972年（昭和47年）4月から1973年（昭和48年）8月までに発掘調査した蒲田遺跡の報告書である。
2. 蒲田遺跡は、福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集の福岡市埋蔵文化財遺跡地名表（総集編）に部木遺跡と登録されているが、部木というのは隣接する部落の小字名であり、甕棺墓等の遺跡の存在が知られているので、今回の発掘調査に際して、遺跡名は大字名をとり、蒲田遺跡とした。
3. 発掘調査は、日本道路公団の委託をうけて福岡市教育委員会が実施した。
4. 本書では、発掘調査の事実報告という点を重視して、多くの実測図を掲載するよう努めた。その結果、記述のページを多少割愛せざるを得なかった。
5. 本書の執筆・編集は、飛高憲雄、藤田和裕、二宮忠司、力武卓治が担当したが、柳田純孝、塩屋勝利、折尾学、山崎純男、柳沢一男らの協力があったことをここに記す。

# 目 次

## 第Ⅰ章 はじめに

1	発掘調査にいたるまで	11
2	遺跡の位置	12
3	発掘調査の経過	14

## 第Ⅱ章 A地区の調査 72/3

1	概要	16
2	旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物	18
3	甕棺墓と土塙墓（第1地点、第2地点）	24
4	蒲田1号墳	72/4 40

## 第Ⅲ章 B地区の調査 72/5

1	概要	46
2	土塙	46
3	旧石器時代の遺物	49

## 第Ⅳ章 D地区の調査 72/3

1	概要	50
2	甕棺墓と土塙墓	54
3	古墳時代の住居跡	79
4	中世の遺構・遺物	94
5	D地区出土の石器	127

## 第Ⅴ章 E地区の調査 72/3

1	概要	128
2	旧石器時代、縄文時代の石器	130
3	土塙	135

72/4 4 蒲田2・3号墳

72/4 5 かけ塚山古墳群出土の遺物

## 第VI章 F地区の調査 72/3

1	概要	142
2	土層と遺構	145

## 第VII章 石器について

## 第VIII章 おわりに

## 図版目次

- P L . 1 (1)蒲田遺跡全景（航空写真—福岡県教育委員会文化課提供） (2)蒲田遺跡遠景
- P L . 2 (1)A地区第1地点全景 (2)甕棺墓出土状況
- P L . 3 (1)第1号甕棺墓 (2)第2号甕棺墓 (3)第3号甕棺墓 (4)第4号甕棺墓  
(5)第6号甕棺墓 (6)第7号甕棺墓
- P L . 4 (1)第1号土塙墓 (2)第2号土塙墓 (3)第3号土塙墓
- P L . 5 (1)溝状遺構内土器出土状況① (2)溝状遺構内土器出土状況② (3)筒形土器
- P L . 6 (1)A地区第2地点全景（航空写真—福岡県教育委員会文化課提供）  
(2)土塙墓出土状況
- P L . 7 (1)第1号土塙墓 (2)第2号土塙墓内磨製石鏃出土状況 (3)磨製石鏃
- P L . 8 (1)蒲田1号墳全景① (2)蒲田1号墳全景②
- P L . 9 (1)蒲田1号墳全景③ (2)蒲田1号墳南北トレンチ東壁断面
- P L . 10 (1)B地区全景（航空写真—福岡県教育委員会文化課提供） (2)遺構出土状況①
- P L . 11 (1)遺構出土状況② (2)土塙
- P L . 12 (1)D地区全景（航空写真—福岡県教育委員会文化課提供） (2)甕棺墓出土状況
- P L . 13 (1)第1号甕棺墓 (2)第2号甕棺墓 (3)第9号甕棺墓 (4)第12号甕棺墓  
(5)第13号甕棺墓 (6)第14・15号甕棺墓 (7)第7・8号甕棺墓 (8)第7号甕棺
- P L . 14 (1)住居跡全景① (2)住居跡全景②
- P L . 15 (1)第1号住居跡 (2)第1号住居跡出土遺物
- P L . 16 (1)第2号住居跡 (2)第2号住居跡出土遺物(Ⅰ)
- P L . 17 第2号住居跡出土遺物(Ⅱ)
- P L . 18 第2号住居跡出土遺物(Ⅲ)
- P L . 19 (1)第3号住居跡 (2)第4号住居跡
- P L . 20 (1)第5・6号住居跡 (2)第7号住居跡
- P L . 21 第5・6号住居跡出土遺物
- P L . 22 (1)南北敷石遺構① (2)南北敷石遺構②
- P L . 23 (1)東西敷石遺構① (2)東西敷石遺構②
- P L . 24 (1)東西敷石北溝 (2)集石遺構
- P L . 25 (1)井戸状遺構 (2)井戸状遺構出土遺物
- P L . 26 D地区柱穴状遺構・出土遺物
- P L . 27 D地区敷石遺構遺物出土状況

- P L. 28 敷石遺構出土遺物( I )
- P L. 29 敷石遺構出土遺物( II )
- P L. 30 敷石遺構出土遺物( III )
- P L. 31 溝状遺構出土遺物
- P L. 32 集石遺構出土遺物
- P L. 33 表土出土遺物
- P L. 34 滑石製遺物
- P L. 35 (1)E 地区全景 (航空写真一福岡県教育委員会文化課提供) (2)E 地区遠景
- P L. 36 (1)E 地区断面① (2)E 地区断面② (3)土塙
- P L. 37 (1)蒲田 2・3 号墳全景 (航空写真一福岡県教育委員会文化課提供)  
(2)蒲田 2・3 号墳全景
- P L. 38 (1)蒲田 2 号墳石室 (2)蒲田 2 号墳墳丘断面
- P L. 39 (1)蒲田 2 号墳墳丘列石 (2)蒲田 2 号墳墳丘出土遺物
- P L. 40 かけ塚山古墳群出土遺物
- P L. 41 (1)F 地区遠景 (2)F 地区発掘区遠景
- P L. 42 (1)No. 1 トレンチ断面① (2)No. 1 トレンチ断面②
- P L. 43 (1)No. 5 トレンチ断面 (2)集石遺構
- P L. 44 石簇( I )
- P L. 45 石簇( II )
- P L. 46 (1)石簇( III ) (2)縦長剥片、横長剥片( I )
- P L. 47 縦長剥片、横長剥片( II )
- P L. 48 折断剥片、切断剥片
- P L. 49 搔器、削器
- P L. 50 (1)Scraper (2)石鋸状石器、揉錐器、彫器、尖頭器、ナイフ形石器、台形石器
- P L. 51 (1)台形石器、彫器、揉錐器 (2)ナイフ形石器
- P L. 52 (1)小石刃、細石刃( I ) (2)小石刃、細石刃( II )
- P L. 53 (1)細石核再生剥片 (2)石核再生剥片
- P L. 54 細石核、細石核再生剥片、石核、石核再生剥片
- P L. 55 磨製石器、石製品
- P L. 56 (1)A 地区出土の繩文式土器 (2)福岡東インターチェンジ全景 (航空写真)

## 挿 図 目 次

Fig. 1	蒲田遺跡位置図（縮尺 $\frac{1}{25,000}$ )	12
Fig. 2	A 地区地形測量図（縮尺 $\frac{1}{1,000}$ )	17
Fig. 3	A 地区土層図（縮尺 $\frac{1}{50}$ )	18
Fig. 4	A 地区土塁状遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{100}$ )	23
Fig. 5	A 地区出土繩文式土器拓影（縮尺 $\frac{1}{2}$ )	23
Fig. 6	A 地区第 1 地点遺構配置図（縮尺 $\frac{1}{100}$ )	折り込み
Fig. 7	A 地区第 1・3・4 号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	25
Fig. 8	A 地区第 2・5 号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	26
Fig. 9	A 地区第 6・7 号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	27
Fig. 10	A 地区第 1・3～5 号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ )	28
Fig. 11	A 地区第 6・7 号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ )	29
Fig. 12	A 地区第 2 号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ )	30
Fig. 13	A 地区第 1～4 号土塁墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	32
Fig. 14	A 地区溝状遺構内土器出土状況図（縮尺 $\frac{1}{15}$ )	34
Fig. 15	A 地区溝状遺構出土土器実測図( I )（縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{8}$ )	折り込み
Fig. 16	A 地区溝状遺構出土土器実測図( II )（縮尺 $\frac{1}{4}$ )	折り込み
Fig. 17	A 地区第 2 地点遺構配置図	37
Fig. 18	A 地区第 1・2 号土塁墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	38
Fig. 19	A 地区第 3～5 号土塁墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	39
Fig. 20	蒲田 1 号墳墳丘測量図（縮尺 $\frac{1}{200}$ )	41
Fig. 21	蒲田 1 号墳墳丘断面図（縮尺 $\frac{1}{50}$ )	42
Fig. 22	蒲田 1 号墳墳丘出土遺物実測図( I )(縮尺 $\frac{1}{3}$ )	43
Fig. 23	蒲田 1 号墳墳丘出土遺物実測図( II )(縮尺 $\frac{1}{3}$ )	44
Fig. 24	B 地区地形測量図（縮尺 $\frac{1}{1,000}$ )	47
Fig. 25	B 地区遺構配置図（縮尺 $\frac{1}{200}$ )	折り込み
Fig. 26	D 地区地形測量図（縮尺 $\frac{1}{1,000}$ )	51
Fig. 27	D 地区甕棺墓・土塁墓配置図（縮尺 $\frac{1}{100}$ )	折り込み
Fig. 28	D 地区第 1～4 号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	55
Fig. 29	D 地区第 5～7 号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	56
Fig. 30	D 地区第 8～10号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	57
Fig. 31	D 地区第11号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ )	58

Fig. 32 D地区第12・13・16号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	59
Fig. 33 D地区第14・15号甕棺墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	60
Fig. 34 D地区第1・2号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{6}$ ）	61
Fig. 35 D地区第4～6・8号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）	62
Fig. 36 D地区第7・9・15号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{12}$ ）	63
Fig. 37 D地区第10・11号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）	64
Fig. 38 D地区第12・13号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）	65
Fig. 39 D地区第3・14・16号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{12}$ ）	66
Fig. 40 D地区第1・2・9・13・16号土塙墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	72
Fig. 41 D地区第6・8・10・12号土塙墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	73
Fig. 42 D地区第2・4号土塙墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	74
Fig. 43 D地区第5・7・11号土塙墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	75
Fig. 44 D地区第14・15号土塙墓実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	76
Fig. 45 D地区第14号土塙墓出土土器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）	76
Fig. 46 D地区第1土塙状遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{15}$ ）	77
Fig. 47 D地区第1土塙状遺構出土土器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）	77
Fig. 48 D地区第2土塙状遺構出土土器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）	78
Fig. 49 D地区第2土塙状遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	78
Fig. 50 D地区住居跡分布図（縮尺 $\frac{1}{100}$ ）	折り込み
Fig. 51 D地区第1・3号住居跡実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	82
Fig. 52 D地区第1号住居跡出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	83
Fig. 53 D地区第2号住居跡実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	84
Fig. 54 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(I)（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	84
Fig. 55 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(II)（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	85
Fig. 56 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(III)（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	86
Fig. 57 D地区第4号住居跡実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	87
Fig. 58 D地区第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	87
Fig. 59 D地区第7号住居跡実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	88
Fig. 60 D地区第5・6号住居跡実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	89
Fig. 61 D地区第5号住居跡出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	90
Fig. 62 D地区第6号住居跡出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{6}$ ）	91
Fig. 63 D地区第II溝状遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{60}$ ）	95
Fig. 64 D地区井戸状遺構出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）	97

Fig. 65 D地区井戸状遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	97
Fig. 66 D地区柱穴出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ ）	100
Fig. 67 D地区柱穴実測図（ $\frac{1}{3}$ ）	100
Fig. 68 D地区敷石遺構出土磁器実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	101
Fig. 69 D地区敷石遺構出土磁器実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	102
Fig. 70 D地区敷石遺構出土磁器実測図（III）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	103
Fig. 71 D地区敷石遺構出土磁器実測図（IV）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	104
Fig. 72 D地区敷石遺構出土磁器実測図（V）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	105
Fig. 73 D地区第I溝状遺構出土磁器実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	106
Fig. 74 D地区第I溝状遺構出土磁器実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	107
Fig. 75 D地区第II・III溝状遺構出土磁器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	108
Fig. 76 D地区集石遺構出土磁器実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	109
Fig. 77 D地区集石遺構出土磁器実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	110
Fig. 78 D地区表土出土磁器実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	111
Fig. 79 D地区表土出土磁器実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	112
Fig. 80 D地区出土陶器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	113
Fig. 81 D地区出土土器実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	114
Fig. 82 D地区出土土器実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	115
Fig. 83 D地区出土青銅製遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	115
Fig. 84 D地区出土滑石製遺物実測図（I）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	116
Fig. 85 D地区出土滑石製遺物実測図（II）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	117
Fig. 86 D地区出土滑石製遺物実測図（III）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	118
Fig. 87 D地区出土滑石製遺物実測図（IV）（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	119
Fig. 88 D地区出土石器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	127
Fig. 89 E地区地形測量図（縮尺 $\frac{1}{1,000}$ ）	129
Fig. 90 E地区石器出土状態図（縮尺 $\frac{1}{100}$ ）	131
Fig. 91 E地区土塙（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）・土塙出土土器実測図（縮尺 $\frac{1}{4}$ ）	135
Fig. 92 蒲田2号墳石室実測図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	136
Fig. 93 蒲田2・3号墳墳丘測量図（縮尺 $\frac{1}{200}$ ）	137
Fig. 94 蒲田2号墳墳丘断面図（縮尺 $\frac{1}{30}$ ）	折り込み
Fig. 95 蒲田2号墳墳丘出土土器実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ ）	139
Fig. 96 かけ塚山古墳群出土遺物実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）	140
Fig. 97 かけ塚山古墳群全景（写真—内海克久氏撮影・提供）	141

Fig. 98	石室（写真一内海克久氏撮影・提供）	141
Fig. 99	F 地区地形測量図（縮尺 $\frac{1}{2,000}$ ）	143
Fig. 100	F 地区トレンチ土層図（縮尺 $\frac{1}{50}$ ）	144
Fig. 101	F 地区集石遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{20}$ ）	145

## 表 目 次

Tab. 1	A 地区出土打製石器一覧表	18
Tab. 2	B・D・F 地区出土打製石器一覧表	22
Tab. 3	A 地区第 1 地点甕棺墓一覧表	33
Tab. 4	A 地区第 1 地点土塙墓一覧表	33
Tab. 5	A 地区第 1 地点溝状遺構出土遺物一覧表( I )	35
Tab. 6	A 地区第 1 地点溝状遺構出土遺物一覧表( II )	36
Tab. 7	A 地区第 2 地点土塙墓一覧表	37
Tab. 8	蒲田 1 号墳墳丘出土遺物一覧表	45
Tab. 9	B 地区土塙一覧表	48
Tab. 10	D 地区甕棺墓一覧表	68
Tab. 11	D 地区土塙墓一覧表	71
Tab. 12	D 地区住居跡出土遺物一覧表( I )	91
Tab. 13	D 地区住居跡出土遺物一覧表( II )	92
Tab. 14	D 地区住居跡出土遺物一覧表( III )	93
Tab. 15	D 地区柱穴計測値表( I )	96
Tab. 16	D 地区柱穴計測値表( II )	96
Tab. 17	D 地区井戸状遺構出土遺物一覧表	97
Tab. 18	蒲田遺跡出土白磁器分類表	98
Tab. 19	蒲田遺跡出土青磁器分類表	99
Tab. 20	D 地区敷石遺構出土遺物一覧表( I )	120
Tab. 21	D 地区敷石遺構出土遺物一覧表( II )	121
Tab. 22	D 地区第 I ・ II ・ III 溝出土遺物一覧表	122
Tab. 23	D 地区集石遺構出土遺物一覧表	123
Tab. 24	D 地区表土出土遺物一覧表	124
Tab. 25	D 地区出土陶器一覧表	125

Tab. 26	D地区出土土師器・瓦質土器一覧表	125
Tab. 27	D地区出土滑石製遺物一覧表	126
Tab. 28	E地区出土打製石器一覧表	130
Tab. 29	蒲田2号墳墳丘出土遺物一覧表	138
Tab. 30	蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覧表	151

## 付 図 目 次

- Fig. 1 蒲田遺跡地形図（縮尺 $\frac{1}{2,000}$ ）
- Fig. 2 蒲田遺跡D地区遺構配置図（ $\frac{1}{300}$ ）
- Fig. 3 蒲田遺跡D地区南北敷石遺構実測図（縮尺 $\frac{1}{50}$ ）
- Fig. 4 A地区I層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 5 A地区I層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 6 A地区I層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 7 A地区II・II上層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 8 A地区II下・III層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 9 B・D地区I・II・III層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 10 D地区I層・E地区I層・F地区III層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 11 E地区I層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 12 E地区II上層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 13 E地区II下層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 14 E地区III層出土石器実測図、石器一覧表
- Fig. 15 蒲田遺跡各地区出土の磨製石器実測図、石器一覧表

## 第Ⅰ章　はじめに

### 1. 発掘調査にいたるまで

九州縦貫自動車道の建設によって破壊される遺跡の発掘調査は、福岡県教育委員会の担当で1969年（昭和44年）4月早々から着手されて現在継続中であるが、すでに資料整理の終了した遺跡の調査報告書は刊行されている。九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財の発掘調査にいたるまでの経過は、1970年（昭和45年）3月刊行の「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」の「発掘調査の端緒と概括」で詳細に述べられているので、ここでは福岡市教育委員会文化課の担当で発掘調査した蒲田遺跡の発掘調査にいたるまでの経過について記述する。

福岡市東区蒲田字北熊にある標高20~40mの台地上には、旧石器時代から近世にいたるまでの各時期の遺跡が存在することは、一部では以前から知られていたようであるが、公にされたのは1971年（昭和46年）4月刊行の「福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集」の「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表」においてである。蒲田遺跡に関するものを以下に表記する。

遺跡名称	遺跡所在地	地形	遺跡の性質	出土遺物	時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包 含 地	細石器、細石核、ナイフ形石器	旧石器時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包 含 地	石鏃、石匙、押型文土器？	繩文時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	包 含 地	石鏃、石劍、石斧、石庖丁	弥生時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	散 布 地	土師器、須恵器	古墳時代
柄 墳	蒲田字北熊 582	台地	円 墳	内部主体一横穴式石室	古墳時代
北熊古墳	蒲田字北熊	山 頂	円 墳		古墳時代
部木遺跡	蒲田字北熊 582	台地	散 布 地	青磁器	歴史時代

九州縦貫自動車道関係の福岡県内における埋蔵文化財の発掘調査は、当初から福岡県教育委員会文化課の担当で行なわれてきたが、蒲田遺跡のある台地が九州縦貫自動車道の福岡東インターチェンジの建設予定地になり、また遺跡が福岡市域内に位置しているということで1971年（昭和46年）の12月になって急ぎょ福岡市教育委員会文化課に、その発掘調査の担当を福岡県教育委員会文化課から依頼してきた。これをうけて福岡市教育委員会文化課では、1972年（昭和47年）4月より発掘調査に着手することにした。

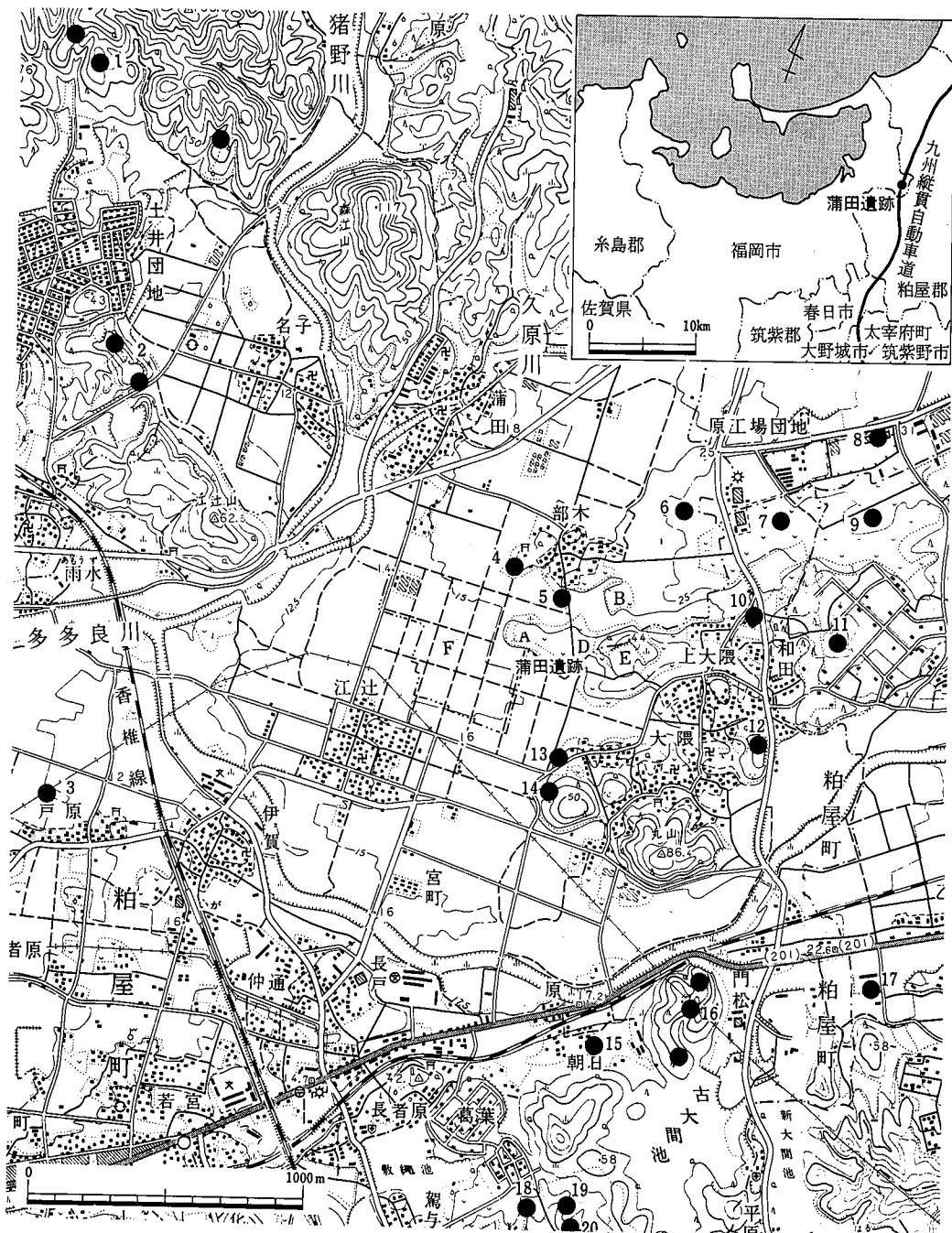
事業主体の日本道路公団からの委託をうけて、福岡市教育委員会文化課では調査組織を下記のように編成し、発掘調査の打ち合わせが4月になってから行なわれた。

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化課

発掘調査担当者 三島格、飛高憲雄、藤田和裕、二宮忠司、力武卓治

事務担当者 石橋博、岩下拓二



1. 湯ノ浦古墳群  
 2. 名子道遺跡  
 3. 戸原遺跡  
 4. 部木八幡古墳群  
 5. 部木遺跡  
 6. 水ヶ元遺跡  
 7. 部木原古墳  
 8. 原遺跡  
 9. 和田・部木原遺跡  
 10. 平塚古墳  
 11. 谷蟹遺跡  
 12. 脇田古墳  
 13. 辻畠遺跡  
 14. 西尾山古墳群  
 15. 葛葉古墳  
 16. 古大間古墳群  
 17. 門松遺跡  
 18. 賀興丁廃寺  
 19. 賀興丁遺跡  
 20. 賀興丁瓦窯跡

Fig. 1 蒲田遺跡位置図 (縮尺 $\frac{1}{25000}$ )

## 2. 遺跡の位置

蒲田遺跡は福岡市東区大字蒲田にあって、福岡平野の東北端に位置している。三郡山地とその西側の山塊から流れ出た川は、多々良川、須恵川、宇美川となって福岡平野の東部を形成している。猪野川と久原川とは、城ノ越山から南にのびる丘陵の南端にある江辻山の東麓において合わさり、江辻山の南側にいたって本流である多々良川と合流して博多湾へと注いでいる。

蒲田遺跡は、久原川と多々良川にはさまれた沖積平野の中の1つの低丘陵上に位置している。遺跡のある丘陵の南方には、標高86m余りの丸山が、北には東から長くのびてきた低い丘陵の末端部があり、そこに部木の集落が形成されている。

丘陵は、標高20~40mで東西約700m、南北は西方で約100m、東方で約300mをはかる。東方の高い山は、かけ塚山と、また西端の低い地域は、りゅうおう（龍王）と呼ばれている。地質学的には第3紀層で形成されており、表土の堆積は薄い。

周辺の丘陵上あるいは水田地帯にある幾つかの微高地上には、各時期の遺跡が存在する。城ノ越山の南には湯ノ浦古墳群が、江辻山の北には名子道遺跡が、蒲田遺跡の北、部木の集落がある低丘陵の西端には部木八幡古墳群がある。また東方のプラザー工業敷地内には箱式石棺群、南の西尾山には西尾山古墳群、その北には辻畠遺跡（甕棺墓群）があり、また江辻の集落のある微高地や戸原の微高地においては、細石器なども表面採集されている。

### 3. 発掘調査の経過

調査は、1972年（昭和47年）4月27日に開始した。

旧石器時代、縄文時代の遺物が集中的に採集されている西方の標高20m前後の台地の西半分をA地区、土師器、須恵器、青磁器などが採集されている東半分をD地区に、さらに東方で発掘調査に先立つ現地踏査の結果、旧石器時代、縄文時代の遺物を採集した標高40m前後の通称かけ塚山をE地区、かけ塚山の北側の標高20m前後の台地をB地区とし、発掘調査に先立って、それぞれの地区の地形に合わせてグリッドを設定した。A地区、D地区は8m方眼のグリッドを全地域に通じて設定し、北から南へA、B、C、……、西から東へ1、2、3、……としてグリッドの標式とした。E地区は2m方眼で組み、南から北へA、B、C、……、東から西へ1、2、3、……とした。B地区は8m方眼で組み、西から東へA、B、C、……、北から南へ1、2、3、……とした。A地区の中央部に位置し、かつて柄塚とよんでいたものを蒲田1号墳、E地区に位置し、かつて北熊古墳とよんでいたものを蒲田2号墳、その東方のやや高まりの認められた部分を蒲田3号墳とした。また、台地の西方に広がる水田地帯をF地区とした。

A、B、D、E地区は、平面升目掘で、F地区はトレンチを入れて発掘調査を実施した。発掘調査は、工事の工程との関係もあって、3班編成で行なった。とくにE地区の発掘調査は2回にわたって別府大学の橘昌信講師、考古学研究室の学生諸君によって実施した。

それぞれの地区の所在地と調査関係者は以下のとおりである。

#### 地区所在地

A地区	福岡市東区蒲田字北熊
B地区	福岡市東区蒲田字葉師
D地区	福岡市東区蒲田字北熊
E地区	福岡市東区蒲田字北熊
F地区	福岡市東区蒲田字祝田、字沖田

#### 各地区的発掘調査期間

A地区	1972年（昭和47年）5月8日（伐採開始）～1973年（昭和48年）6月15日
B地区	1973年（昭和48年）6月16日～8月11日
D地区	1972年（昭和47年）5月11日～1973年（昭和48年）6月10日
E地区	1972年（昭和47年）8月15日～8月30日 1973年（昭和48年）3月1日～15日
F地区	1973年（昭和48年）1月16日～2月28日
1号墳	1972年（昭和47年）5月24日（墳丘測量開始）～6月30日
2・3号墳	1972年（昭和47年）7月18日（墳丘測量開始）～8月30日

調査関係者

安部キヨ子 安部国恵 安部サエ子 安部シズ子 安部正一 安部ツチエ 安部利郎 安部知代 安部松代 安部道子 安部ヨシエ 井上駒子 井上信香 井上八重子 内海サト 大山美智枝 小山ツタエ 河辺重夫 河辺チサエ 黒木新之輔 相良文子 篠崎温子 篠崎久助 篠崎末吉 都地キク子 都地作五郎 都地恒子 都地直子 都地房江 都地富美子 都地マサ子 都地マチ子 萩尾ふじの 樋口コマ 樋口ミサオ 部木四郎 光安喜和子 光安貞子 光安紗和子 光安種良 光安利郎 光安弘枝 光安富美子 光安専 光安マツノ 光安宗太 光安ユキノ 光安礼子 山崎チヨ子 荒津孝治 河野徹也 実渕栄治 (久山中学校生徒)

(別府大学文学部考古学研究室)

上村佳典 坂本嘉弘 志津友子 永松みゆき 平ノ内幸治 和田利徳 足立孝徳 飯田直子  
大城慧 大城盛栄 原田保則 橘昌信 (別府大学講師)

(明治大学学生)

島巡賢二 金子真土 小森真澄 原美智子 藤野龍宏 和田むつみ

(地元協力者)

後藤周三 (多々良公民館長) 安部徹生 (蒲田・部木地区区長) 内海知彦 (部木八幡宮宮司)  
樋口久雄 内海克久 光安宗太 都地文夫

(協力者)

株式会社大林組柏屋工事事務所  
福原組

発掘資料の整理は、1973年（昭和48年）11月から1974年（昭和49年）12月28日までおよんだ。関係者は以下のとおりである。

今村淳子 内海サト 杉妙子 土斐崎つや子 野村文江 八藤丸一枝 山口賀津子 山口栄  
山崎チヨ子 山本光子 小水博明

## II A 地区の調査

### 1. 概 要

東西に長い舌状台地に位置し、標高20~21mの高さを持つ。水田面との比高は4~5mをはかる。西の部分、舌状の先端部をA地区とし、東の部分をD地区と名付けそれぞれ担当の調査員により発掘調査を行なった。このA地区は、福岡市埋蔵文化財地名表総集編ならびに国平健三・井上直樹両氏により発表された遺跡であり、調査前のたびたびの踏査でも旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物ならびに古墳1基の確認ができた。このことによりA地区は、旧石器時代の包含層、ならびに縄文時代の包含層を推定し、また国平健三・井上直樹両氏が問題点として取り上げた鈴桶技法と称せられる石刃技法とその石核の層位的、共伴関係遺物の検出を問題点として追求して行く方針をとった。A地区的発掘調査は、昭和47年5月から開始し、8月までを第一次、10月から12月までを第二次、昭和48年5月から6月までを第三次調査とした。調査方法は、1区画8m×8mを1升とするグリッド方式をとり、東西に1~16区、南北をA~H区として升目を組み、第一次にH区画、A・B区画を調査対象として行なっていった。

これによりA~C・10~13グリッドにおいて土塙数基の検出とその下層より石簇・剝片・ナイフ形石器の出土を確認することができた。しかしながら縄文時代の包含層、旧石器時代の包含層は、B-12、C-11という北の部分にしか包含されておらずゆるやかな斜面のみに現存していたものと判断を下した。このためII層上面の褐色粘質土層より各グリッドを4つに区分し10cm単位で一面ずつ掘り下げていく方法をとった。その結果、遺物の広がりはわずかであったが明確な包含層を把握することができた。ただ縄文時代の遺物包含層中には、土器は一片も発見されず、すべて石器のみの出土であることは、注目せねばならない事実として上げておきたい。また他のグリッドでは包含層を把握することができず表土の次に第IV層と考えた花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土に達していた。これは、甕棺の状態、蒲田1号墳の断面図との関係から50cm程度の削平された状態が推定できた。

弥生時代の遺構・遺物は、第二次・第三次の調査で検出したもので、A~C-10~13グリッドでは土塙墓6基、うち2基から石器が出土し、特に第2号土塙墓出土の有茎磨製石簇は、注目された。また台地の最西端部を調査した第三次では、甕棺7基、土塙墓4基が出現した。したがってD地区の甕棺、土塙墓群、A地区土塙墓群と合わせて同一台地に三か所の弥生時代の墓地が位置することが明らかとなった。これらは互いになんらかの関連があったものと思われ同一台地という位置関係に多くの問題が内在、派生するものと考えられる。さらにA地区的甕棺、土塙墓をとりかこむ溝状遺構と出土土器は、弥生時代の葬送を知るうえで多くのことを提示してくれるであろう。

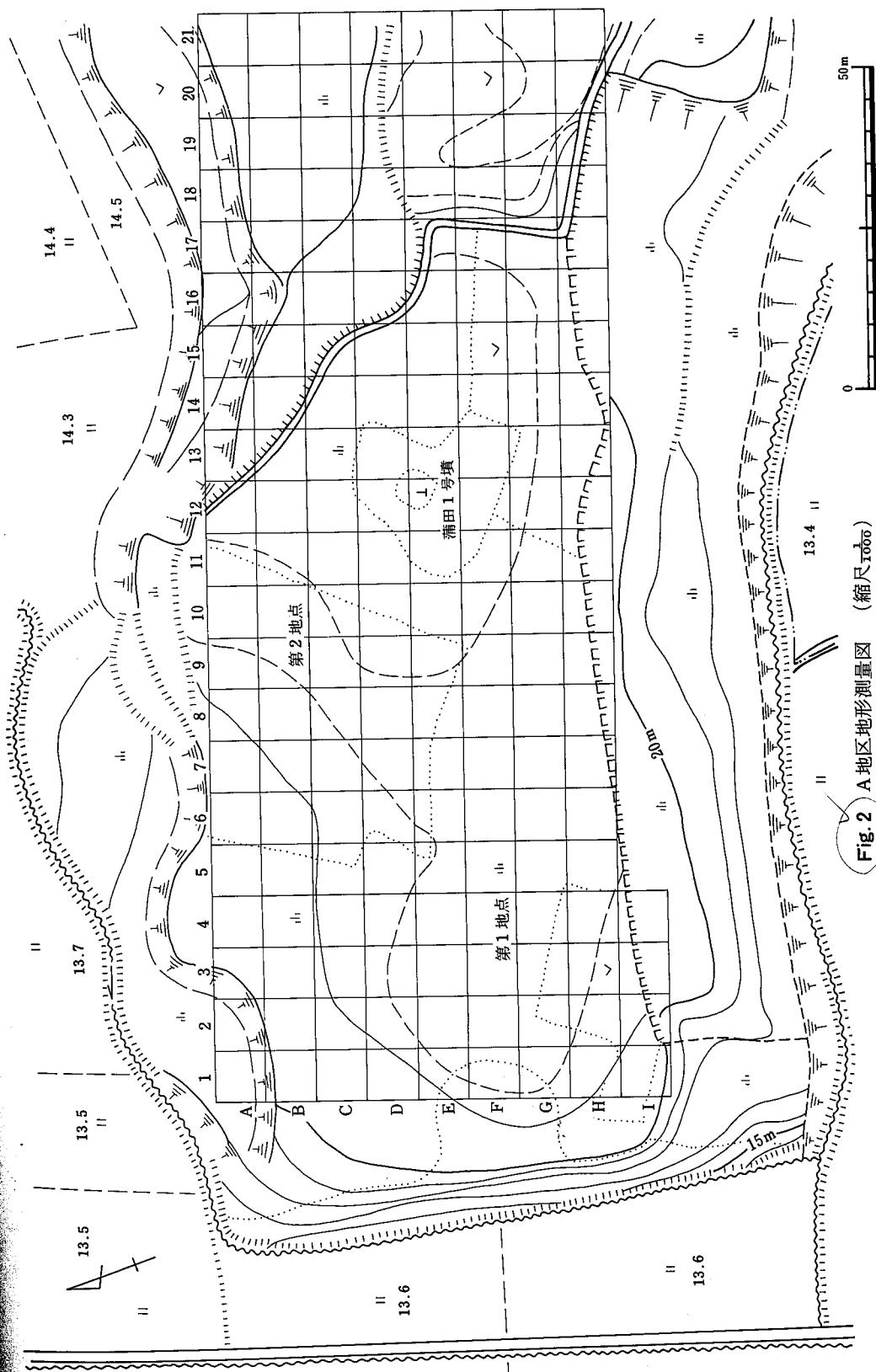


Fig. 2 A地区地形測量図 (縮尺 $1:1000$ )

金木(凸)

## 2. 旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物

### 層位について

概要でも述べたごとくA地区は、50cm程度削平された形跡がある。ただ一部分保存状態のよいB・C-12・13、D・E-8があり、Fig.3(D E-8の断面図)の下段右側の層序が、B・C-12・13でも認められた。Fig.3の上段は、ピット状遺構がありこれはII層上面よりの掘りこみである。

I層は、表土層(耕作土層)15cm、II層が褐色粘質土層20cm、III層が赤褐色粘質土層15cm、IV層が花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土層で、遺物包含層は、II層上面10cmで縄文時代の包含層と考えられる層位であり、II層下面5cm・III層10cmは、旧石器時代の遺物包含層としてとらえることができた。II層の上下の区別でII層下面の層位は、II層上面とIII層上面との接点でありII層とIII層の色土の混り合った感がある。またIII層の包含層は、上面10cm程度。

### A地区出土石器一覧表について (Tab.1)

この表は、打製石器のみの一覧表であり、磨製石器・磨製石製品は、ふくんでいない。磨製石器の出土地点は、付図Fig.15の9・10が、第1地点の溝の中から出土し、11は、1号墳表採品である。13の石庖丁未製品?は第2地点第1号土塙墓の出土、17・18の有茎磨製石鏃は、第2地点第2号土塙墓出土である。打製石器一覧表については、P.22でのべる。

Tab.1 A地区出土打製石器一覧表

器種名 層位	細石刃	細石核	細石核剥片	石核	石核剥再片	ナイフ器	台形様器	彫器	ドリル	石鏃	二工次石加器	scraper	残核	縦剥長片	横剥長片	小石刃	碎片	計
I層	76	3	2	20	2	16	17	7		200	857	25		105	12	28	360	1730
II層上面	32	3	8	1	2	4	2	2		46	189	7		15		5	6053	6369
II層下面	30	4	12	1	18	3	5				7	5		35	3	7	390	520
III層	5	3	10	3	9	2		1	1		13	8		38	6	15	83	197
計	143	13	32	25	31	25	24	10	1	246	1066	45		193	21	55	6886	8816

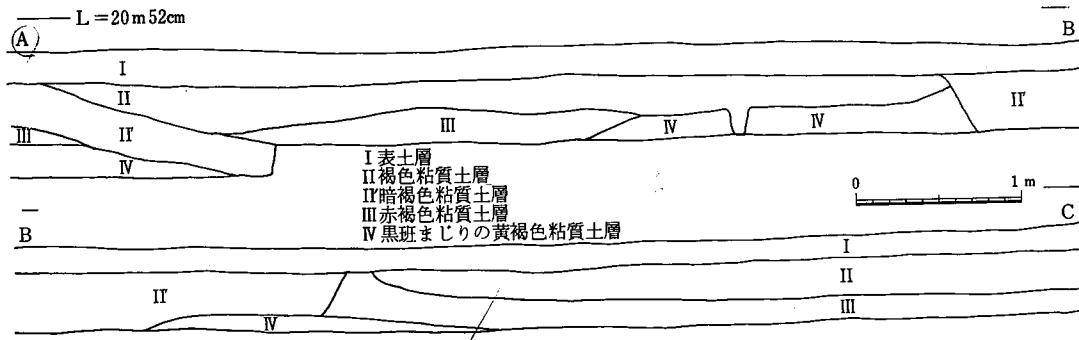


Fig. 3 A地区土層図 (縮尺約1/50)

## 遺 物 (石器について)

### A 地区 I 層出土の石器

A地区 I 層出土の石器は、多種多様の器種・形態・技術を持つ石器が出土している。時期区分では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物が出土し、その点数は、Tab.1に示すごとく数多くの石器が検出できた。しかしながら少量の資料しか図示できなかつたことは、まったく遺憾に思う。ここでは、図示した石器について概略のみにとどめ後日機会があれば資料とともに発表したい。また弥生時代の遺物については、別章で述べることにして、この章では、旧石器時代・縄文時代の遺物についてのべてみたい。

#### 石鏃について (付図Fig.4-1~45)

図示したものは、44点であるが、それ以外に174点出土している。218点の石鏃は形態的に数多く分類が可能であり、この分類は、第VII章で取り扱っているためここではふれることを避けたい。I層の石鏃の時期は、形態的観察と土塙内から出土した土器片からみて縄文早期末から中期にかけてのもので、これだけ多くの石鏃が、1つの舌状台地の一部分だけに出土することは、何かを意味するものであろう。また石鏃の形態で特に注目されるのは、先端部の状態であり、石鏃の使用方法の異なりを考察することが、1つの問題提起となると思われる。

先端部の状態で大別すると3つに分類できる。(1)先端部が丸みを持つ形態(付図Fig.4-19・20・25・26~28)。先端部がまったく尖ることなくなだらかな丸みを持つ。先端部の角度は135度内外である。(2)先端部は尖る形態を持つが、先端部の角度が90度内外(付図Fig.4-5・15・18・21・24)。(3)先端部が鋭利に尖り、先端部角度は、45度内外を示す(付図Fig.4-1~4・7~14・16・17・22・23・29~44)。この(3)は、細分することが可能でその細分基準は、先端部角度が45度内と外とに区別できる。この(1)~(3)の先端部の状態は、腸快式の場合にかぎって考察することができる。つまり対象物に直接ふれる最初の部分であり、鏃の先端部によって対象物が異なることを意味するものであったと推定できる。

#### 尖頭器について (付図 Fig.4-46・47)

46は、黒耀石を石材とした3cm×2cmの小型尖頭器で、一部に自然面を残し大まかな剝離によって整形し、その後先端部と側辺部に細部加工があるが、全体に加えていないために断面は、凹凸のあるレンズ状になっている。47は46にくらべて細部加工が表面に加えてあるが全体に加えていないためレンズ状の形態はするが、凹凸の部分がある。石材は、黒耀石を利用し、先端部・基部の部分に細部加工のある2.5cm×1.5cmの小型尖頭器である。

**剝片 (Fig.4-48~59・Fig.5-1・2) と折・切断剝片 (Fig.4-64・Fig.5-3~11, 38~59)**

剝片は、縦長剝片と横長剝片に区分できる。剝片のほとんどが自然面を持ち、打面は、58をのぞいて平坦打面である。53は、表面と裏面との剥離方向が逆で、これは、上下の打面を持つ石核からの剥離によって生じた剝片である。(石器実測図は付図 Fig. 4 ~ 15)

折・切断剝片は、明らかにその裁断方法が異なり、折断剝片は、Fig.5-38~59の22点で、表面の稜を打点として打撃により折り取る方法を持つ。これに対して切断剝片は、Fig.4-64・Fig.5-3~11の10点で、剝片の側辺にノッチ状の剥離を加えて表面の稜を打点として折り取る方法を持つ。この例としてFig.5-41のノッチ状の剥離は注目されるものである。

**二次加工石器 (Fig.4-62・63・Fig.5-12~16・21~27・29~31・Fig.6-1~4・6) (付図)**

細部加工だけ加えてあるものと側辺部に細かなリタッチのある剝片を二次加工石器とした。

**スクレーパー (Fig.5-17~20・28・32~37・Fig.6-5・7~16) (付図)**

スクレーパーもエンド・スクレーパー (Fig.5-17・32・34・36・Fig.6-7・9~15) と母指形スクレーパー (Fig.6-8)、サイド・スクレーパー (Fig.5-18~20・28・33・35・Fig.6-16) の3つにわけられる。

**ドリル (Fig.6-17~19) (付図)**

先端部断面が、三角形及び梯形であり、縦長剝片を素材とし末端部を加工して鋭利にし、加工はすべて表面からの加工で形成されている。

**小石刃 (Fig.6-20~26) と細石刃 (Fig.6-27~41) (付図)**

小石刃は7点で剥離方向は一方向によるもので、二次加工の加わっているものもある。細石刃は、15点であるが、32は小石刃に組み入れられるものかもしれない。

**彫器 (Fig.6-53~58・Fig.7-12) (付図)**

彫器は、7点出土しているが、1打による彫刻刀面形成が4点と最も多い。

このほかに細石核・細石核再生剝片・ナイフ形石器・台形様石器・石核・石核再生剝片・残核等が出土しているが、これらの石器については、のちほどべる予定であるため除外する。

## A地区II層上面出土石器

**石鏃 (Fig.7-19~27) (付図)**

9点図示したが、このほかに38点の検出がある。形態的には、I層の石鏃と同様にバラエティーがある。土塙内の土器 (Fig.4~5) の時期と同時期の可能性を持つ石鏃である。

**細石刃 (付図Fig.7-32~42) と剝片 (付図Fig.7-28~29・44~46)・台形石器 (付図Fig.7-43)**

細石刃と台形石器をのぞけばII層上面は、縄文時代の遺物と考えられる。これらの石器は、II層上面という10cm掘りの結果であることを明記しておきたい。細石刃11点、縦長剝片4点、横長剝片1点?、台形石器1点でこの台形石器は、素材の頭部を利用し製作している。

### スクレーパー（付図Fig.7—47～53・58）

エンド・スクレーパー（47・52）の2点、サイド・スクレーパー（48～51・53）の5点である。48・49のサイド・スクレーパーは、石質・製作技術から縄文時代のスクレーパーと酷似している。石簇と同様の時期と考えられる。また58の親指形スクレーパーも同様であろう。

### 折・切断剝片（付図Fig.7—54～57）

折断剝片は、55・56の2点、切断剝片も54・57の2点である。すべて縦長剝片を素材とする。

## A地区 II層下面出土の石器について

### 剝片（付図Fig.8—1～6）と折・切断剝片（付図Fig.8—7～13）

剝片は、1が横長剝片で2～6が縦長剝片である。打面は、すべて平坦打面からの打撃剝離である。剝離方向は、ほぼ一方向であるが、3の剝片は、上下の剝離を持つ。

折断剝片（7・11～13）と切断剝片（8～10）とは、すべて縦長剝片を素材としている。

### スクレーパー（付図Fig.8—14～18）と彫器（付図Fig.8—19）

14・15がエンド・スクレーパーで16～18がサイド・スクレーパーである。15をのぞいてすべて縦長剝片を素材としている。彫器は、5打による彫刻刀面を形成している。

### ナイフ形石器（付図Fig.8—20～22）と台形石器（付図Fig.8—23・24）

ナイフ形石器は、2cm内外の超小型に属し、すべて先端部のみにbluntingを加えてある形態を持つ。台形石器は、大型と小型に区別されナイフ形石器も台形石器も縦長剝片を素材とする。

### 石核再生剝片・細石核再生剝片・細石核（付図Fig.8—32・35・37・39：33・34・36：40・41）

石核再生剝片は、明らかに一定の法則を持っていたことを物語るものである。また細石核再生剝片も同様なことが言える。36は残核である。40は、（半）舟底形石核で一方向からの細石刃離面が残る。41は、角柱状の形態を持つもので、良質の細石刃を離面した形跡は認められない。

## A地区 III層出土の石器について（付図Fig.8—42～53）

### 剝片と切断剝片（付図Fig.8—42：43・44）

42は横長剝片であり平坦打面より剝離されたもの。切断剝片は縦長剝片を切断している。

### 彫器とナイフ形石器（付図Fig.8—46：47・48）

彫器は、2打による彫刻刀面を持つ形態。ナイフ形石器は、小型であり、47は横長剝片を素材とし、48は、縦長剝片の末端部を刃部として利用し、胴部をbluntingにより切断。

### 残核と石核再生剝片と石核（付図Fig.8—45：49・52：50・53）

45は細石核の残核と考えられ、再生剝片を剝離した直後のもので、側辺に細石刃剝離面が残存している。これは側面再生剝片を剝離したと観察できる残核で、その目的は、背面と側面にみられる自然面を剥ぎ取るための剝離と考えられる。そのことは、打撃が背面にむかって細

石刃剥離面からのものであることから明確に判断できる。打面は、細部に調整剝離面を持つ2条による平坦打面である。剝離以前は、半舟底形の形態を持っていたことが推定できる。

49の石核再生剝片は、正面を再生するためのものと考えられる。この剝片から推定できる石核は、打面が平坦打面を持ち、剝離方向は、上下の二方向を持つ。この形態等から考えると小石刃か細石刃を剝離する角柱状の石核の可能性がある。52の細石核再生剝片は、側面再生のために剝離された剝片である。それは、側辺に細石刃剝離面を持つことが明らかである。またこの剝片は、上下二方向の剝離方向を持ち、細石核からの剝離は、下位からの剝離によるものである。ただこの剝片が、4 cm程度のものであることから細石核であれば大型の角柱状の石核と考えられるが、むしろ剝片自体を考えるならば石核再生剝片であろう。51は、小石刃で末端部を折断している。50はBlade—coreと考えてもよい石核である。実測図では明らかではないが、上下に一打による平坦面を持ち、剝離面はすべて上位からで下位からの剝離は、みとめられない。また背面にも剝離工程を行なった形跡を持ち、この面も明らかに上下に一打による平坦面を形成し、上位から剝離工程をくり返している。つまり正面観でみられる剝離工程終了後背面における剝離工程を行なって行く方法を持つ。ただここで問題となる点は、下位の平坦打面の目的である。推定できる目的は、剝離する剝片の末端部をあらかじめ規整しておくためのものと考えられる。もう1点は、正面観における上部の細かな剝離面が認められるが、これは、石核としての剝離終了後にその残核を利用してscraperとして再利用した形跡を持つ。

53の石核は、打面が自然面である。この石核の打撃方向は、上位、下位、横位の三方向を持ち、すべて打面は、自然面である。三方向といいう一見不規則の打撃方向を持つこの石核も、1つの剝離順序が観察される。つまり一面につき、左右から中央へのパターン形式の中で、下位から横位へ、次に上位の順で剝離をくり返す1つのパターンを持つ石核であろう。

### A 地区出土打製石器について

A地区出土石器の総点数は、Tab.1 の表で示すごとく8816点とそれ以外にI層から切断剝片20点・折断剝片が145点・尖頭器が2点・不定形の剝片が2481点、II層上面から切断剝片が12点・折断剝片が46点・尖頭器が1点・不定形の剝片 749点、II層下面から切断剝片が4点・折断剝片が22点・不定形の剝片が58点、III層から切断剝片 9点・折断剝片が6点・不定形の剝片が24点出土し総数3,579点で合計12,395点である。

このほかB・D・F地区の出土石器をここで記すことにしたい。

Tab.2 B・D・F地区出土打製石器一覧表

B 地 区	小 石 刃	削 片	細 石 刃	折 剝 断 片	綫 片 長	二工 次石 加 器	石 核	scraper	台石 形 様 器	ナ 形 石 フ 器	計	F 地 区	削 片	石 核	二工 次石 加 器	台様 石 形 器	剝 片	計
I	4	295	2	8		11	1	6	1	1	329	I	1		1		2	2
II上	1	10		2	1	1			2		17	III	5			1	2	8
II下				1	3	1					5	IV		1		1		2
III				1	1						2							
計	5	305	2	12	5	13	1	8	1	1	353		6	1	1	2	2	12

D地区は I層のみ  
 石核再生剝片 1, 小石刃 1, 細石刃 2, 折断剝片 20, 彫器 1, 横長剝片 1, 縦長剝片 2, 二次加工石器 41, 石核 20  
 scraper 4, 台形様石器 2, 不定形剝片 36, ナイフ形石器 2, 削片 69, 石錐 14, 細石核 2  
 計 218

## 土塙状遺構

## A地区第1地点の北側

## 拡張区（D・E—3区）

で検出された不整な長方形に近い土塙状遺構で、長さ 5.2m、幅 1.2m、深さ 40~50cm を測る。押型文土器 3 点が出土したが、遺構の性格は不明。

## A 地点出土の縄文土器

縄文土器は全部で 8 点出土したが、文様のわかる 6 点のうち①~③以外は単独出土である。

①、②はともに粗大な橢円を縦列（右上から左下の方向）へ押捺しているが、規則的でない。器形がやや外反する口縁部片で、胎土に石英粒、砂粒を含み、焼成はもろい。①は内面に横位の沈線を数条施文している。

③は粗い格子目状の押型文土器の口縁部片で、文様は不規則で、胎土、焼成器形とも①、②に近い。器壁は①~③とも 1.0~1.2cm で、上記の遺構から出土した。

④は横位の沈線文を数条施文した胴部片で、胎土に石英粒、砂粒を含み、焼成は堅緻。暗褐色を呈し、外面の沈線文の間には煤が付着している。曾畠式土器の文様構成に類似している。

⑤、⑥は滑石を多量に混入する口縁部片と考えられ、赤褐色を呈し、阿高式土器の胎土に類似する。⑤は渦巻状の沈線による文様、⑥は 2 条の沈線を組合せた文様構成である。

①~③はいずれも口縁がやや外反する早期末の押型文土器、④は文様構成から前期の曾畠式土器、⑤、⑥は胎土、文様から中期の阿高式に含まれる土器と考えられる。

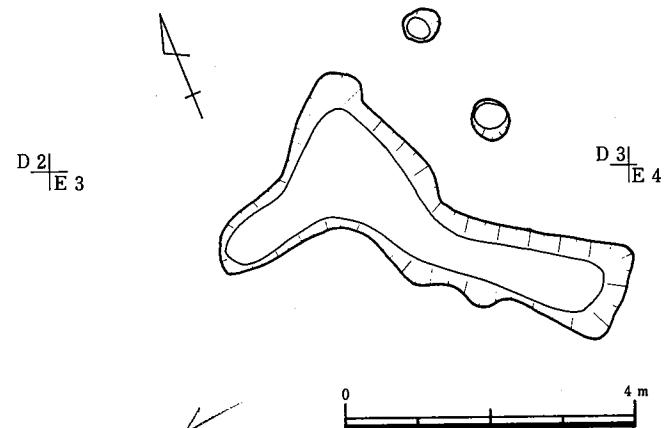


Fig. 4 A 地点土塙状遺構実測図 (縮尺 1/100)

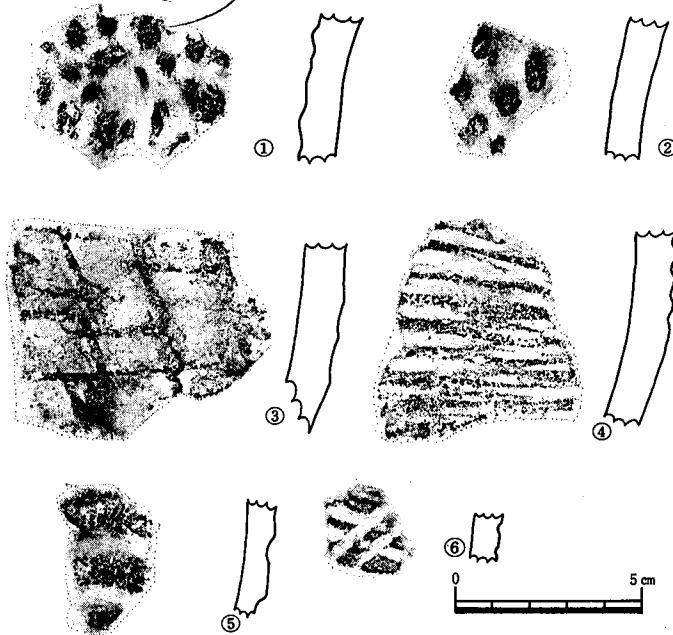


Fig. 5 A 地点出土縄文式土器拓影 (縮尺 1/2)

### 3. 蔊棺墓と土塙墓

#### (第1地点)

A地区第1地点は、台地の最西端部にあり、A地区では第三次調査の昭和48年5月から6月まで発掘調査し、弥生時代の蔯棺墓7基・土塙墓4基（うち1基は、木棺墓）と、弥生時代の遺物を出土するL字形の溝状遺構1条、さらに前述した縄文式土器片を出した土塙状遺構（Fig. 4・5）などを検出した。

検出した蔯棺墓の位置関係や埋置方法については、Fig.6・Tab.3に示すごとくである。L字形の溝状遺構は、すでに削平されているために、かなり浅く、また地形との関係から不明瞭な部分もあるが、すくなくとも蔯棺墓をとりかこんで掘られていることは明らかである。この溝状遺構のほぼ中心に、大型の第2号蔯棺墓が埋置されており、これとほぼ主軸を同じくして、第4号蔯棺墓、第6号蔯棺墓と小児用と思われる第3号蔯棺墓の3基がごく近接して埋置される。第1号蔯棺墓と第5号蔯棺墓は、北へ6～8m離れて位置し、いずれも削平されている。第7号蔯棺墓は、東寄りにもっとも離れて位置する。これら計7基の蔯棺墓はいずれも溝状遺構の内側にある。土塙墓は、計4基あり、第1号土塙墓は、小口の状態から木棺墓と考えられ、第4号土塙墓と2基だけが溝状遺構の内側に位置している。第2号土塙墓と第3号土塙墓は、溝状遺構の溝底あるいはその斜面にあり、溝状遺構より切られた事実を示すものではなく、むしろ溝状遺構と同時期のものと考えた方がより妥当性があろう。

溝状遺構は、幅約5m、深さは最深部で40cmで現在は、かなり浅い。全長は約55mあり、西南側の端部は、現在は崖面となっており、北側は、雑木や耕作でかなり攪乱を受けており明確にできなかった。溝状遺構の出土遺物（Fig.15・16）は、特にG・H-5グリッドより集中して出土し、壺形土器、甕形土器、高杯形土器などの弥生式土器、石庖丁などの石器で多種多様である。これら出土遺物には、丹塗りの土器やY28・29・30のような小型土器やY26のような底部穿孔の土器があり、特にY31の筒形土器の出土は、この溝状遺構の性格、さらには、第1地点の墓地の性格をも決定しうるものであろう。これらの遺構・遺物が発掘調査によって明らかとなつたが、表採、あるいはF地区水田の客土中からも蔯棺片が出土することから、あと数基の蔯棺の存在を考慮する必要があろう。以上第1地点の発掘調査の結果、弥生時代中期中葉頃に第2・4・6号蔯棺墓が埋置され、中期後半にかけて第1・3・5号蔯棺墓、さらに第7号蔯棺墓が埋置され、溝状遺構は、これらの蔯棺墓の埋置と同時、あるいはすくなくとも第7号蔯棺墓の埋置される間に前後して掘られたものであることが、出土遺物からも知られる。また丹塗り土器、小型土器、底部穿孔土器、さらに筒形土器などの遺物は、供獻葬送土器と考えられ、その対象が、特定墓か墓域全体かの問題は別にしても、蔯棺墓が営まれた期間の所産、つまりある一定期間の供獻・葬送の結果として把握できるであろう。

## 1 甕棺墓出土状況 (Fig.7 ~ 9 PL.3)

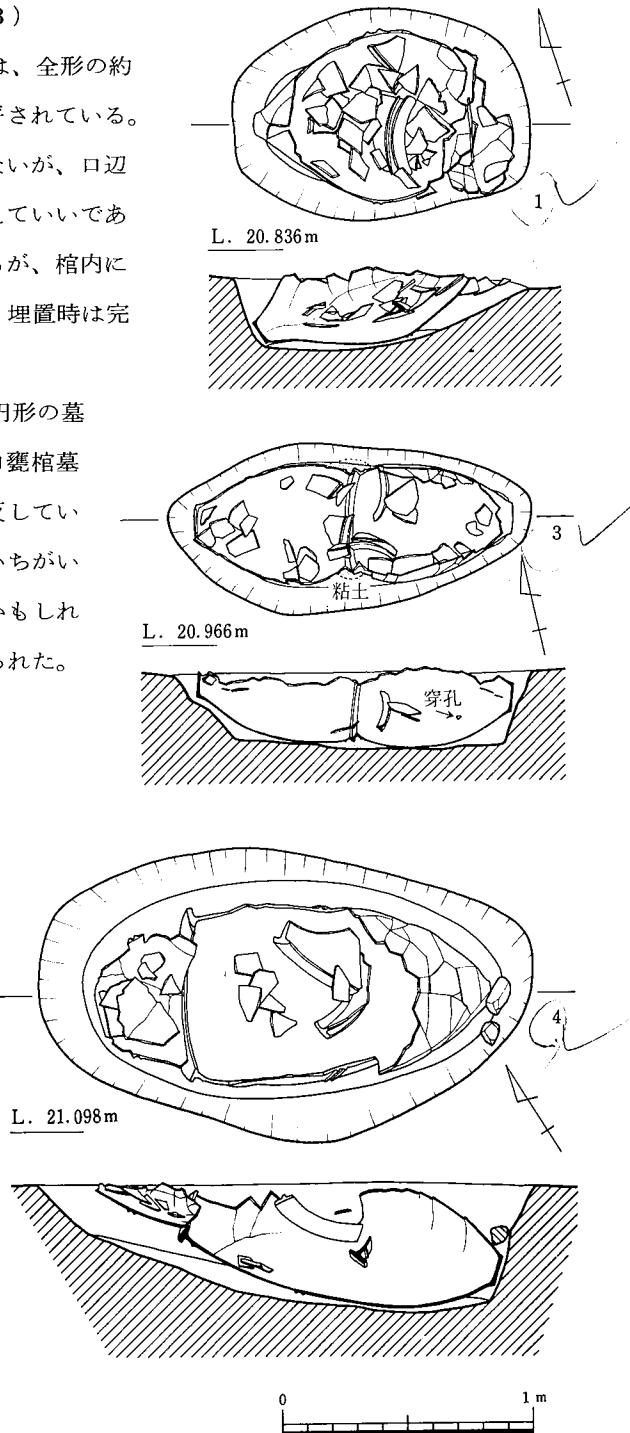
第1号甕棺墓 (Fig.7 PL.3) 現存部は、全形の約 $\frac{1}{2}$ も残っていず、上棺のほとんどが削平されている。上棺は、復原できなかつたので明確でないが、口辺部打ち欠きで覆口式の合口甕棺墓と考えていいであろう。下棺の甕は、口辺部を欠いているが、棺内に口辺部が落ちこんでいることなどから、埋置時は完形であったものと思われる。

## 第3号甕棺墓 (Fig.7 PL.3) 不整橢円形の墓

塙にはほぼ水平に埋置された接口式の合口甕棺墓であるが、口辺部が「く」の字形に外反しているために、いわゆる接口ではなく、互いちがいに組みこまれており、覆口式とすべきかもしれない。この口辺部には、白色粘土がみられた。棺底のやや低い東棺には、胴中位に1孔が穿かれている。本甕棺墓は、その大きさから小児用と思われる。

## 第4号甕棺墓 (Fig.7 PL.3) 第2

・3・4・6号甕棺墓は、ごく近接して埋置されており、第4号甕棺墓はこれらの西寄りに位置し、主軸も大きな差はない。墓塙は、不整橢円形で、上棺部の方の塙底は斜面とし、合理的な埋置の方法をとっている。上棺は、胴部中位の突带上より打ち欠いており、下棺の甕口縁部に合わせておらず、一種の接口式合口甕棺墓と言うことができよう。下棺の甕は、断面T字形の口縁直下には、断面台形状の突帶を1条、胴中位に2条の突帶をめぐらす。上棺は、底部を欠くが、下棺と同じような器制をなすものであろう。

Fig.7 A地区第1・3・4号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

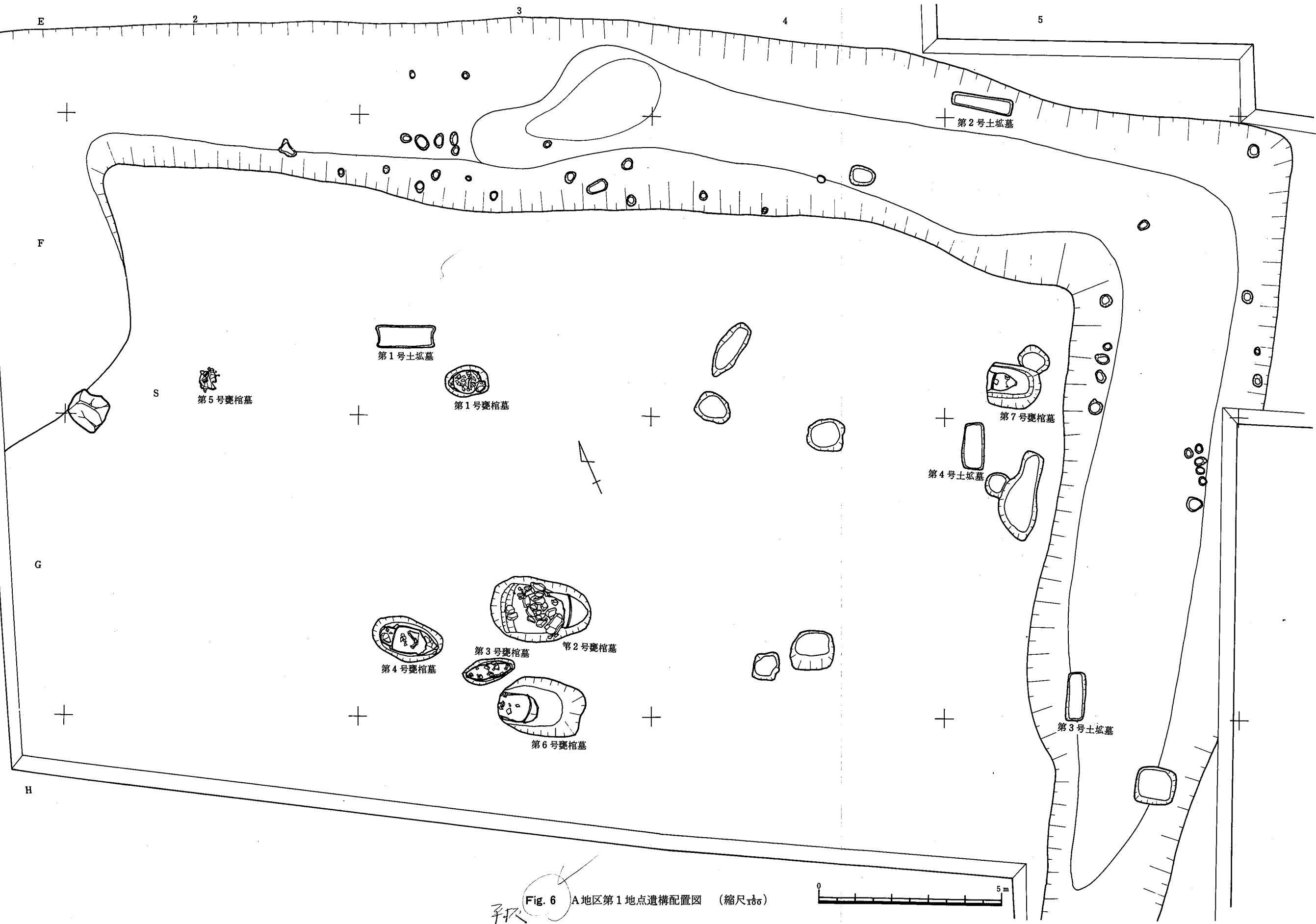


Fig. 6 A地区第1地点遺構配置図 (縮尺 $1/100$ )

手稿  
3枚

## 第 5 号甕棺墓 (Fig.8)

わずかに胴部の一部を残すのみで墓塙や口辺部の位置、あるいは単棺か複棺か明確にすることはできないが、胴部空帶より主軸・埋置傾斜を知ることができる。本甕棺墓は、第 1 地点では、もっとも高い位置に埋置されており、このことから第 1 地点の削平状況が推測されよう。

## 第 2 号甕棺墓 (Fig.8 PL.3)

平面不整橢円形の墓塙は、西側口辺部は階段状に掘られ、東側棺底部は、ほぼ垂直な壁である。溝状遺構内側のはば中央に埋置されており、器高 130cm を越すかなり大型の甕棺で、埋置位置や大型甕棺などは、本甕棺墓が特異な性格を有していたことを考えさせる。また口辺部の石積も例をみない。この石積は、石蓋というよりも、口辺部に粘土が用いられていることから、木蓋などの補強として置かれたものであろうか。

## 第 6 号甕棺墓 (Fig.9 PL.3)

口辺部の位置を、第 2 号甕棺墓とは逆にとり、平面不整橢円

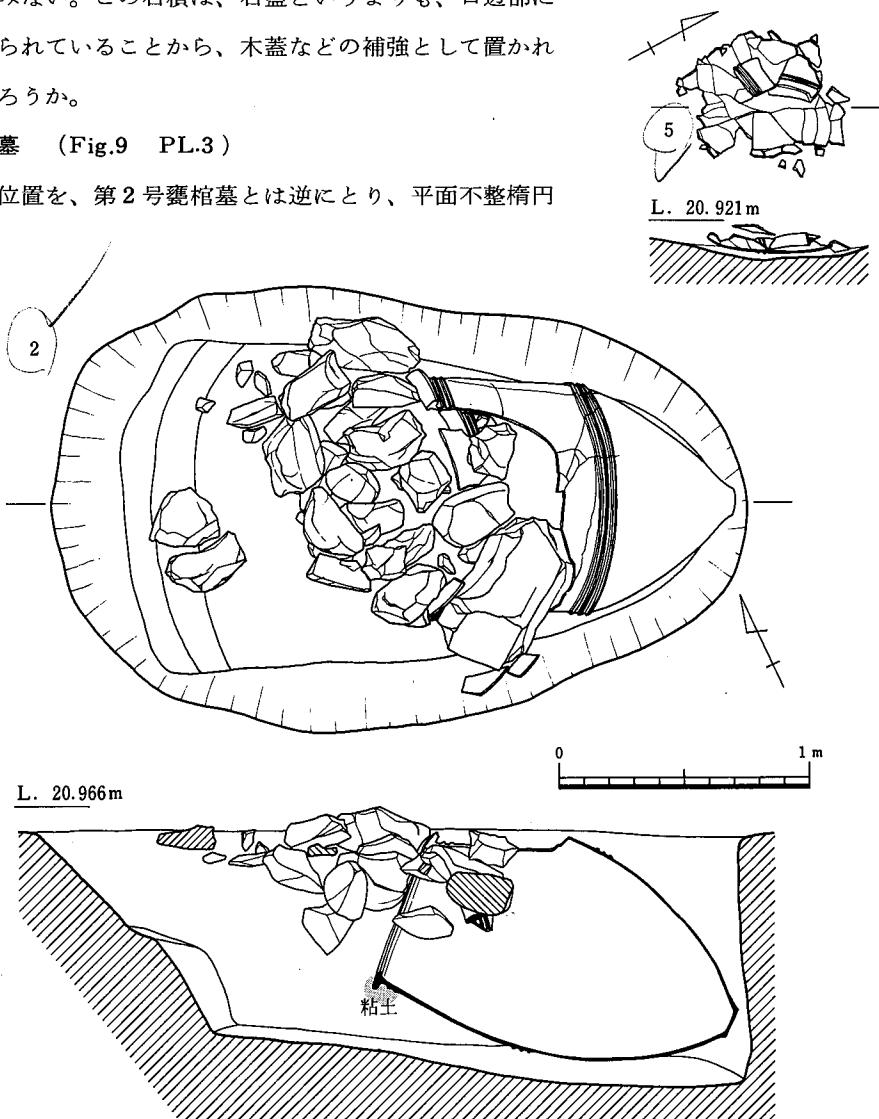


Fig. 8 A 地区第 2・5 号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

形の墓塙は、一部を後世の溝によつて切られているが、ほぼ旧形の状況を示すものと思われ、横穴插入式の埋置方法をとる。上棺は、胴部にややまろみのある鉢を用いており、接口式である。

#### 第7号甕棺墓

(Fig.9 PL.3)

平面隅丸方形の墓塙は、四壁をほぼ垂直に掘り、西

側をさらに横に掘り、下棺を埋置し、上棺の甕を接口式に合わせる。上下棺とも形態の異なる甕で、しかも「く」の字形に外反する口縁をもつが、上下甕の口径は、一致する。

本甕棺墓は、構状遺構内側の西側コーナーにあり、他とは、やや離れて位置し、時期的にも差があり、第1地点では、もっとも新しい時期が考えられる。

第1地点の甕棺墓からは、副葬品、人骨などは検出されなかった。

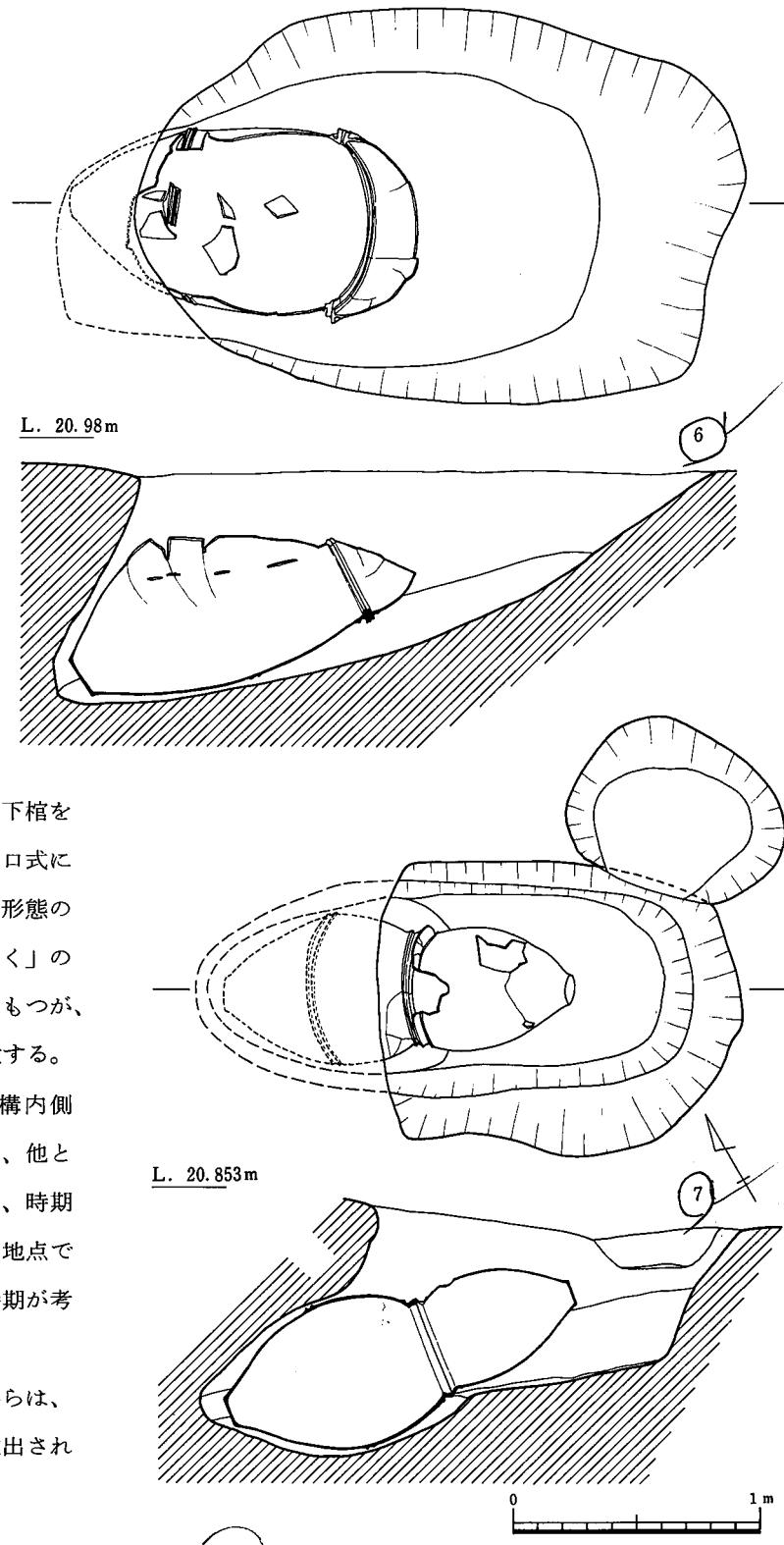
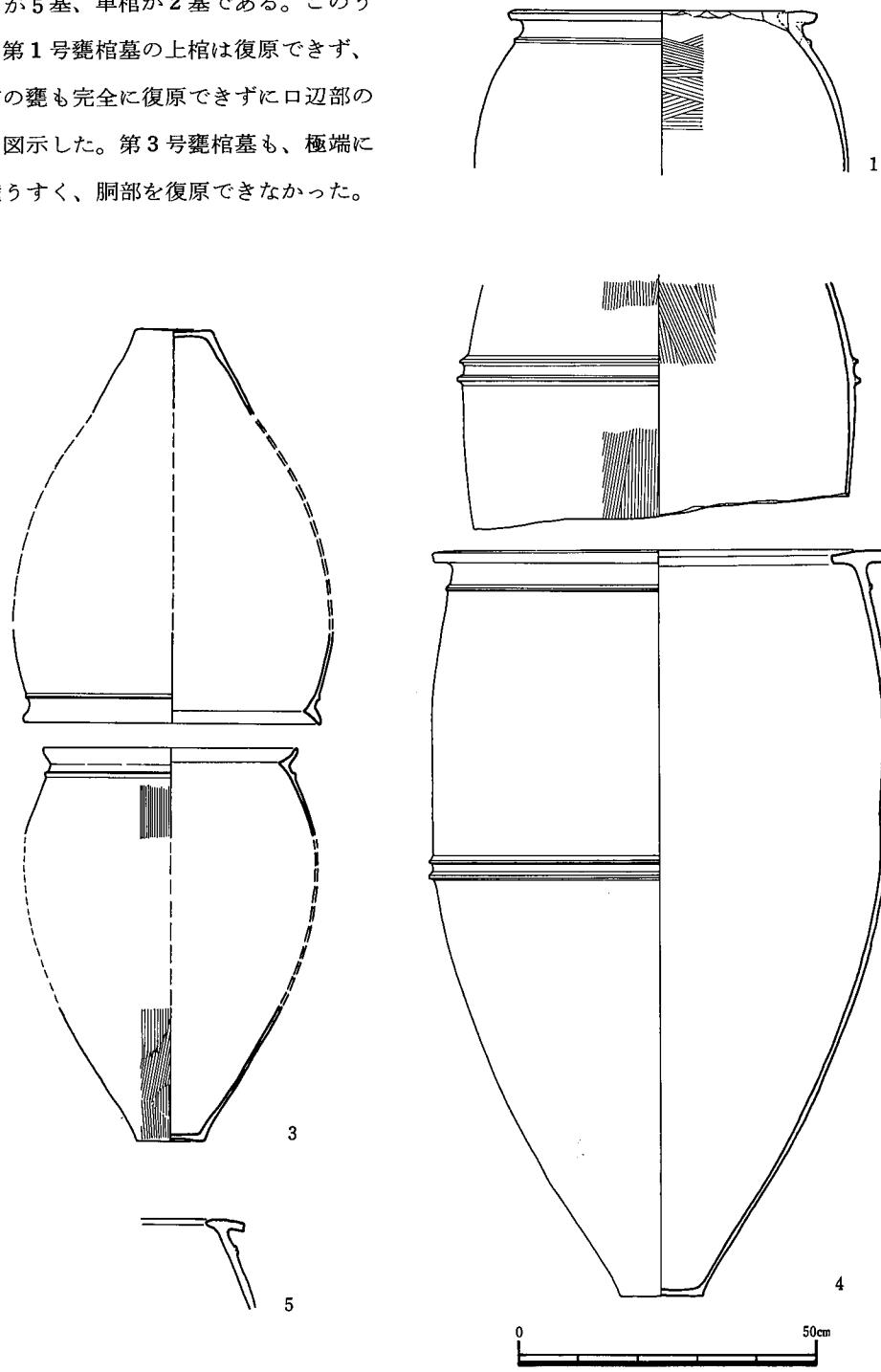


Fig.9 A地区第6・7号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

## 2 出土甕棺 (Fig.10~12)

第1地点での検出甕棺墓は、計7基で複棺が5基、単棺が2基である。このうち、第1号甕棺墓の上棺は復原できず、下棺の甕も完全に復原できずに口辺部のみを図示した。第3号甕棺墓も、極端に器壁うすく、胴部を復原できなかった。

Fig.10 A地区第1・3~5号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

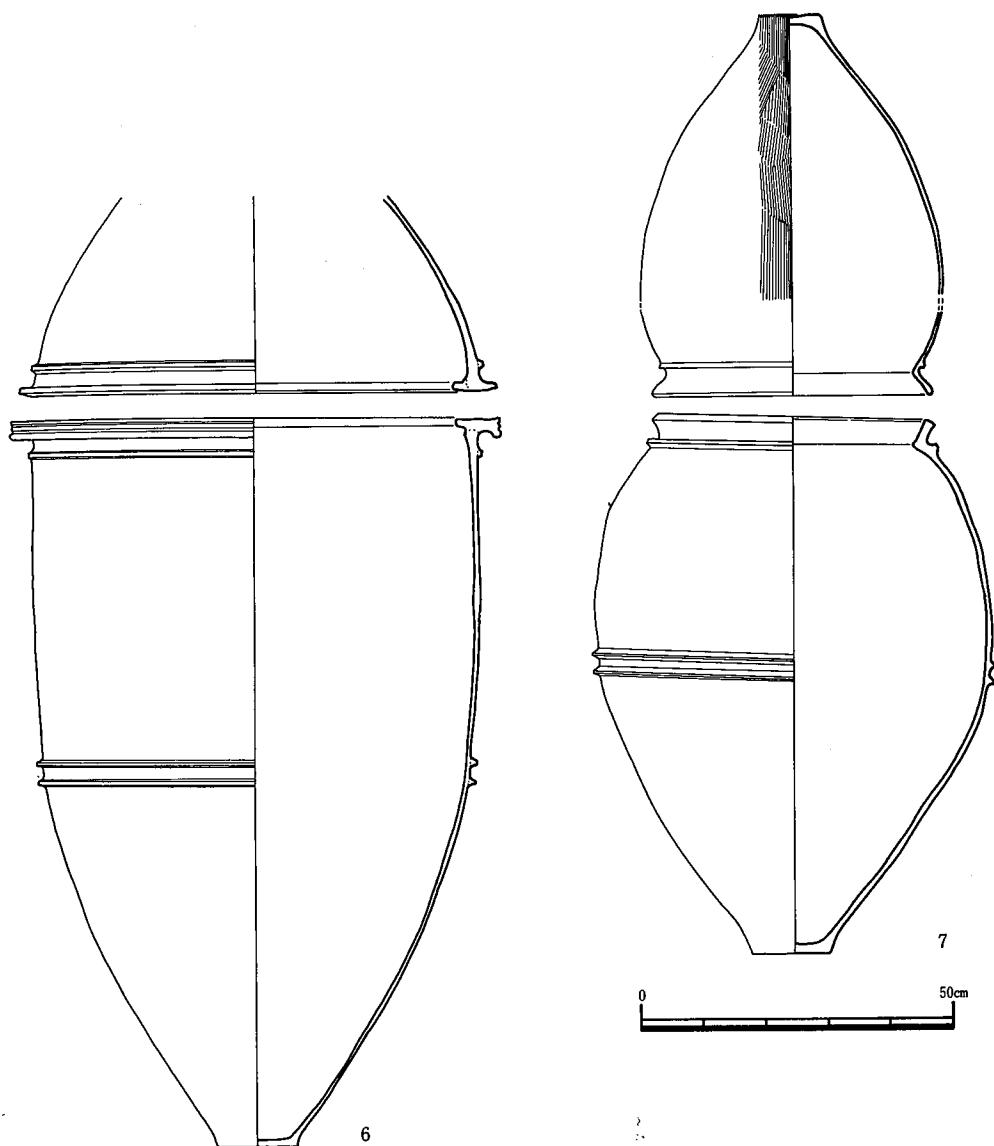
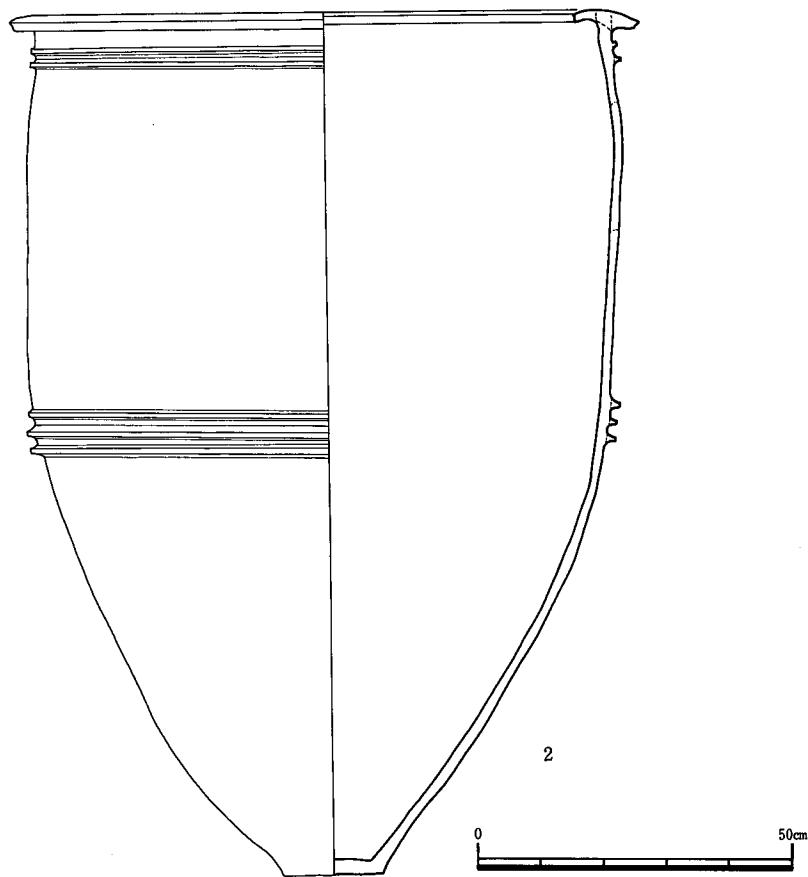


Fig.11 A地区第6・7号甕棺実測図（縮尺 $\frac{1}{2}$ ）

Fig.12 A 地区第 2 号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

## 第 1 号甕棺 (Fig.10)

口縁内側の突出部は、打ちかかれているが、いわゆる逆 L 字形の口縁で、上面は平坦をなすものであろう。口縁下に断面コの字形の突帯をめぐらし、その稜線は鋭い。胴部下半部は複原できなかったが、かなり張るものと思われる。口辺部の器壁厚く、粘土の継ぎ目がよく観察できる。内面は、横方向に粗い刷毛を用いている。赤みをおびた黄褐色を呈す。口径 52cm。

## 第 2 号甕棺 (Fig.12)

口径 100cm、器高 137cm をはかる大型の甕棺であるが、調整は丁寧である。内外唇とも、よく発達、誇張された T 字形の口縁をもつ。口縁下に、断面コの字形の背の高い 2 条の突帯をめぐらし、胴上半部は、張りをみせず直線的にのびる。胴部中位には、口縁下の突帯と同じような断面コの字形の突帯を 3 条めぐらしている。これらの突帯は、器面調整後に、丁寧な横ナデを加えて貼付けていることが、その剝離状況から観察できる。底部は、平底であるが、内面はやや盛りあがっている。外面赤褐色を呈し、胴上部に焼成時の黒斑が見られる。

### 第3号甕棺 (Fig.10)

上下棺の甕とともに器壁うすく、胴部を復原できなかった。下甕は、あげ底の底部から胴部中位よりやや上に最大径をとり、くの字形に外反する口縁へつづく。口縁内面は、まるみがあるが稜を持ち、内彎しながら外方へのびる。口縁直下には、やや上むきの断面三角形突帯をめぐらし、その下部から底部に、上下方向の刷毛目をほどこす。外面茶褐色を呈す。口径42cm、器高約62cmをはかる。上甕は、口径50cmとやや大きいが、器制と同じくする。口縁の突帯は、やや小さくなり、外面磨滅のため調整痕不明。赤みをおびた茶褐色を呈す。

### 第4号甕棺 (Fig.10)

上棺の甕は、胴部上位より打ち欠く。胴部に2条の突帯をめぐらす。突帯断面は、三角形に近いが、まるみをもつ。内外面ともに粗い刷毛目がみられ、特に突帯部は刷毛目のうちに横ナデしている。下棺の甕は、底部から、内彎しながらのびる胴部は、胴部中位から、直線的になり、内傾するT字形口縁へとつづく。口縁の内外唇部は、よく発達し、外唇部は、ぶ厚いつくりをなす。下甕は、口径72cm、器高 125cm、淡茶褐色を呈し、胎土・焼成ともに良。

### 第5号甕棺 (Fig.10)

削平された墓塙に、わずかに胴部の一部を残していたのみであるので復原できず、ここでは、その墓塙に落ちこんでいた口辺部のみを図示する。したがって現存部の胴部と同一個体となるかは明確でない。口縁上面は、平坦面をつくり、内外突出部は、よくのびる。口縁下の突帯と外唇は、断面M字形をなす。砂粒少なく、焼成良好。外面は、赤みをおびた茶褐色を呈し、内外面ともに、ナデ痕のこる。特に内唇下は、横ナデで凹む。口径不明。

### 第6号甕棺 (Fig.11)

上棺は、内外面に発達良好なT字形口縁をもつ鉢形土器が用いられている。口径78cmの口縁は、ぶ厚いつくりをなし、口縁下の、断面コの字形突帯も、幅広くつくられている。胴部は、口辺部より、ややふくらみをもって底部へのびるが、底部欠損のため不明。外面赤褐色を呈する。下棺の甕は、口縁部に特徴を持っている。平底の底部から内彎しながら立ちあがる胴部は、胴部中位より、直立ぎみになり、口縁へとつながる。胴部中位の2条の突帯は、断面コの字形をなす。口縁は、いわゆるT字形をなすが、外唇が、垂直方向に異状に発達し、ここに2条の沈線をいれる。口縁下には、断面M字形の小さな突帯をめぐらす。外面黄褐色。

### 第7号甕棺 (Fig.11)

下棺の甕は、小さめの底部を持ち、胴部は、最大径を中位よりやや上にとり、くの字形に外反する短い口縁につながる。2条の突帯は、胴部中位にあり、断面三角形をなす。口縁内面は、鋭い稜をもつ。外面は、笠状のもので丁寧なナデ調整をほどこす。上棺の甕は、くの字形に外反する口縁部をもつが、口縁端は、まるみを持っておさまり、内面の稜線部も鋭さを欠いている。胴部には、上下方向の刷毛目痕がのこる。

す  
東  
で  
  
よ  
り  
う  
だ  
ま

## 3 土塙墓出土状況

(Fig.13 PL.4)

## 第1号土塙墓 (Fig.13

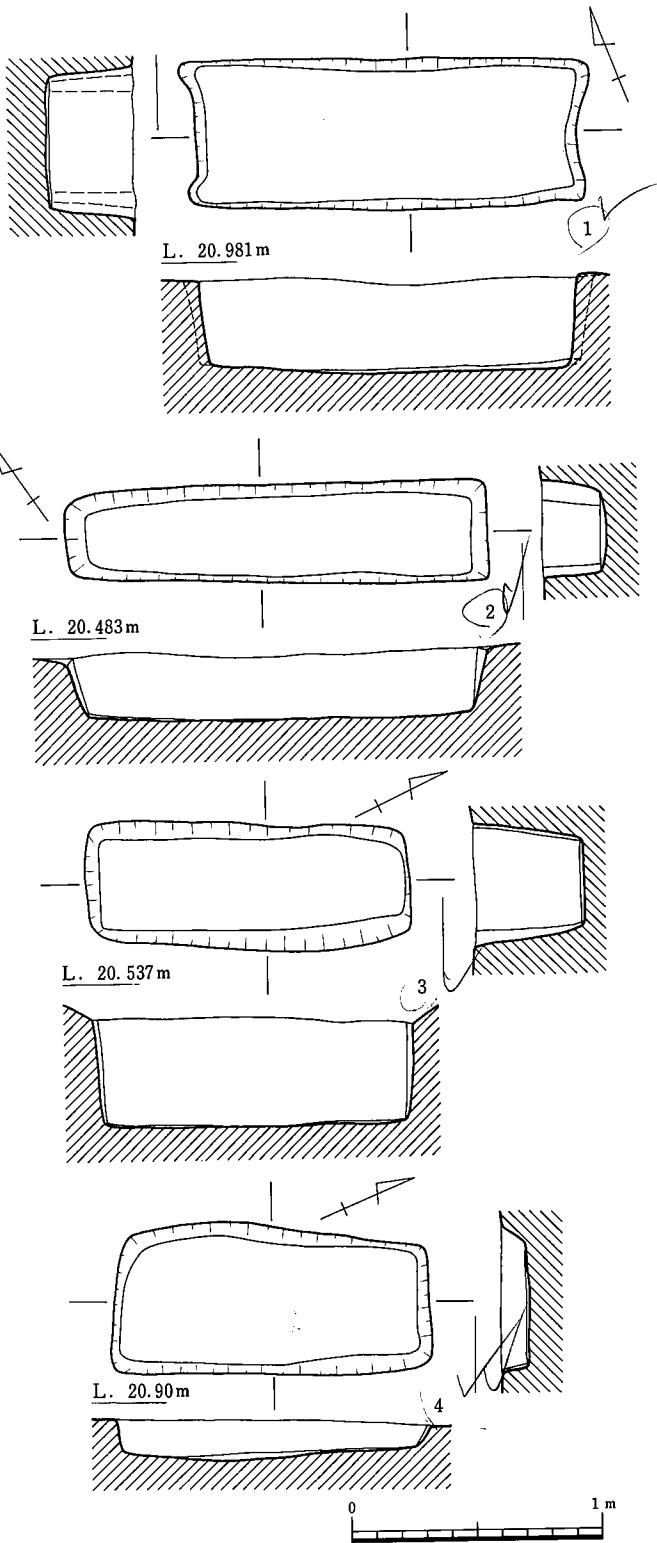
PL.4)

L字状の溝状遺構の内側にあり、第1号甕棺墓と近接して位置する。平面プラン長方形の土塙は、長さ約152cm、幅59cmをはかり、やや西短側（西小口）が幅広いようである。四壁とも、ほぼ垂直に掘りこまれており、塙底は、ほぼ平坦となる。両短側壁の両端は、長側壁にそって掘りこみがみられ、木棺墓側板の痕跡と思われる。小口板の存在は、確認できなかったが、小口板を2枚の側板でおさえる構造が考えられる。

## 第2号土塙墓 (Fig.13

PL.4)

溝状遺構内にあり、第1号土塙墓とほぼ方位を同じくする平面プラン長方形の土塙で、長さ168cm、幅38cmをはかる。東短側が幅広くなっている頭位か。四側壁は、いずれもほぼ垂直の壁を持っており、塙底は、平坦である。現存部は、いくらか削平されていると思われる。

Fig.13 A地区第1～4号土塙墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

## 第3号土塙墓 (Fig. 13 P.L. 4)

第2号土塙墓と同じように溝状遺構内より検出されたものであるが、方位は、ほぼ直角のN-26°-Eをとる。平面プラン長方形の土塙は、長さ 129cm、幅49cmとやや小型である。塙内埋土の上より溝状遺構の土器片が出土することから、すくなくとも本土塙墓は、溝状遺構より新しい時期は示さないであろう。塙底は、平坦で、もっとも深く掘りこまれている。

## 第4号土塙墓 (Fig. 13)

溝状遺構の方向と平行に長軸をとるもので、第3号土塙墓と同一方向を示すが、溝中ではなく、第7号甕棺墓に近接して位置する。平面プランは、長さ 125cm、幅58cmの長方形で、通例の土塙であるが、深さ14cmと掘りこみが浅い。これは、第1地点の第1・3・5号甕棺墓の残存部からみて、かなり上部を削平された状況を示しているものと思われる。

Tab. 3 A地区第1地点甕棺墓一覧表

(単位 cm)

No.	方 位	傾 斜	形 式	土 器	墓 長さ×幅×深さ 塙 塙底レベル	時 期	備 考	Fig.	P.L.
1	N-12°-W	S E-32°	覆口?	甕+?	不整 橋 円 形 118×85×30 20.456m	中 期		7. 10	3
2	N-65°-W	N W-22°	单	甕	不整 橋 円 形 276×170×82 19.846m	中 期	口辺部に粘土	8. 12	3
3	N-77°-W	ほぼ水平	接 口	甕+甕	不整 橋 円 形 145×65×31 20.55m	中 期	上棺の甕に糊痕	7. 10	3
4	N-58°-W	N W-18°	接 口	甕+甕	不整 橋 円 形 196×115×72 20.378m	中 期		7. 10	3
5	N-29°-E	ほぼ水平	不 明	甕	不 明 20.761m	中 期		8. 10	
6	N-42°-W	S E-31°	接 口	甕+鉢	不整 橋 円 形 250×158×78 19.90m	中 期		9. 11	3
7	N-60°-W	S E-16°	接 口	甕+甕	隅 丸 方 形 147×112×103 19.773m	後 期		9. 11	3

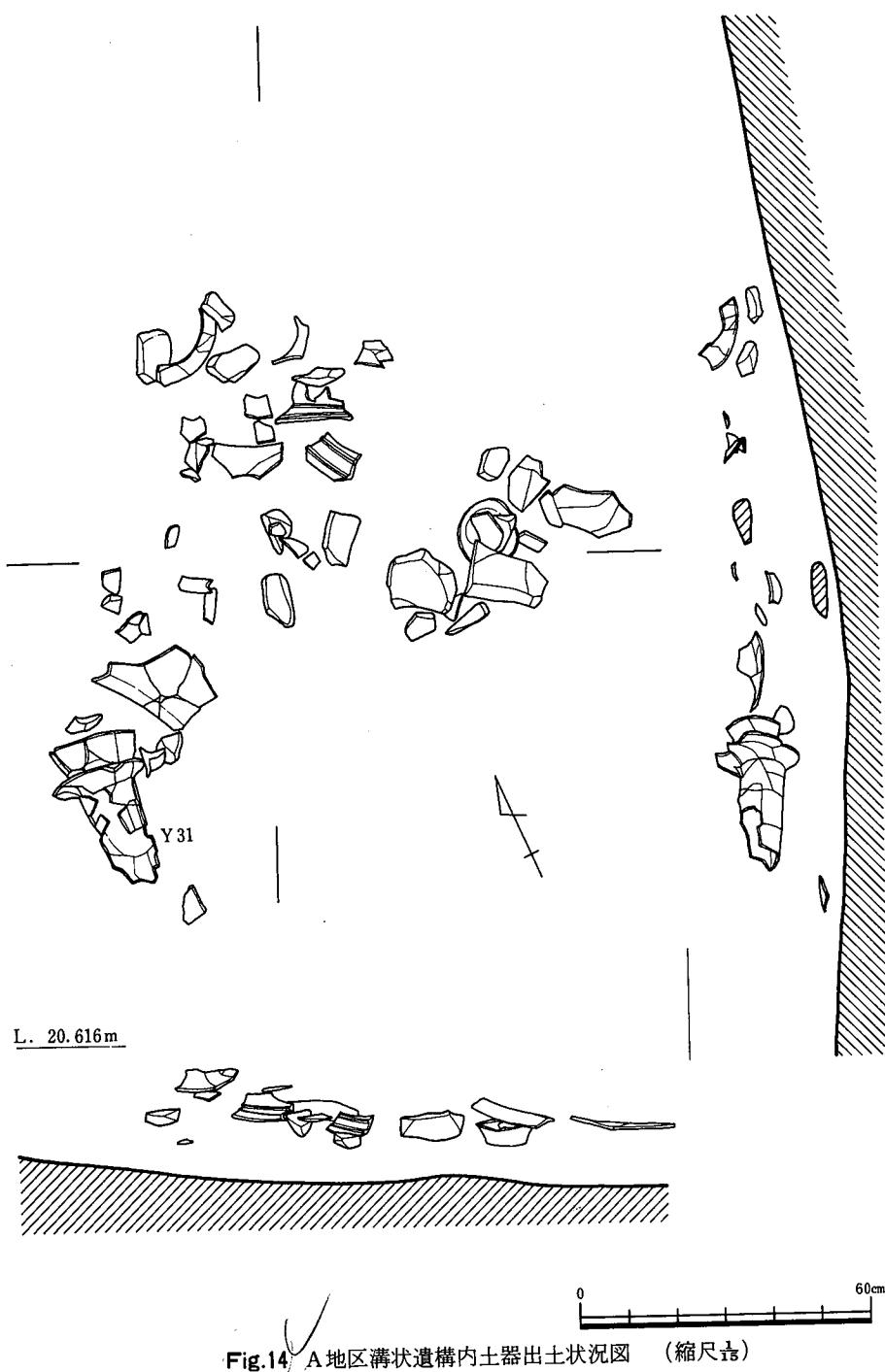
Tab. 4 A地区第1地点土塙墓一覧表

(単位 cm)

No.	方 位	平 面 形	長さ×幅(左・中・右)	深 さ	塙 底 レ ベル	備 考	Fig.	P.L.
1	N-69°-W	長 方 形	152×58・59・56	36	20.531m	木棺か?	13	4
2	N-56°-W	長 方 形	168×33・38・40	26	20.143m	溝状遺構内に位置する。	13	4
3	N-26°-E	長 方 形	129×44・49・39	43	19.967m	溝状遺構内に位置する。	13	4
4	N-24°-E	長 方 形	125×53・58・49	14	20.69 m		13	

## 4 溝状遺構 (Fig. 14 P.L. 5)

溝状遺構は、前述したように、その全貌をついに知りえなかつたが、すくなくとも溝状遺構の外側には、同時期の関連すると思われる遺構の存在はない。溝状遺構内の出土遺物は、土器と石器に限られる。土器、石器は、ともに弥生時代の遺物で、新しい時期の遺物の混在はない。また、これらの土器の示す時期と、甕棺墓の示す時期とには、大きい差は認めがたい。出土土器は、溝状遺構内に分散してはいるが、G・H-5グリッドに集中しており、流れ込みの



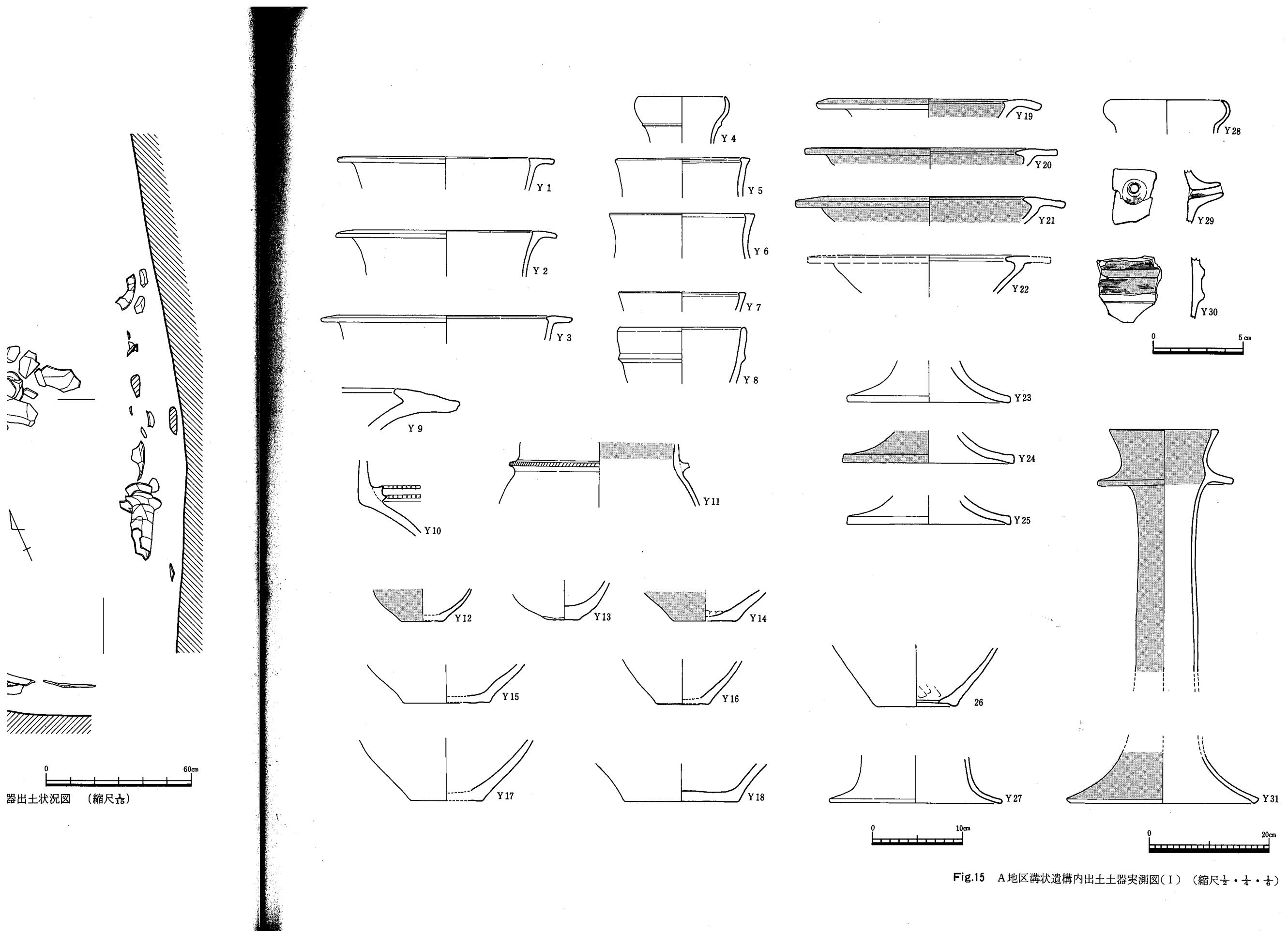


Fig.15 A地区溝状遺構内出土土器実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4} \cdot \frac{1}{6}$ )

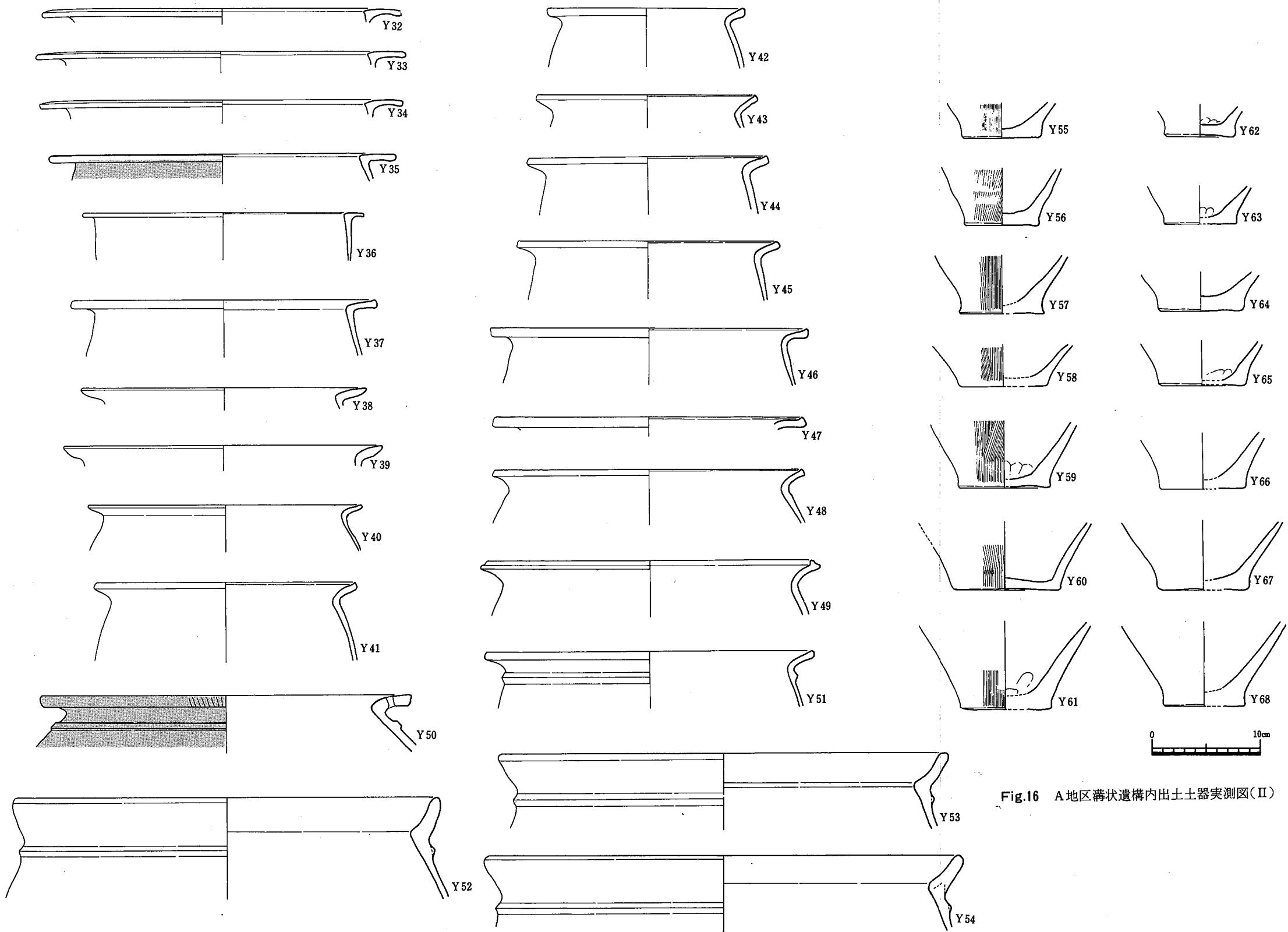


Fig.16 A地区溝状遺構内出土土器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

状態ではなく、むしろ意識的な投げこみ（？）を推測させる。H-5グリッドの筒形土器は、脚部を欠いており、また、底部穿孔土器、丹塗り土器の出土は、この推測を裏付けるものと考えられる。以下、溝状遺構の出土土器について、表にして記す。

Tab. 5 A地区第1地点溝状遺構出土遺物一覧表（I）

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.
Y-1	G-4	壺	口辺部	口径 24	長い頸部に上面を平坦にした口縁部をつける。Y 1・2の頸部は直線的であるがY 3はやや弯曲し口縁部もやや下方にさがる。	内外面ともに砂粒露出	砂粒多い	黄褐色		15
Y-2	G-5	壺	口辺部	口径 24.5		口辺部横ナデ、他は内外面ともにナデ	砂粒、焼成痕	茶褐色		15
Y-3	G-4	壺	口辺部	口径 28		口辺部横ナデ	砂粒、焼成良	黄褐色		15
Y-4	A地区	壺	口辺部	口径 9.6	内側に弯曲したいわゆる袋状口縁をもち、口縁下に断面三角形の突帯	かなりの磨滅をうけ砂粒露出	砂粒 焼成普通	淡黄褐色		15
Y-5	A地区	？	口辺部	口径 15	Y 8以外はいずれも平坦な口縁をもつもので内側にわずかな突出部がある。Y 8は、まるみのある口縁下に三角突帯をつけておりY 7と同様に鉢形の器形となるか？Y 5、6はY 31の口縁部に類似しているが口径にあまりにも差がある。		砂粒多 焼成普通	黄褐色		15
Y-6	F-5	？	口辺部	口径 16			砂粒、焼成良	茶褐色		15
Y-7	F-5	？	口辺部	口径 14		内外面磨滅	砂粒、焼成普通 やや軟質	茶褐色		15
Y-8	A地区	？	口辺部	口径 15		口辺部ヨコナデ	砂粒わざか、 堅緻	淡黄褐色		15
Y-9	G-5	壺	口辺部	口径不明	頸部は大きく弯曲して外方にひろがるものと思われる。	内外面ともに削離、 調整痕不明	砂粒少量 焼成良	黄褐色		15
Y-10	G-5	壺	体部		Y 1～3、Y 9のような口縁部につながる頸部であろう。Y 10は刻み目をもつM字形突帯をつける。	内外面ナデ、M字形 突帯に刻み目	砂粒少量 焼成良	黄褐色		15
Y-11	F-5	壺	体部			内面ナデ、外面横ナデ、コの字形突帯	胎土精良、焼成 普通	淡黄褐色 内面淡褐色	わざかに丹 塗り痕	15
Y-12	G-5	壺	底部	底径 4.6	径の小さな底部に、まるく内に弯曲する体部がつくる。Y 13はややあつみがあるがいざれも袋状口縁をもつものであろう。	外面丹塗り？	砂粒少 焼成良	黄褐色		15
Y-13	A地区	壺	底部	底径 3.5		内面なめらか 底部やくばむ	砂粒少 やや軟質	赤褐色		15
Y-14	G-5	壺	底部	底径 6.8	底径、器壁などに差はあるが、体部への立ちあがりは、内反するようである。Y 18は平底である。	内面ナデ、底部内面 笠状の押圧痕	砂粒、良	赤褐色	外面丹塗り の可能性	15
Y-15	G-5	壺	底部	底径 9.4		内面ナデ、底部内面 周囲は横ナデ	砂粒もつが胎土 精良	赤褐色	外面丹塗り？	15
Y-16	G-5	壺	底部	底径 5.8		内面上下方向のナデ	砂粒、焼成良	赤褐色		15
Y-17	G-5	壺	底部	底径 8.2		内面丁寧なナデ外面 刷毛（？）後にナデ	砂粒	灰褐色		15
Y-18	G-5	壺	底部	底径 12.6		底部平底	砂粒少量 焼成良	黄褐色		15
Y-19	F-4	高杯	口辺部	口径 25	いざれも鋤先状の口縁をもつ。Y 19は上面にまるみがあるが他はほぼ平坦である。Y 19、21は、口縁端が下方にさがりぎみ。	内外面横ナデ	砂粒多く胎土 やや粗い	赤褐色丹塗り 内面のみ		15
Y-20	G-5	高杯	口辺部	口径 28		内外面横ナデ	胎土精良 やや軟質	黄褐色 内外面丹塗		15
Y-21	G-5	高杯	口辺部	口径 30		内外面横ナデ	砂粒少量 焼成良	赤褐色 内外面丹塗		15
Y-22	G-5	高杯	口辺部	口径 27		杯部内面丁寧な横ナ デ	砂粒すくない	外面赤褐色 内面淡赤褐色		15
Y-23	F-4	高杯	脚部	脚径 18	Y 24以外は、丹塗り痕が認められない、脚端部にやや違いがある。Y 25は端部内面を押さえており凹状となる。	外面砂粒露出、内外 面横ナデ	砂粒	茶褐色	丹塗り痕認 められず	15
Y-24	G-5	高杯	脚部	脚径 19		内外面ナデ	胎土精良 焼成良	赤褐色	外面丹塗り	15
Y-25	G-5	高杯	脚部	脚径 18		端部横ナデ	胎土、焼成良	黄褐色	丹塗り痕なし	15
Y-26	G-5	？	底部	底径 9	底部に焼成後の穿孔、わすかにあけ底	底部ちかくに压痕	砂粒、焼成良	暗茶褐色		15
Y-27	A地区	？	底部	底径 19	器台とするには、器體のあつき、径など通例のものと異なる。	内外面ともに磨滅	砂粒、焼成良	黄褐色		15
Y-28	G-5	壺	口辺部	口径 6.2	器壁極端にうすく丁寧なつくりをなす。Y 29、30ともに小型の土器である。	胎土、焼成良	黄褐色		Fig. 15の縮 尺は1/2	15
Y-29	G-4	？	注口	注口径 0.9	注口の長さ 1.9cm	胎土、焼成良	内面淡褐色 外見淡黃褐色			15
Y-30	G-5	？			断面コの字形の突帯をもち丹塗り痕あり。	胎土精良 焼成良	黄褐色			15
Y-31	H-5	器台？		口径 18 器高 48+ $\alpha$ 脚径 32	脚部の途中をぐらかばん形。丹塗り痕認められるが削離はげしい。口縁のつくりはY 5、6に類似	砂粒、焼成良	黄褐色	Fig. 15の縮 尺は1/2	14-15	

Tab. 6 A 地区第1地点溝状遺構出土遺物一覧表 (II)

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.	
Y-32	G-5	甕	口辺部	口径 32	逆L字形の口縁をもつもので上面に平坦部をつくる。内面に稜がはいるが突出部は顕著でない。Y35は「く」の字をなす。	内面稜をもつ	砂粒, 良	黄褐色		16	
Y-33	G-5	甕	口辺部	口径 34		内外面横ナデ	砂粒わずか、焼成良	やや赤をおびた黄褐色		16	
Y-34	G-5	甕	口辺部	口径 33		外面横ナデ	砂粒, 堅緻	黄褐色		16	
Y-35	F-4	甕	口辺部	口径 32		内外面横ナデ, 内面稜線下はやくぼむ	砂粒すくない 焼成良	黄褐色	外面わずかに丹塗り痕	16	
Y-36	H-5	甕	口辺部	口径 25.8		磨滅のため調整痕不明	焼成良	黄褐色		16	
Y-37	F-4	甕	口辺部	口径 28	跳ね上がり口縁と同様に「く」の字形の口縁をもつが、跳ね上がりが顕著でない。Y39, 40はややあつく端部はまるみがある。	外面砂粒露出	焼成良	黄褐色		16	
Y-38	H-5	甕	口辺部	口径 26			砂粒すくない 焼成良	黄褐色		16	
Y-39	H-5	甕	口辺部	口径 29		剥離はげしく原形をとどめない。	砂粒すくないが 3mm大の小石もつ	黄褐色		16	
Y-40	H-5	甕	口辺部	口径 25		内外面とも剥離はげしく調整痕不明	砂粒多し、 焼成良	黄褐色		16	
Y-41	F-5	甕	口辺部	口径 24			砂粒 焼成良, 堅緻	黄茶褐色		16	
Y-42	H-5	甕	口辺部	口径 18	いわゆる跳ね上がり状の口縁をもつもので「く」の字形の口縁をもつもので「く」の字形の口縁をもつY47は、やや平坦ぎみであり、Y49は、跳ね上がりが特に著しい。	口辺部は横ナデ、外 面は丁寧なナデ調整	砂粒すくない 焼成良	茶褐色		16	
Y-43	G-5	甕	口辺部	口径 20.4		内外面ともに丁寧な ナデ調整	砂粒, 堅緻	黄褐色		16	
Y-44	F-5	甕	口辺部	口径 22			砂粒	灰茶褐色		16	
Y-45	A 地区	甕	口辺部	口径 22		内外面ともに丁寧な ナデ	砂粒 焼成良, 堅緻	灰黄褐色		16	
Y-46	A 地区	甕	口辺部	口径 24		口辺部横ナデ	砂粒 焼成普通	淡黄褐色		16	
Y-47	A 地区	甕	口辺部	口径 29		口辺部横ナデ 外面ナデ	砂粒 焼成良	淡黄褐色		16	
Y-48	F-4	甕	口辺部	口径 28.5		丁寧なナデ調整	砂粒 非常に堅緻	淡黄褐色		16	
Y-49	A 地区	甕	口辺部	口径 31		口辺部横ナデ	砂粒 焼成普通	黄褐色		16	
Y-50	A 地区	甕	口辺部	口径 34		口辺に上方からの穿孔、 口縁端に斜めの刻み目	砂粒すくなく 胎土、焼成良	灰黒褐色	外丹塗り	16	
Y-51	G-5	甕	口辺部	口径 32		Y46と同様な口縁である が、跳ね上がりはなくもつ。 口縁下に三角突帯をもつ。	外面磨滅し、調整痕 不明	砂粒多い 焼成普通	淡黄褐色		16
Y-52	H-5	甕	口辺部	口径 39		大型な甕口縁部であつて の口縁部は、内に稜線が はいりやや内弯しながら のび、まるくおさまる。 口縁下に貼りつけの突帯。	調整痕不明	砂粒多い 焼成普通	黄褐色		16
Y-53	H-5	甕	口辺部	口径 41		内外面ともに磨滅し砂 粒露出、調整痕不明	砂粒多い 焼成普通	黄褐色		16	
Y-54	H-5	甕	口辺部	口径 44		調整痕不明	砂粒多い 焼成良	黄褐色		16	
Y-55	G-5	甕	底部	底径 7.4	いずれも外面に刷毛目調 整をしたもので、Y55・ Y56・Y61のように刷毛 目後横ナデを加えた可 能性のあるものもある。 底部は平底とややあげ底 のもの、内面に指または範 様のものの押圧痕が認め られるもの、(Y59・Y 61) 底部外端がやや 突出するもの(Y57・ 59)などの特徴をもつも のがある。	外面刷毛後ナデ?	砂粒, 良	内面黒褐色 外面黄褐色		16	
Y-56	G-5	甕	底部	底径 7.0		外面刷毛後ナデ?	砂粒, 良	内面灰黒色 外面灰黃褐色		16	
Y-57	F-4	甕	底部	底径 7.8		外面刷毛目わざかに のこる	砂粒 焼成普通	黄褐色		16	
Y-58	G-4	甕	底部	底径 8.2		外面刷毛目	砂粒, 良	赤黄褐色		16	
Y-59	G-5	甕	底部	底径 8.6		外面こまかい刷毛、内 面ナデ、底部やくぼむ	良, 良	黄褐色		16	
Y-60	H-5	甕	底部	底径 10		内面砂粒露出、外面 刷毛	砂粒多, 良	茶褐色		16	
Y-61	G-5	甕	底部	底径 8.4		底部内面押圧痕 外面刷毛後ナデ?	砂粒, 良	外面茶褐色 内面黒褐色		16	
Y-62	H-5	甕	底部	底径 6.6		底部内面押圧痕 底部外面ナデ	砂粒, 良	赤茶褐色		16	
Y-63	G-5	甕	底部	底径 6.6		底部内面押圧痕	砂粒, 良	黄褐色		16	
Y-64	G-5	甕	底部	底径 4.0		外面横ナデ	砂粒, 良	黄褐色		16	
Y-65	G-5	甕	底部	底径 8.0		内面丁寧なナデ 底部内面押圧痕	砂粒, 良	茶褐色		16	
Y-66	G-5	甕	底部	底径 8.0		内面砂粒露出	砂粒多, 良	明黄褐色		16	
Y-67	G-5	甕	底部	底径 8.6		内外面ナデ	わずかに砂粒	茶褐色		16	
Y-68	G-5	甕	底部	底径 7.6		内外面ともに丁寧な ナデ調整	わずかに砂粒, 良	内面茶褐色 外丹塗り茶褐色		16	

## (第2地点)

A地区第2地点の土塙墓は、A地区第二次調査の昭和47年10月から12月までの発掘調査で検出したものである。第2地点は、台地の中央北端部に位置しグリッド番号は、A～C-10～13グリッドである。ここで述べる土塙墓6基は、A-10グリッド8×8mの1グリッド内にあるが、外にも数基の土塙が認められたが、平面不整形で長軸も統一性がなく不定形であったために、ここにはとりあげなかつた。6基の土塙墓は、いずれも長軸をほぼ同じくし、IV層の腐礫を含む黄褐色粘質土層に掘りこまれているが、A地区第1地点、およびD地区の状況からして土塙上部は削平されたとすべきだろう。第1・2号土塙墓は、塙底・側壁にそって小児人頭大の石を並べており、ある種の木棺墓を推測せしめる。第5・6号土塙墓は、短側が互いにつながっているが、長さ、墓塙の深さ、長軸ともに異なることから、2基の土塙墓の切り合いとすべきであろう。ただし切り合いの先後関係は、土質・平面的にも把握できなかつた。出土遺物は、第1・2号土塙墓の石器のみであるが、特に第2号土塙墓の有茎磨製石簇2本は、第2地点土塙墓群の時期推定ばかりでなく、北部九州におけるこの種の出土遺跡の1つとして新たな資料を加え、土塙墓という明瞭な遺跡から出土したことは、さらに重要なことであろう。

Tab. 7 A地区第2地点土塙墓一覧表

(単位cm)

No.	方 位	平 面 形	長さ×幅(左・中・右)	深さ、塙底 レベル	備 考	Fig.
1	N-77°-W	隅丸長方形	222×87・97・70	20・20.47m	塙底および側壁にそって小児人頭大の石を置く、石器出土	18
2	N-36°-W	隅丸長方形	224×85・95・90	28・20.44m	東短側に集中して石を置く。 有茎磨製石簇	18
3	N-78°-W	隅丸長方形	140×54・58・51	14・20.54m		19
4	N-65°-W	隅丸長方形	202×68・72・57	31・20.43m		19
5	N-78°-W	隅丸長方形	108×76・77・67	23・20.47m	第6号土塙墓と切り合い?	19
6	N-72°-W	隅丸長方形	163×72・82・70	21・20.49m		19

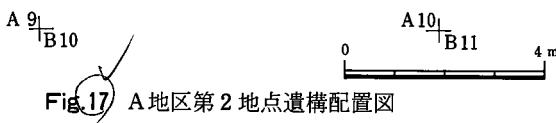
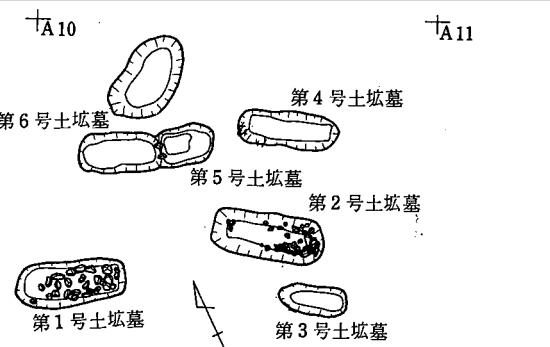
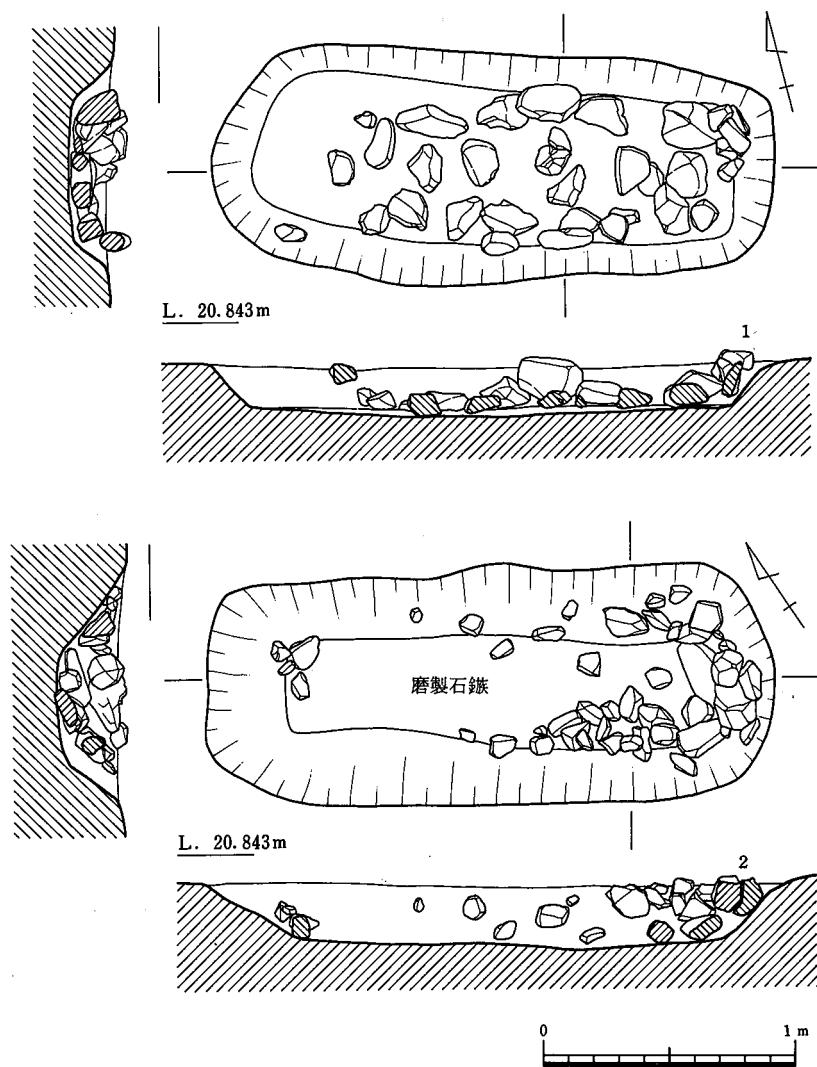


Fig. 17 A地区第2地点遺構配置図

## 土塙墓出土状況

第1号土塙墓  
(Fig.18 PL.7)

平面プランは、隅丸長方形である。小児人頭大の石は、塙底と西短側壁をのぞく3壁に認められる。石の大きさには統一性がないが、塙底は、ほぼ同じ高さであり、側壁は、壁に立てかけか、ほぼ垂直に立っている。石器は、この石の間より出土したもので安山岩質の石材を用いており、全長14.6cm、厚さ6mmあり、一部研磨されて

Fig.18 A地区第1・2号土塙墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

いるが、完成品であるか疑わしい。側壁の石、あるいは塙底の石の状況からして、第2号土塙墓とともに、木棺の可能性がある。

## 第2号土塙墓 (Fig.18 PL.7)

平面プランの幅が第1号土塙墓より広いのは、長さ・平面プランとも類似している。塙内の石は、東短側に集中しており、塙底には少なく、石の大きさにも不統一性が目立つ。2本の有茎磨製石錐は、土塙のほぼ中央部より出土したもので一本は、鋒先を下にし、もう1本は、水平の状態であった。検出時に刃部を欠いた方は、全長11.7cm・茎長2.4cmあり、もう1本は、全長12.5cm・茎長2.5cmをはかる。いずれも背には茎までつながる錐をもち、断面菱形の身であるが、前者は、やや偏平ぎみである。

## 第3号土塙墓 (Fig.19)

第2地点では、もっとも小さく塙底のレベルも高い。平面プランは、隅丸長方形であるが、西短側は、橢円形となる。出土遺物はなんら認められなかった。

## 第4号土塙墓 (Fig.19)

長側壁が直線的でないが、平面プランは、隅丸長方形で、長軸を、第2・3号土塙墓とほぼ等しくする。

## 第5号土塙墓 (Fig.19)

第6号土塙墓と切り合いと思われるが、第5号土塙墓を1基とすれば、やや小型となる。

## 第6号土塙墓 (Fig.19)

第5号土塙墓より塙底の深さがわずかに高い。  
第5・6号土塙墓の境界にある4個の石は、どちらに属するかは、明確でない。

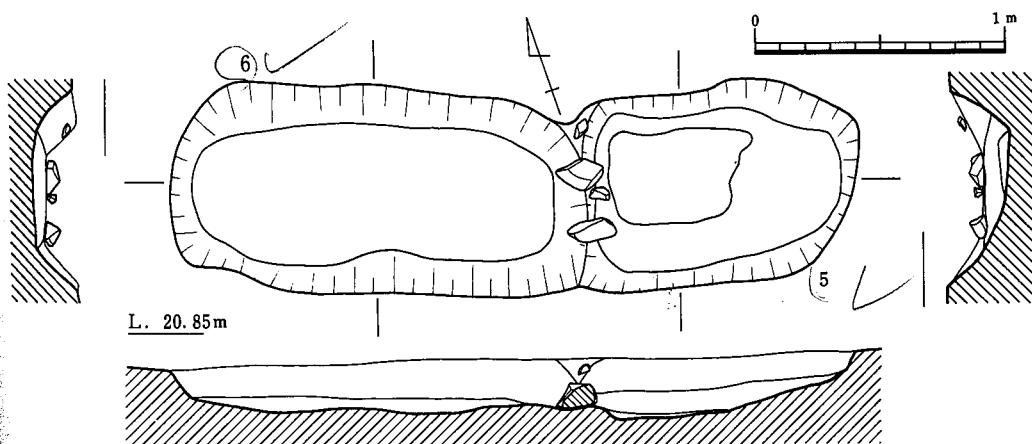
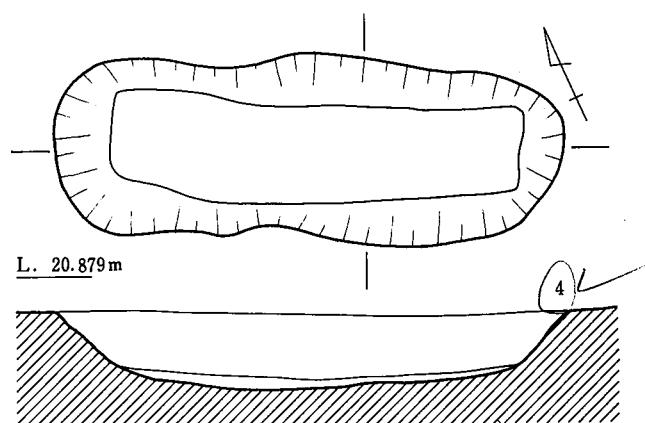
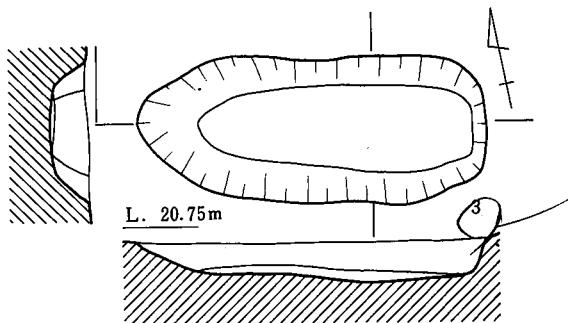


Fig.19 A地区第3～5号土塙墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

72/4

#### 4. 蒲田1号墳

本墳は、かけづか山からほぼ西に向って伸びる低平な台地上に位置する。調査前の観察により、径10数mの範囲にわたり、周囲の畠地より約2mほどの高まりを持っており、一面草木におおわれ、その一部は竹林となっていることがわかった。

平板による地形測量の結果では、本墳南側はかなり急で、北東部はゆるい斜面になっており直径10数mの円墳であろうことを予測させた。南側は竹木が茂り、北東部のゆるい斜面は江戸時代以降、現代に至る墓地として利用されている。なお、本墳のほぼ中央部に「クロガネモチ」の巨木があって、これを根こそぎ獲らんがためにブルドーザーを入れた痕跡があり、結局は木の大きさと墓地側から入れないこともあってあきらめたものの、大量の土を攪乱して去った。このため調査はこの土を除くことから手をつけたが、この攪乱された土の中にはかなりの遺物と、大小の緑泥片岩の板石を含んでいた。

調査は、本墳の埋葬施設の主体部確認と土層観察のため、中央部からほぼ東西・南北にトレーナーを設定し発掘にかかった。しかし、いずれのトレーナーにおいてもその主体部らしき遺構に接することができなかつた。ただ、南トレーナーにおいては、0.9m×0.6mほどの緑泥片岩の板石を検出したが、これもすでに原位置を離れていた。このため、各トレーナーの土層の観察とともに、それぞれの区域の墳丘盛土を1枚ずつ剥いでゆく作業にかかつた。この作業に伴つて、弥生式土器片、須恵器、土師器、青磁等の破片を検出したが、ついに主体部と覺しきものの発見には至らなかつた。

墳丘盛土の状況を観ると、3本の縞状の黒色土層が認められるが、このうちの最下部に位置する黒色土層中に主として遺物の発見を見、その下層の黄褐色粘質土層中にも遺物が含まれていることがわかつた。さらに上部の盛土表土内にも須恵器・磁器の出土を見たが、これらの遺物は全てが破片となっており、まともなものがそのままつぶれたという感じを受けさせるものではなく、このような遺物の出土状況から考えて、土層図に見る最下層の黒色土層が本墳築造時の地表面であったこと、さらに本墳築造に際しては本丘陵上の繩文・弥生時代の遺物を含む土を盛土として使用したことが判明した。各トレーナーでの観察によれば、墳丘裾部に対する周溝などの加工は認められなかつたが、北側に地山をわずかに削ったと思われる部分があつた。しかしこの加工が本墳築造時においてなされたものかどうかは不明である。

最後に、北東部の墓地の部分を除き、南東・南西・北西の各区を地山面まで掘り下げたが、いずれの区においても埋葬主体部に接することはできなかつたし、地山面においても、その加工の痕跡を認めるることはできなかつた。そのほか、埴輪・葺石・石列などの外部施設も一切認められなかつた。

以上の調査により、ブルドーザーによる破壊のため埋葬主体部を確認できなかつたという、

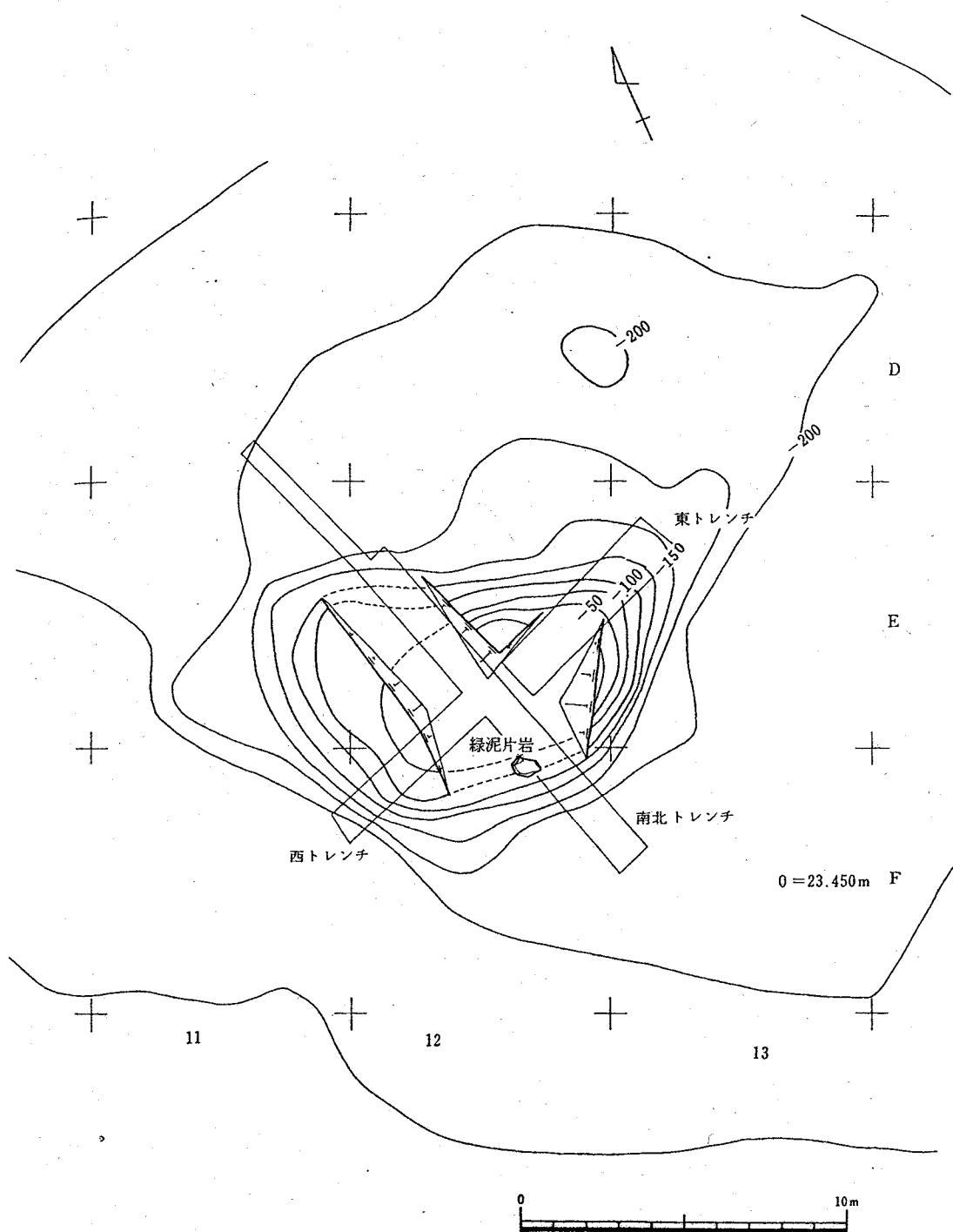
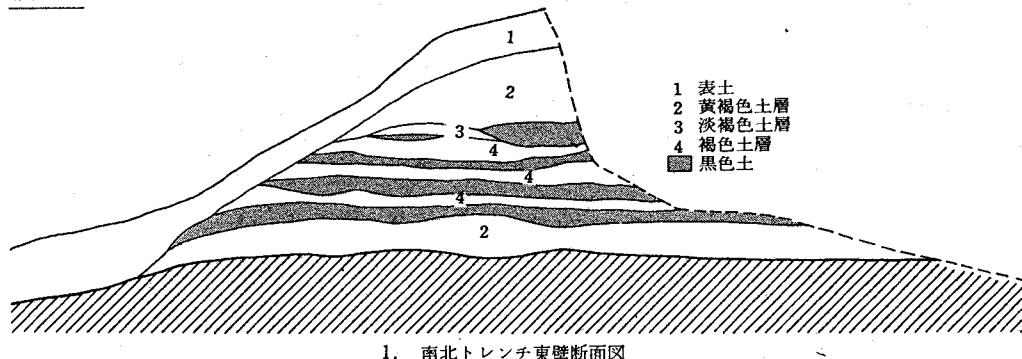
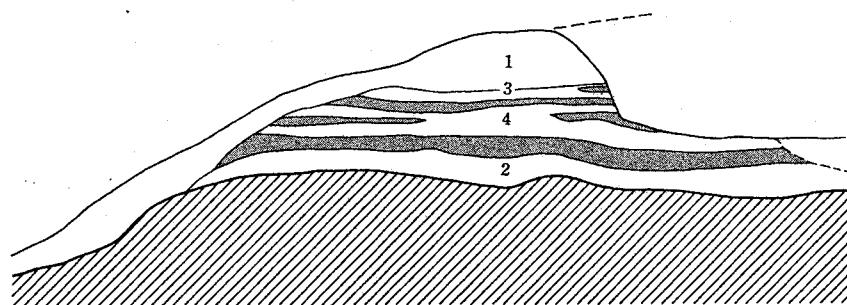


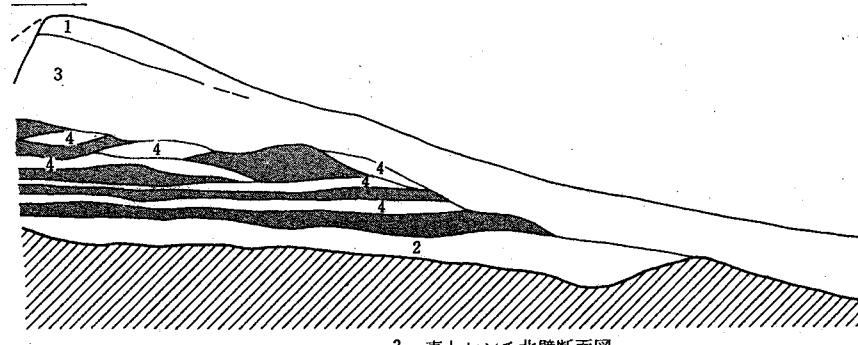
Fig.20 蒲田1号墳墳丘測量図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

L. 23.45m

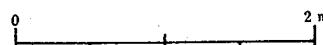
1. 南北トレンチ東壁断面図

L. 23.45m

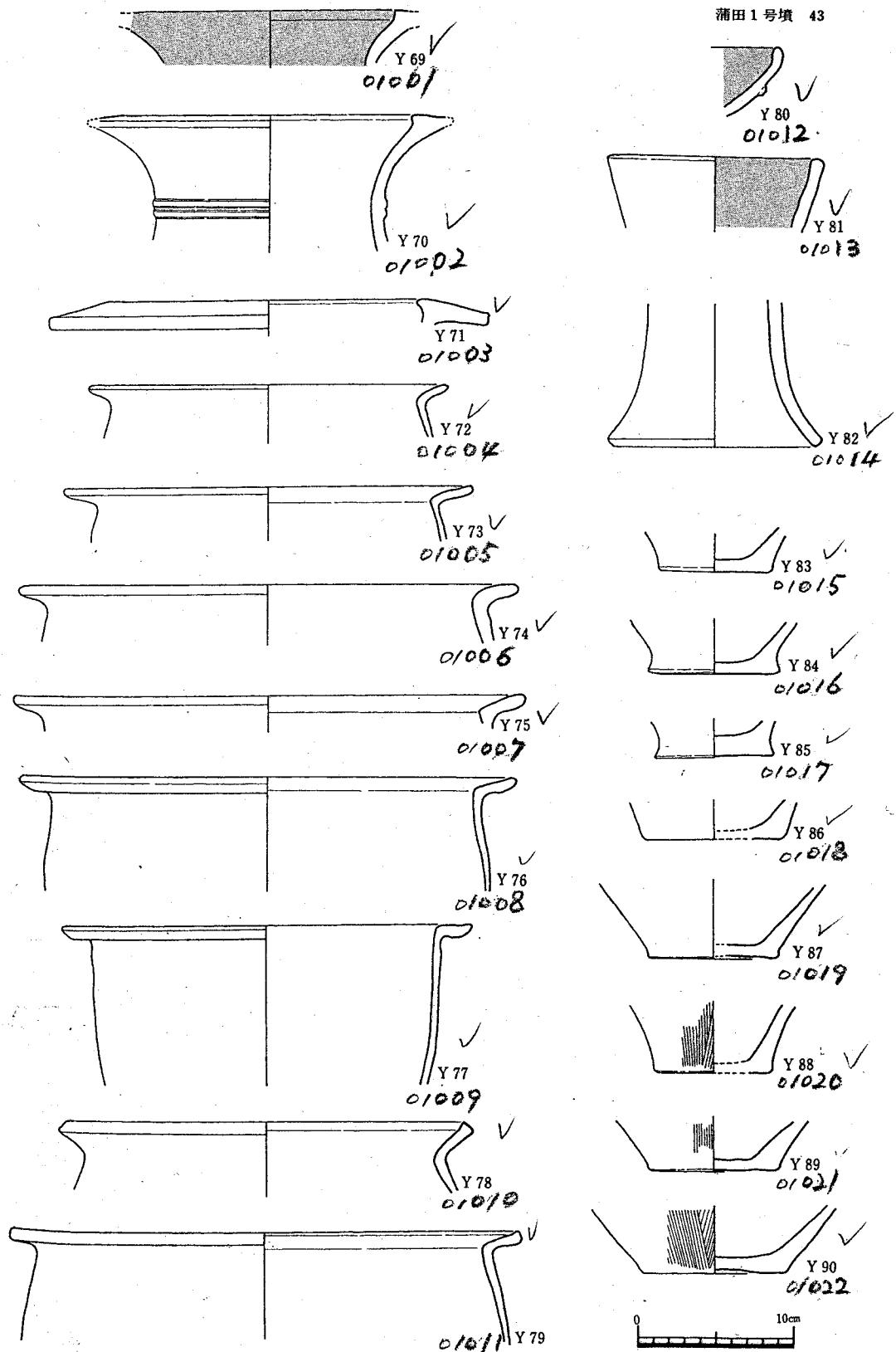
2. 西トレンチ北壁断面図

L. 23.45m

3. 東トレンチ北壁断面図

Fig.21 蒲田1号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

180

Fig.22 蒲田1号墳墳丘出土遺物実測図(Ⅰ) (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

7214

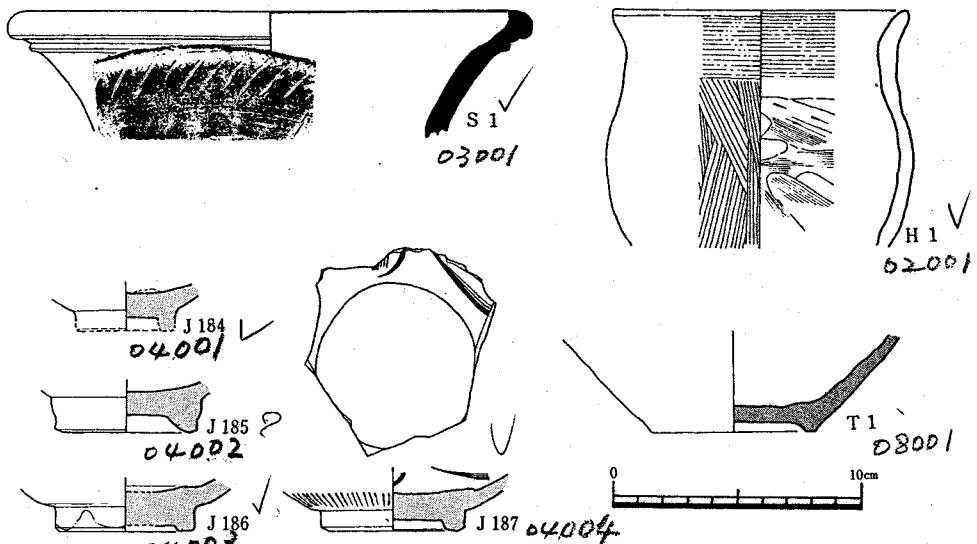


Fig. 23 蒲田1号墳墳丘出土遺物実測図(II) (縮尺1/2)

古墳としての否定的要素を含むにしても、立地の条件、盛土を持つことからして古墳と考えることが妥当と思われる。さらに、かなりの量の緑泥片岩を集めていることから、少々大胆に推測することが許されるならば、その内部主体としては、緑泥片岩の板石による小口積みの小石室（堅穴式）ではなかったろうかと思われる。横穴式石室でないことは間違いない、また、適当な大きさの板石をもたないことから、箱式石棺とも考えられない。本墳が堅穴式の小石室をもっていたものであるとすれば、先に述べた南トレンチ出土の  $0.9m \times 0.6m$  の板石は、天井石として使用された可能性も考えられる。このような堅穴式の小石室については、本墳から指呼(往)の間に望み得る土井名子道1号墳にその例を見ることができる。

本調査についてまとめてみると次のようになる。

1. 本墳は径10数mの円墳であったであろうこと。
2. 内部主体は、緑泥片岩を使用した小石室をもつものであったろうこと。
- 以上の推測と次の事実を知り得た。
3. 本墳築造に際しては、本台地上の縄文、弥生期の遺物を含む土を盛土として使用した。
4. 本墳築造後、この台地はその背の部分を1m近く削られ、平坦にされた。

(往) 「名子道遺跡」 一福岡市大字土井字名子道所在古式墳墓の調査1972年—

Tab. 8 蒲田1号墳出土遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	出土地点 (層位)	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	Fig.
Y-69	北西部	壺	口辺部	口径16+α	長手の頸部は、大きく外彎し断面錐先状の口縁部をなす。 Y70は断面M字形の突帯をもつ。	内外面ともに丹塗りか? 内面横ナデ、外面上下の窓の横ナデか?	精良	普通	淡黄褐色	22
Y-70	西トレンチ 黒色土層	壺	口辺部	口径 23		砂粒	普通	赤茶褐色		22
Y-71	墳丘	壺	口辺部	口径 28	口縁部のみ、内側の突出は小さく、やや下方にさがる。	口縁端やや跳ね上がる。	砂粒	普通	暗茶褐色	22
Y-72	南東部 黒色土層	甕	口辺部	口径 23		調整痕不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-73	南東部 黒色土層	甕	口辺部	口径 26			砂粒	普通	淡褐色	22
Y-74	北東部	甕	口辺部	口径 32	いずれも「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部の跳ね上がりはなく、面取りもなく、まるくつくる。Y73・75・76は内面に綫縫がはいる。 Y77は口縁部がほぼ平坦で最大径は口縁部にある。	内外面とも磨滅し 調整痕不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-75	南東部2・3 黒色土層	甕	口辺部	口径 33		調整痕不明	砂粒	普通	赤褐色	22
Y-76	南東部B最上 黒色土層	甕	口辺部	口径 32		調整痕不明	砂粒少 精良	普通	黄褐色	22
Y-77	南東部B	甕	底部欠	口径 26		口辺部横ナデ	砂粒	普通	黄をおびた 赤褐色	22
Y-78	北東部	甕	口辺部	口径 26	「く」の字形に外反する口縁部をもちやや肥厚した端部は小さく跳ね上がる。	内外面調整痕不明	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-79	南東部B最上 黒色土層	甕	口辺部	口径32.8		口辺部横ナデ、外面不 鮮明だが綫刷毛か?	砂粒	普通	黄褐色	22
Y-80	墳丘		口辺部	口径26~30	突帯は断面M字形。	内外面横ナデ後丹塗り	砂粒	堅緻	赤褐色	22
Y-81	南東部 2・3黒色土層		口辺部	口径 14	口縁部は平坦でなくまるみをもつ。	内面ナデ、丹塗り、 外面剥離	砂粒多 い	普通	淡褐色	22
Y-82	南東部B最上 黒色土層	器台	底部	下部径14	ほぼ一定した厚さをもつ。欠失部も現存部と同形か?くびれ部 中位。	外面綫刷毛	砂粒	普通	淡黄褐色	22
Y-83	南東部最上 黒色土層		底部	底径 7.2	底部やや凹	外面横ナデ	砂粒	堅緻	淡黄色	22
Y-84	北西部 地山直上		底部	底径 8.4	底部はやや凹。体部へは内反り ぎみ		砂粒	普通	黄褐色	22
Y-85	南北トレンチ		底部	底径 7.8	底部があつつく外面端部はやや突出する。	底部凹む。外面横ナデ 底部増鋸利	砂粒	普通	外面灰褐色 内面淡黄色	22
Y-86	南東部 2・3黒色土層		底部	底径 9	器壁あつい。	外面砂粒露出	砂粒	普通	黑褐色	22
Y-87	西トレンチ		底部	底径 8.4	底部はやや凹。内反りぎみ		砂粒少 精良	普通	赤褐色	22
Y-88	南北トレンチ		底部	底径 7.6	内反りぎみであるが底座小さく 立ちあがりも大きい。	外面粗い刷毛	砂粒	普通	赤茶褐色	22
Y-89	北西部		底部	底径 8.4	底径大きく内反りぎみ、Y89は 器壁がぶあつい。	外面綫刷毛後ナデか?	砂粒	普通	赤茶褐色	22
Y-90	南北トレンチ		底部	底径 13	Y90あげ底	外面粗い刷毛	砂粒	普通	黄褐色	22
H-1	墳丘	甕	底部欠	底径 12	肥厚した口縁部は小さく外反し まるくおさめる。	口辺部横ナデ外面綫刷 毛内面窓削り	砂粒少	普通	暗茶褐色	22
S-1	北東部	甕	口辺部	口径 20	口縁部は外反し、端部は内側に 丸くつまみ出しておさめる。	内面ともにヨコナデ、口唇 下部に一筋の凸部をつまみ出し その下に筋による波状文。	砂粒	堅緻	淡灰黒色	23
J-184	北西部	碗	底部	高台径 3.8 高台高 0.9	小形の碗で見込内底に砂付着		灰白	良		23
J-185	北東部	碗	底部	高台径 5.8 高台高 1.3	高台の削り出しに特徴があり 凹凸がめだつ	高台には釉がかかるが 見込には釉がかからず	淡黄色	良		23
J-186	墳丘	碗	底部	高台径 5.6 高台高 1.0	ぶあつい底部に彫りの浅い高台 をつける。蓋付は水平	見込には文様なし	暗灰色	良	釉は高台ま で流れる	23
J-187	北西部	碗	底部	高台径 5.8 高台高 0.8	高台は削りすぎて沈線をえがく 部がある。	高台底に櫛目。見込全体 に文様	灰色	良	釉は高台ま で	23
T-1	北西部		底部	底径 6.6	あげ底の底部から体部は、大き く外反する。器種不明	内面横ナデ。外面丁寧 な窓削り	暗褐色	良		23

7215.

## 第III章 B 地区の調査

### 1. 概 要

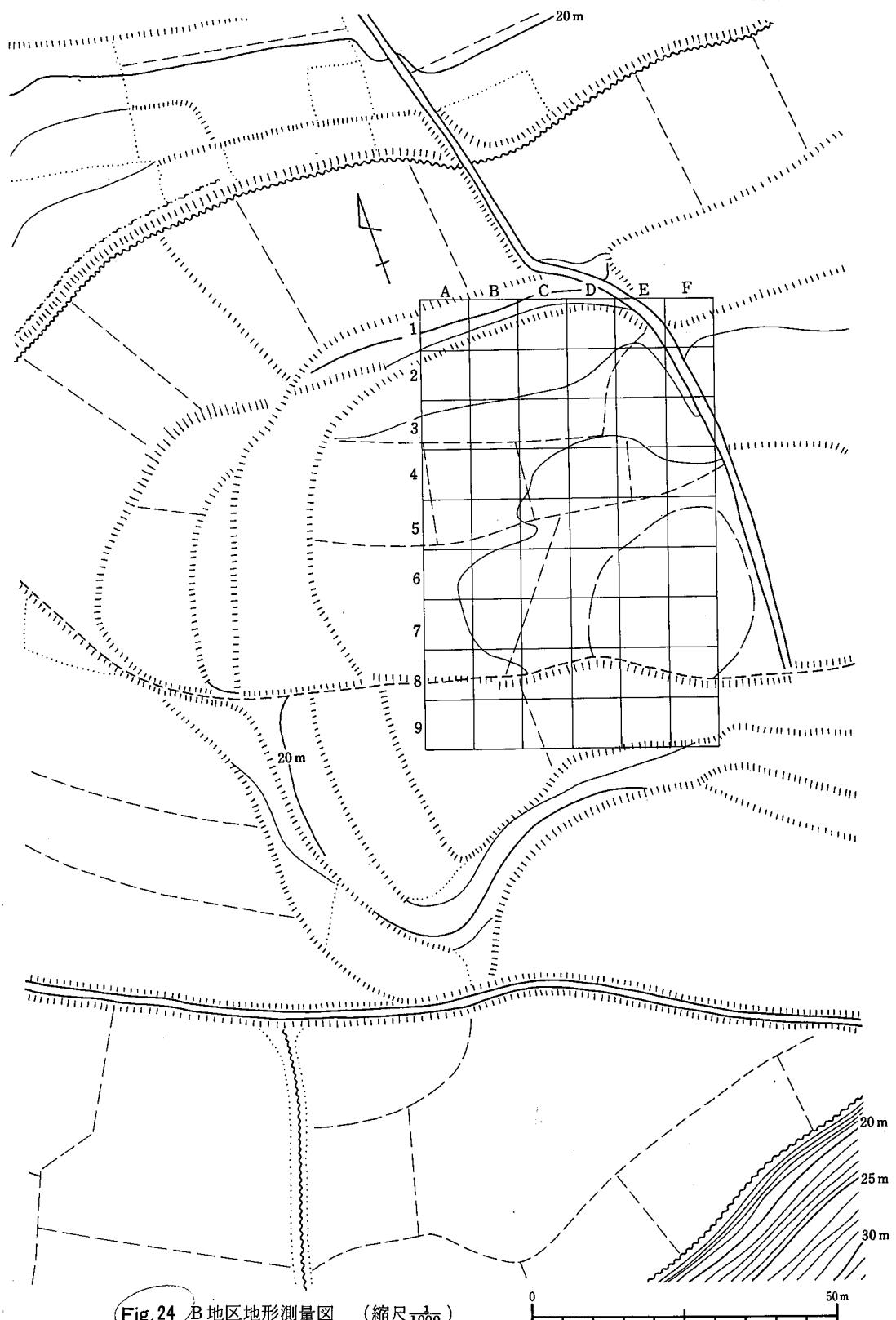
B 地区の地形は、標高40mを持つかけ塚山と称したE 地区と部木部落の中間に位置し、和田・大隈からつづく標高23mを持つ最西端に位置する。B 地区は、昭和48年6月16日から8月11日までの約2か月間発掘調査を行なった。発掘調査方法は、地形にそって1区画が8×8mのグリッドを組み、東西をAからF、南北を1から9とし、台地全体の表土層（耕作土層）を剝ぎ、遺構の検出を行なった。その結果、表土層の下は、A・D・E 地区で第IV層とした黄褐色の中に礫を含む花崗岩風化土壌であり、その土層を掘りこんで多くのピット群が検出できた。

また遺構の検出を行なって行く際に表土層から石鏃・台形様石器・ナイフ形石器・石核再生剥片等が出土したため、包含層の確認を行ってみた。その結果E—2・3 グリッドの道路側断面でA・E 地区と同様のII・III層を確認することができた。このII・III層からは、少数ではあるが、石器の出土を確認した。その状態によりE—2・3 グリッドを掘り下げてみたが、ここ の包含層は薄く部分的に現存していることが判明した。

### 2. 土 坂

土坂及びピット群は、第IV層を掘り下げてつくられており、その分布は、北東部と南西部に大半が集中している。これらの土坂及びピットの平面プランは、円形・長方形・隅丸長方形など定形化したのもあるがほとんどが、不整形である。C—7 グリッドの47号土坂は、平面プラン円形で、深さ約1mにほぼ垂直に掘られ、平坦な坂底をなす。さらに北側の壁中位から、横に掘りこまれており、深さ70cm、径1mの円形となっている。このようないわゆる二重土坂は、B—2 グリッドの1号土坂にもみられる。1号土坂は、不整形の平面プランで、深さ80cmの坂底から、さらに深さ50cmの坂が掘りこまれており、最深部までの深さは140cmをはかる。坂底に、石をもつものもいくつかあり、E—3 グリッドの9号土坂、B—6 グリッドの24号土坂、41号土坂などにみられる。また、坂底に小さなピットをもつものもあるが、これらは時期を異にするピットの重複と考えられるが、表面観察では、その先後関係は明確にしえなかつた。平面プランが不整形な土坂の多くは、これに該当するものと思われる。E—2 グリッド4号土坂、B—4 グリッド12号土坂、D—6 グリッド42号土坂、E—8 グリッド51号土坂などは、平面プランや深さなどから土坂墓の可能性もある。

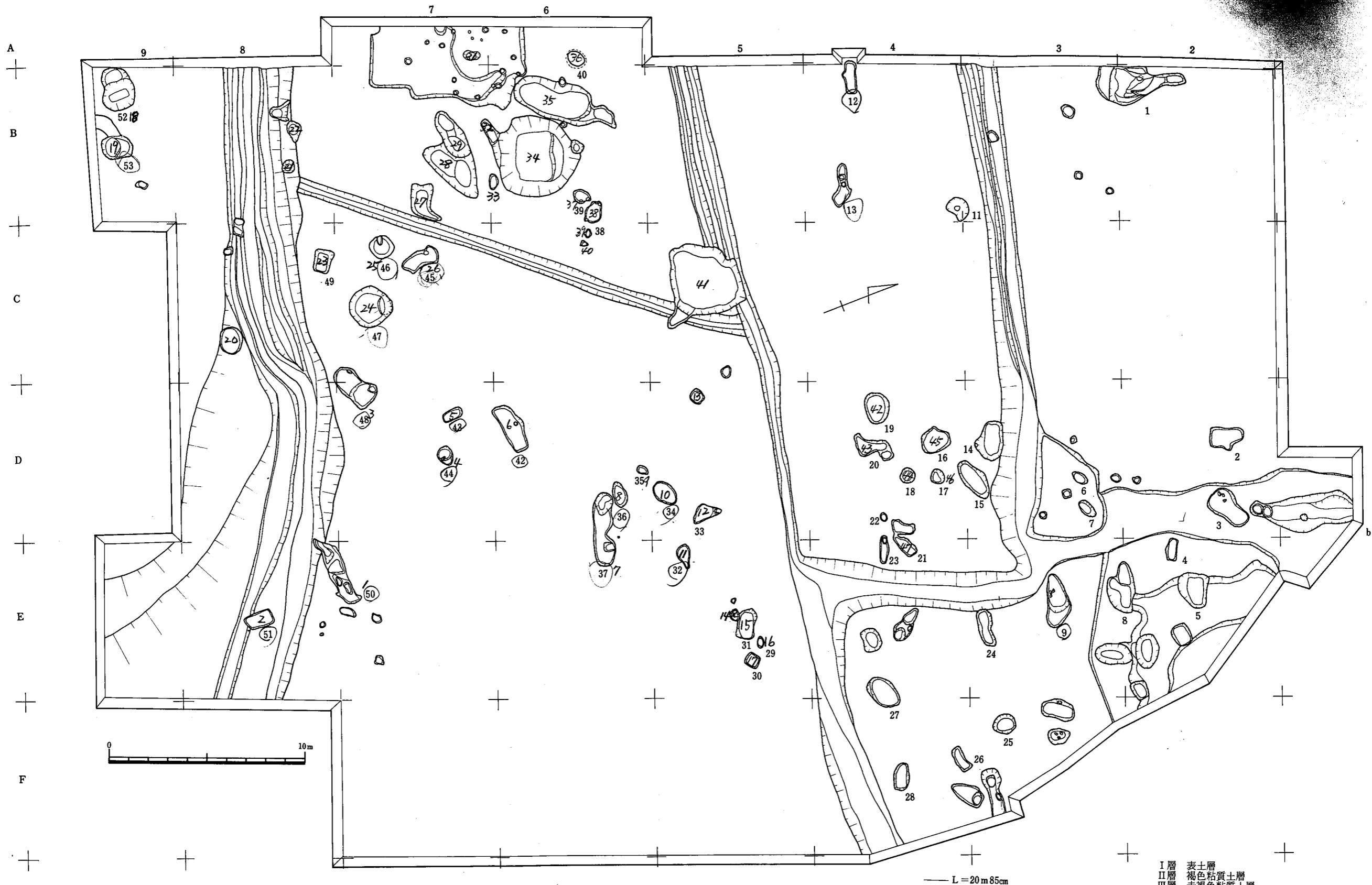
番号は付してないが、これら53基の土坂以外にも、数基の土坂があるが、いずれも遺物の出土がまったく認められず、したがって、時期、性格ともに明確にしがたい。



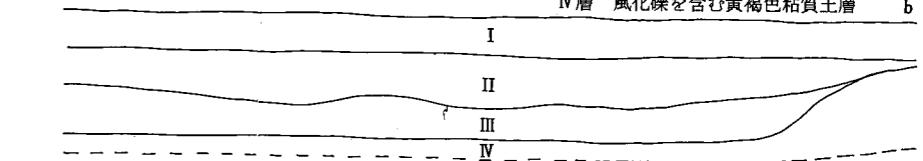
Tab. 9 B地区土塙一覧表

(単位 cm)

No.	グリッド	平面形	長さ	幅	深さ	備考
1	B-2	不整形	460	200	161	二重竪穴 内部 100×95×92
2	D-2	隅丸長方形	170	127	20	
3	D-2	不整形	235	133	15	内部にピット有
4	E-2	長方形	113	48	48	
5	E-2	隅丸長方形	170	150	45	
6	D-3	楕円形	110	50	15	中央に小ピット有、40×35×24
7	D-3	楕円形	93	40	18	
8	E-3	不整形	185	126	35	
9	E-3	不整形	270	105	17	礫が内部に有
10	B-3	円形	63	48	13	
11	B-4	円形	127	120	22	
12	B-4	長方形	160	70	25	
13	B-4	不整形	224	75	15	内部にピット有
14	D-3	隅丸長方形	182	150	10	
15	D-3	長楕円形	250	135	33	
16	D-4	不整形	146	114	17	
17	D-4	円形	130	100	52	
18	D-4	円形	73	75	25	
19	D-4	楕円形	150	120	25	
20	D-4	不整形	145	87	18	
21	D-4	不整形	140-100	60-52	35-24	
22	D-4	円形	53	50	10	
23	E-4	長楕円形	140	35	20	
24	E-3	長楕円形	188	73	10	礫2個内部に有
25	F-3	円形	132	100	22	小ピット有、15×11×13
26	F-4	隅丸長方形	127	55	13	
27	E-4	楕円形	180	117	11	
28	F-4	長楕円形	145	72	12	
29	E-5	楕円形	78	72	40	
30	E-5	不整方形	58	48	12	
31	E-5	隅丸長方形	163	134	24	隅丸長方形とピット
32	E-5	不整形	150	80	24	
33	D-5	不整形	126	75	14	2つのピットの切合
34	D-5	楕円形	135	88	18	
35	D-6	楕円形	59	40	15	
36	D-6	楕円形	127	71	32	
37	D-6	不整形	357	115	37	内部にピット有
38	B-6	不整形	165	115	40	
39	B-6	不整形	110	74	25	ピットが側壁に3つ。
40	B-6	円形	73	73	10	
41	B-6	楕円形	81	47	14	内部にピットと礫 35×30×25
42	D-6	隅丸長方形	255	100	25	内部にピット
43	D-7	隅丸長方形	111	53	16	
44	D-7	不整形	90	75	45	
45	C-7	不整形	197	103	23	
46	C-7	円形	127	110	24	内にピット有 43×26×40
47	C-7	円形	210	183	111	二重竪穴、内部は 120×100×90
48	D-7	不整形	235	130	73	
49	C-8	長方形	125	80	70	
50	E-7	不整形	385	105	30	内部にピット有
51	E-8	長方形	142	73	25	
52	B-9	不整形	220	167	73	2つのピットの切合
53	B-9	不整形	320	122	85	ピットと長方形ピットの切合



I層 表土層  
II層 褐色粘質土層  
III層 赤褐色粘質土層  
IV層 風化礫を含む黃褐色粘質土層



平板剖面  
7枚  
1~7

Fig. 29 B地区遺構配置図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

72-15

### 3. 旧石器時代の遺物

#### 層位について

B地区のほぼ全体に表土層下にすぐ第IV層と思われる花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土層があり、そのIV層を掘り下げているピット状遺構がある。しかしながらF—2・3の道路側断面にII・III層を確認することができ、断面及びE—2・3の調査を行なった。道路側断面の層序図はFig.25で示すごとく、I層が表土層（耕作土層）20cm、II層が褐色粘質土層25cm、III層が赤褐色粘質土層（花崗岩風化土層）23cm、IV層が花崗岩風化礫を含む黄褐色粘質土層からなり、その下層は、花崗岩風化礫の密度が多くなる状態がみられ、黄褐色粘質土層がしだいに赤褐色に変化する。遺物包含層は、II層・III層であるが、II層は、A・E地区と同様に上下に区別され、上面20cm、下面5cmであった。

#### 石器について

表土層から出土した石器は、石簇・二次加工石器・台形様石器・ナイフ形石器・Scraper・石核再生剝片・切断剝片・折断剝片がある。これらの石器の中には、縄文時代の石簇、旧石器時代の遺物である台形様石器・ナイフ形石器・石核再生剝片がある。石簇は、扁脚簇の一種であるが、意識的に製作した形跡を持つ。台形様石器は1型に分類したもので、側辺部がbluntingではなく横位からの大まかな剝離によって形成された大型の石器である。ナイフ形石器も特殊形態を持った石器で、先端部のみにbluntingを加え他の部分は、素材のままの状態である。また石核再生剝片は、打面再生剝片で横位からの剝離によって石核から剝離されたのちScraperとして使用した可能性をもつ。Scraperは、SideとEndに区別できる。Sideが2点、Endが4点である。折断剝片は、2点出土し、切断は、2点出土している。

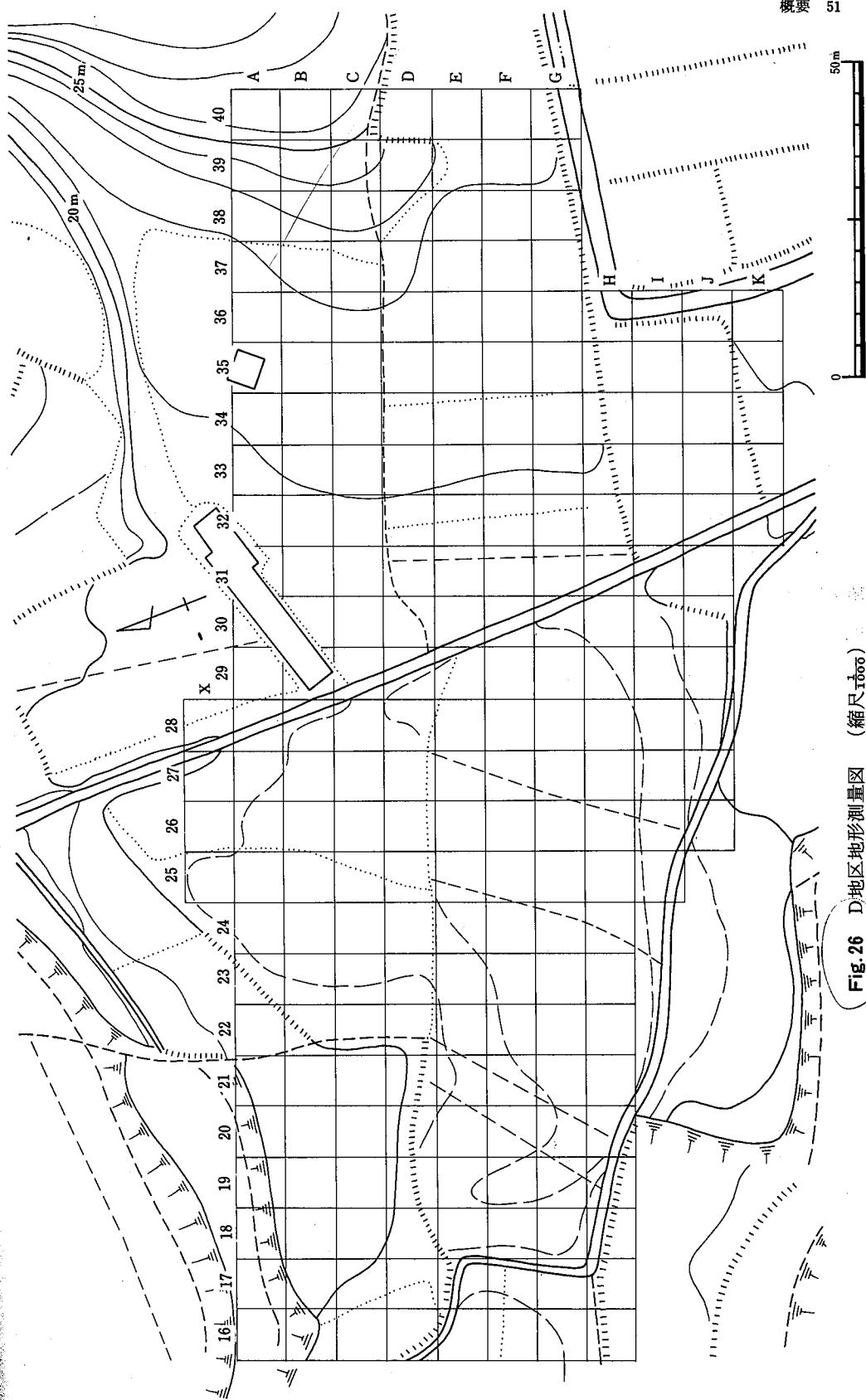
II層上面には、石簇3点、Scraper2点、折断剝片1点の計6点の出土である。II層下面では、大型縦長剝片と折断剝片が出土し、III層では、縦長剝片1点、折断剝片が1点、出土点数は少なかった。II層上面の包含層は、石簇のみで時期を決定することはできないが、A地区・E地区の状況から判断して縄文の時期と考えてもさしつかえないとしても、II層下面、III層の出土石器のみの観察では、この層位が旧石器時代の遺物の包含層であると断定することはできない。しかしながらA地区・E地区の層位とB地区の層位との対比による観察と、II、III層の折断剝片・縦長剝片等の剝離面を観察すると、剝離面は、一方向による打撃を持つか、上下の二方向による打撃、横位と上の二方向によるものである。また、縦長剝片・折断剝片の形態を観察するとBladeともよべる剝片であり、また技術的にもこれらの剝片を剝離した石核は、1つの定型化した技法を持っていた可能性を大いにひめたものである。また表土層より出土している台形様石器、ナイフ形石器、石核再生剝片等の出土からみて、B地区のII層下面・III層は、旧石器時代の遺物の包含層である可能性を強く持つ層位であろう。

## 第IV章 D地区の調査

### 1. 概 要

D地区は、A地区第1・2地点、蒲田1号墳と同じ台地にあり、グリッド番号16列を境として、台地の東側半分を占める。地形は、A地区と同様に畠地として利用されていたために、平坦であるが、グリッド18列でA地区より一段低くなつて、東側は、標高を増し、かけ塚山の西斜面へとつながる。発掘調査以前の表採などの知見によると、A地区とは異なり、石器類はきわめて少なく、この反面青磁類をはじめとして、弥生式土器・土師器・須恵器などが多く、これらと関連する遺構遺物の出現が予測され、特に本台地と相対する部木部落の台地には、前方後方墳を中心とする部木八幡古墳群が位置し、<sup>(註)</sup>甕棺墓の所在も確認されているなど、周辺の遺跡との関連からもA地区と同じようにかなり複合的な遺跡であることを思わしめた。

発掘調査は、昭和47年5月より開始し、全面の草刈り後、A地区からの通しのグリッド8×8mのグリッドを設定した。D地区も旧石器時代の層位的確認の可能性も予想され、また、本遺跡の発掘調査が、いわゆる緊急調査で、記録保存の対象にしかすぎないことから、層位的にしかも全面的な最深部までの発掘調査が必要であった。時間的な問題から建設工事と並行しての発掘調査を余儀なくされ、工事用進入道路が建設されるグリッドH・I列、すなわちH-25～H-29、I-25～I-29の10グリッドから表土除去をおこない、ついでカルバート・ボックス建設のグリッド26列と発掘調査を進めた。表土層中の出土遺物は、表採結果と大きく異なることはなかった(Fig.78)。表土除去後の表面観察によって、東北方向に走るいく条かの溝と柱穴状の黒褐色土の落ちこみの存在が知られた。D地区が、ごく最近まで桑畑として利用されていたために、耕作に伴うものかとも思われたのであるが、柱穴状ピットには、礎盤と考えられる石を持つもの、あるいは磁器類を出土するものがあり(Fig.66・67、PL.26)柱穴と断定できた。またH・I-29グリッドでは南北方向の溝状の落ちこみがあり、これらが先の東北方向に走る溝に切られており、東北方向の溝が現在の畑の畔方向とも一致することなどから、明らかに耕作に伴うものと判明したので、柱穴と南北方向に走る溝状の落ちこみを追求することにした。その結果H-29グリッドでは、3条の溝が確認され、発掘順に第I・II・III溝とした。もっとも東寄りの第I溝は給水用パイプが埋設されていたために、かなり攪乱を受けたようで出土遺物も各種混在し、この推測を裏づけた。第I・II・III溝とも出土遺物は、青磁類を主とするが、甕棺片の出土が注目され、甕棺墓の存在を予想させた。これらの溝の南側末端部をおさえるために拡張区J-29グリッドを設定したところ、第I・II・III溝とも1つに連結し、台地を整形したかのような遺構があらわれ、この上に集石遺構が乗っていることが確認された。ここでも出土遺物は磁器類が主となっていた(Fig.76・77)。カルバート・ボックス建設のグリッド26列で

Fig. 26 D地区地形測量図 (縮尺 $1:1000$ )

日本(国)地図

は、H・I-25グリッドで中央に幅4m、その両側に幅1mの落ちこみが南北方向に走っており、中央の落ちこみは、小石をたたきしめた状態で敷石が発見され、ここからも、磁器、石鍋などが出土し、H・I-29グリッドの第I・II・III溝、およびJ-29グリッドの積石と出土遺物は類似し、時期的には差がなく、機能的にもなんらかの関連があったものと思われた。さらにこの遺構は、北へのびていると思われたので、南北両端部を確認するために、北側の調査契約地すれすれにA-C-24~28グリッド、南側も同じようにJ-26・27グリッドを設定した。北側のA-C-24~28グリッドでは、柱穴と耕作による数条の浅い溝があらわれ、南側のJ-26・27グリッドでは、敷石の末端部が出現し、ここでもJ-29グリッドと同様に台地を整形した可能性がみられた。この結果、遺構および遺物の包含が台地全体におよぶことが確認された。また、敷石の北側端部は、E-25グリッドでT字形に直交するあらたな敷石があらわれ、敷石両側の小溝とともに、さらに東西にのびているようであった。この結果、敷石の構造と、これに伴う建造物の追求、さらに甕棺墓の把握などが発掘調査の問題点となった。

H・I-29グリッドの溝中出土の甕棺片は、D地区での甕棺墓の存在を推測させたが、磁器類を出土する敷石・集石・溝などの遺構がつくられる際、台地をある程度整形、削平した可能性もあり、弥生時代の生活面の把握は困難と思われた。しかし、I・J-29グリッドでは、第I溝に切られながらも、わずかに墓壇を残した甕棺墓2基と、H・I-29グリッドでは、第II溝に切られた土塙墓3基を検出し、H-28グリッドでは、上部を削平されてはいるが、良好な状態で壺棺墓・土塙墓が出現した。また、I・J-29グリッドでは、浅い土塙より、丹塗りの甕・壺・高杯が発見され、供獻・葬送の祭祀遺構と考えられ、D地区の甕棺・土塙墓群が同一台地にあるA地区と同じ様相を示すのか重要な問題となった。

建設工事と並行して、発掘完了グリッドから遺構実測を済ませ、昭和48年6月までに、調査予定地のほとんどを発掘終了した。敷石は、南北方向の敷石を南北敷石、東西方向の敷石を東西敷石と呼び、その機能および、付随するであろう遺構の確認に注意し発掘を進めた。南北敷石は、南北全長48m、幅6m、東西敷石は、全長94m、幅6mをはかり、南北敷石の東側溝は、E-25グリッドで直角に曲がり、途中削平されているようであるが、E-29グリッドの第II溝とつながるようである。東西敷石の北側溝は、敷石と並行に東西にのびるが、D-21グリッドで北に方向を転じ、台地下の水田面にのびており、これを北溝と呼ぶことにした。また第III溝は、東西溝東端部と、第I溝は東西溝北側溝とそれぞれE-29グリッド、D-29グリッドで連結することが明らかとなった。また、敷石を剥いでいく段階で、高麗天目を出土したI-25グリッドで、井戸状の遺構が発見された。甕棺・土塙墓も、発掘の進展に伴って数を増し、F-26グリッドの有軸羽状文の土器片を出す土塙墓を西端とし、最終的には、甕棺墓16基、土塙墓16基を検出し、十字形に交差する配置であった。これらの大部分は、溝によって切られるか削平されており、第III溝によって切られた第11号甕棺墓出土の磁器・石鍋類、また第7号甕棺墓

出土の金環など、中世における台地の整形・削平という当初の推測をさらに強めた。

東西敷石の側溝は、D・E-29グリッドで第I・II溝と連結することを確認していたが、東西敷石とは別の敷石がD-28グリッドに現われ、東にのびているようであった。この敷石の東側延長上には、豚舎があり、かつて豚舎建設の際、同類の敷石が存在したということから、豚舎の後方、かけ塙山西斜面にA-35~37グリッド・B-37グリッドを設定したが、耕作時の溝が出たのみで、敷石と関係するものはなんら発見できなかった。また、一段低い畠地となっているH-K-32~35グリッドでは、かつて人家が建っていたということで遺構の存在が危ぶまれたが、幸いにも地上げしており、その盛土下から古墳時代の住居跡7基と中世と思われる柱穴群を検出した。中世の遺構と重複しているために、各住居跡内の出土遺物すべてが、住居跡に伴うものとは考えられないが、第2号住居跡では、古手の須恵器を出し、第5号住居跡と第6号住居跡は切り合い関係にあり、第6号住居跡からは、単孔式の甌が出土した。また中世と思われる柱穴群は、ここでも盤石を持つものがあり、特に柱穴内出土の崇寧重宝は、磁器類などの他の遺物とともに、本遺跡の年代・性格を考えるうえで貴重な資料と思われた。

#### (主要参考文献)

- |            |  |
|------------|--|
| 福岡市教育委員会   | 『宝台遺跡』昭和45年<br>『金限遺跡第1次調査概報』昭和45年<br>『多々良遺跡調査報告書』昭和47年<br>『宝満尾遺跡』昭和49年<br>『板付周辺遺跡調査報告書』昭和49年 |
| 福岡県教育委員会   | 『津古内畠遺跡』第1次~第4次 昭和45年~昭和49年<br>『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』I~V 昭和45年~昭和49年<br>『大宰府浦城跡』昭和46年         |
| 大野町教育委員会   | 『中・寺尾遺跡』昭和46年  |
| 佐賀県教育委員会   | 『姫方遺跡』昭和49年  |
| 福山市教育委員会   | 『草戸千軒町遺跡』昭和40年   |
| 和島誠一編      | 『日本の考古学』III 弥生時代 河出書房新社  |
| 日本考古学協会編   | 『日本農耕文化の生成』昭和36年   |
| 杉原莊介・大塚初重編 | 『土師式土器集成』本編  |
| 亀井明徳       | 『九州出土の宋・元代陶磁器の分析』考古学雑誌第58巻4号   |
| 高槻市史編さん委員会 | 『高槻市史』第6巻考古編   |
| 佐原真・金閔恕編   | 『古代史発掘』弥生時代 稲作の始まり 講談社   |

#### (e) 部木遺跡

昭和38年に部木より大隈に通じる農道を拡張したときに発見されたもので、現在、井上茂雄氏宅の裏畠崖面に1基の甕棺が露出している。当時作業に従事した人たちの話を総合すると、この甕棺は、同形のものが2個口を合わせた状況で出土し、うち1個は完全に破壊したとのことで、甕棺内部からは、何も出土しなかったという。残された1個は、高さ1.5mほどの崖面に、斜めに掘りこんだ墓塚に埋置されており、口辺部を欠くが、上記のごとく合口式であったことは、棺内に口辺部があることからも納得できよう。甕の形態は、胴部中位に、コ字形断面の突帯2条をめぐらし、口縁上面は、平坦面をなすもので、D地区第12・13号甕棺の下棺に類似している。現在は、農道のために崖面に露出しているが、おそらくは、垂直に掘られた土塙に横穴を穿ち、挿入埋置したものと思われる。

## 2. 甕棺墓と土塙墓

D地区における甕棺墓・土塙墓群は、台地の東側、標高20mのほぼ平坦部に形成されている。最終検出数は、甕棺墓16基、土塙墓16基である。前述したように、積石、集石遺構の石に混じって甕棺片が出土し、第I・II・III溝と呼んだ溝に切られていることから、さらに多くの甕棺墓・土塙墓を考えるべきであろう。現存の遺構からすれば、北端は第14号甕棺墓、西端は第1号土塙墓、東端は第13号土塙墓、南端は第4号甕棺墓で、十字形に交差する形で埋置されており、甕棺墓、土塙墓とともに、特別のグループをなさないものと思われる。甕棺墓は、発見順に番号を付した。第1号甕棺墓は、広口壺が2個出土し、1個には丹塗り痕が認められ、出土状況からみて、壺棺墓というよりも、あるいは土塙墓の供獻土器と考えることも許されるかもしれない。第2・6・7・8・15号甕棺墓の5基は、小児用甕棺墓と思われるが、第6・8号甕棺墓は、複棺の可能性もある。溝により、切られているのは、第11号甕棺墓と第14・15号甕棺墓で、第III溝の溝底に位置する第11号甕棺墓からは、磁器類、石鍋などを出土した。甕棺墓の方位には、統一性があるよう見え、ほぼ北西方向をとるものと、これらと直角に交わる主軸をもつものの2つのグループがある。この2つの主軸と、大きく異なる甕棺墓は少ない。埋置の方位に関する限り、D地区では古い時期と思われる甕棺墓の多くが北東方向の主軸をとる傾向にあるが、時期的な差は認めがたい。また単棺、複棺の差による埋置方法にも大きく異にすることはないと思われる。16基の土塙墓の長軸も、甕棺墓と同様に2つのグループに分かれ、しかも、甕棺墓と直角方向のものは少なく、並行に掘られている。甕棺墓、土塙墓ともに、明らかに副葬品と断定できるものではなく、第7号甕棺墓の金環、第10号甕棺墓の石斧、第11号甕棺墓の磁器類、滑石製石鍋、第12号甕棺墓の黒耀石製石簇、第1号土塙墓の有軸羽状文土器片など、いずれも後世の流入と考えられる。切り合いは、甕棺墓ではなく、土塙墓の第14号土塙墓と第15号土塙墓にみられる。第14号土塙墓は、第15号土塙墓を切っているが、平面隅丸方形のプランは、通例の土塙墓と違いやや特異な形態をなしており、あるいは土塙墓としての認定は、困難かもしれない。ただ第14号土塙墓から外面丹塗りの甕形土器が出土しており、D地区土塙墓群の年代をある程決定できるであろう。また、甕棺、土塙墓に付随すると思われる土塙をJ-29グリッドで検出した。この土塙からは、丹塗りの壺、高杯、甕形土器が出土し、甕棺墓、土塙墓に対する祭祀遺構と考えられる。F-27グリッドでも、不定形ながら土器片を出す土塙を検出した。これらの甕棺墓・土塙墓からやや離れていくつかの時期不明の土塙が存在する。

E

+

+

+

+

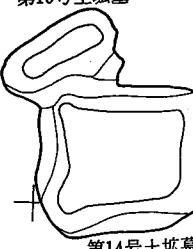
第15号土塚墓



第14号Terracotta Coffin Tomb

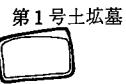


第15号Terracotta Coffin Tomb

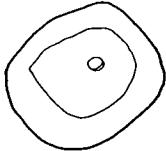


第14号Terracotta Tomb

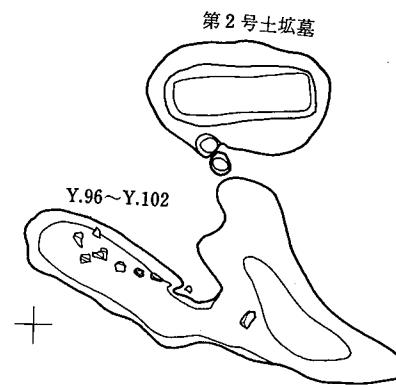
F



第1号土塚墓

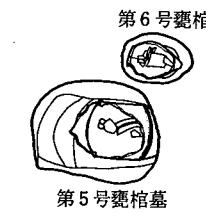


+

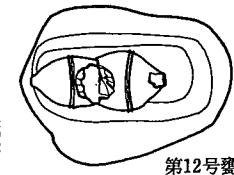


Y.96~Y.102

+

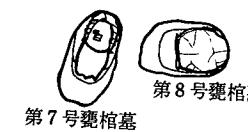


第5号Terracotta Coffin Tomb



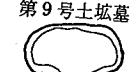
第12号Terracotta Coffin Tomb

+



第7号Terracotta Coffin Tomb

+

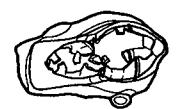


第9号土塚墓

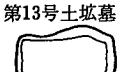
+



第12号土塚墓



第13号Terracotta Coffin Tomb



第13号土塚墓

G

+

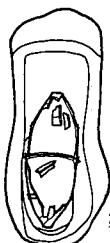


+

+

+

+



第10号Terracotta Coffin Tomb



第11号Terracotta Coffin Tomb



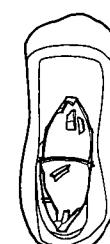
第2号Terracotta Coffin Tomb

+

)



G



+



H

+



I

+



Fig.27 D地区甕棺墓・土塚墓配置図 (縮尺 $\frac{1}{100}$ )

平版 1版

## 1. 甕棺墓出土状況 (Fig. 28~33 PL.12)

## 第1号甕棺墓 (Fig. 28 PL.13)

平面プラン隅丸長方形の土塙より、2個の広口壺が出土した。うち1個は丹塗り土器で、口縁部を下にしており、この上にもう1個の壺が重なる。これらの出土状況からみて、甕棺というよりも、土塙墓に対する供献土器とすべきかもしれない。

## 第2号甕棺墓 (Fig. 28 PL.13)

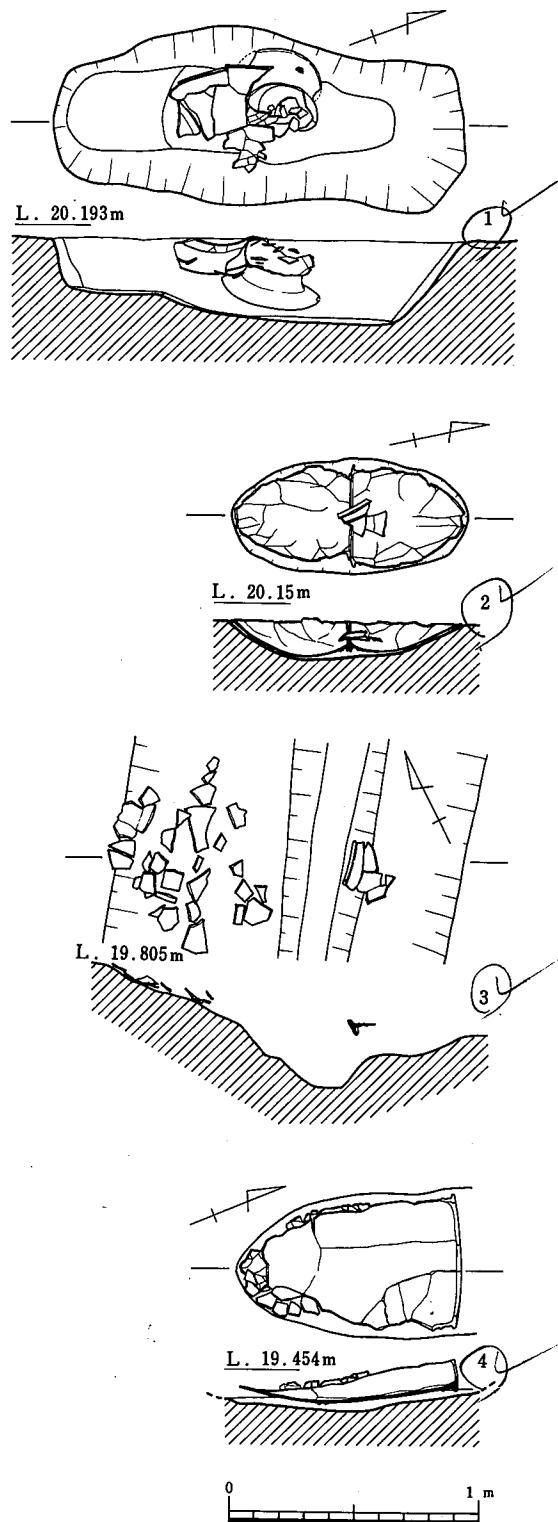
わずかに全形の $\frac{1}{2}$ を残して出現した。現存部によれば、2つの小型の甕を用い、口縁部を合わせて、ほぼ水平に埋置している。甕は、ほぼ同型のものを利用している。やや口辺径の小さい南側の甕は、口辺部に2条の断面三角形突帯を持つが北側の甕は、1条しかみられない。墓塙底の標高は、他に比較し高いが、これは、小型という甕の大きさによるもので、深い墓塙を必要としたかったためであろう。

## 第3号甕棺墓 (Fig. 28)

第I溝より切られ、その斜面に破片がわずかに残る。図示した甕口辺部は、溝底より浮いており、もとより原位置を示すものではなく、方位、墓塙、さらに複棺、単棺かも明確でない。

## 第4号甕棺墓 (Fig. 28)

本甕棺墓も溝より切られているが、現存部より方位と、傾斜角度が推測できる。現存部は、墓塙に、ほぼ密着して水平に埋置されており、第1・2号甕棺墓と並行の方位をとる。単棺か複棺かは判断できないが原位置であることは確かで、D地区甕棺墓配置の南端に位置している。

Fig. 28 D地区第1~4号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

## 第5号甕棺墓 (Fig.29)

隅丸長方形の平面プランは、方形にちかく、北西側より階段状に掘りこむ。上・下棺の削平状況からみて、長方形の塙をほぼ垂直に掘り、さらに東下方に横穴を掘り、甕を斜めに埋置する方法をとったのであろう。上棺は、大半を欠くが鉢形土器を用いており、下棺の大型甕と口辺部を合わせる。D地区の甕棺墓としては、古い時期に属し、中期中葉か？

## 第6号甕棺墓 (Fig.29)

第5号甕棺の北側に、ごく近接して発見されたもので、方位もほぼ等しい。本甕棺墓も、大半が削平され、墓塙の平面プランも原形を示さない。棺内落ちこみの口辺部は、下棺の甕の口辺部ではなく、別個体に復原できた。したがって複棺ということが考えられるが、口径があまりにも異なることから、挿入という埋置方法、あるいは供献土器ということも考えられよう。

## 第7号甕棺墓 (Fig.29、PL.13)

平面プランは、不整橍円形で、北側に斜めに掘りこまれている。N-44°-Wの方位は他の甕棺墓の方位と、やや異にしている。2個の甕を用いた接口式の甕棺墓であるが、下棺は、体部に5条の断面M字形の突帯をめぐらす特異な甕を用いており、丹塗り痕が認められる。下棺より金環が出土したが、その出土状況からみて、削平時に流入したのであろう。

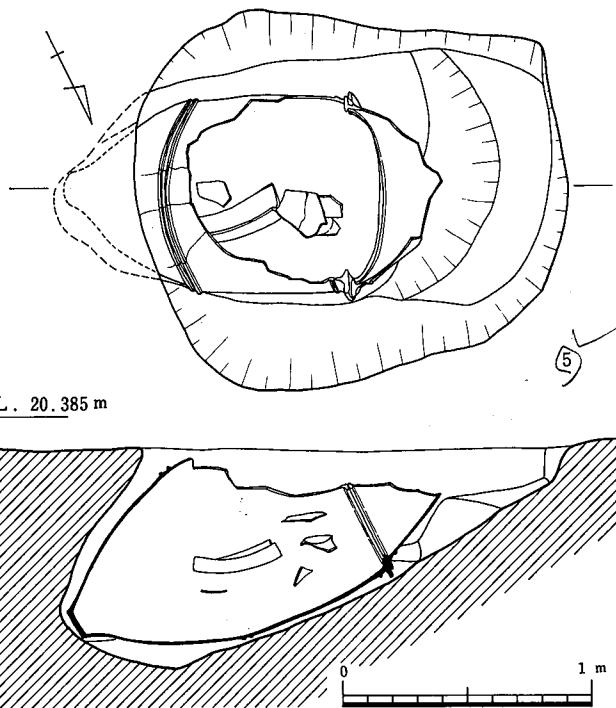
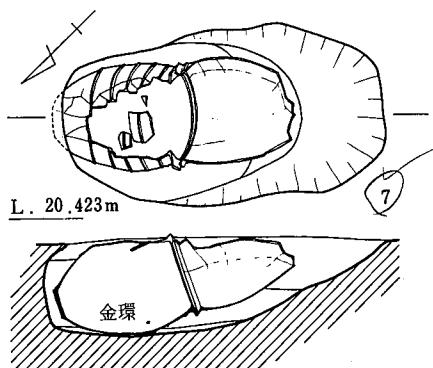
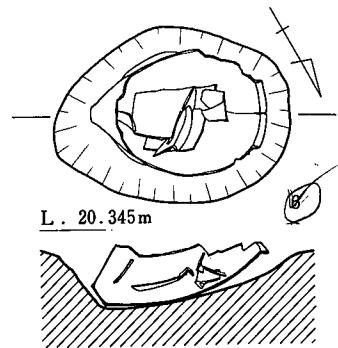


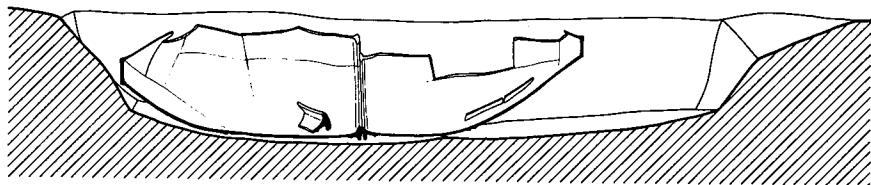
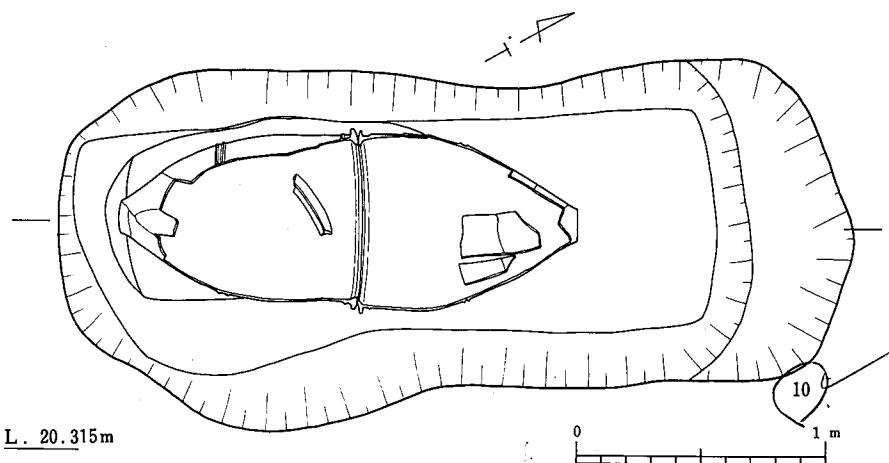
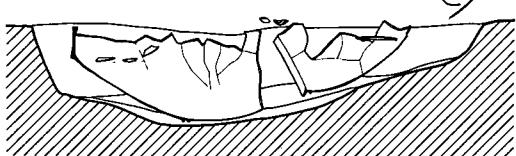
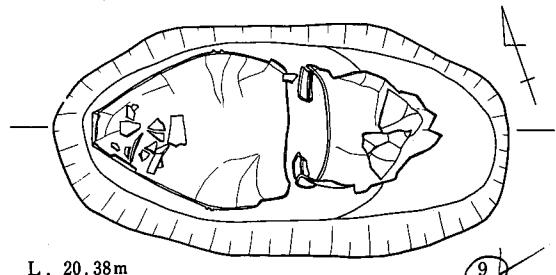
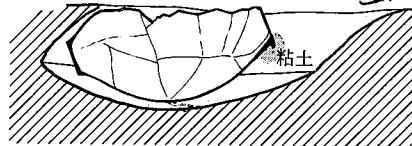
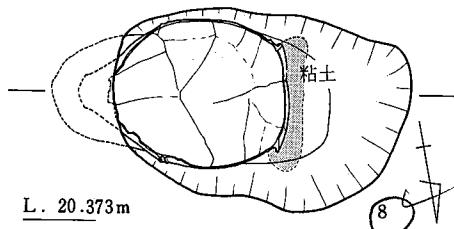
Fig.29 D地区第5～7号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

## 第8号甕棺墓 (Fig.30 PL.13)

全形の $\frac{1}{3}$ ほどを欠く。墓塚は、東側へ斜めに掘りこみ、墓塚の形と合わせて棺を埋置している。棺上部は削平され、現在は单棺であるが、口辺部には灰白色粘土があり、複棺という可能性もある。方位は異にするが、第7号甕棺墓に近接して位置し、同じように小児用の甕棺墓と思われる。

## 第9号甕棺墓 (Fig.30 PL.13)

大きさを異にする2つの甕を用いた甕棺墓で、西棺は、ほぼ水平に埋置されているが、小型の東棺は、これと離れて、口辺部を下にし、傾斜をもって埋置されている。西棺の甕は、口辺部を打ち欠き、小型の甕の口径に一致させていることから、出土状況は、旧形を示さず、さらに墓塚の形状から、両棺とも水平に埋置されていたもので、西棺は、削平時に動いたのであろう。

Fig.30 D地区第8～10号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

## 第10号甕棺墓 (Fig.30)

第11号甕棺墓と、ほぼ同じ方位で並行する位置関係にある。墓塙は、隅丸長方形の平面プランで、甕棺の埋置としては、必要すぎるほどの大きさである。大きさにやや違いがあるが、器制を同じくする2つの甕を用いた接口式の合口甕棺墓である。南側の甕口辺部より、石斧が出土したが、棺内落ちこみの破片よりみて、副葬品とは断定できないであろう。

## 第11号甕棺墓 (Fig.31)

第III溝により、上部を切られているが、墓塙と埋置方法は推測できる。ほぼ等しい大きさの甕を用いた接口式合口甕棺墓で、墓塙の北側壁を垂直近く掘りこみ、下棺を置き、斜面の塙底を利用して上棺を埋置するという方法をとる。墓塙および棺内出土の磁器類 (J 114~121) や滑石製石鍋などは、削平後の遺物で、第III溝に伴うものである。

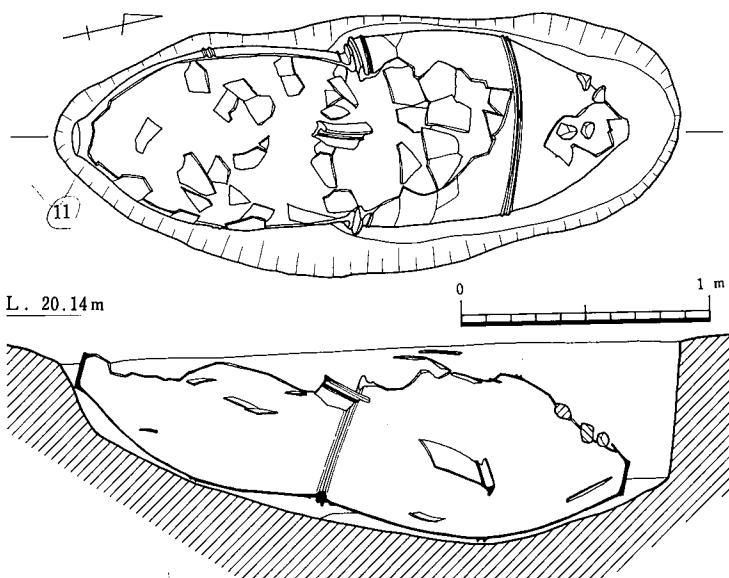
## 第12号甕棺墓 (Fig.32 PL.13)

平面プラン隅丸長方形の墓塙の西寄りには水平に埋置された接口式の合口甕棺墓で、第5・6号甕棺墓の東側に近接して位置する。接口式の形をとるが、東側の甕は、口辺部を打ち欠いており、西側の甕は、口辺部は存在するが、口縁内の突出部を全面打ち欠いている。2つの甕は、墓塙の西に片寄って置かれており、埋置順序は、西棺が先であったものと考えられる。

## 第13号甕棺墓 (Fig.32 PL.13)

墓塙は、上下棺の形に合わせて掘ってあり、下棺は、塙底を深くしている。下棺は、胴部に2条の断面三角形の

突帯をめぐらす大型  
甕で、平坦な口辺部  
を持つ。上棺は、小  
型の甕で、くの字形  
に外反する口辺部で  
あるが、下棺とたく  
みに組み合わせ密着  
している。傾斜して  
埋置された甕棺の多  
くが同一方向に並び、  
しかも本甕棺墓のよ  
うに上棺を西側に置  
く例が多いようであ  
る。

Fig.31 第11号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

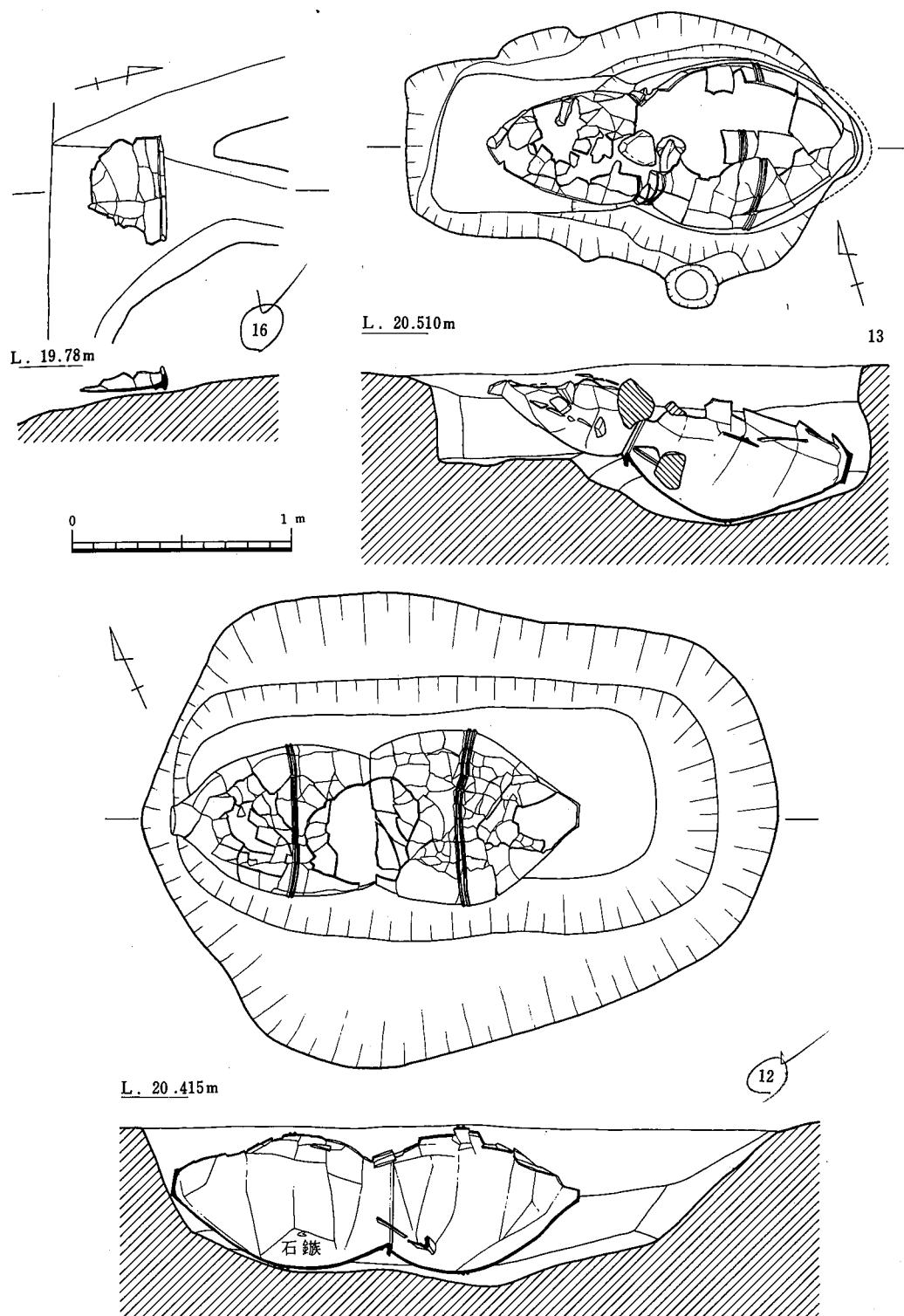


Fig. 32 D 地区第12・13・16号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

## 第14号甕棺墓 (Fig.33 PL.13)

第III溝より墓塙の一部を切られている。水平に埋置した单棺で、墓塙の塙底は、甕の形態と同じように掘られ、口辺部側は、階段状となる。また、最大径をはかる口辺部は、特に横に掘りこみがみられる。本甕棺墓は、D地区甕棺墓の北端に位置している。

## 第15号甕棺墓 (Fig.33 PL.13)

第14号甕棺墓と同じように第III溝によって墓塙を切られている。逆L字形の口縁をもつ小型の甕を用いた接口式の合口甕棺墓で、やや傾斜して埋置されている。両棺の全長約65cmで本遺跡では、もっとも小さい甕棺墓で、小児用甕棺墓であろう。D地区における小児用甕棺墓は、第2・6・7・8・15号甕棺墓などが考えられるが、墓域の中での占地、あるいはグループなどに特殊性は見られず、また、甕棺としての専用土器か、転用土器かは、明らかにしがたい。

## 第16号甕棺墓 (Fig.32)

わずかに甕の口辺部を残すのみなので、詳細は不明である。現存部は、口辺部を北に向けており、出土状況が原位置を示すとすれば、ほぼ水平に埋置されていたということになり、その方位も、他の甕棺墓と大きく違わない。

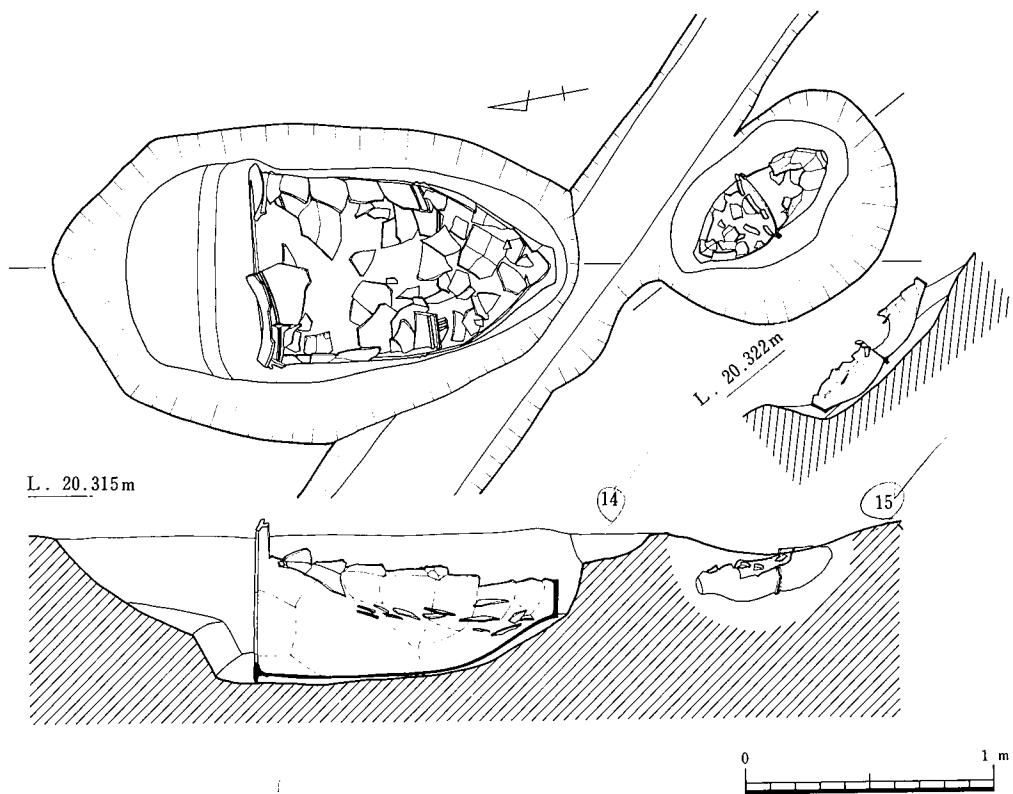


Fig.33 D地区第14・15号甕棺墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

## 2. 出土甕棺 (Fig.34~39)

D地区甕棺墓の検出総数は、16基で、複棺11基、单棺5基である。これらの大部分が削平のために破壊されており、復原作業は困難をきわめた。出土個体数27個のすべてをここに図示したが、第1号甕棺墓の広口壺2個、第2号甕棺墓の上下甕棺、第3号甕棺墓、第15号甕棺墓の上下甕棺は、器壁うすく、完全に復原できなかつた。実測図の縮尺は、第1号甕棺墓、第2号甕棺墓、第15号甕棺墓は $\frac{1}{6}$ 、他は縮尺 $\frac{1}{12}$ で統一した。

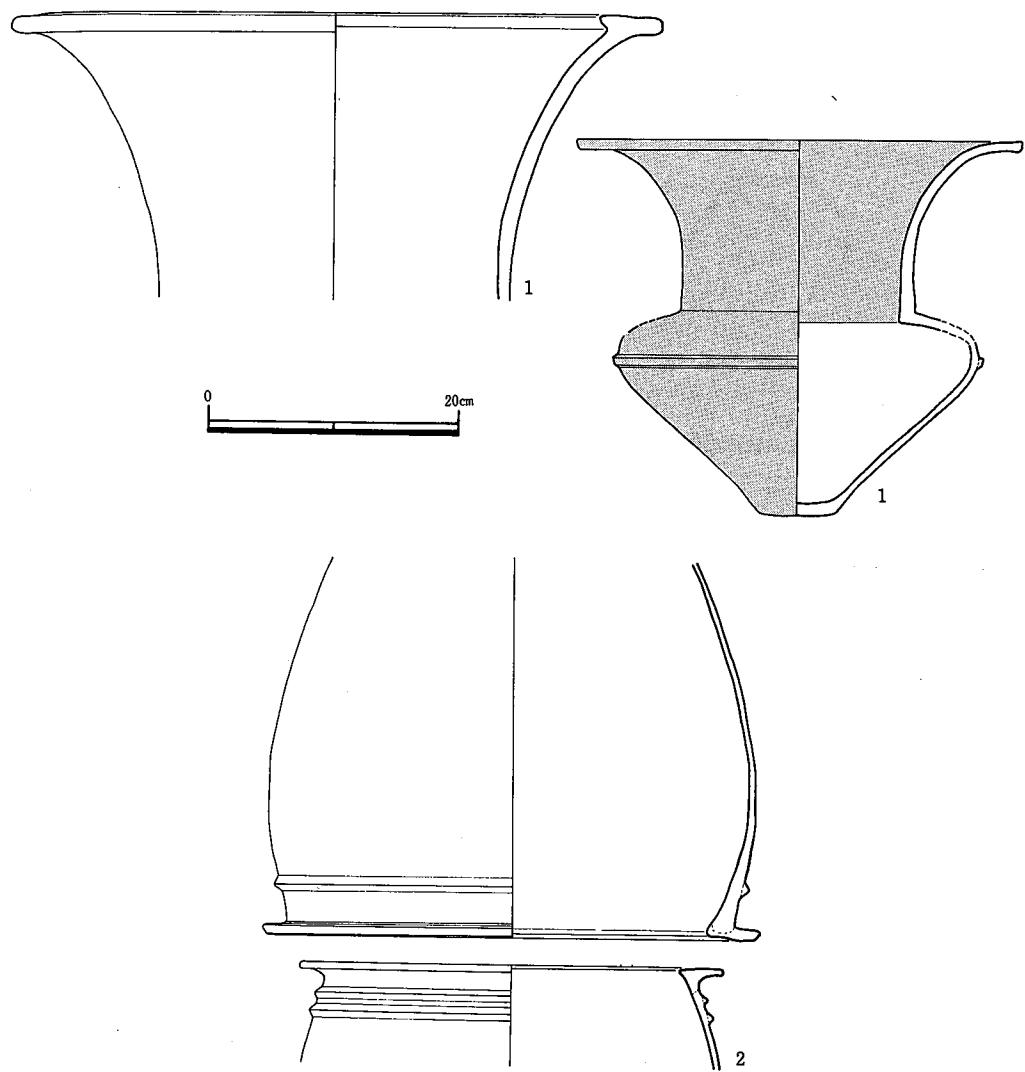


Fig.34 D地区第1・2号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{6}$ )

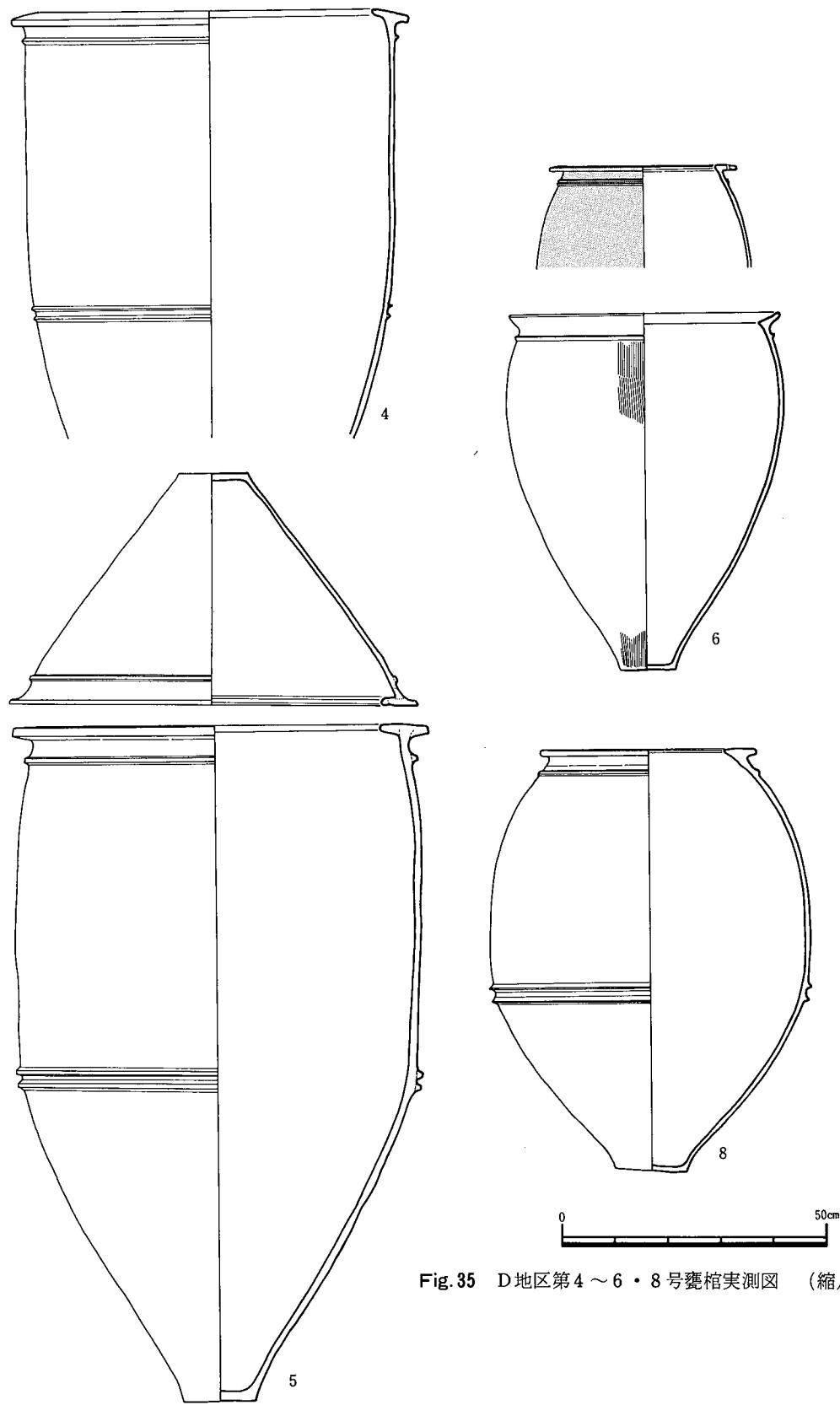


Fig. 35 D 地区第 4 ~ 6 • 8 号甕棺実測図 (縮尺  $\frac{1}{12}$ )

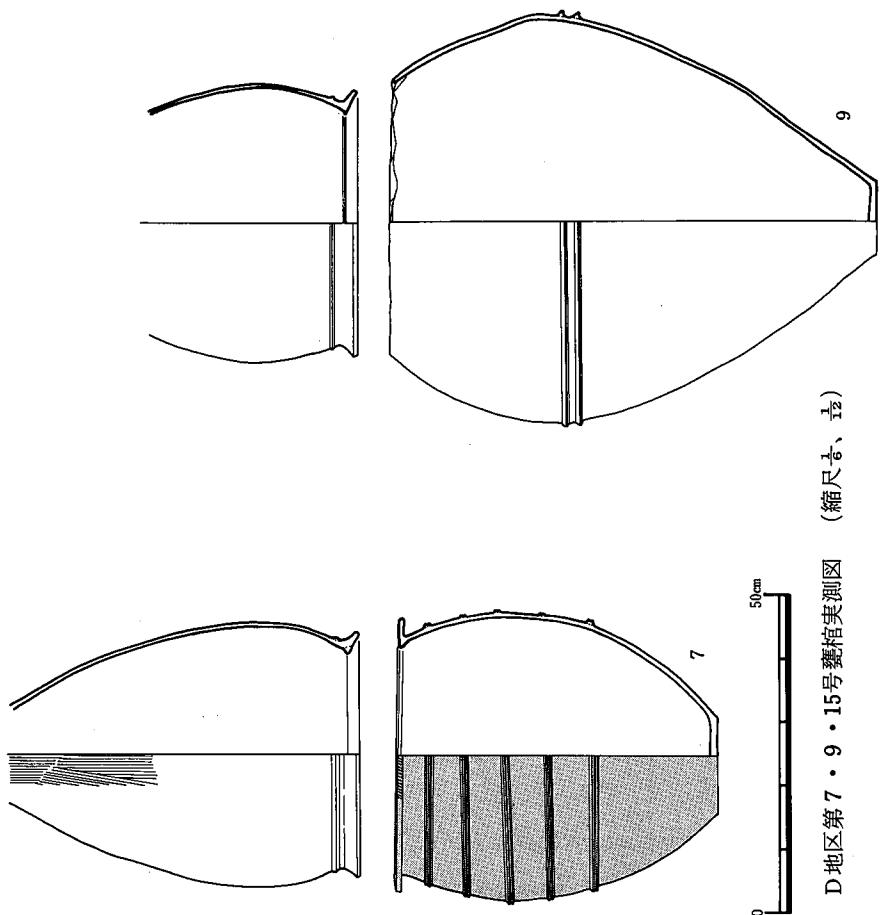


Fig. 36 D 地区第 7・9・15号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{6}$ 、 $\frac{1}{12}$ )

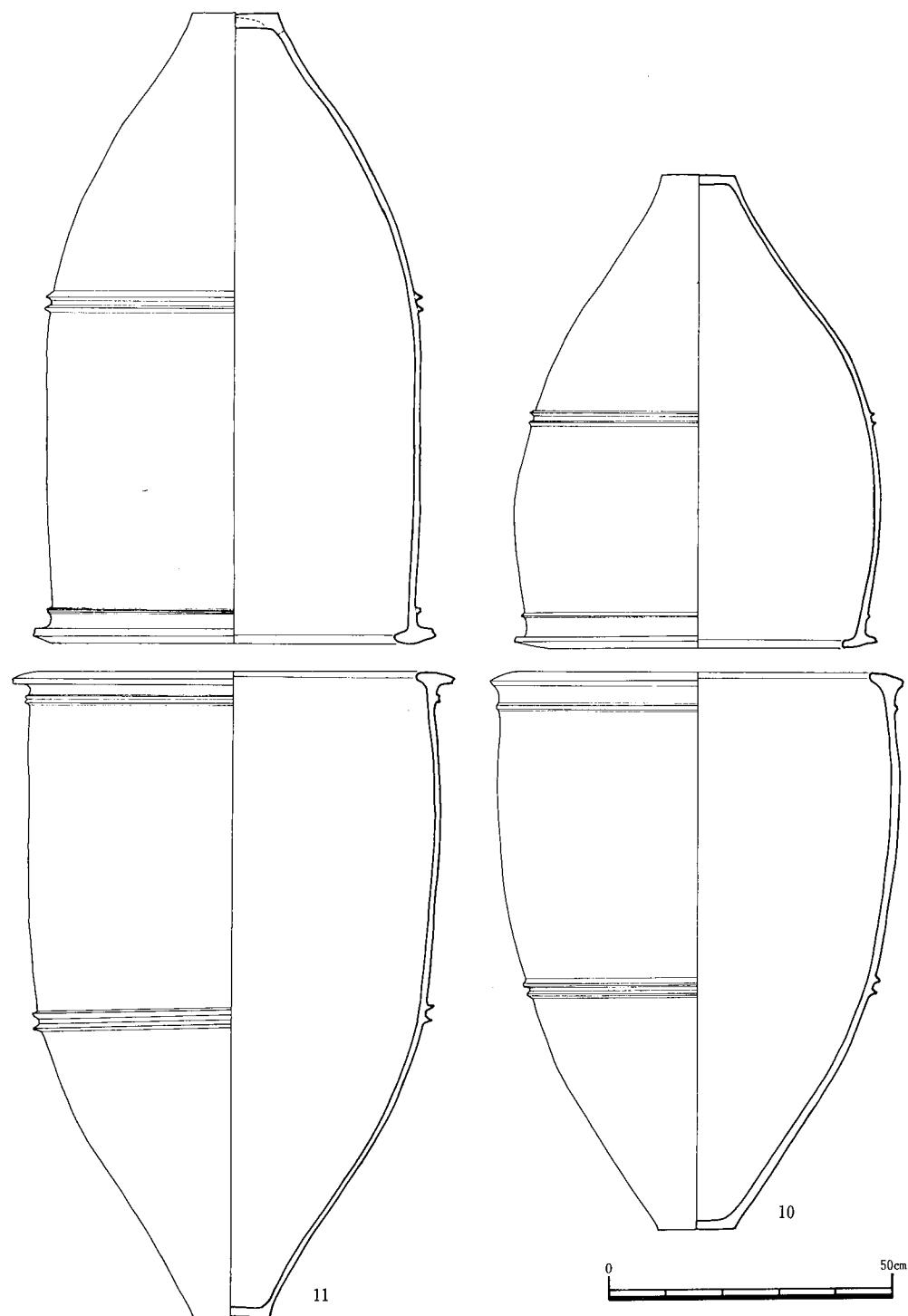


Fig. 37 D地区第10・11号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

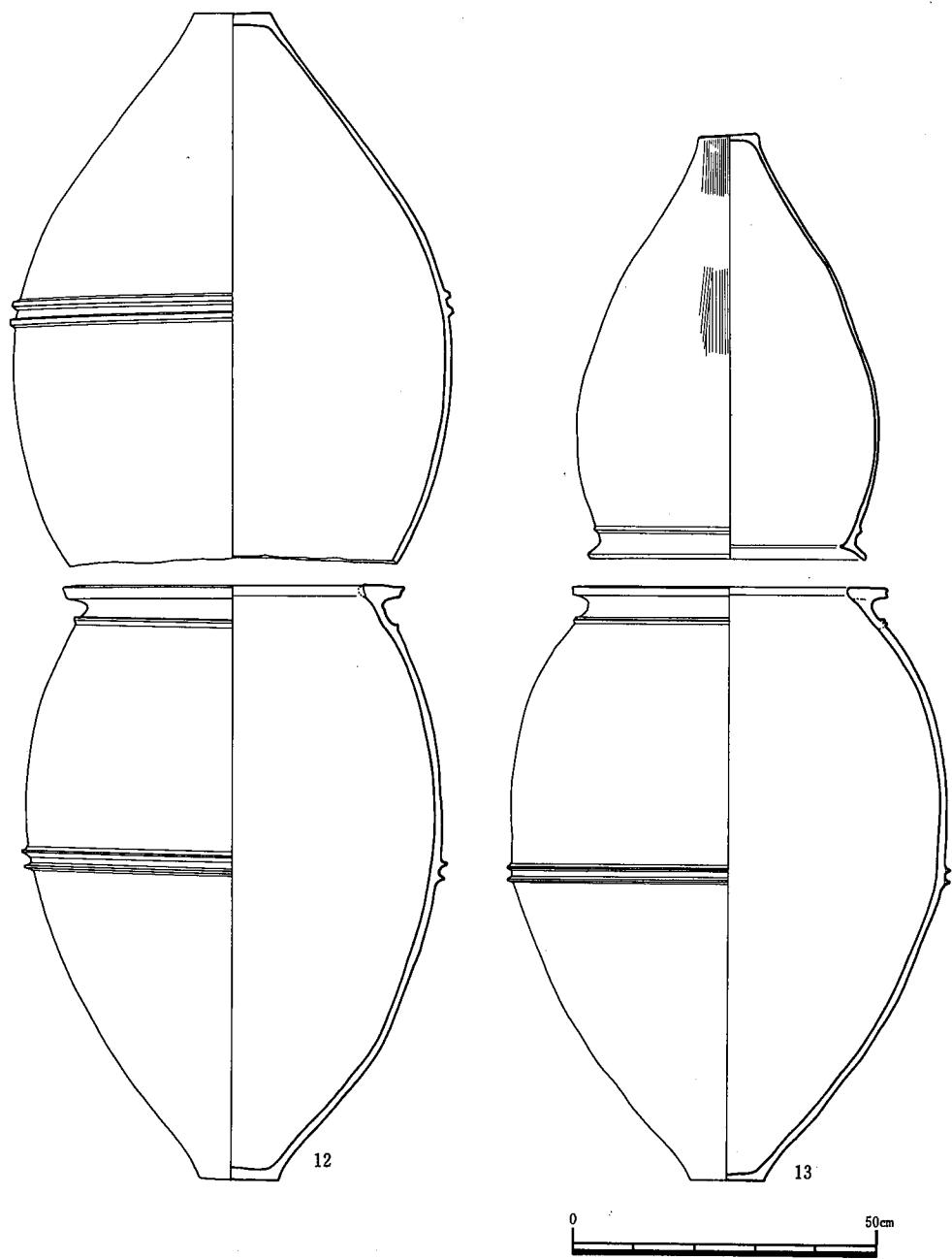


Fig. 38 D 地区第12・13号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )



第1号甕棺 (Fig.34) 2個の壺形土器

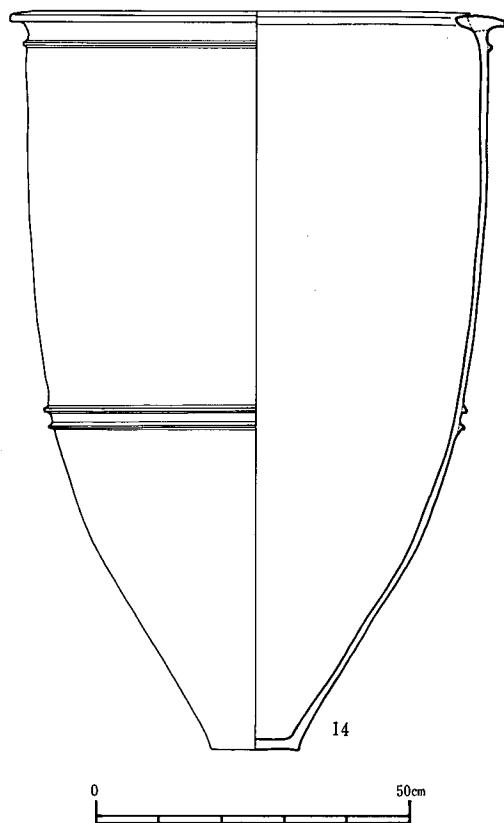
よりなる。上に重なる壺は、口径52cmで、頸部から朝顔状に開く。口縁内面には突出部があり、口縁上面は平坦面をなす。胎土砂粒もつ。他の1個は、口径36cm、復原器高30cmをはかる。まるみのある小さな底部から外反ぎみにのび、コの字形の突帯を、胴部最大径の位置にめぐらし、急に内弯して頸部へつながる。頸部は、上方に直線的にのび、その中位より開く。頸部内面、底部外面に丹塗り痕のこる。

第2号甕棺 (Fig.34) 両棺とも復原で  
きず、ここでは口辺部のみを図示する。下  
棺とした甕は、口径34cmで、逆L字形の口

縁をもち、口縁直下に、断面三角形の突帯を2条めぐらす。口縁上面は、ほぼ平坦面をなすが、わずかながら内側に傾いている。上棺の甕は、同じように逆L字形をなすが、器壁は厚く、外唇部は、まるみをもつ。口縁直下に断面三角形の突帯を1条めぐらす。両甕とも、砂粒多く、赤みをおびた黄褐色を呈する。内外面磨滅し、調整痕不明。口径40cm、口縁上面は、平坦面をなさず、内側に傾斜し、その稜はにぶい。

第3号甕棺 (Fig.39) 第1溝によって切られているために、全形を知りえない。図示した口辺部は、その残存部と同一個体をなすかは、明確にできない。口縁部は、いわゆるT字形口縁をなすもので、口縁下に、1条の断面三角形突帯をめぐらす。口縁内側への突出部は、肥厚しており、内外唇とも、まるみをもつ。口縁上面は、平坦となるが、外に傾斜する。

第4号甕棺 (Fig.35) 胴部中位に、2条の断面三角形突帯をめぐらし、口辺部へは、直線的にのび、T字形口縁をつける。口縁のつくりは、第3号甕棺と類似しており、内面への突出部は肥厚し、外傾する口縁となる。口縁下には、1条の断面三角形突帯をめぐらす。外面淡茶褐色を呈す。胎土には、石英砂粒を含む。

Fig.39 D地区第3・14・16号甕棺実測図 (縮尺 $\frac{1}{12}$ )

**第5号甕棺 (Fig.35)** 下棺の甕は、口径80cm・器高126cmをはかる。2条の断面コの字形突帯は、胴部中位よりやや下方にめぐり、胴部上半部は、直線的で、上面平坦なT字形口縁へとのびる。口縁部の内外面の突出部は、水平にのびる。口縁下の突帯は、断面コの字形をなす。上棺は、鉢形土器が用いられており、口径78cm・器高43cmをはかる。底径14cmの底部から直線的に外反し、下甕と同じようなT字形の口縁をもっている。内面の突出部は、肥厚する。

**第6号甕棺 (Fig.35)** 下棺内に落ちこんでいた甕形土器は、口縁内面と外面に丹塗り痕が認められ、平坦面をつくる口縁部には、相対して2個一組の穿孔一対があり、体部にも焼成後外側からの一孔がある。口径35cm。下棺の甕は、口径51cm・器高67cmで、くの字形に外反する口縁を持つ。口縁突帯下と底部付近には、刷毛目痕がのこる。

**第7号甕棺 (Fig.36)** 下棺の甕は、口径43cm・器高52cmで、逆L字形の口縁をもつ。口縁上面は、平坦であるが、やや外傾する。胴部は、まるみをもっており、大きめの底部へつながる。胴部には、断面M字形の突帯が5条めぐり、口縁に近くなるにつれ、その間隔はせまい。上棺の甕は、口径39cm、底部を欠くが、やや長めの胴をもつ、口縁部は、くの字形に外反し、口縁内面は、突出し、粘土継ぎ目が観察できる。底部近くに刷毛目痕のこる。

**第8号甕棺 (Fig.35)** 上面水平の逆L字形口縁をもつ。頸部は、急に屈曲して胴部へつながり、中位よりやや下に、2条の断面台形の突帯をめぐらす。口径41cm・器高78cm。

**第9号甕棺 (Fig.36)** 同器種大小の甕よりなる。小型の甕は、口径41cm、口縁部は、くの字形に外反する。内面には、小さく突出する部があり、鋭利な稜線をなす。大型の甕は、口辺部を打ち欠いている。現高68cm。胴部最大径は、やや上位にあり、その位置に断面三角形の突帯をめぐらす。突帯は、鋭利な三角形ではなく、またやや下方に垂れさがる。

**第10号甕棺 (Fig.37)** 下棺の甕は、口径73cm、器高96cmで、胴部中位よりややさがって2条の断面三角突帯をめぐらす通例のものであるが、口縁部に特徴をもつ。つくりとしては、T字形であるが、厚みがあり、内外への突出が少ない。口縁直下に突帯をめぐらす。上棺は、口径64cm・器高78cmの甕で、外傾するT字形の口縁をもつ。断面三角形の突帯を、口縁下に1条、胴中位に2条めぐらす。

**第11号甕棺 (Fig.37)** 下棺口径78cm・器高112cm、上棺口径70cm・器高110cmと両棺ほぼ同じ大きさの甕を用いている。外傾するT字形口縁は、上棺が、やや肥厚しているようである。上棺の甕底部には、粘土継ぎ目が観察できる。口縁下の突帯は断面M字形をなす。

**第12号甕棺 (Fig.38)** 下棺の甕は、底部から、内弯しながらのびる胴部中位に2条の断面三角形の突帯をめぐらす。口縁は、上面平坦部をもち、ぶ厚く堅牢なつくりをなす。胴部中位に、やや上向きの断面三角形の突帯をめぐらす。上棺は、口辺部を打ち欠いた甕で、下棺よりも、胴部にまるみがあり、胴中位の2条の突帯も、断面コの字形をなし、細かい点で異なる。いずれも胎土に石英砂粒を含み、外面茶褐色を呈す。

第13号甕棺 (Fig. 38) 口径52cm・器高96cmをはかる下棺は、第12号甕棺墓と同一の器制を持つ甕で、逆L字形の口縁は、上面を平坦とし、外唇部がやや凹む堅牢なつくりをなす。口縁下の突帯は、断面M字形である。胴部中位には、頂点のせまいコの字形突帯をめぐらせる。上棺の甕は、口径48cm・器高68cmで、くの字形に外反する口縁をもつ。胴下半分には、刷毛目痕のがこる。口縁部の内側は、やや凹み、内面突出部の稜はするどい。

第14号甕棺 (Fig. 39) 口径80cm・器高 117cmをはかる甕を用いた单棺である。口縁部はいわゆるT字形の口縁をなし、内側への突出部は肥厚している。断面コの字形の突帯は、口縁直下に1条、胴部はやや下位に2条がめぐる。

第15号甕棺 (Fig. 36) 下棺の甕は、口径26cm・器高復原31cmをはかる。口縁はL字形をなし上棺に比較するとぶ厚く、やや外傾する。底部はあげ底ぎみ。上棺の甕は、口径26cm、器高復原34cmで、やや胴長である。口辺部は、逆L字形で、外唇部はまるくおさめている。口縁上面は、わずかに内傾し、内面突出部が認められる。

第16号甕棺 (Fig. 39) 口径不明。T字形口縁をもっている。内面は、よく発達しているが、粘土の継ぎ目から、外面の突出は、小さくつけられている。

Tab. 10 D地区甕棺墓一覧表

(単位 cm)

No.	方 位	傾 斜	形 式	土 器	墓 坪	時 期	備 考	Fig.	PL.
1	N-20°-E			壺・壺	隅 丸 長 方 形 164×70×34 19.803m	中 期		28	13
2	N-12°-E	NE ほぼ水平	接 口	甕+甕	椭 圆 形 94×46×16 19.98m	中 期		28	13
3	N-64°-W	不 明	單 ?	甕	不 明	19.65m	中 期		28
4	N-22°-E	NE ほぼ水平	單 ?	甕	不 明	19.294m	中 期		28
5	N-74°-W	NW 28°	接 口	甕	隅 丸 長 方 形 173×76×87 19.395m	中 期		29	
6	N-66°-W	NW 29°	差しこみ?	甕+鉢	不 整 椎 圆 形 94×69×25 20.045m	中 期		29	
7	N-44°-W	SW 13°	接 口	甕+甕	不 整 椎 圆 形 128×66×47 19.913m	中 期	金 環	29	13
8	N-80°-W	NW 18°	單	甕	不 整 椎 圆 形 119×76×41 19.87m	中 期	口辺部に粘土	30	13
9	N-70°-W	SW ?	差しこみ?	甕+甕	椭 圆 形 183×90×40 19.86m	中 期		30	13
10	N-28°-E	NE ほぼ水平	接 口	甕+甕	隅 丸 長 方 形 318×103×48 19.655m	中 期	石 斧	30	
11	N-12°-E	SW 15°	接 口	甕+甕	椭 圆 形 249×102×78 19.24m	中 期	口辺接合部に粘土、青磁	31	
12	N-66°-W	SE ほぼ水平	接 口	甕+甕	隅 丸 長 方 形 289×216×73 19.555m	中 期	石 鎚	32	13
13	N-74°-W	NW 15°	接 口	甕+甕	隅 丸 長 方 形 206×112×73 19.64m	中 期		32	13
14	N-16°-E	NE ほぼ水平	單	甕	椭 圆 形 211×112×58 19.565m	中 期		33	13
15	N-28°-W	NW 12°	接 口	甕+甕	椭 圆 形 105×75×20 19.865m	中 期		33	13
16	N-13°-E	NE ほぼ水平	單	甕	不 明	19.64m	中 期		32

### 3. 土塙墓出土状況 (Fig.40~44)

#### 第1号土塙墓 (Fig.40)

平面プランは長方形で、四壁はほぼ垂直に掘られており、全長101cmをはかる、幅は、両短側ともに差はない。D地区では、小型の土塙墓である。図示できなかったが、土塙内より有軸羽状文をもつ弥生式土器の小破片を出土した。N-72°-Wの方位で、土塙墓群の西端に位置する。

#### 第2号土塙墓 (Fig.40)

長軸方位N-70°-Wは、第1号土塙墓と差はない、近接して位置する第5・6号甕棺墓や第12号甕棺墓とも方向を同じくしている。平面プランは、隋円形に近い隅丸長方形をなすが、二段目の掘りこみは、四壁ともほぼ垂直をなし、長さ204cm・幅76cmの長方形をなす。塙底は、平坦であった。

#### 第3号土塙墓 (Fig.42)

第3号土塙墓は、第1号甕棺墓の南側約1mの位置にあり、不整形の土塙墓である。長さ3mもあり、やや大きすぎること、塙底が二段となっていることなどから、2つの土塙墓の切り合いも考えられよう。ただ表面観察、土層断面には変化は認められなかった。

#### 第4号土塙墓 (Fig.42)

第II溝より上部を切られているため、不整長方形の平面プランは、旧形を示さないであろうが、第II溝の溝底より低い部分は、旧形のままである。平面プランの長さは、290cm、幅162cm、二段目の掘りこみは、長さ170cm・幅82cmをはかり、北短側がやや幅が広い。長軸方位N-12°-Eで、土塙墓群の南端に位置する。

#### 第5号土塙墓 (Fig.43)

第4号土塙墓の北側に約1.5mと近接して位置しており、同じように第II溝によって切られる。第4号土塙墓と平面プランはよく類似しているが、土塙の規模は小型である。長さ200cm・幅142cmで、長軸方位N-10°-Eで、第4号土塙墓と並ぶ。四壁は、わずかに稜をもつていて、塙底まで斜めに掘られている。出土遺物はなかった。

#### 第6号土塙墓 (Fig.41)

同じように第II溝によって切られる。長さ210cm・幅100cm・深さ29cmあり、隅丸長方形の平面プランをとる。第1・2号甕棺墓、第3・4・5号土塙墓に囲まれているが。これらの方位と違い、直角方向のN-78°-Wの方位をとる。

#### 第7号土塙墓 (Fig.43)

平面長方形プランで、長さ208cm、幅83cmをはかり、第10号甕棺墓と第8号土塙墓の間にあり、ほぼ同一方向に並ぶ。深さは、24cmと浅く、上部を削平されたものと思われる。塙底は、中央部が最も低い。平面プラン、および塙底プランも西短側よりも東短側が幅広く、東短側が頭位であろうか。

### 第8号土塙墓 (Fig.41)

長さ 172cm・幅79cmの長方形の平面プランを持つ土塙墓で、第7号土塙墓の北側に位置する。方位は、N-52°-Eで、北東-西南方向をとる第3・4・5・7号土塙墓の北東端にあり、これより、北側には、同一方向の土塙墓はみられない。塙底プランも、長方形を示し、小口の東短側の塙底には、一段低い掘りこみがあり、木棺小口板を想定させる。ただ、ほかの三側には、同種の掘りこみは検出できず、塙底は、平坦となっていた。

### 第9号土塙墓 (Fig.40)

深さは、12cmと浅く、塙底レベルもD地区でもっとも高い。平面プランは、不整橢円形で、長さ 133cm・幅76cmをはかり、N-28°-Wの方位をとる。四壁の掘りこみはあまく、平面プランも不整形がめだつことから、土塙墓とするには、疑わしい一面も持つが、甕棺墓の出土状況からして、土塙墓も削平されたことが考えられ、本土塙墓を小児用土塙墓とすれば、掘りこみの浅い現存部でも、矛盾はないと思われる。また、位置や方位にも同じことが言え、ここでは、土塙墓と認定してとりあげた。

### 第10号土塙墓 (Fig.41)

長さ 163cm・幅66cm・深さ50cmをはかる。平面プランは、長方形で、第III溝より切られている。第11号甕棺墓の北東部約 1.7mの位置にあり、第7号土塙墓と並行する。四側壁の掘りこみは、ほぼ垂直となり、長側は、両側とも内側に掘りこまれ、平面プランよりも塙底プランが幅広くなっている。塙底は、平坦であるが、両短側の深さに 5cm程の差があり、北短側にむかって、傾斜している。塙底近くから、弥生式土器片を出土したが、磨滅した小破片のため、時期は、明確にしがたい。

### 第11号土塙墓 (Fig.43)

第10号土塙墓と同様に、第III溝によって東側半分を切られるが、現存部より旧形を知りうる。現存部の平面プランは、長方形で、明らかに二段の掘りこみを持っている。一段目の掘りこみは、復原長 215cm、幅95cmで、二段目掘りこみは、長さ 128cm、幅37cmをはかる。一段目掘りこみは、削平されているが、二段目掘りこみは、旧形をとどめていると思われる。二段目掘りこみは、四側壁とも垂直に掘られ、深さも 50cmを越え、塙底のレベルは、D地区土塙墓では、もっとも低い。塙底は、平坦面をつくらず、弓状にややまるくなっている。

### 第12号土塙墓 (Fig.41)

N-72°-Wの方位は、第11号土塙墓と、ほぼ同じ方向で並行する位置にある。土塙上面を、第I・III溝によって切られているために、平面プランは、変形となる。側壁は、垂直に近く、東短側は、内側に掘りこまれている。塙底は、平坦面をなす。本土塙墓は、削平されているが塙の深さからみて、第11号土塙墓のような二段掘りこみの可能性はないようである。

### 第13号土塙墓 (Fig. 40)

第13号甕棺墓の東側に近接して位置し、第8号甕棺墓・第9号土塙墓・第12号土塙墓・第13号甕棺墓と方向を同じくして、ほぼ一列に並ぶ。長さ 138cm、幅72cmで、長方形の平面プランを持つ。西短側で、やや凹凸があるが、側壁は、ほぼ垂直に掘られ、塙底は平坦をなす。

### 第14号土塙墓 (Fig. 44)

長さ 222cm 幅 200cmの、方形にちかい平面プランを持つ。塙底は、平坦となるが、西側壁には、突出した掘りこみがみられる。土塙北隅で、第15号土塙墓を切る。塙底に密着していないが、土塙内より弥生式土器片が出土し、図示した。Y91は、逆L字形口縁をもつ甕形土器で口縁下に断面三角形の突帯1条をめぐらし、丹塗り痕が認められる。口径は36cm。Y92は、底部で、底径 9 cm、明赤茶褐色を呈す。これらの土器から、D地区土塙墓の年代推定が、ある程度可能となろう。

### 第15号土塙墓 (Fig. 44)

第14号土塙墓より切られている。長さ 174cm・幅 100cmの平面プランは、不整橢円形で、塙底プランは、隅丸長方形である。塙底は、ほぼ平坦面をつくるが、側壁は、傾斜をもって掘りこまれている。

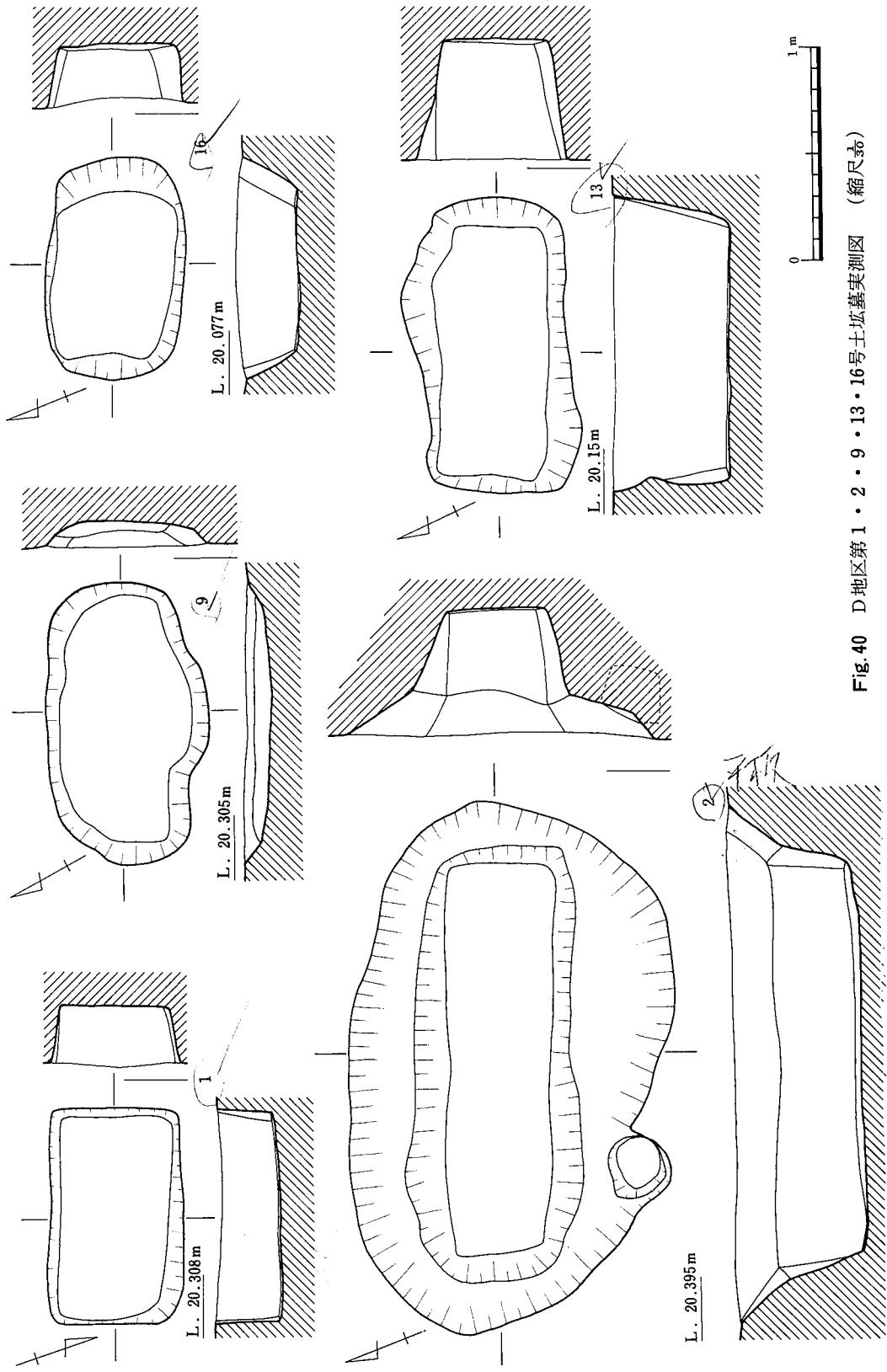
### 第16号土塙墓 (Fig. 40)

長さ 104cm・幅65cmの長方形平面プランは、D地区では、第1号土塙墓について小型である。N-68°-Wの方位は、第11号土塙墓と同一で、第12・13号土塙墓などとは、並行の位置にある。長側壁はほぼ垂直の掘りこみをなすが短側は、斜めの掘りこみをなす。

Tab. 11 D地区土塙墓一覧表

(単位 cm)

No.	方 位	平 面 形	長 × 幅 (左・中・右)	深さ・塙底レベル	備 考	Fig.
1	N-72°-W	長 方 形	101× 58・ 63・ 60	31	19.93m 有軸羽状文土器片	40
2	N-70°-W	隅丸長方形	242×115・148・110	55	19.63m	40
3	N- 8°-W	不整長方形	300× 62・ 96・ 82	46	19.62m あるいは2つの土塙の切りあいか? 石鎚	42
4	N-12°-E	不整長方形	290×168・162・173	48	19.44m 第II溝より切られる	42
5	N-10°-E	不整橢円形	200× 92・ 142・ 122	40	19.68m 第II溝によって切られる	43
6	N-78°-W	隅丸長方形	210× 90・ 100・ 85	29	19.78m 第II溝によって切られる	41
7	N-77°-E	長 方 形	208× 63・ 83・ 82	24	19.97m	43
8	N-52°-F	長 方 形	172× 70・ 79・ 73	23	19.99m 東短側に浅い掘りこみがあり、あるいは木棺か	41
9	N-62°-W	不整橢円形	133× 61・ 76・ 56	12	20.12m	40
10	N-28°-E	長 方 形	163× 61・ 66・ 50	50	19.59m 第III溝より切られる、弥生式土器片	41
11	N-68°-W	長 方 形	170+α×90・90・—	70	19.38m 二段の掘りこみ第II溝によって切られる	43
12	N-72°-W	隅丸長方形	148× 40・ 54・ 50	40	19.58m 第III溝によって切られる	41
13	N-65°-W	長 方 形	138× 65・ 72・ 62	55	19.56m	40
14	N-70°-W	隅 丸 方 形	222×205・200・184	54	19.61m 弥生式土器出土 (Y91・Y92)	44
15	N-98°-W	不整橢円形	174× 90・ 100・ 90	28	19.86m 14号土塙より切られる	44
16	N-68°-W	長 方 形	104× 53・ 65・ 58	30	19.74m	40

Fig. 40 D 地区第 1・2・9・13・16号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

D地区第6・8・10・12号土塚墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )

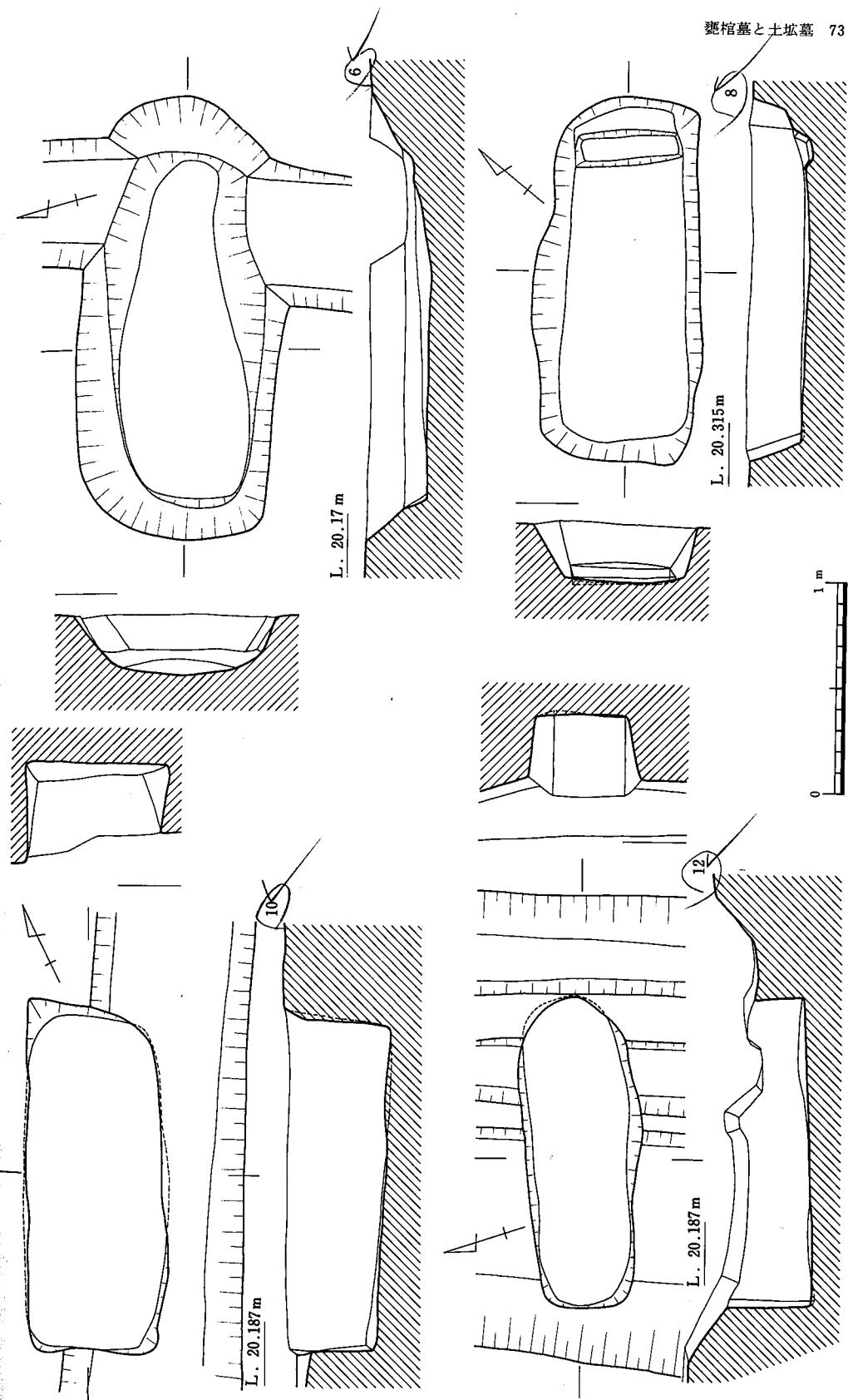


Fig. 41

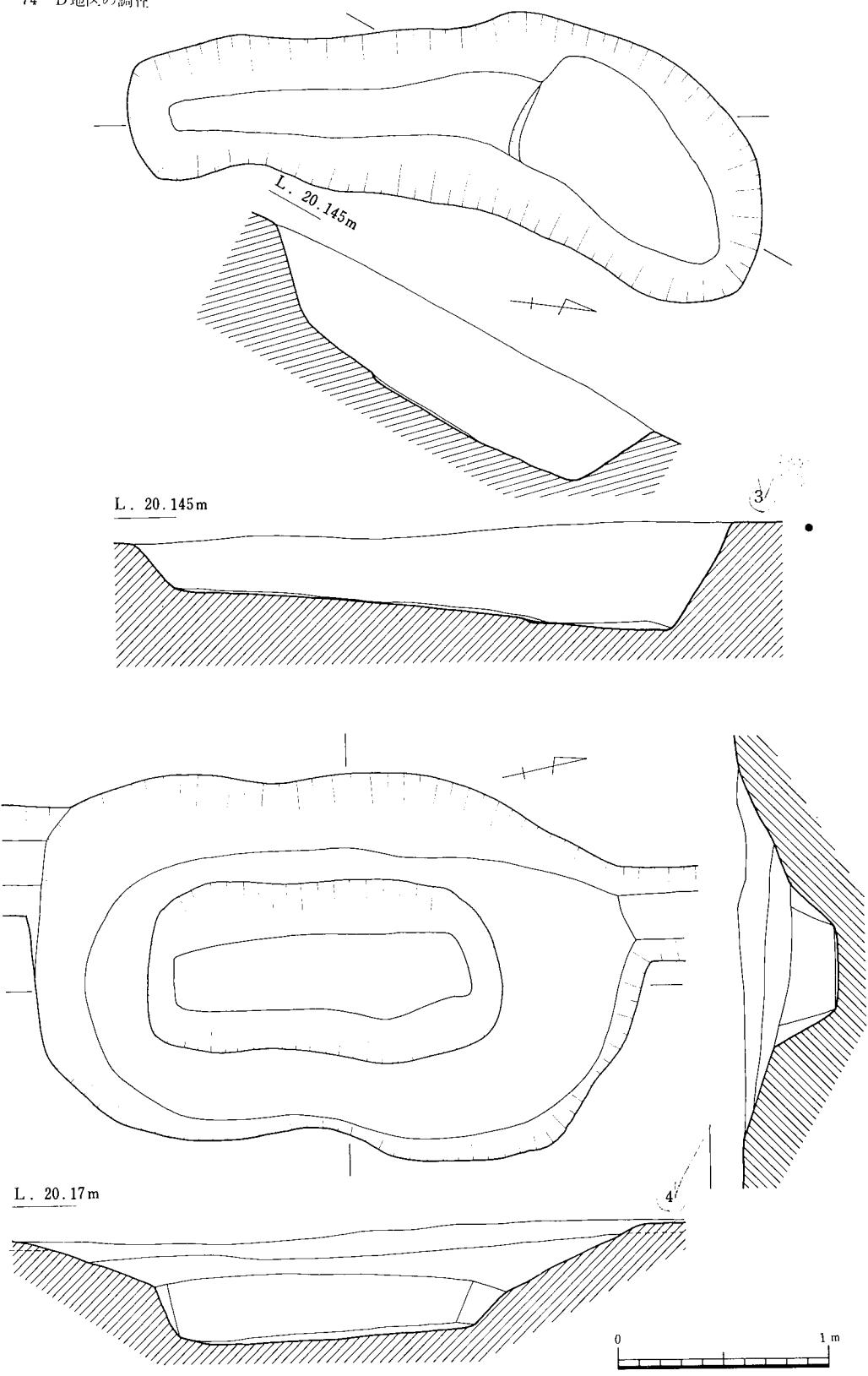
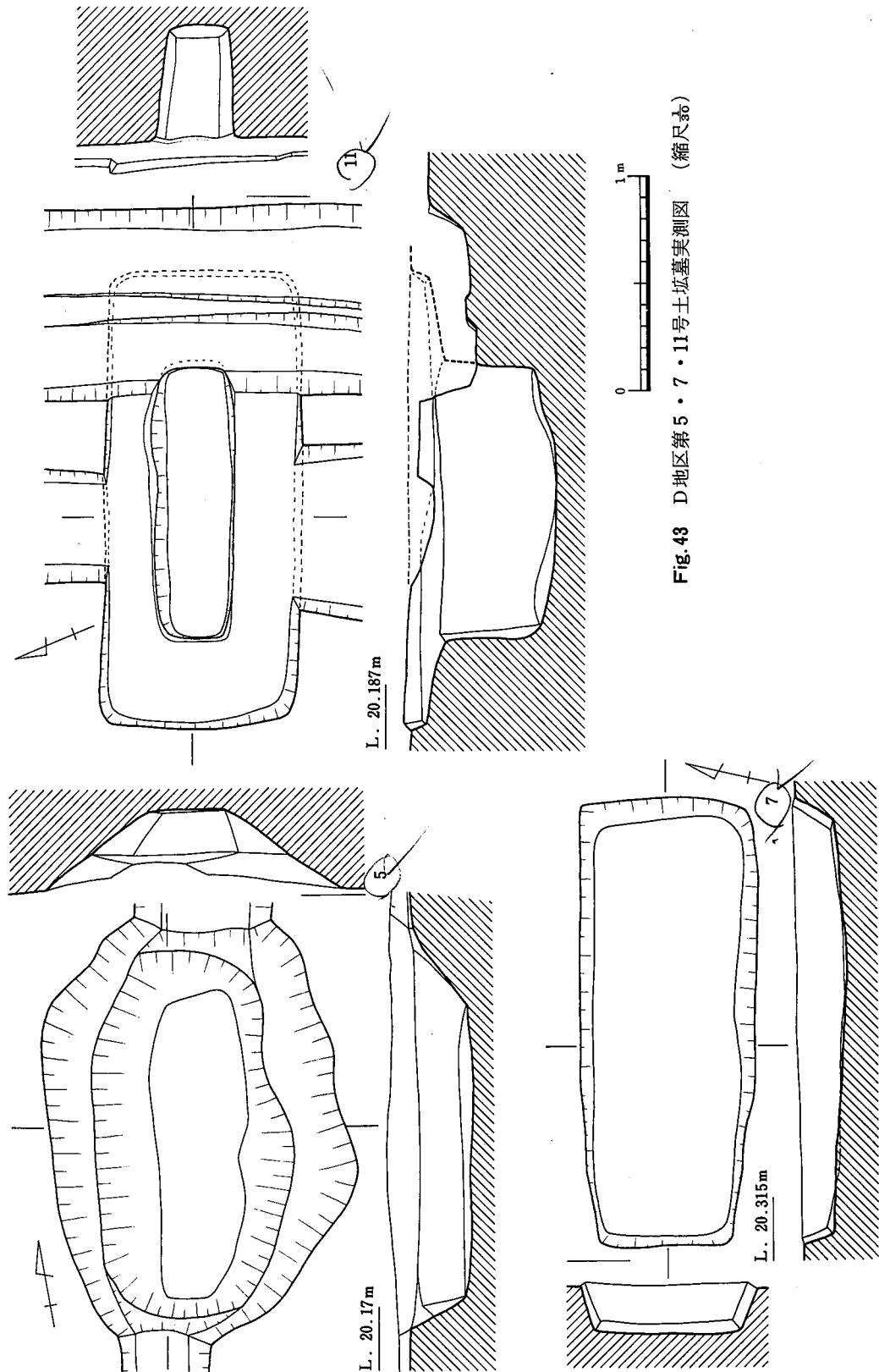


Fig. 42 D 地区第 3・4 号土塙墓実測図 (縮尺 $\frac{1}{30}$ )



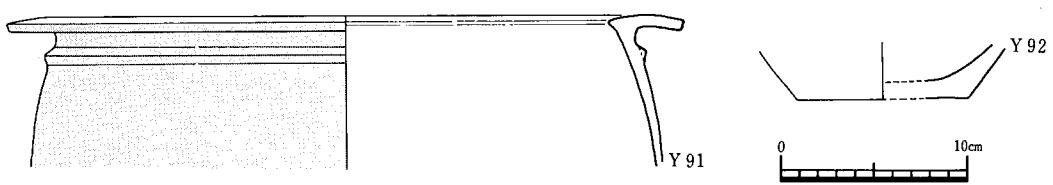
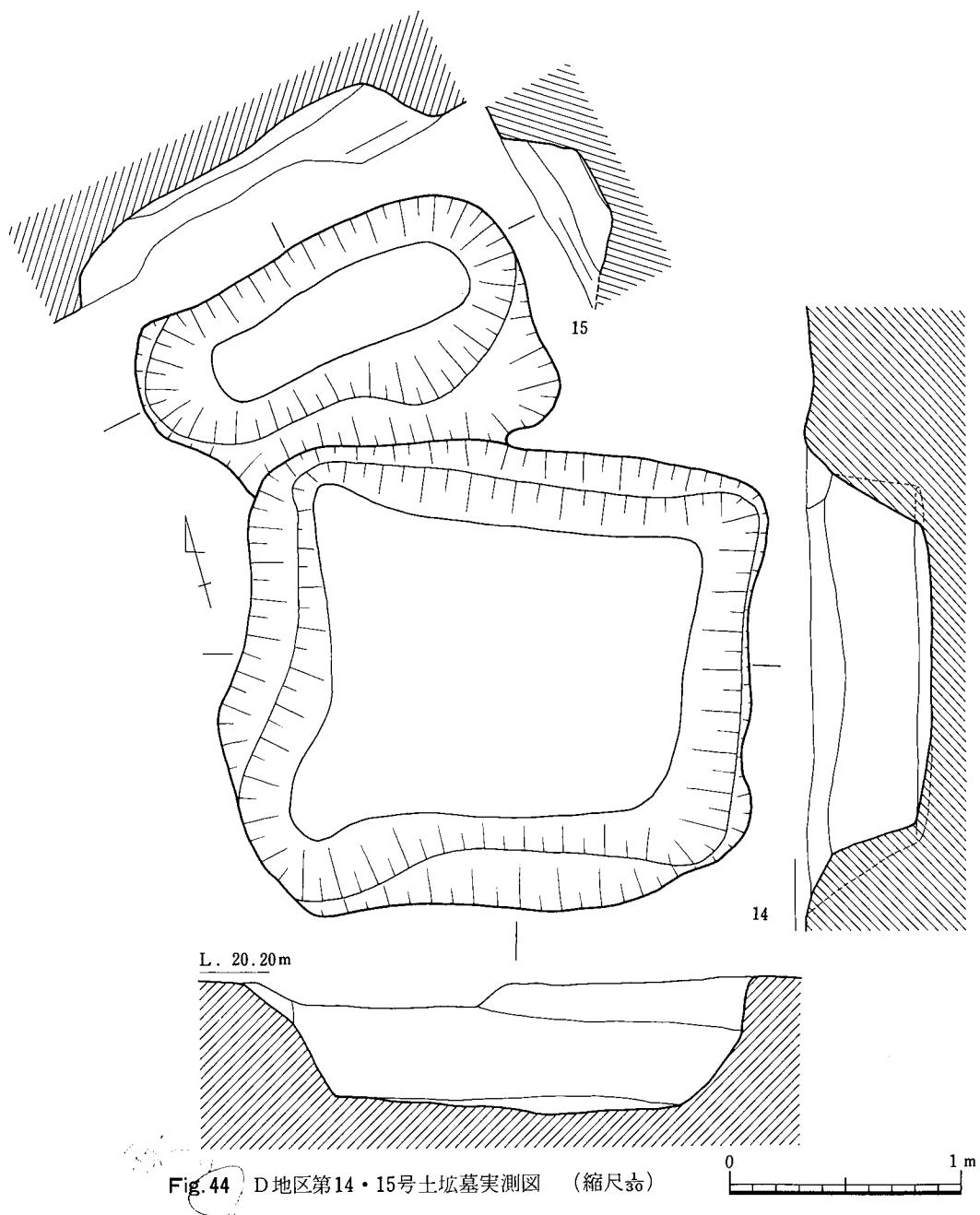


Fig. 45 D地区第14号土塙墓出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

#### 4. 土塙状遺構 (Fig.46~49)

D地区では、甕棺墓・土塙墓に付隨すると思われる遺構が2か所に存在する。これらは、いずれも土器を伴っており、その時期は、甕棺墓・土塙墓の示す時期と大きな違いはない。いま I・J-28・29グリッド検出の遺構を第1土塙とし、F-27グリッド検出の遺構を第2土塙として、出土遺物・遺構について記す。

##### 第1土塙 (Fig.46・47)

平面プランは、不整橢円形で、長さ90cm・幅60cmをはかる。深さは、10cm前後と浅く、塙底まで傾斜をもって掘られており、明瞭な壁をもたない。出土遺物で図示したのは、次の3点である。Y93は、口径27cmで逆L字形の口縁を持っており、上面平坦な口縁は、下方に傾く。口縁直下には、断面M字形の突帯をめぐらす。Y94は、高杯形土器の杯部で、内面の突出部はよく発達し、外傾する上面平坦な口縁をもつ。Y95は、高杯形土器の脚部で、断面三角形の突帯をもち内面にしづり痕が見られる。Y94と同一個体か、また、壺形土器と思われる土器片も出土した。これらは、いずれも外面丹塗りである。第1土塙は、第4号甕棺墓と並んで、甕棺墓、土塙墓群の南端に位置している。出土遺物の丹塗り土器、さらには、甕棺墓・土塙墓との位置関係などから、祭祀遺構としての性格が考えられよう。

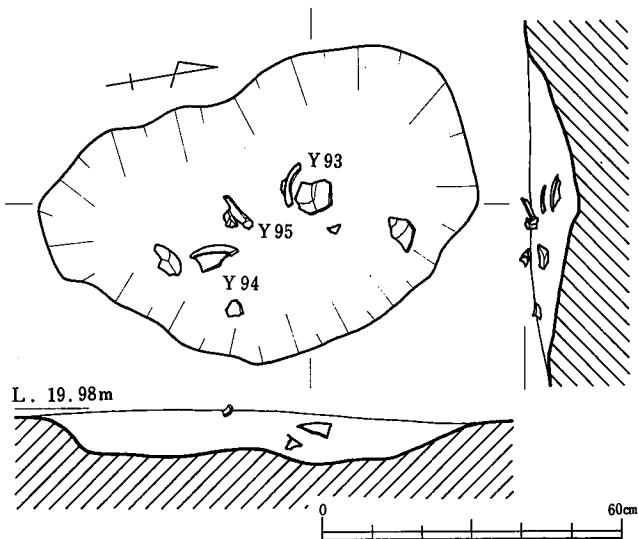


Fig. 46 D地区第1土塙状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{15}$ )

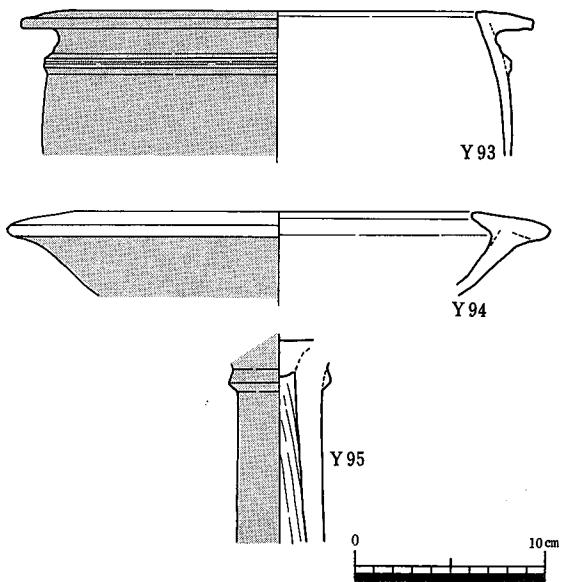
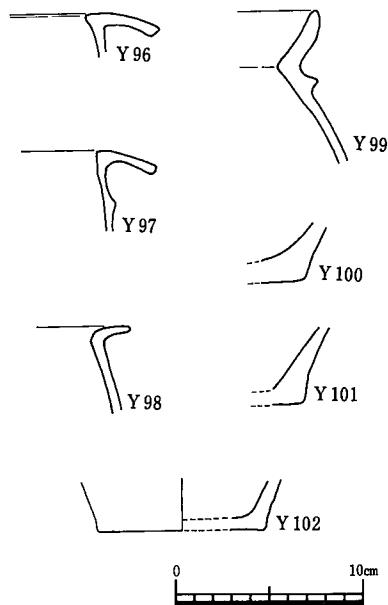
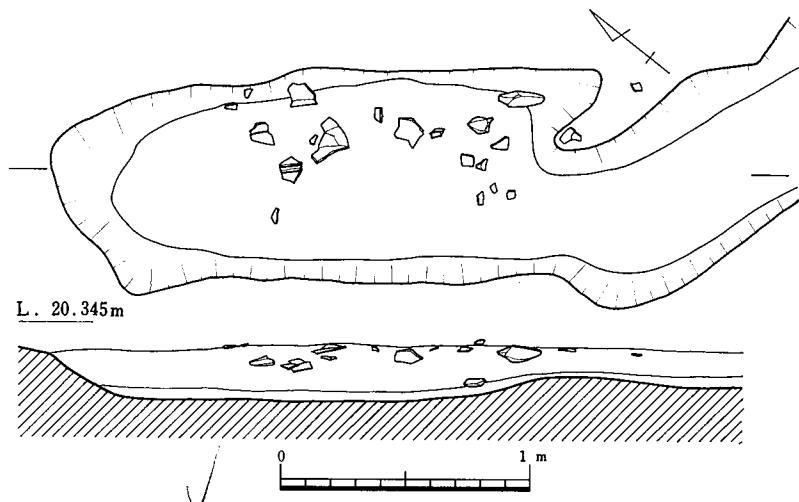


Fig. 47 D地区第1土塙状遺構出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$ )

## 第2土塙 (Fig.48・49)

第2土塙は、第2号土塙墓の南側で検出したもので、平面プランは不整長楕円形をなす落ちこみで、意識的な掘さくによるものであるかは疑問である。図示した出土遺物は7点である。

Y96は、明赤茶褐色を呈する口辺部で、逆L字形の口縁は、外傾する。Y97は、明黄褐色で逆L字形の口縁は同じように外傾する。口縁直下に突帯をめぐらす。Y98は、淡茶褐色で、口縁は小さく、ほぼ水平に外反する。内外面ともに砂粒露出する。Y99は、くの字形に外反する口縁を持つ。口縁直下に断面三角形の突帯を持つ。胎土は、砂粒を含み外面に横ナデ痕がわずかながら認められる。Y100は、灰白色を呈する底部であるが、破片のため底径は知りえない。Y101は、茶褐色で、同じように底径、調整痕は不明。Y102は、内面黒色、外面赤褐色を呈する平底の底部である。底径は、9cmをはかる。出土遺物のすべてが、内外面ともに磨滅をうける。第2土塙は、甕棺墓・土塙墓に近接してはいるが、出土遺物等には時期的な統一性がなく、丹塗り土器などを持たないことなどから、第1土塙と同一の性格は考えられないであろう。

Fig. 48 D地区第2土塙状遺構出土土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$ )Fig. 49 D地区第2土塙状遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$ )

### 3. 古墳時代の住居跡

住居跡 7 基は、D 地区調査予定地の最南端にあたる H～K-32～35 グリッドで検出したものである。中世の柱穴群と重複しているために、住居跡内のピット、および出土遺物について、両者を区別する必要があり、このことに注意しながら発掘を進めた。

#### 第 1 号住居跡 (Fig.51・PL.15)

住居跡が検出された I～K-32～35 グリッドは、I 列から K 列にむかって傾斜する。つまり現況は、北側が高くて南側が低くなっている。第 1 号住居跡は、もっとも北側の I-34 グリッドにある。北壁 4.7m・南壁 4.8m・東壁 4.5m・西壁 4.3m、深さ 40cm をはかり、ほぼ方形の平面プランをもつ。床面は、地山と考えた黄褐色土を掘りこんでいる。住居跡内には、明らかに上部より掘りこまれたピットをのぞいて、14 個のピットが存在するが、H11 の甕口辺部を出したピット 3 は、明らかに本住居跡の主柱穴の 1 つをなすものと思われる。これに対応するのが床面よりの深さ 40cm 前後のピット 1・2・4 であろう。特にピット 2・4 は、底に石がみられた。床面に炉と認められる部分はなく、また、外部施設など付随する遺構は持っていない。

#### 出土遺物 (Fig.52・Tab.13・PL.15)

出土遺物は、碗・杯・甕・壺形土器、手捏ね土器などの土師式土器、須恵器、滑石製紡錘車などで、これらの遺物は、住居跡の東側に片寄って出土した。実測できた杯形土器 (H 2～5) は、4 個体分あり、口径 13cm 前後で、内外面とも丁寧な調整を施しており、口縁部を強く押して横ナデするものと小さく外反させるものとがある。碗形土器 (H 6) は、はりのある胴部に内傾する口縁部をつけ、上面は小さな平坦面をつくる。甕形土器には、口辺部のつくりに三種あり、H 8 のようにくの字形に外反し、内側に稜をもつもの、H 9・10 のように彎曲しながら外反するものと、もう 1 つは、H 7 のようにあつめの短い口辺部をもつものなどがある。壺形土器 (H11) は、精良な胎土を用いており、球形の胴部をもつ。手捏ね土器 (H12～14) は、ほぼ同じ大きさをなす。H15 は、土器と同じ焼きであるが、全形を知りえない。

#### 第 2 号住居跡 (Fig.53・PL.16)

第 2 号住居跡は、第 1 号住居跡と第 4 号住居跡の中間に位置する。表土除去後の観察では、北壁・西壁がやや判然としていたのみで、東壁・南壁は、不明瞭であった。さらに、南壁付近に、畑地利用の際の段があり、傾斜が急になっていたために、発見を困難にした。西壁の北隅に 1.5m × 1.2m の張り出しがみられる。北壁 5.1m・南壁 4.0m・東壁 3.8m・西壁 4.5m で、コーナーは、いずれもまるみがある。柱穴内には、10 個のピットが存在し、壁との関係から、ピット 1・2 が主柱穴と考えられるが、これに対応する柱穴は、住居内には、認めがたい。とすれば住居跡外に、対応する柱穴を求めるか、あるいは、上部構造に帰因するとすべきか。床面には、焼土など炉と認める部分は、検出されなかった。

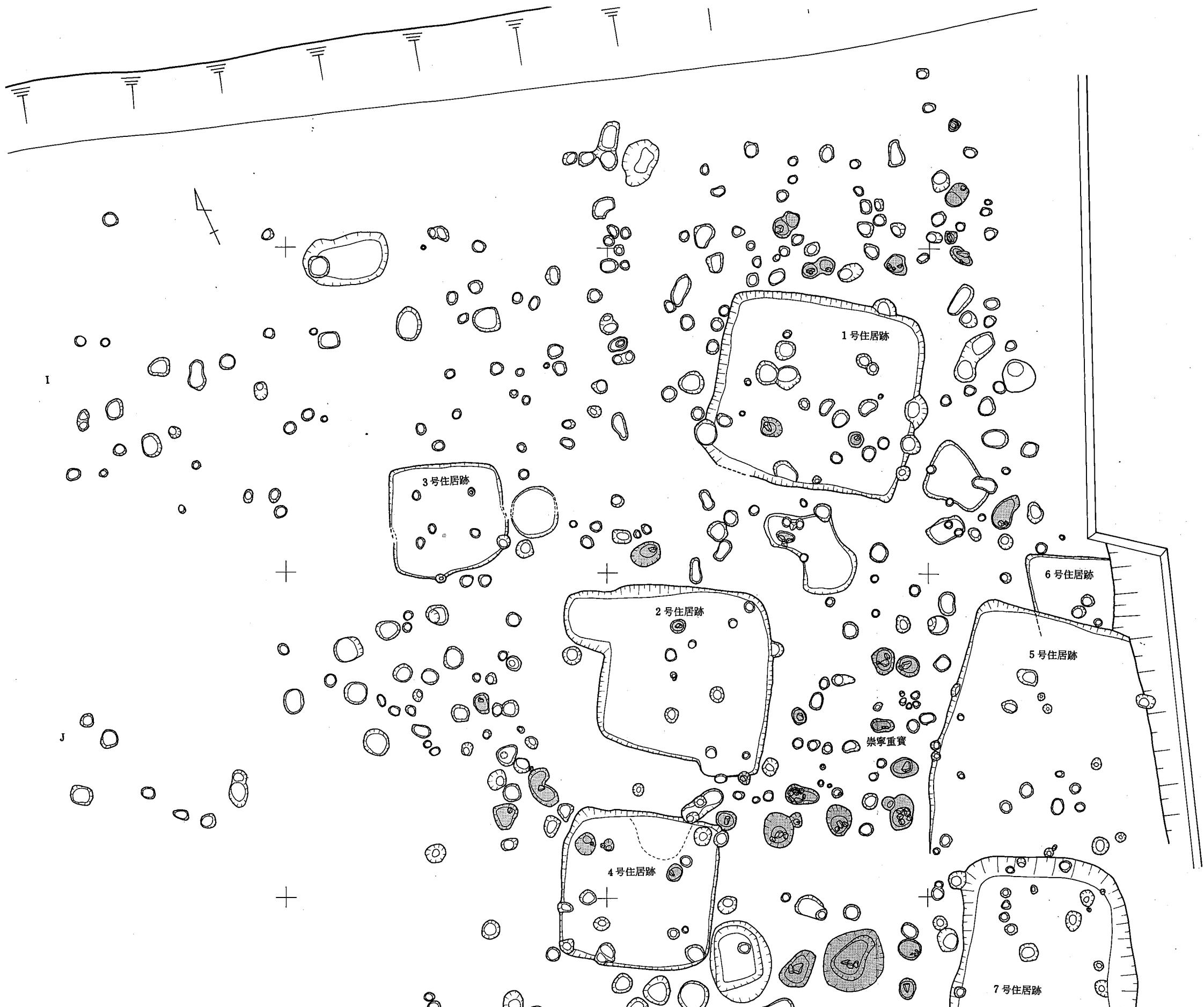




Fig. 50 D 地区住居跡分布図 (縮尺 $\frac{1}{100}$ )

## 出土遺物 (Fig.54・55・56 Tab.13・14 PL.16・17・18)

遺物は、住居跡内の北東部より集中的に出土し、床面には接した状態を示す。これらの遺物には、手捏ね土器・須恵器など完形に近いものもあるが、ほとんどが破片となっている。実測可能な須恵器は、図示した杯と蓋のみである。蓋 (S 2~6) は、S 6 をのぞき、直立した長い体部をもち、天井部とは、明瞭に区分され、口縁端部は、つまみ出される。杯 (S 7~9) は、やや内傾きみのうすく直立する立上りをもって、蓋受部には、蓋をかぶせて焼いたあとが認められる。いずれも焼成良好である。土師式土器の杯・椀・壺・甌形土器は、第1号住居跡と同じように、それぞれいくつかに分類できる。杯形土器は、球形に近い胴部に、するどく外反する口縁をもつもの (H18)、丸底であるが、球形をなさず底面の大きいもの (H16, 17)、胴がはり、口径、器高ともに大きいもの (H19~23)。椀形土器は、底面の大きい丸底の底部に内彎する胴部がつき、直立ぎみの口縁でおさめ、口縁内外面を強く押して横ナデするもの (H24) と軽くナデるもの (H25) がある。甌形土器は、胴のはりが小さく、くの字形に外反する口縁部をもつもので、外反が小さく、ぶあつい口縁をもつもの (H29・34)、彎曲しながら外反するもの (H30~33)、うすく直立する口縁をもつもの (H36) があり、内外面の調整に差はない。壺形土器 (H37~39) は、3個あり、いずれも球形の胴部をなし、外反する口縁をもつ。内外面の調整は類似するが、口縁のつくりが、直立ぎみのもの (H37)、くの字形のもの (H38)、まるみをもって外反するもの (H39) に分けられる。焼成は良好であるが、胎土に砂粒を含む。手捏ね土器は、4個出土したが、うち1個は、図示できなかった。

## 第3号住居跡 (Fig.52・PL.19)

他の住居跡は、いずれも側壁の方向を互いに並行にとるが、第2号住居跡のみ、やや異にしている。平面プラン長方形で、北壁 2.7m・南壁 2.6m・東壁 2.2m・西壁 2.6mをはかる。住居跡の中央部を、耕作用の溝によって切られており、また、床面までの深さは、20cmもなく、上部はかなり削平されたものと思われる。このために南壁東隅は、不明瞭な壁となっている。住居跡内には、7個のピットがあり、ピット1・2・3・4が、主柱穴となるのであろう。遺物は、土器片がピット3付近より出土したが、実測不可能な破片のため図示できなかった。

## 第4号住居跡 (Fig.57・PL.19)

第2号住居跡の南側に位置する平面プラン方形の住居跡で、北・南壁 3.8m・東、西壁 3.5mをはかる。南壁部は、かなり削平されているが、住居跡の落ちこみは、明瞭である。住居跡内には、12個のピットが認められ、主柱穴は、ピット1・2・3・4であろうか。ピット4は、やや深く床面より40cmである。北壁には、部分的に焼土が堆積している。

## 出土遺物 (Fig.58・Tab.12・14)

須恵器は、蓋の2個が実測できた。ともに蓋で体部・天井部の境は明瞭でない。S11は、南壁に接して発見された。H43は、甌形土器の口辺部で、H44は、鼈の張付把手である。

### 第5号住居跡 (Fig.60・PL.20)

第6号住居跡の下部より検出した住居跡で、東壁を農道で、南壁を耕作でそれぞれ切られているが、北壁の西コーナー残存状態は、わりに良好である。平坦な床面には、焼土・炭化物が厚く存在し、それが部分的でないことから、火災ということも推測されるが、出土遺物には、その顕著な痕跡は見られない。住居跡内には、24個のピットがあり、ピット1・2・3・4が主柱穴であろうか。

### 出土遺物 (Fig.61・Tab.12・14・PL.21)

須恵器の杯S12は、直立するやや短めの立上りを持ち、S15～17は、内傾する短い立上りを持っている。蓋(S13・14)は、いずれも天井部と体部との境を失っており、天井部は、約半分を箆削りする。杯形土器(H49～51)は、3個体あり、小さく外反する口縁部の上面端は、まるみをもつ。H49は、球形の胴部をなすものと思われ、H51は、平底ぎみのあつい底部をなす。椀形土器(H45～48・52)は、第2号住居跡出土の椀形土器に類似するもの(H45)、口縁部は、内弯するが、胴のはりが少ないもの(H46～48)、内弯する口縁に、はりの大きい胴部がつくもの(H52)に分けられる。杯、椀形土器ともに、胎土もよく丁寧なつくりをなす。甕形土器は、くの字形に外反する口縁をもち、胴部外面刷毛目、内面箆削り、口縁内外面は、横ナデで、外面は、刷毛目を消している。H55・56は、餌把手で、別個体である。H57は、手捏ね土器で、あつい底部をもつ。H58～60は、土製の錘で3個発見された。3個とも、管状をなし、H59は、ややまるみがある。この他に、硬質砂岩を用いた砥石が出土している。砥石の長さは、約10cm・幅2.5cm・厚さ1.5cmの長方形で、使用面は、研磨されくぼんでいる。

### 第6号住居跡 (Fig.60・PL.20)

第5号住居跡の上部につくられた住居跡で、時期的に第5号住居跡よりも新しくなる。表面観察では、切り合い関係は、明確にできなかつたが、第5号住居跡の掘り込みより出土した餌のレベルが、第6号住居跡の床面レベルと合うことなどから、餌を第6号住居跡に伴うものとし、第5号住居跡を古い時期のものと考えた。

### 出土遺物 (Fig.62・Tab.14・PL.21)

H61・62は、餌で、H61は完形である。底部は、単孔式となっており、長胴の中位に、把手を張りつけている。須恵器蓋は、全体の約半分を箆削りしており、天井部と体部の境はない。

### 第7号住居跡 (Fig.59・PL.20)

検出した住居跡の中で、もっとも南端にあり、標高も低い位置にある。平面プランは、長方形で、4隅は、かなりまるみが目立つ。北壁の残存状態は、概ね良好であるが、農道によって削平された南壁は、明瞭さを欠いている。住居跡内のピットには、第1・3号住居跡のように明らかに対応するような配置は、みられない。住居跡の出土遺物は、すくなく、実測不可能な小破片のために図示できず、またこれらの多くが、後世の流入と思われた。

82 D 地区の調査

D 地区住居跡

各住居跡の実測図は、縮尺 $\frac{1}{60}$ で統一した。明らかに住居跡に伴わずに上面から掘りこまれた柱穴は、Fig.50のD地区住居跡分布図に記入した。なお、この図で柱穴にアミがかかるっているのは、盤石を持っていることを示している。

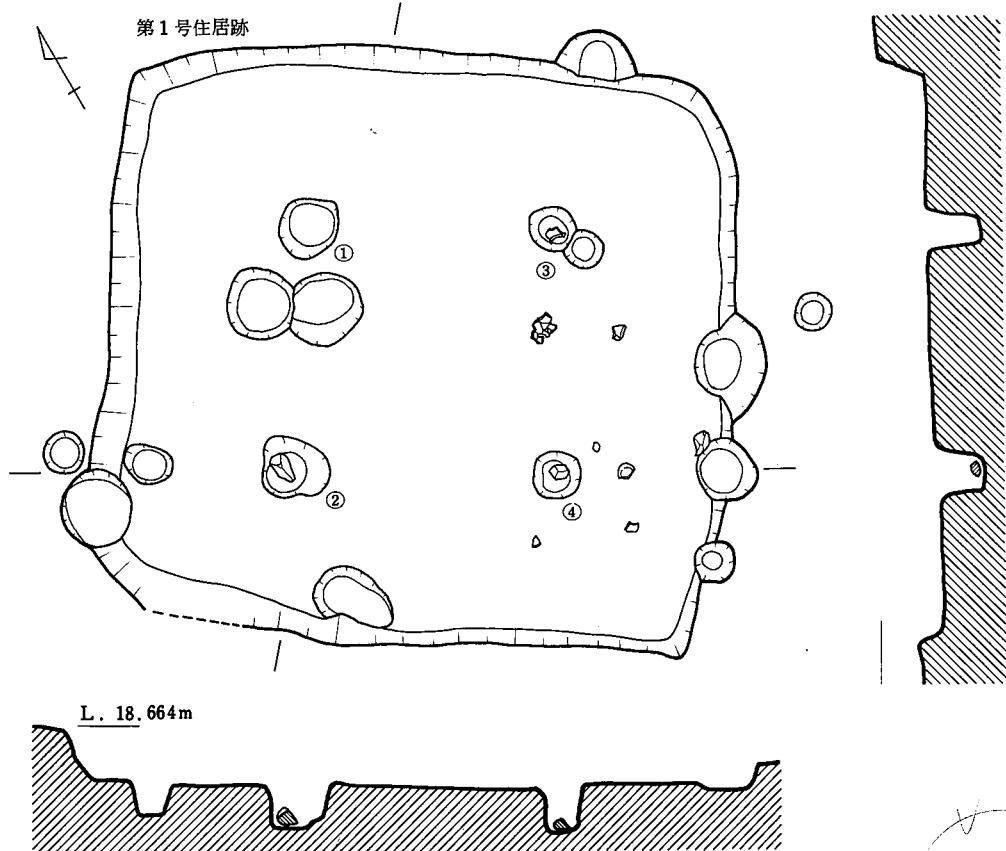
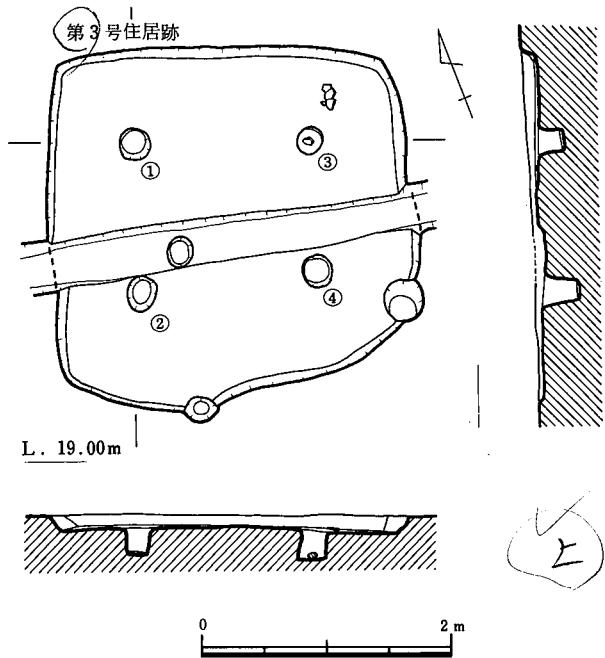


Fig. 51 D 地区第1・3号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{60}$ )

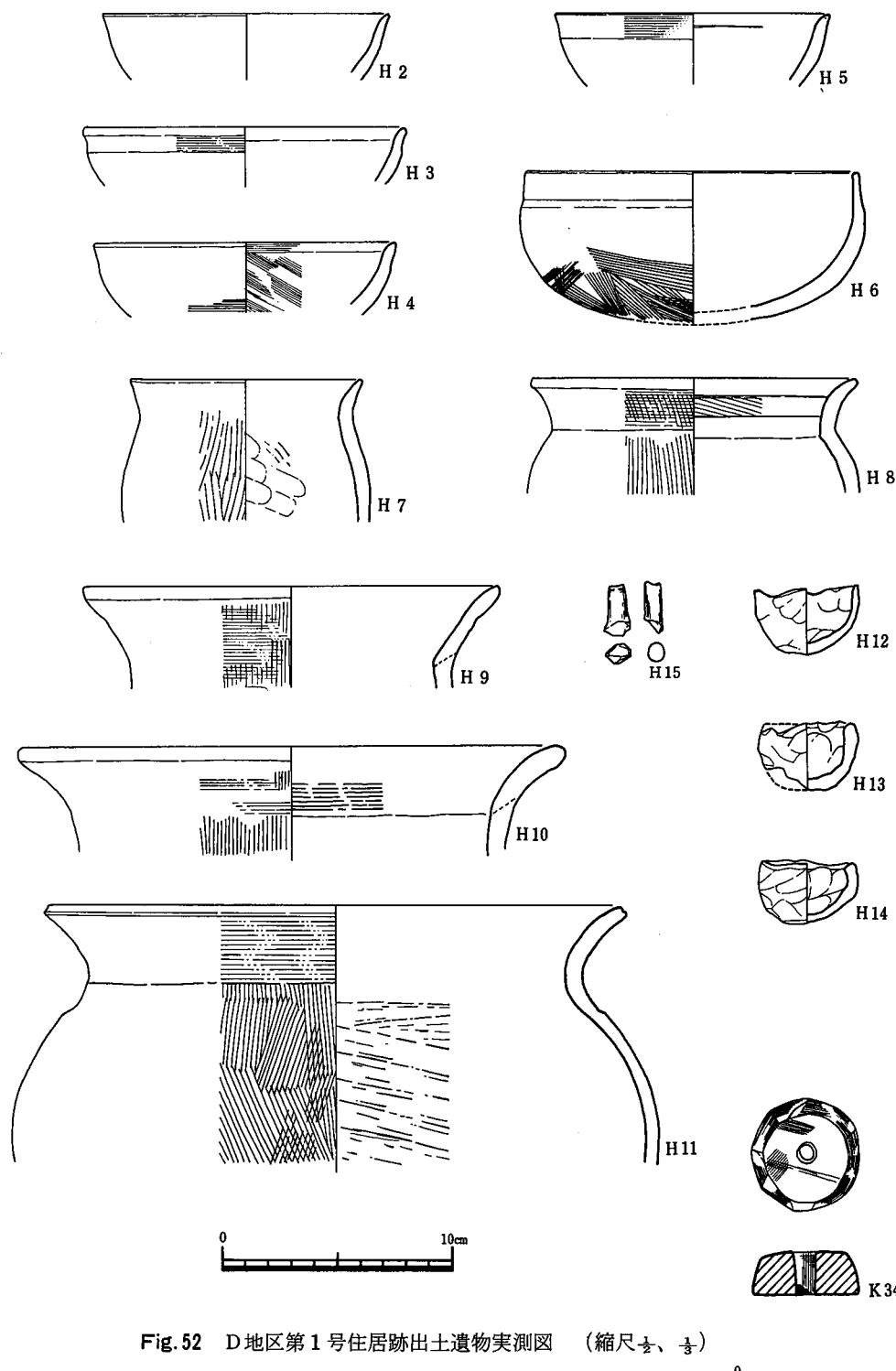


Fig. 52 D 地区第 1 号住居跡出土遺物実測図 (縮尺  $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ )

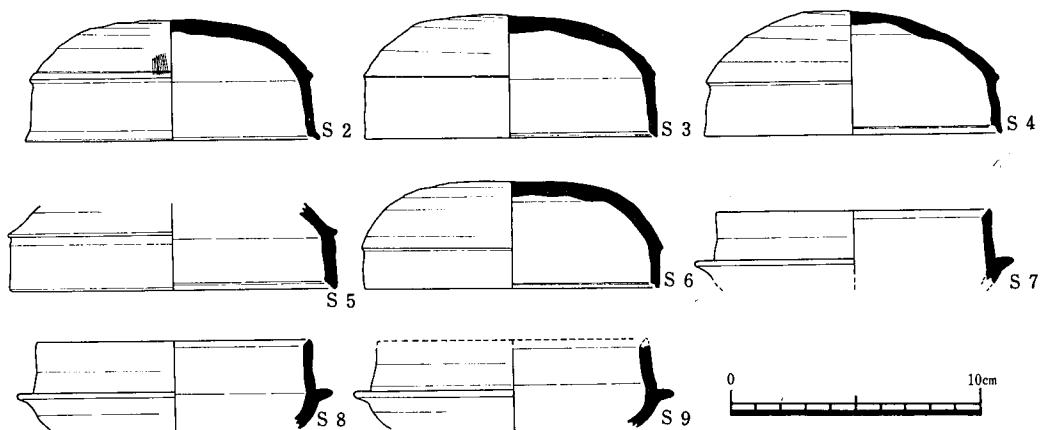
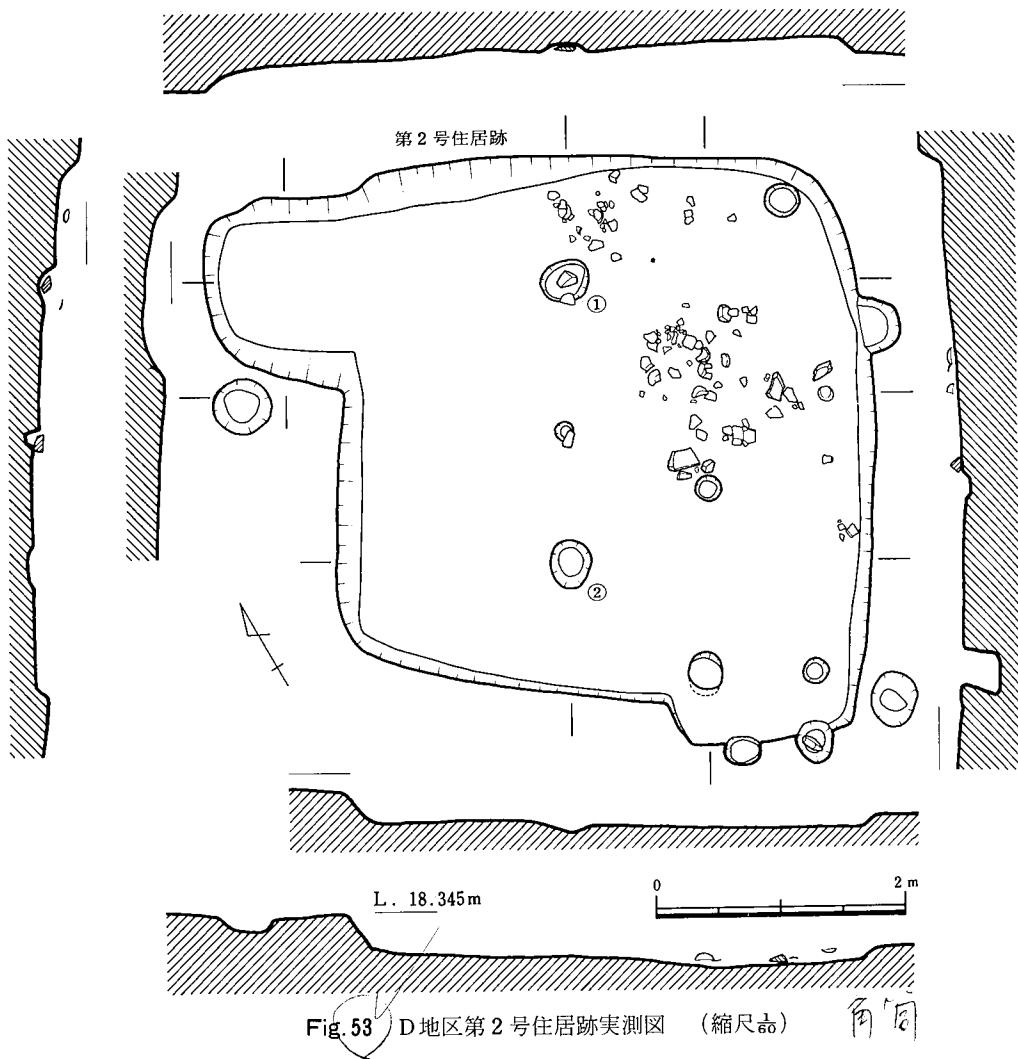
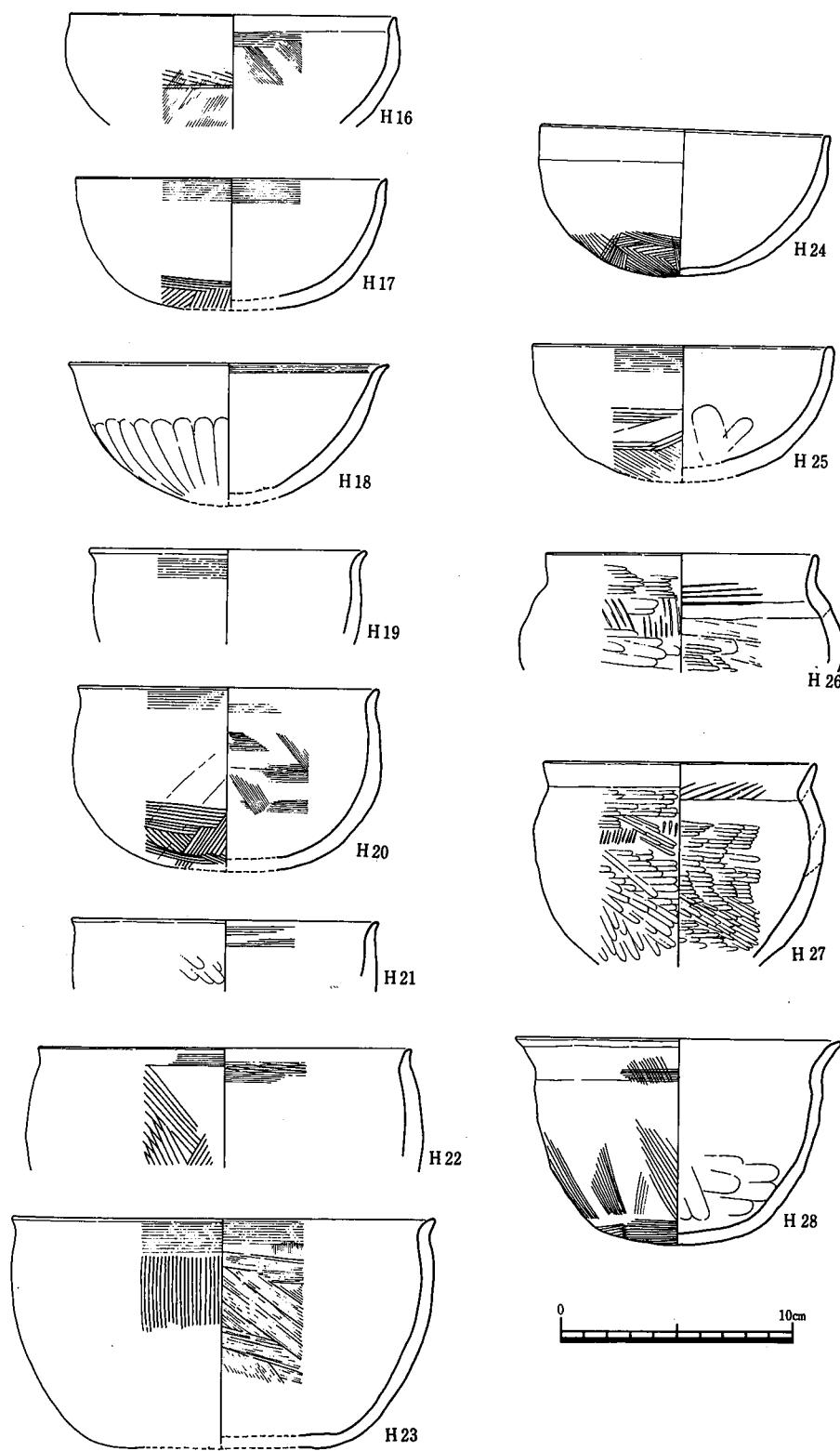


Fig. 54 D地区第2号住居跡出土遺物実測図(I) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

Fig. 55 D 地区第 2 号住居跡出土遺物実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

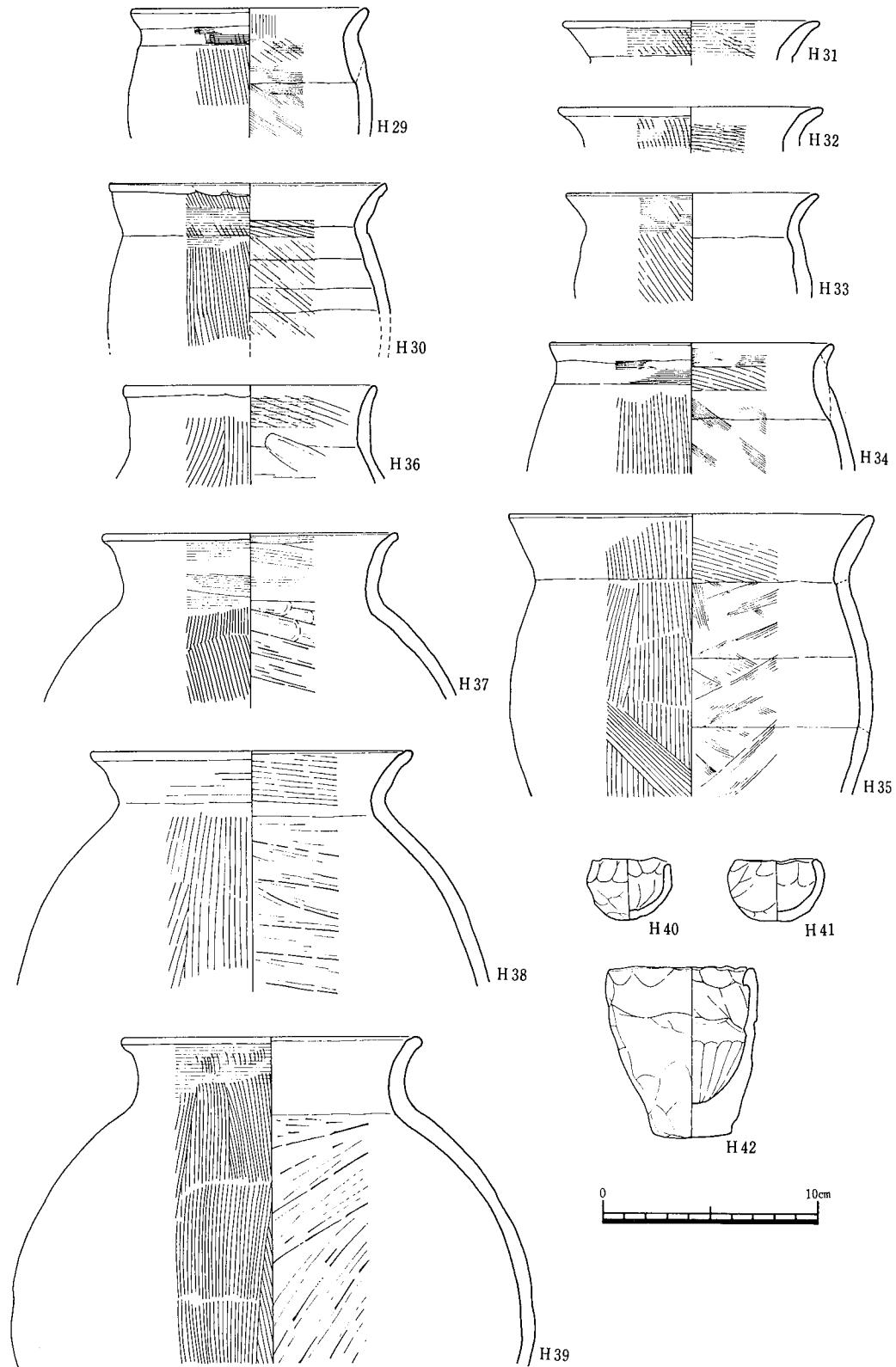


Fig. 56 D 地区第 2 号住居跡出土遺物実測図(III) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

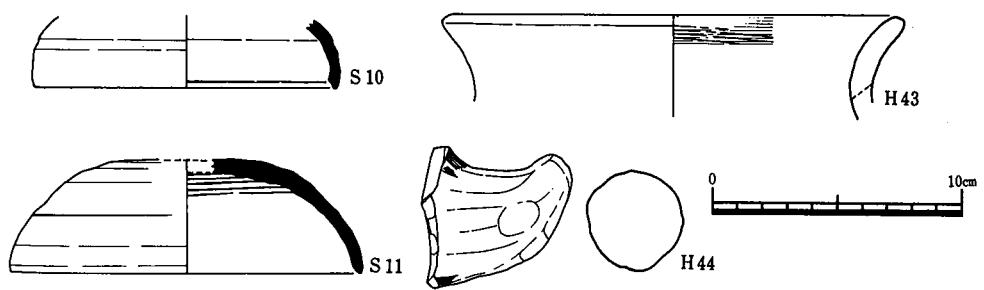
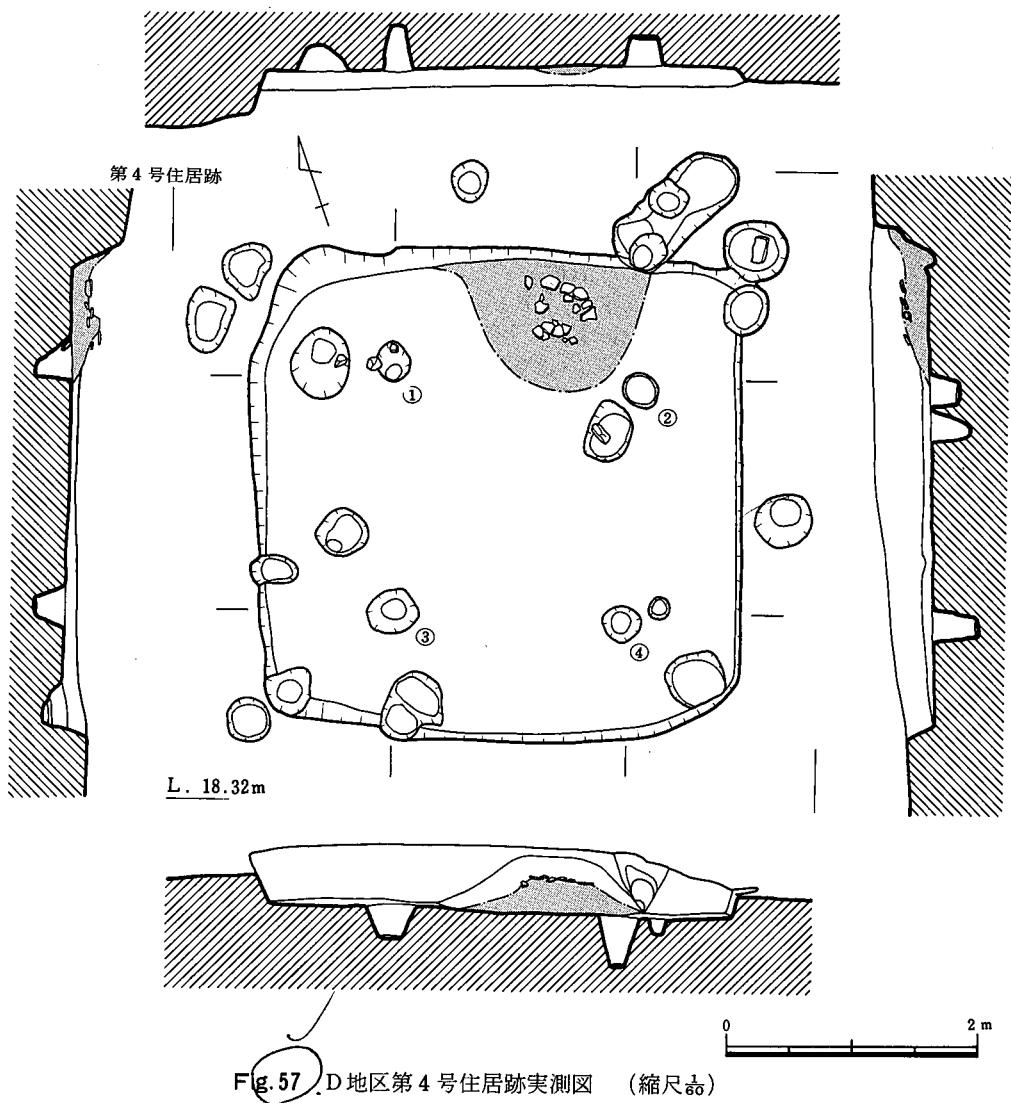
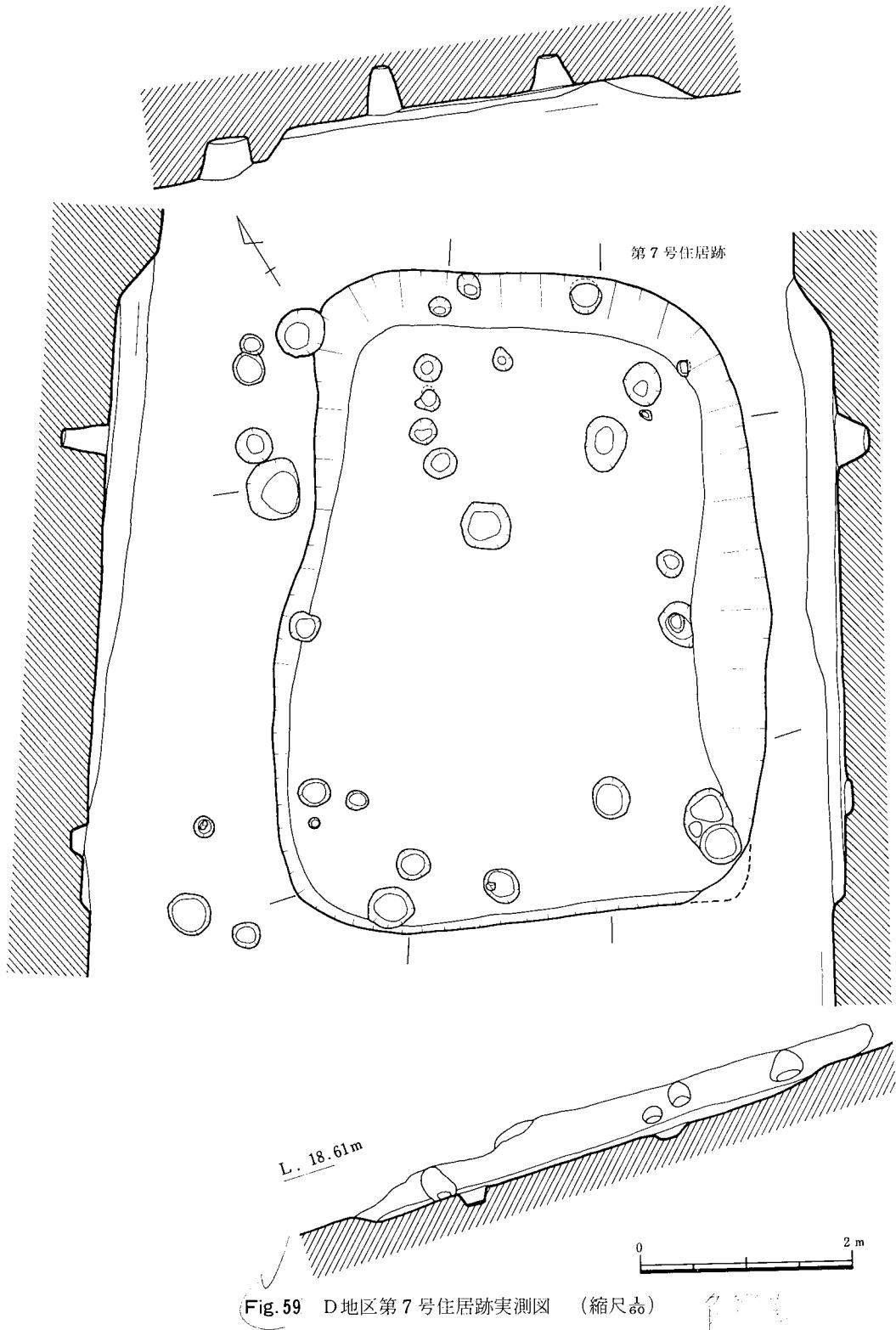


Fig. 58 D地区第4号住居跡出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{3}$ )



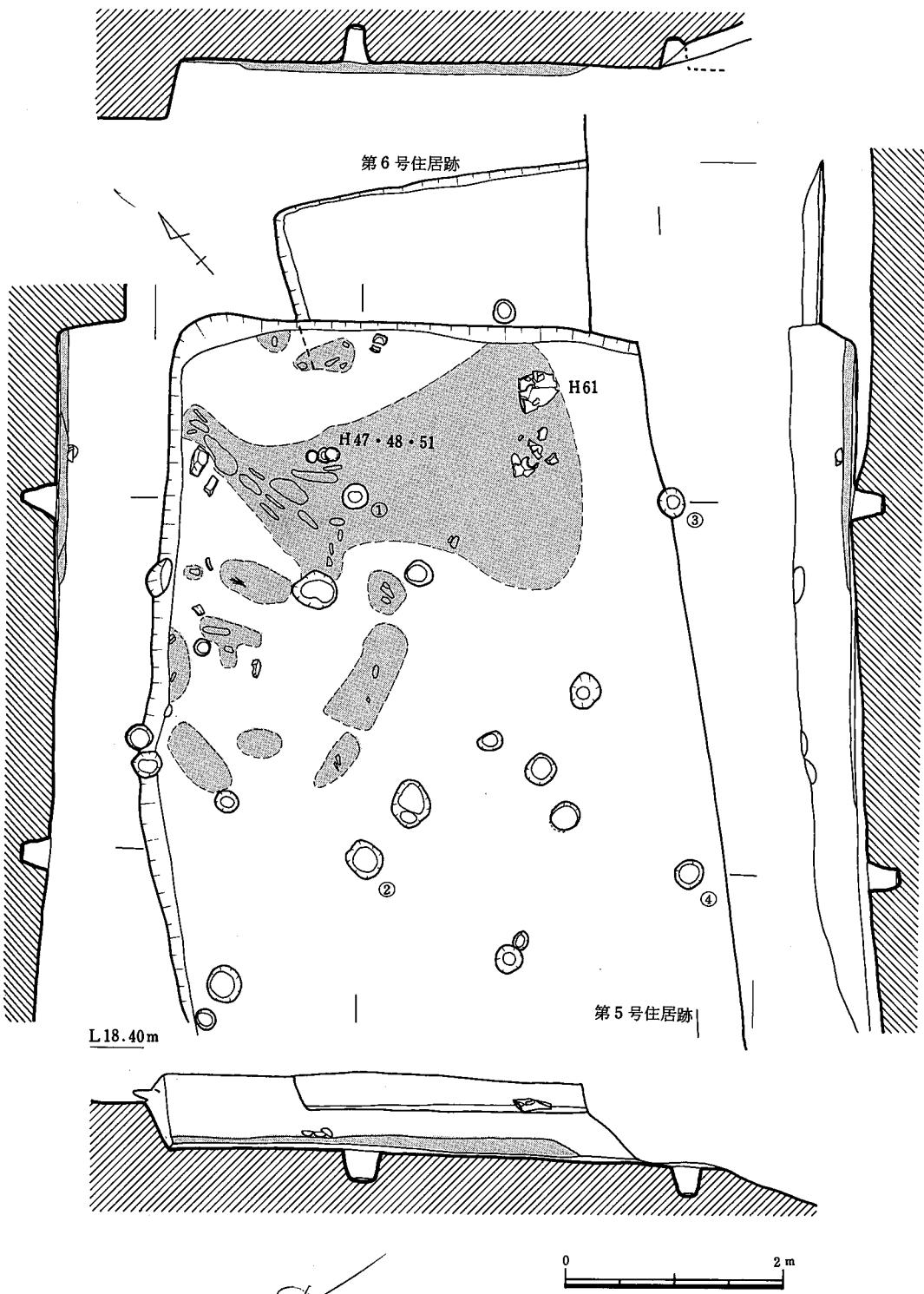


Fig. 60 D地区第5・6号住居跡実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

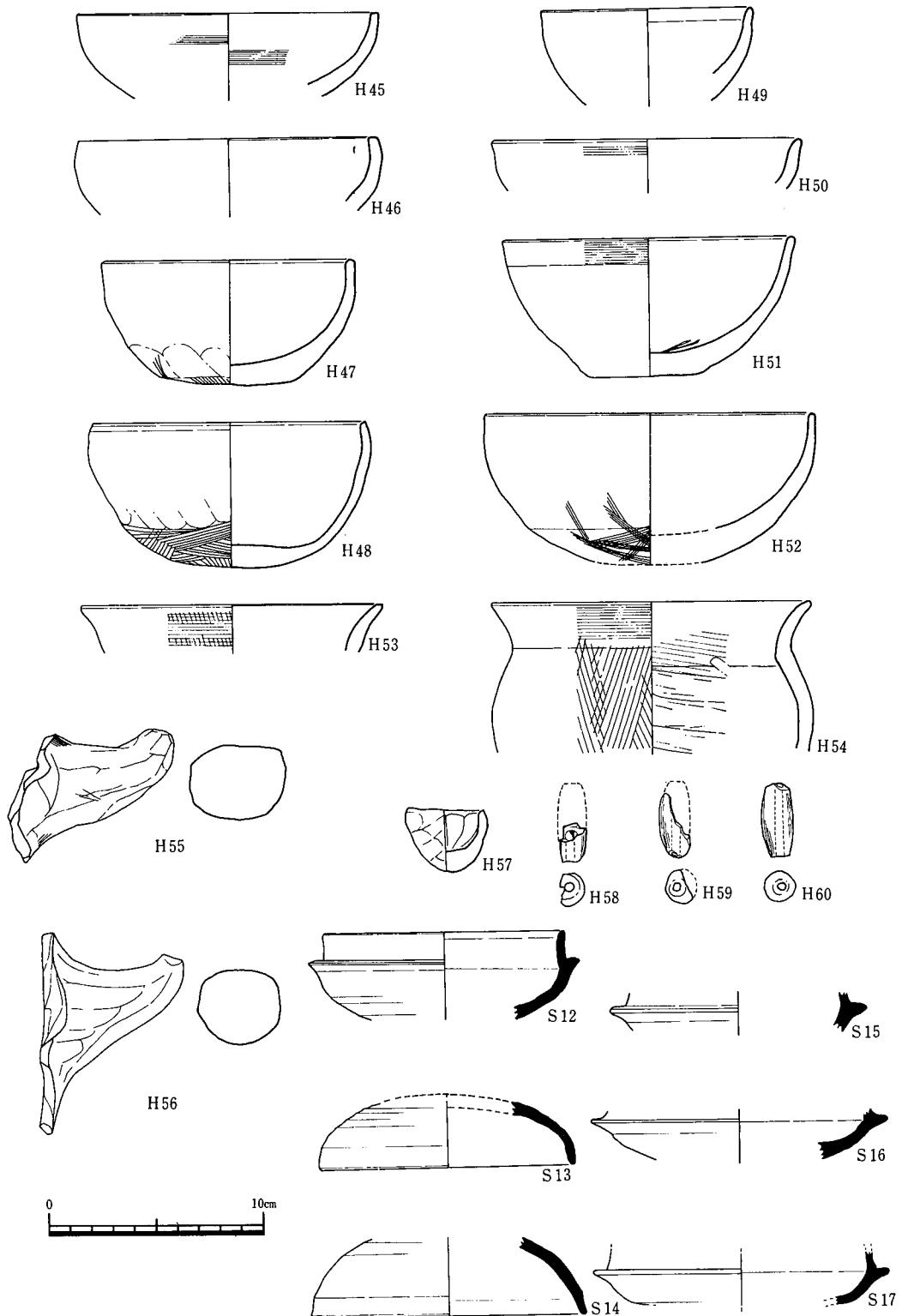


Fig. 61 D 地区第 5 号住居跡出土遺物実測図 (縮尺  $\frac{1}{3}$ )

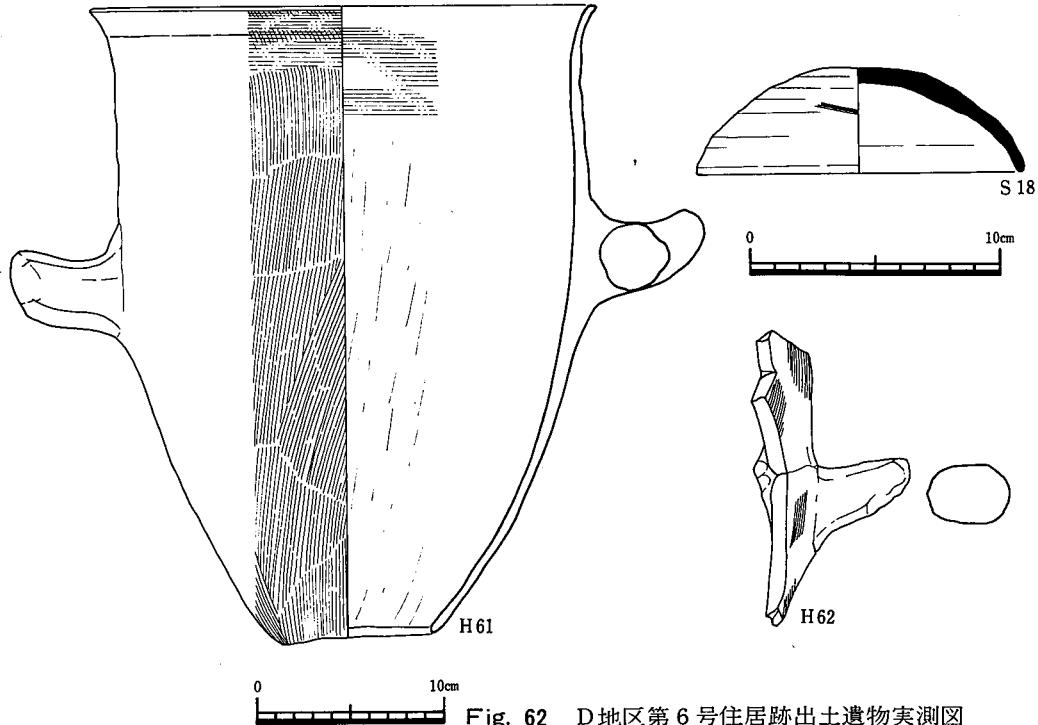


Fig. 62 D地区第6号住居跡出土遺物実測図

(縮尺  $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{4}$ )

Tab. 12 D地区住居跡出土遺物一覧表 (I)

(単位 cm)

遺物番号	住居跡	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.	PL.
S-2	2号住居跡	蓋	ほぼ完形	口径11.8 器高4.8	丸味を持つ天井部に、器高のほぼ半分の長さの直立した体部を持つ。天井部と体部とを明瞭に区分している。口縁端部は、つまみ出しがあり、器内面に明瞭な稜線をもつ。	S-5は不明であるが、他は全て天井中央部から天井部の四分の三近くをヘラ削りする。ていねいな作りである。	良好・堅密	灰黒		54	16
S-3	2号住居跡	蓋	ほぼ完形	口径11.8 器高4.9		〃	灰	内部にナデあり		54	16
S-4	2号住居跡	蓋	ほぼ完形	口径12.0 器高4.9		〃	灰			54	16
S-5	2号住居跡	蓋	部分復原	口径13 (推定)		〃	灰			54	
S-6	2号住居跡	蓋	ほぼ完形	口径12.0 器高4.3	上記4例に比し、体部が若干短い。	太めの石英粒を含む。堅い	淡灰			54	16
S-7	2号住居跡	杯	部分復原	口径11.0 (推定)	S-7、S-8とともに2cmほどの立上がりを持ち、S-9も口縁端部を欠いているが、ほぼ同様になると思われる。	蓋をかぶせてやいたあとが受部端に認められる。S-7、S-8は同一個体の可能性もある。	良好・堅密	灰		54	
S-8	2号住居跡	杯	部分復原	口径11.0 (推定)		〃	灰			54	
S-9	2号住居跡	杯	部分復原	口径10.6 (推定)	わずかに内傾するが直立するうすい立上がりである。	〃	灰			54	
S-10	4号住居跡	蓋	部分復原	口径12.1 (推定)	天井部、体部の境は明瞭ではない。体部は丸く内側に向いて伸びる。	口縁端部を引き出して作り、この部分の内側に明瞭な稜線をもつ。	良好	灰		58	
S-11	4号住居跡	蓋	完形に復原	口径13.8 器高4.5	かなり大形で、全体的に丸味をもつ。天井部、体部の境は明瞭ではない。	天井部半分ほどをヘラ削り。口縁端部は丸くおさめている。	胎土は良いがわずかに焼きが甘い	淡灰	内側、天井部にタタキ痕あり	58	
S-12	5号住居跡	杯		口径9.0 (推定)	やや小ぶりで、直立するが短めの立上がりを持つ。	一部に焼きぶくれが認められる。	砂粒を含むが焼成は良好	濃灰		61	21
S-13	5号住居跡	蓋		口径11.7 (推定)	天井部と体部の境がなくS-13では口縁部をわずかに内側に傾けているのに対し、S-14は外にひらく。	天井部の約半分ほどをヘラ削りしている	良好・堅密	〃		61	
S-14	5号住居跡	蓋		口径12.6 (推定)			胎土は良焼成甘い	淡灰茶	いわゆる生ヤケ	61	
S-15	5号住居跡	杯		不明	3例とも、端部を欠しているが、内傾する短い立上がりを持つ。		胎土・焼成とともに良好堅密	灰		61	
S-16	5号住居跡	杯		〃			黒灰			61	
S-17	5号住居跡	杯		〃			灰			61	
S-18	6号住居跡	蓋	ほぼ完形	口径12.9 器高4.2	全体的に丸味をおび、口縁部は丸くおさめる。天井部、体部の境はない。	全体の約半分をヘラ削り	良好	内面ナデ		62	

Tab. 13 D地区住居跡出土遺物一覧表(II)

(単位 cm)

遺物番号	住居跡	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.
H-2	1号住居跡	杯	口辺部	口径12.6	内外面の調整にやや違いがあるが、口縁部の形制を同じくする。いずれも底部を欠くが丸底をなすものと思われ、体部は小さく外反する。	口辺部内外面ともに横ナデ	良	良	黄褐色	杯Ⅱ類b	52
H-3	1号住居跡	杯	口辺部	口径 14	現在底部欠け部分強く押し下へん	口辺部外面横ナデ、外面口辺下は部分強く押し下へんナデ	砂粒	良	黄褐色	杯Ⅱ類a	52
H-4	1号住居跡	杯	口辺部	口径 13	H-3・4・5は、口縁部外面を強く押し横ナデする。	口辺から外面は横ナデ、内面は斜めのナデ、口辺下半に刷毛目	良	良	赤褐色	杯Ⅱ類a	52
H-5	1号住居跡	杯	口辺部	口径 12	内外面横ナデ、H-3と同様に口辺部外面は強く押し下へんナデ	内外面横ナデ、H-3と同様に口辺部外面は強く押し下へんナデ	良	良	赤褐色	杯Ⅱ類a	52
H-6	1号住居跡	椀	底部欠	口径14.6 器高 6.6	丸底の底端から、はりをもつ体部に内凹ぎみの口縁部がつく。	内外面体部ナデ、口辺部内外面横ナデ、底部刷毛	良	良	茶褐色	椀Ⅲ類	52
H-7	1号住居跡	甕	底部欠	口径 10	頭部より、短くあつめの口縁部が外反する。胴の張りは小さい。	口辺部内外面ともに横ナデ、体部外面粗い刷毛目、内面は薄張りのもので押さえられる。	砂粒	良	赤茶色	甕Ⅰ類a	52
H-8	1号住居跡	甕	口辺部	口径14.4	胴部はやや張りがあり口辺は「く」の字形に外反する。口辺部外面は刷毛を横ナデで消す。内面は、斜めの刷毛後横ナデ	口辺部内外面ともに横ナデ、内面は斜めのナデで消す	砂粒多	良	赤褐色	甕Ⅱ類	52
H-9	1号住居跡	甕	口辺部	口径18.2	ともに同じように外反する口縁部をもち、H10の口縁部は、よりまるみがある。粘土の縮ぎ目	内面横ナデ、外面緩刷毛を横ナデで消す	砂粒堅穢	良	黄褐色	甕Ⅲ類	52
H-10	1号住居跡	甕	口辺部	口径 22	内面は、横刷毛目を、外面は緩刷毛目を横ナデで消す	口辺部内外面ともに横ナデ	砂粒	良	黄褐色	甕Ⅲ類	52
H-11	1号住居跡	壺	底部欠	口径 25	球形に近いまるみのある胴部から口辺部は弯曲しながら外反する口縁部はやや凹む。口辺部は横ナデ、胴部外面刷毛目、内面無削り	砂粒少精良	良	明赤褐色	住居跡内柱穴出土	52	
H-12	1号住居跡	手捏ね土器	口縁部	口径 4.6 器高 2.8	H12は、口辺部は、うすく、やや外反する。H13は、器壁はあつく口縁部はまるみがあり、内凹。H14は、胴中位から内凹し、口縁上面は、内傾する。	口辺部と外面は横ナデ、外面にわざかに刷毛目による。	砂粒少	良	茶褐色		52
H-13	1号住居跡	口縁部	口縁部	口径 4.0 器高 2.9		口辺部は横ナデ、胴部はよく研削される。底部粗い刷毛目。	砂粒少	良	茶褐色		52
H-14	1号住居跡	口縁部	口縁部	口径 4.2 器高 2.7		口辺部横ナデ、胴部内外面ともに凹みがき。	砂粒少	良	茶褐色		52
H-15	1号住居跡			長さ 2.2 最大径 0.7	丸い棒状の先端部は、軽くつまんでつくられており約子状をなしている。	口辺部と外面は横ナデ、内面にわざかに刷毛目による。	砂粒少	良	赤褐色		52
H-16	2号住居跡	杯	底部欠	口径 14	H2・3・4と同様な形制であるが口縁部の外反が弱く体部もややはりぎみである。	口辺部と外面は横ナデ、内面にわざかに刷毛目による。	良	良	暗赤褐色	杯Ⅱ類b	55
H-17	2号住居跡	杯	底部欠	口径13.4 器高 5.5	口辺部は横ナデ、胴部はよく研削される。底部粗い刷毛目。	口辺部は横ナデ、胴部は横ナデ、底部粗い刷毛目。	良	良	淡茶褐色	杯Ⅱ類b	55
H-18	2号住居跡	杯	底部欠	口径13.8 器高 6.1	底部から体部は球形となり、口縁部はするどく外反する。	口辺部横ナデ、胴部内外面ともに凹みがき。	良	良	明赤褐色	杯Ⅰ類	55
H-19	2号住居跡	杯	口辺部	口径 12	口辺にやや違いがあるが外反する口縁部に、はりの他の体部が大きくなり、やや平坦ぎみの丸底をなす。H21・22は杯Ⅱ類bと共に口縁部の外反が小さい。	外面口辺下は横ナデ、外面は凹みがきのように丁寧な往來りをする。	精良	良	赤褐色	杯Ⅲ類a	55
H-20	2号住居跡	杯	底部欠	口径 13 器高 7.9	内面ナデ、口辺部横ナデ、外面は施削剣後刷毛。	内面ナデ、口辺部横ナデ、外面は施削剣後刷毛。	砂粒	良	茶褐色	杯Ⅲ類a	55
H-21	2号住居跡	杯	口辺部	口径 13	口辺部は、内外面横ナデ、下部は凹みがきか?	口辺部は、内外面横ナデ、下部は凹みがきか?	良	良	赤茶色	杯Ⅲ類b	55
H-22	2号住居跡	杯	口辺部	口径 16	口辺部は横ナデ、体部は外面刷毛目、内面よく研磨削りする。	口辺部は横ナデ、体部は外面刷毛目、内面よく研磨削りする。	良	良	暗茶褐色	杯Ⅲ類b	55
H-23	2号住居跡	杯	底部欠	口径18.4 現存部高 9.8	H-20のような小さく外反する口辺部は横ナデ、外面胴部上位は継の刷毛、下部は平底か?口縁部は丸底か?	口辺部は横ナデ、内面にわざかに刷毛目による。	わざかに砂粒	良	黄褐色	杯Ⅲ類a	55
H-24	2号住居跡	椀	ほぼ完形	口径12.6 器高 6.3	丸底の底部から体部はまるくのび、やや直立ぎみの口縁部である。	口辺部内外面ともに横ナデ、内面丁寧なナデ、底部粗い刷毛目。	精良	良	淡茶褐色	椀Ⅰ類a	55
H-25	2号住居跡	椀	底部欠	口径 13 器高 5.8	H24は口縁部に段をなし、H25は、軽く横ナデ?	口辺部外面横ナデ、体部外面は刷毛のち凹みがきか?	良	良	明赤茶色	椀Ⅰ類b	55
H-26	2号住居跡	壺	底部欠	口径11.6	まるみのある体部に、ほぼ直立する口辺がつく。口辺下に粘土の縮ぎ目がみられる。内外面ともに口辺下に柔軟があり、いざれも口辺を凹みがきで消される。	口辺部外面横ナデ、体部外面は刷毛のち凹みがきか?	精良	良	茶褐色		55
H-27	2号住居跡	壺	底部欠	口径11.6 現存部高 8.7	H-26と同じような調整痕がみられるが器形をやや異にする。口縁部はまるみがあるがやや外反し、粘土の縮ぎ目がよく観察できる。	口辺部外面横ナデ、体部外面は刷毛のち凹みがきか?	精良	良	黑茶褐色		55
H-28	2号住居跡	甕	底部欠	口径 14 器高 8.8	最大径は口辺部、口辺と体部との接合部は刷毛のち横ナデ、外面の刷毛は、底部からの順序で底部のみが左の方向をとっている。	口辺部内外面ともに横ナデ、底部からの順序で底部のみが左の方向をとっている。	砂粒	良	内面茶褐色 外表面茶褐色	甕Ⅰ類b	55

Tab. 14 D 地区住居跡出土遺物一覧表 (III)

(単位 cm)

遺物番号	住居跡	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.
H-29	2号住居跡	甕	底部欠	口径 11	H-29～H-35は、いずれも頸部より「く」の字形に外反する口縁部をもち、内外面の調整も頗る著しいが、外反が小さく、ぶあつい口縁をもつものと弯曲しながら外反するものがある。前者は、口縁内面が折りかえしげみ	口辺部内外面の刷毛および内面の粘土の継ぎ目は横ナデで消される。	砂粒多	良	外面黒色 内面暗茶褐色	甕 I 類 a	56
H-30	2号住居跡	甕	底部欠	口径 12.8		口辺部全体から縦削毛をいたれた後に粘土を詰め、横ナデで消す。	砂粒	良	黄茶褐色	甕 I 類 b	56
H-31	2号住居跡	甕	口辺部	口径 12		口辺外面は刷毛を横ナデで消す。	砂粒	良	黄褐色	甕 I 類 b	56
H-32	2号住居跡	甕	口辺部	口径 12.4		口辺内面は斜めの刷毛を外面は縦削毛を横ナデで消す。	良	良	茶褐色	甕 I 類 b	56
H-33	2号住居跡	甕	口辺部	口径 11.6		口辺部内外面横ナデ、頸部から体部は刷毛	砂粒	良	黑茶褐色	甕 I 類 b	56
H-34	2号住居跡	甕	口辺部	口径 13		口辺内面は刷毛、口縁端から外面は横ナデ	砂粒	良	茶褐色	甕 I 類 a	56
H-35	2号住居跡	甕	底部欠	口径 17	体部の最大径は中位にあるが、さらには口徑が大きくなり、口辺部はく字形に外反する。口辺部は内外面ともに刷毛を横ナデで消す。	砂粒	良	淡茶褐色	甕 I 類 b	56	
H-36	2号住居跡	甕	口辺部	口径 11.6	口辺部は、ほぼ直立し、うすい器壁をなす	口辺部の外面は縦削毛を消す。内面は斜めの刷毛後横ナデ	わずかに砂粒	良	灰茶褐色	甕 I 類 c	56
H-37	2号住居跡	壺	口辺部	口径 13.6	H-37・38・39とも胸下半部を欠くが球形の体部をなすものであろう。内外面の調整法は、あまり差がないが、口辺部のつくりにやや直立するもの(H-37)「く」の字形に外反するものの(H-38)まるみをもって外反するもの(H-39)がある。口縁内面は水平の刷毛を横ナデで消す。体部外面刷毛、内面窓削り		砂粒	良	茶褐色		56
H-38	2号住居跡	壺	底部欠	口径 15			砂粒	良	灰茶褐色		56
H-39	2号住居跡	壺	底部欠	口径 14 現存部高 15			砂粒粗	良	茶褐色		56
H-40	2号住居跡	手捏ね土器	完形	口径 3.7 器高 2.8	2号住居跡からは計四個の手捏ね土器が出土したが、うち小型の一個は復原できなかった		良	良	赤褐色		56
H-41	2号住居跡	甕		口径 3.7 器高 2.9	口縁の一部を欠くがほぼ完形、整形わりに丁寧		良	良	赤褐色		56
H-42	2号住居跡	甕		口径 6.7 器高 7.8	底径 3.7cm、ぶあつい底部から内面は上へナデあげる。口辺は、内へ折りかえし指頭でおさえる。		砂粒	良	赤褐色		56
H-43	4号住居跡	甕	口辺部	口径 18.6	内外面ともに横ナデ		砂粒	良	赤褐色	甕 III 類	58
H-44	4号住居跡	甕	把手	径 3.8 × 4.0	ややぞんぐりとした把手で張付部の上、下端に刷毛目痕があり、内面は下から上への窓削り痕が認められる		砂粒	良	茶褐色		58
H-45	5号住居跡	椀	口辺部	口径 14	口縁部は、直立ぎみにのび平坦部をつくる。	口辺部内外面ともに横ナデ痕のこる、他はナデ	良	良	黄赤褐色	椀 I 類 b	61
H-46	5号住居跡	椀	口辺部	口径 14	いずれも丁寧な調整がほどこされており、H-47・48はやや平底ぎみの底部をもつ。	口辺部横ナデ、他はナデ刷毛目なし。	良	良	黄褐色	椀 II 類	61
H-47	5号住居跡	椀	完形	口径 11.6 器高 5.8		内面は丁寧なナデ、底部は粗い刷目、体部押圧痕	良	良	赤茶褐色	椀 II 類	61
H-48	5号住居跡	椀	完形	口径 12.6 器高 6.7		口辺部内外面横ナデ、内面丁寧なナデ	精良	良	茶褐色	椀 II 類	61
H-49	5号住居跡	杯	口辺部	口径 10	口縁部は小さく外反し、まるみをもつ、口径の違いがあり、H-49は球形の体部をなすのである。	口辺部は横ナデ、外面上はわずかに条痕のこる。	砂粒	良	黒褐色	杯 II 類 a	61
H-50	5号住居跡	杯	口辺部	口径 14.6	H-51は外反する口縁部をもつが、まるみのある口縁端をなし平底ぎみのあつい底部をなす。	口辺部外面横ナデ痕わずかに残る。	良	良	赤褐色	杯 II 類 a	61
H-51	5号住居跡	杯	完形	口径 13.6 器高 6.4		口辺部内外面横ナデ、内面丁寧なナデ	精良	良	茶褐色	杯 II 類 a?	61
H-52	5号住居跡	椀	底部欠	口径 15.4 器高 8.0	直線的な口縁は、やや内傾ぎみで体部はねりがある。	口辺部内外面ともに丁寧な横ナデ、底部の刷毛は不規則	良	良	暗赤褐色	椀 III 類	61
H-53	5号住居跡	甕	口辺部	口径 12		外面は縦削毛を横ナデで消す。	砂粒	良	黑茶褐色	甕 I 類 b	61
H-54	5号住居跡	甕	底部欠	口径 14.8		内面の粘土接合部には指痕、口辺内面は刷毛目、外面横ナデ	砂粒	良	茶褐色	甕 I 類 b	61
H-55	5号住居跡	甕	把手	径 4.4 × 3.4	張付の把手で張付部に粗い刷毛目がみられる。内面は窓削りか?		砂粒硬質	良	黄褐色		61
H-56	5号住居跡	甕	把手	径 3.9 × 3.5	H-44・55のような張付部の刷毛目みられず。内面は、横水平の刷毛目		砂粒	良	茶褐色		61
H-57	5号住居跡	手捏ね土器	口辺部	口径 3.6 器高 3.0	外面は、逆時計まわりに土器を動かし、整形する。内面は、下から上への方向を示す。		良	良	茶褐色		61
H-58	5号住居跡	錘		長さ 3.6 最大径 1.3	いずれも管状をなし、H-58・59は、全形の1/2を欠く、H-60は、完形。		良	良	黑茶褐色		61
H-59	5号住居跡	錘		長さ 3.5 最大径 1.5			良	良	黑茶褐色		61
H-60	5号住居跡	錘		長さ 3.6 最大径 1.4			良	良	黑茶褐色		61
H-61	6号住居跡	甕	完形	口径 27 器高 33	張付の把手をもつ单孔式の甕、孔は径 9cm 口辺部横ナデで内面は窓削り。外面の刷毛目を消す。		砂粒	良	茶褐色		62
H-62	6号住居跡	甕	把手	径 3.3 × 2.4	やや扁平で短く張付部に亀裂あり、体部外面は縦削毛内面は指痕の後刷毛目		砂粒	良	黑茶褐色		62

#### 4. 中世の遺構・遺物

A地区、D地区が位置する台地には、旧石器、縄文時代から弥生時代をへて、古墳時代までの遺物、遺構の存在が確認されたが、これと重複して、中国産磁器類などを多量に出土する遺構がある。本遺跡では、旧石器、縄文時代の遺物について、その量は多く、また遺構も、台地半分以上を占めていることから、発掘調査に多くの日数を要することになった。遺構は、敷石、溝、集石、井戸状遺構、さらに柱穴に大別できる。これらの遺構は、同じような遺物を出土することから、互いになんらかの関連があるものと思われ、その構造や性格追求とともに、発掘調査の重要な問題点であった。

##### I. 敷石遺構（付図2 PL.22～24）

ここで敷石遺構としてとりあげるのは、前述した南北敷石・東西敷石および北溝の3遺構である。これらの遺構は、時期的な差は認めがたく、また機能的にも分離して考えることは困難と思われるが、記述の関係から、3つの遺構に分け、順に記していく。

**南北敷石**（付図3 PL.22）は、I-25グリッドを南の端部として、D-25グリッドを北の端部とする全長48mの敷石である。敷石は、幅6mの溝状の落ちこみ内に、たたきしめた状態で検出されたが、敷石の横断面は、平坦面をなさず、蒲鉾状に中央部が盛りあがっている。敷石の石は、小児人頭大を最大とするほどで、極端に大きい石は用いられず、大きさや、石質など、石自身には、統一性、特殊性は、ないようである。南側端部のI-25グリッドでは、段をもって、台地を削っており、その斜面にも石がのっているが、流れ込みの状態を示している。1段低くなった部分も、敷石と同じような遺物を出すが、かなり攪乱を受けている。敷石の南北方向の断面は、中央部がもっとも高く、南北の両側に向って次第に低くなる。敷石の石の量に、部分的な差がみられるが、これは、断面高低の差とは関係ないようである。

**東西敷石**（付図2 PL.23）は、D-25グリッドで、南北敷石と直交するが、切り合い関係は示さず、南北敷石の東西両側溝も、敷石と同じように方向を変えており同一の遺構である。西の端部は、E-17グリッドにあり、敷石の北側溝は、掘られているが、敷石の石は、極端にその量が減り、地表面から浅いということもあってか、不明瞭に終わる。東の端部は、前述したように豚舎下まで延びているようであるが、確認できなかった。したがって、東西敷石の全貌は、出現していないことになるが、豚舎下より発見されたものは、D-28グリッドで、北側溝より新たに始まる別の敷石と思われる。E-17グリッドよりD-27グリッドまでの敷石全長は約94mをはかる。東西断面は、ほぼ中央部にあたるD-21グリッド付近がもっとも低く、東西の両方向に向かって、次第に高くなる。横断面は、南北敷石とは異なり、平坦状となり、石も大きめであり、量も多いようである。敷石の北側には、小溝をもち、同じように東西両端部が高く、中央部が低くなり、D-21グリッドで、方向を北に転じて、さらに現水田の台地下に伸びている。この遺構を北溝とした。（PL.24）

## 2. 溝状遺構 (付図2・Fig.63)

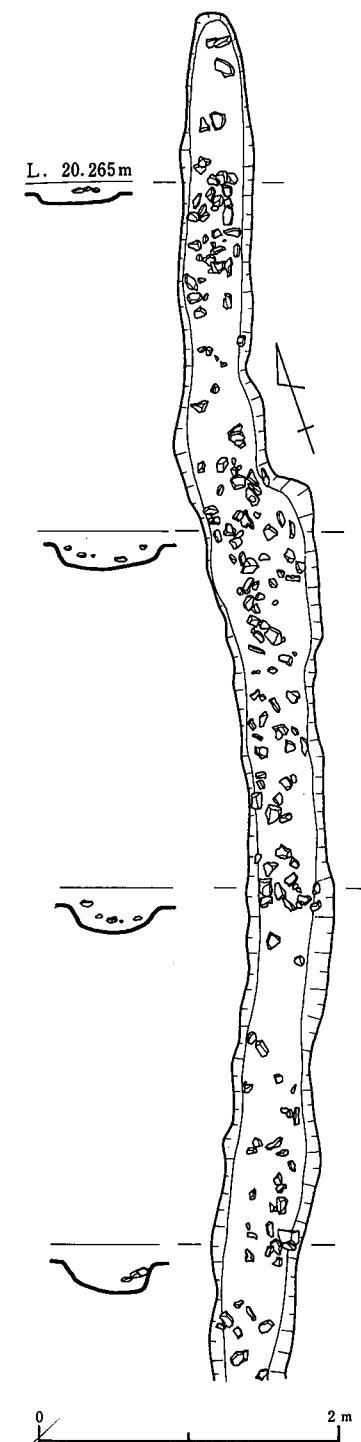


Fig. 63 D地区第II溝状遺構実測図  
(縮尺 $\frac{1}{50}$ )

1<4-26.

ここで溝状遺構としてとりあげる、第I・II・III溝は、いずれもE-29グリッド・D-29グリッドで、東西敷石と連結し、同一時期の所産と考えられるものであるが、出土遺物も多く、台地東側を画する溝と思われ、また敷石を持たないことなどから、ここでは、一応分けて記す。なお、第I・II・IIIの番号は、発見順に付したもので、第I溝は東、第III溝は西、その間に第II溝という位置関係にある。

第I溝は、第11・12号土塙墓を切っている。検出した長さは、約45m・深さ約30cmをはかる。南の端部は、集石につながり、第II溝とも連結する。北端は、豚舎と農道にさえぎられ、発掘できなかつたが、東西敷石の北側溝と、D-28グリッドの別の敷石に結びつくものと思われる。また、第III溝とは、切り合っており、第I溝も、いく条かの溝によってなるが、給水用パイプ埋設の際に攪乱されており、これらの前後関係は、把握できなかつた。

第II溝は、南端部を集石につなげ、第4・5・6号土塙墓を切り、第I溝と並行して北へのびる。F-29グリッドで一旦途切れるがその先端部より、約3.5mの間隔をおいて、L字形の溝があり、さらに、その延長上に東西敷石の南側溝が位置する。これらの間隔が、後世の削平によるものか、あるいは、意図的なものかは、明確でない。

第III溝は、北端部で、東西敷石よりのびる溝と一部分つながるもので、第10・11・12号土塙墓、第11号甕棺墓を切っている。南端は、第11号甕棺墓の墓塙と重なり、途切れる。この南側に、浅いL字状の溝があり、この遺構の出土遺物も、第III溝としてとりあげた。

以上3つの溝には、敷石遺構と同じような石、遺物が出土するが、石を敷いた様子ではなく、落ちこみの状況を示している。

## 3 集石遺構 (PL.24)

遺構は、工事用進入道路の建設予定地である J-29・30 グリッドで検出したもので、第III溝に見られた給水用パイプがここまでびており、攪乱されていると思われたのであるが、遺構は、地山を整形しており、出土遺物の示す時期には混乱ではなく、また、この遺構から、小さな落ちこみが西へのびており、これが南北敷石の東側構につながる可能性があることから、1つの遺構とした。集石は、地山を、最大幅 1.8m、長さ 6m に舌状に作り出した先端部にみられるもので、敷石と同じような大きさの石を用いて、すくなくとも四重に積みあげられている。また、集石の東側には、長さ約 3.5m の列石が東へのびており、同一の遺構をなすものと思われる。この列石の出土遺物は少ないが、集石からは、敷石や溝と同じように、中国産磁器類を出土する。なお、この舌状の作り出しは、J-26 グリッドの南北敷石の南側端部とつながるものと考えられる。

## 4 井戸状遺構 (Fig. 64・65 Tab. 17 PL.25)

I-25 グリッドには、敷石直下に井戸状の遺構が存在する。平面は、直径約 1.8m の円形をなし、深さ約 2m、底部も円形で、直径 70cm をはかる。上部は、逆円錐状に傾斜をもって掘られ、中位よりやや上から円柱状に垂直に掘られる。遺物は、土師皿と青磁であるが、底部からは出土していない。特に、円柱状に掘りこまれる位置には、10 数個の石とともに完形の土師皿が出土した。遺構内の埋土は、上部が暗茶褐色土で、下部は、黄茶褐色土であった。

## 5 柱穴 (Fig. 66・67 PL. 26)

柱穴状ビットは、発掘したグリッドのほぼ全面にわたってみられるが、密集度の違いは存在する。特に、南北・東西敷石と第II溝によって囲まれた E-I-25~28 グリッドでは、H 列を境として、南側に密集しており、北側では、数個を数えるすぎない。これらの柱穴状ビットには、盤石を持つものがあり、これらは、明らかに柱穴と考えられるが、互いに関連した建物としては、とらえられない。建物として認定できたのは、E-27 グリッド (D-1 とする) と G-26 グリッド (D-2) とする 2 棟である。D-1 は、1 (柱間は約 3m) × 1 (約 2.5m) で、長軸は、東西方向である。D-2 は、1 (柱間約 3m) × 2 (柱間約 1.8m) で長軸は、北東-南西方向をとる。柱間は、やや差があり統一性がなく、北側は、4 個のビットよりなる。これらの建物の時期は、明確でない。各ビットの計測値は下表のとおりである。

Tab. 15 柱穴計測値表 (I)

(単位cm)

D-I	摘要 (柱間 北・南・東・西)	P1 径・深さ	P2 径・深さ	P3 径・深さ	P4 径・深さ
E-27 グリッド	1 × 1 (305 × 310 × 250 × 260)	40・26	40・14	38・17	30・24

Tab. 16 柱穴計測値表 (II)

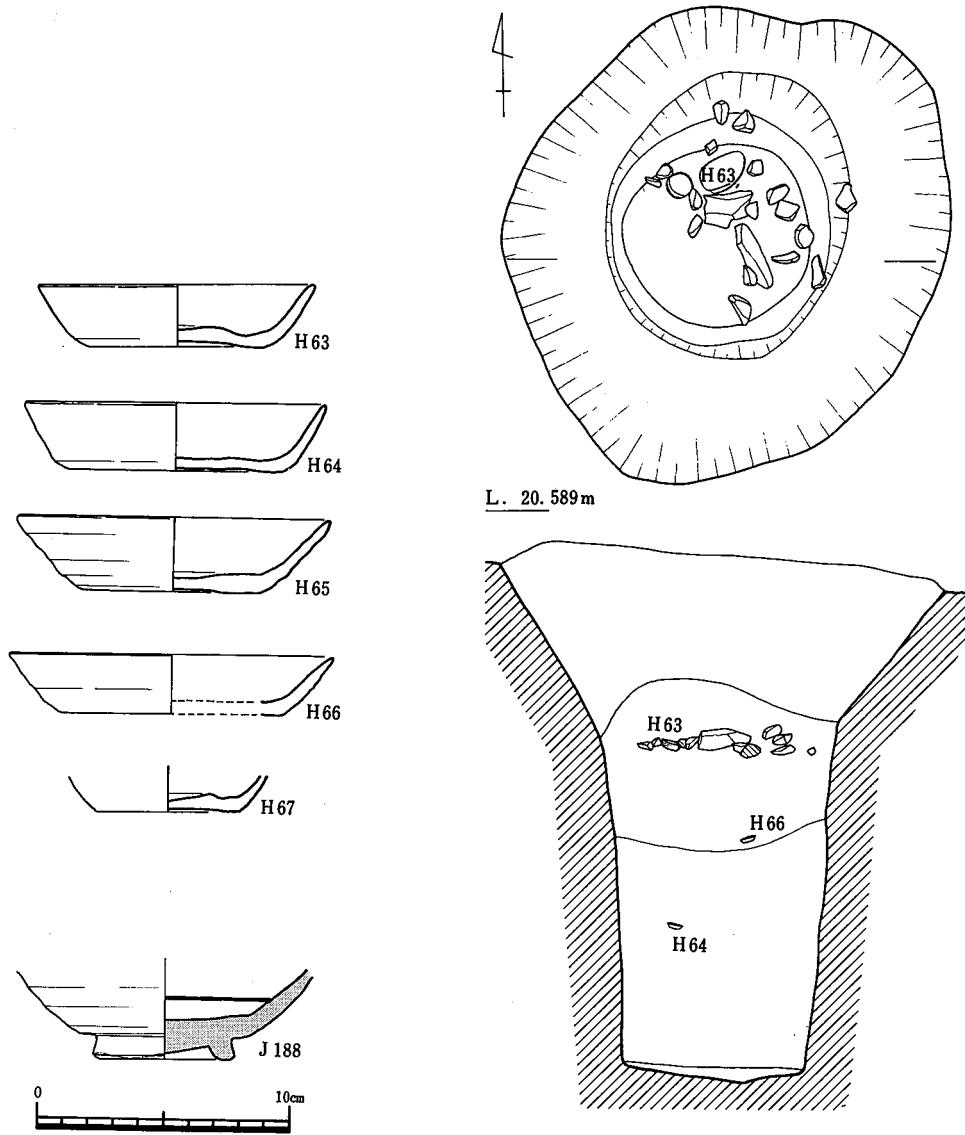
(単位cm)

D-II	摘要 (柱間 北・南・東・西)	P1 径・深さ	P2 径・深さ	P3 径・深さ	P4 径・深さ	P5 径・深さ	P6 径・深さ	P7 径・深さ	P8 径・深さ
G-26 グリッド	1 × 2 (325 × 325 × 180 × 150 × 90)	38・14	35・40	34・21	40・15	35・29	30・53	40・15	40・29

Tab. 17 井戸状遺構内出土遺物一覧表

(単位cm)

遺物番号	遺物	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.	PL.
H-63	土師	皿	ほぼ完形	口径 11.0 器高 2.5 底径 7.2	いずれも糸切りの底部をもっており、H63・H67のように、ややあげ底となり、体部の立ちあがりが大きいものと、H64・H66のように体部の立ちあがりが小さく、したがつて口径が大きいものの2つに分類できる。	底部に焼成後の穿孔	良	良	赤褐色		64	25
H-64	土師	皿	ほぼ完形	口径 12.0 器高 2.8 底径 8.4		内外面横ナデ、底部糸切り	良	良	赤褐色	L 18.944 m	64	25
H-65	土師	皿	ほぼ完形	口径 12.4 器高 3.0 底径 7.0		糸切り底部・内外面横ナデ	良	良	赤褐色		64	
H-66	土師	皿	底部欠	口径 13.0 器高 2.4 底径 9.0		内外面横ナデ、底部不明	良	良	赤黄褐色	L 19.284 m	64	
H-67	土師	皿	底部	底径 5.6		糸切り底部・横ナデ	良	良	赤褐色		64	
J-188	青磁	碗	底部	高台径 5.6 高台高 0.9	底部あつく高台の削り出し浅い。見込内底には文様はないが見込体部に沈線めぐる。		灰色 緻密	良	釉は高台まで		64	

Fig. 64 D地区井戸状遺構出土遺物実測図(縮尺 $\frac{1}{10}$ )Fig. 65 D地区井戸状遺構実測図(縮尺 $\frac{1}{30}$ )

千秋有

## 出土遺物 (Fig. 68~87 Tab. 18~27 PL. 28~34)

敷石・溝・集石・井戸状遺構より出土する遺物は、弥生式土器、土師式土器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、石鍋など多様である。これらの遺物は、敷石、集石の中より混在して出土するが特定の遺構のみに、また部分的に集中して出土することではなく、分散して出土する傾向にある。出土遺物の主となる磁器類は、中国産と朝鮮産がみられ、中国産磁器類が、圧倒的な量を占める。最近、発掘調査遺跡の増大に伴い、中国産磁器類についての報告が増え、考古学的な研究・分析もなされている。これらの研究・報告を参考、指標としてさらに若干の考察を加えて、本遺跡出土の磁器類を分類する。中国産磁器類は、大きく白磁と青磁に分けられ、白磁は、その形態、手法、釉調などから5類に、青磁は、特にその文様から8類に分けられる。朝鮮産磁器は、I-25グリットの井戸状遺構の上部と敷石遺構より出土した天目類 (J 78~81) で、高麗天目いわゆる黒高麗と呼ばれているものである。以下、白磁、青磁の分類表を示す。

Tab. 18 蒲田遺跡出土白磁器分類表

類	形態・手法・文様の特徴 (法 量)			胎土・釉調	該当遺物番号	備考 (類例)
	口辺部	体部	底 部			
I	口径16~17cmで、小さく外反させるものと、ほぼ水平に平坦面をつくって小さく外反するものがある。口縁内面下に沈圈内外面横ナデ。	器高を知りえるものなし。内側しながら口縁へつながる。直線的な体部は、水平の口縁をもつようである。見込体部に輪描き文、外面窓削り。	高台径5.2~7.2cm・高台高は、1.4cm前後ものと、1.9cm前後のものがある。高台は背を高く削り出しが、見込内底には輪描き文で、高台と体部の境に段をもつものがあり、これらの多くは、高台露胎。	灰白色・白・淡黄白色胎土、灰白・淡黄白色釉、高台脇が土になるものと、高台まで流れるものあり。	J 7~10・83~86 89~91・94~108 ・114~115・117 ・118~125・126 ・129~131・154 ~156・163 計27	福岡市和白遺跡 図43
II	口径14~17cmで玉縁状の口縁をもつ。この口縁は、折り返しの頗著なものと、なめらかなもの、さらに大小の違いがある。内外面横ナデ。	J 124は、全形を知りうる。器高 6.3cm、口径15.8cm。内側ながら口縁へつながるが、I類ほどではなく、やや直線的で底部からの立ちあがりは小さい。外面窓削り。	高台径6.2~7.2cm、高台高0.7~1.0cm。高台の削り出し浅く、ぎんぐりしている。見込内底に沈圈、高台削り出しが浅く、高台内の窓切りがまるみのあるものと深く水平になっているものがある。	白色、灰白色胎土、白、灰、灰白色釉、高台脇は露胎、口縁部に厚くかかるのがある。	J 2~6、11~13 計 8	福岡市和白遺跡 図48・113 大宰府史跡昭46 図18・50
III	本遺跡では、口縁を知りうる碗はない。	図示した6例のうちJ 92・165は、高台脇に輪縁があり、底部からの立ちあがりは、やや屈曲する。	見込内底に輪状の無釉がある。高台径5.8~7.6cm、高台高1.1~1.4cm。高台の削り出しは、深く高い。見込内底はやや平坦となる。投付が水平なものもある。(J 164)	灰白・白・淡黄白色胎土、やや青みを帯びる。高台露胎。	J 92・95 106・107 164・165 計 6	福岡市多々良遺跡 図21 大宰府史跡昭46 図18
IV	いわゆる口禿の口縁をもつものであるが本遺跡では、皿のみで碗の出土はなかった。皿口径を知りえるのはJ 14のみで10.2cm。	J 14の器高は 1.9cm、底部からの立ちあがりが大きいものと小さいものがあり、大きい方は、器高が高い。外面窓削り	底径4.8~7.0cmだが体部の立ちあがりの小さいものは底径も小。底部の厚さは、器高の大きい方がうすめ。どちらもややあげ底。見込内底に沈圈。	灰白・白色胎土、灰白・白色釉、全面上に釉、底部は、釉うすく、刷毛ナデ(?)のものもある。	J 14~18 J 87 計 6	多々良遺跡 図18
V	白磁であるが、I~IV類にはいらないもの、出土数が少ないとセット関係がつかめないもの、あるいは特殊な器形をなすものをここに括する。				J 72~74 146~147 計 5	

Tab. 19 蒲田遺跡出土青磁器分類表

類	形態・手法・文様の特徴 (法量)			胎土・釉調	該当遺物番号	備考(類例)
	口辺部	体部	底部			
I	鏡葉文をもつものに碗と皿がある。口径16~18cm皿口径11~13cm、口縁はやや尖るものと、外反するものがある。	体部外面に鏡葉文をもつもので、鏡葉文は陽刻され縁をもつもの、鏡片彫りの粗雑なもの、沈線によるものなど、さらに単弁のもの複弁のものと多様である。	高台径5.0~5.8cm、高台高0.7~0.9cm、ぶつつい底部削り出しの浅い、小さな直立する高台をつける。	灰、灰白胎土。釉は、高台まで流れる。	J 41~47 135~137・172	蒲田2号墳 J 189
					計11	
II	口径16.6~17cm口縁端は、まるく、やや外反する。内面に1~2条の沈線。	見込部に縦に区画があるもの、いわゆる「寿文割区範片影」と呼ばれているもの。窓と橋を用いる。	底部が現存するのは、J 100のみ、高台径6.6cm高台高0.8cm、高台のつくりは、I類に類似。	灰白、灰、淡灰茶色胎土	J 52?・100 111・174 175?	
					計5	
III	口径15~17cm I類と同じように、細く尖る口縁をもつものと、まるくおさめるものがある。内面口縁下に沈線をもつものもある。	見込に草花文をもつもの、あるいは同一器制をとるもの。現存部によると、文様は内底に窓描きする例が多く、見込部にも施文されるときは、窓・橋が併用される例が多い。	高台径5.2~6.8cm 高台高0.6~1.2cmで、高台のつくりはI類に類似。極端に無いものがあり、内底はもありあがるものがある。	白、灰白、灰、灰黄、淡黄、淡黄白色胎土黄乳をもつものがある。露先が白黄色、赤銅色を呈するものがある。	J 49~51、53~59 60~71・101~103 112・138・145・ 173・176~180	
					計40	
IV	底部のみの破片なので口辺部は不明。和白例は、内面口縁下に沈線をもつ。口径16.7cm。	見込内底に渦巻放射状の菊花文をもつ。本遺跡では、2例のみであるが、見込部には連続する蓮花文が描かれるものか?	高台径5.4~6.2cm 高台高0.7~0.8cm、ぶつつい底部はI類と同じであるが、さらに小さい高台をもつ。	灰白色胎土 高台面取りまで釉かかる。	J 48・181	
					計2	
V	碗 口径16~17.2cm、内外彫ぎみの体部は、外反することなく、まるみのある口縁をつくる。	内外面口縁下に沈線めぐり、外面は、底部から放射状に描き手文をもつ。内面は、電光状の施文をなす。	高台径4.7~6.8cm、高台の削り出しは粗雑、内底が平坦なものと、凹凸がはげしいものがある。高台内は、断面山形の粘土をのこすものがある。	灰、灰白、灰黄白色胎土 高台脇露胎	J 19~27 97~99・101~103 109・119~121 132	
					計20	
	皿 口径10~120cm 口辺部は外反し、まるい口縁をつける。	器高2cm、文様は内底にあり、横書きの電光状文と、窓描きの草花文よりもなる。内底と体部との境に沈線。	底径2~6cm、あげ底の底部から、体部は稜をもってやや厚くなっている。見込内底に文様ないものもある。	灰白、灰色胎土 底部無釉のものが多い。	J 28~40 96・133・134 166~169	
					計20	
VI	本遺跡では、ただ1点の出土。越州窯であろう。	内面横ナデ、外面は1cm幅の窓削り。	底部、口辺部を欠く。	釉剝離し不明 茶灰色胎土	J 1	
					計1	
VII	本遺跡では、3点出土。明代か?	口辺部、体部を欠いている。見込内底に刻印。	高台径5.4~6.4cm 高台高1.1~1.4cm 疊付は、まるみがあり、背が高い。	淡灰白色胎土、高台内は赤銅色を呈する。	J 76・105・148	
					計3	
VIII	白磁V類と同じようにセッット関係がつかぬ。あるいは特殊な器形をなすもの。	J 77は白磁、蛇目高台で見込文様は染付 J 104は蓋の底部か? 削り出しの粗雑な高台がつく J 149は碗で、V類にはいるか? J 150は蓋の底部か? J 183は大型の皿であろう。I類に属するか?			J 77・104 149・150 183	
					計5	

## 青銅製遺物 (Fig. 83 P.L. 27・30)

H-25グリッドの南北敷石東側溝より出土したもので、J 4・13と共に伴。欠損部少なく、ほぼ完形に近く、1辺7.5cmの方形である。本例を鏡とするには、種々の点で疑問があるが、A面の中央部に小さな突出部があり、鉢と思われる。これを鉢とすれば、円鉢というよりも、むしろ帶鉢に近く、かなり細いつくりのものと言えよう。A面の縁は、5mmほどの幅をもってやや厚くなっている。B面には、禾本科植物か、あるいは木質部らしきものの付着が認められる。ただし、箱に納められていたような出土状況ではなかった。映像面は、原形は平面をなしていたものと思われるが、現在は、やや凸面を示す。

## 軒平瓦 (Fig. 83)

図示した軒平瓦はH-29グリッドの第I溝より出土したものである。周縁を欠いているが上外区は珠文・下外区は、陽刻鋸歯文よりなり、内区は、扁行唐草文と思われる。瓦片は、集石遺構でも出土しているが、出土数は、きわめて少ない。

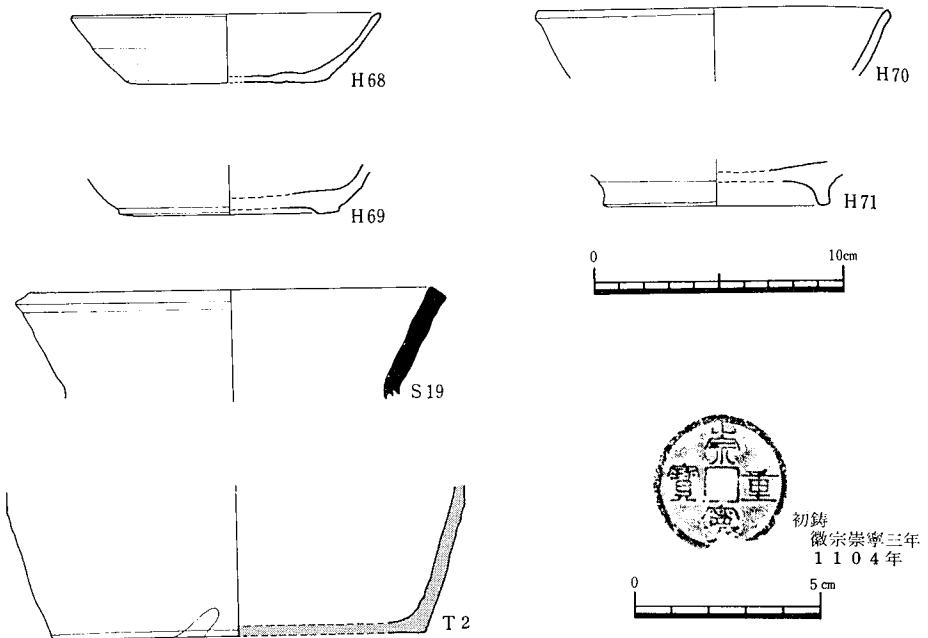


Fig. 66 D地区柱穴出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{3}$ )

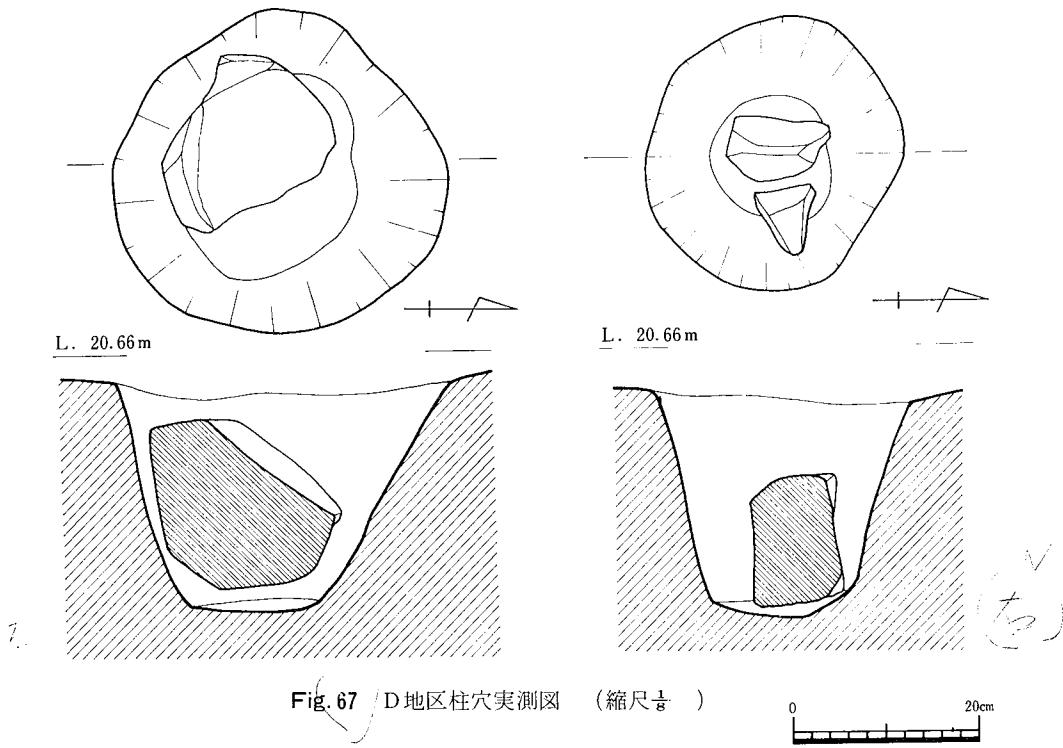


Fig. 67 D地区柱穴実測図 (縮尺 $\frac{1}{8}$ )

0 20cm

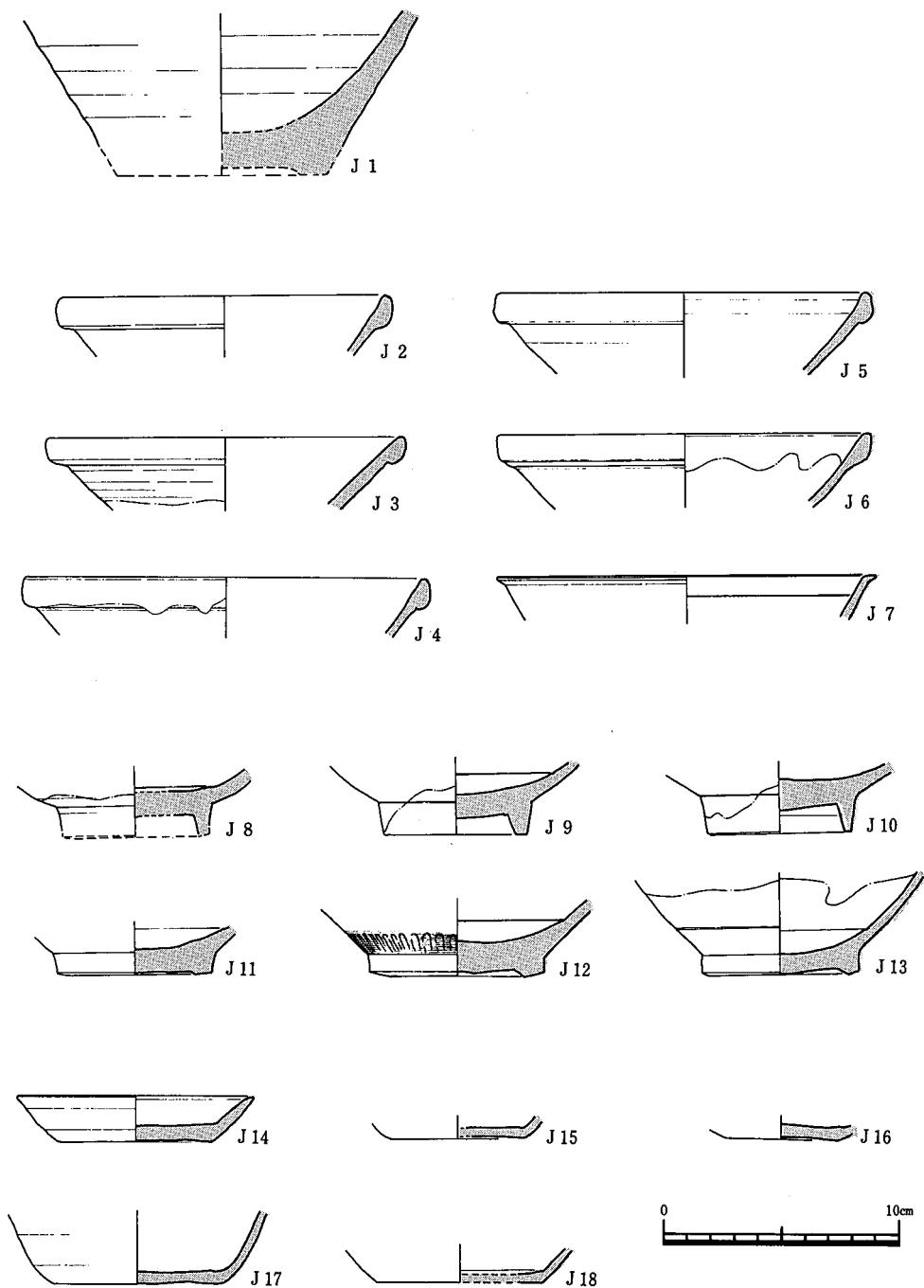


Fig. 68 D 地区敷石遺構出土磁器実測図( I ) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

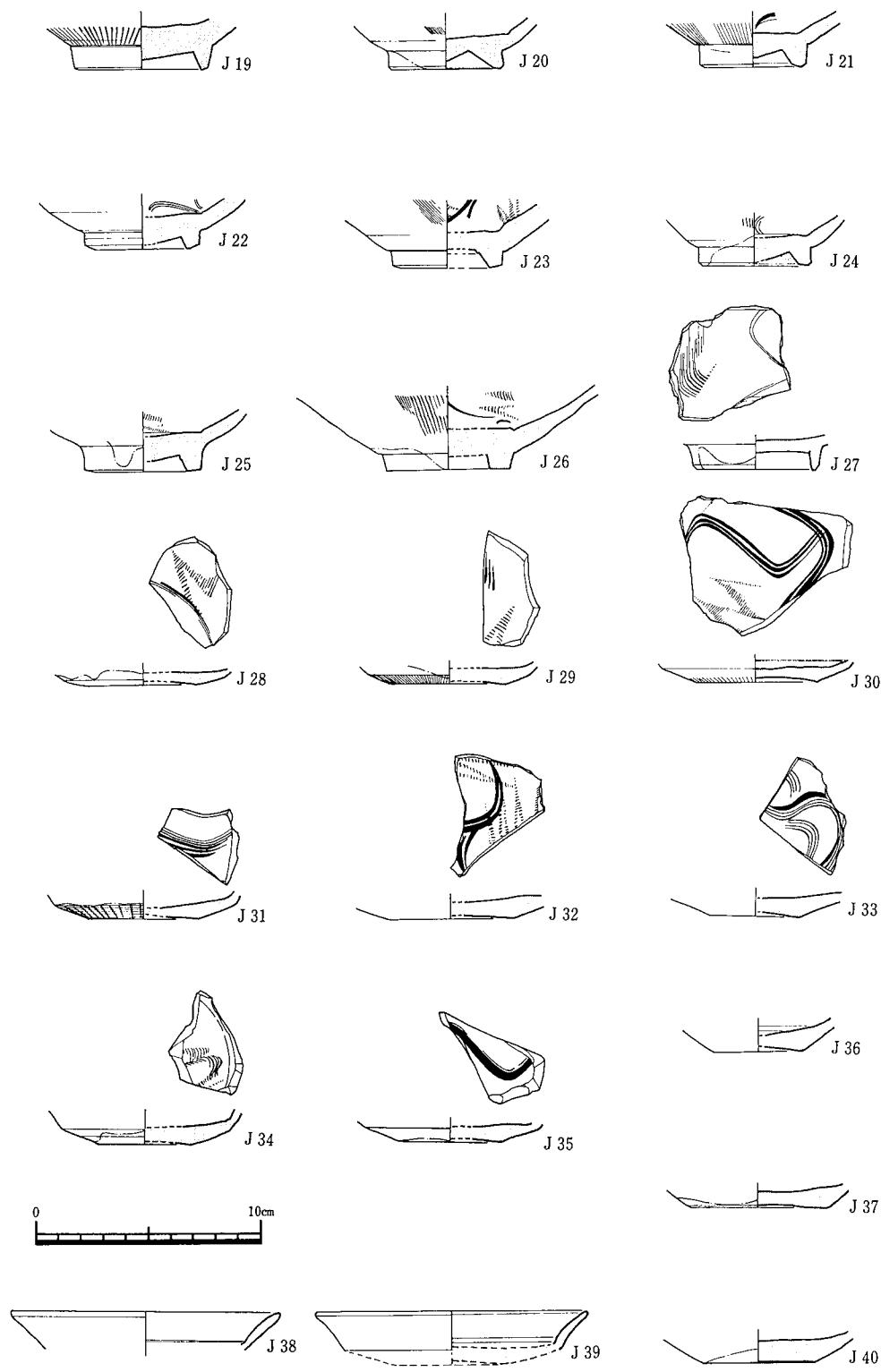
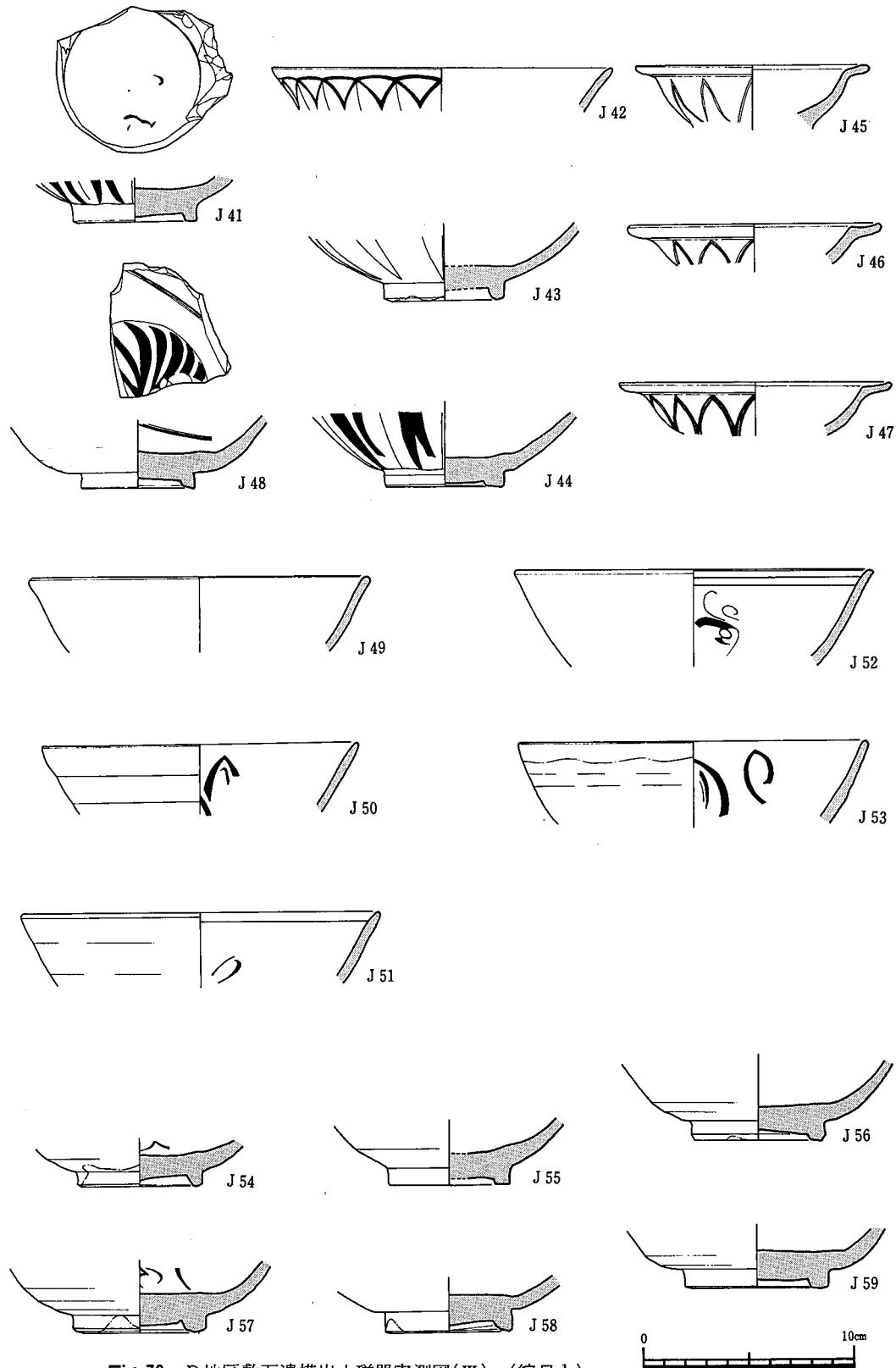


Fig. 69 D 地区敷石遺構出土磁器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

Fig. 70 D 地区敷石遺構出土磁器実測図(III) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

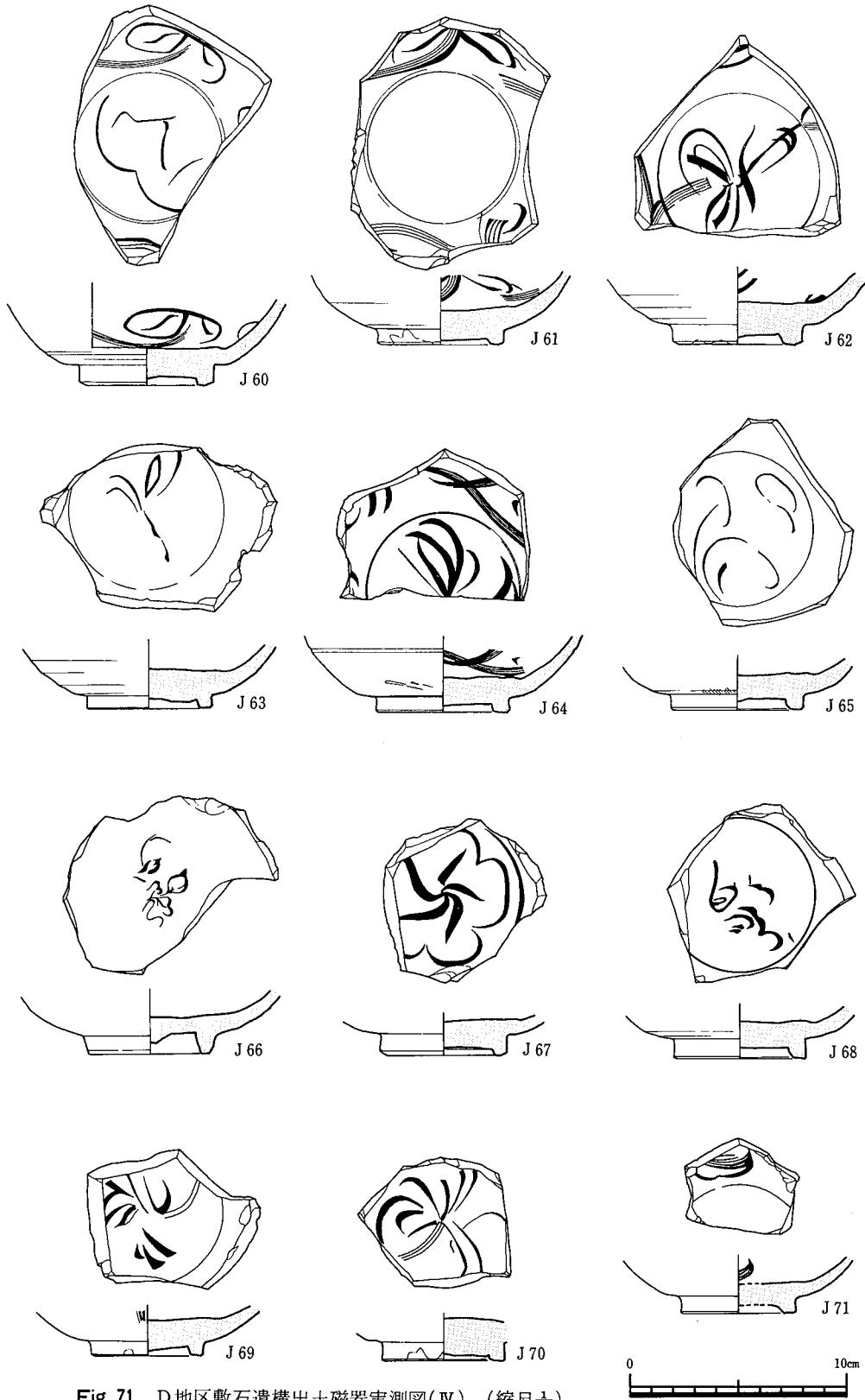


Fig. 71 D 地区敷石遺構出土磁器実測図(IV) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

0 10cm

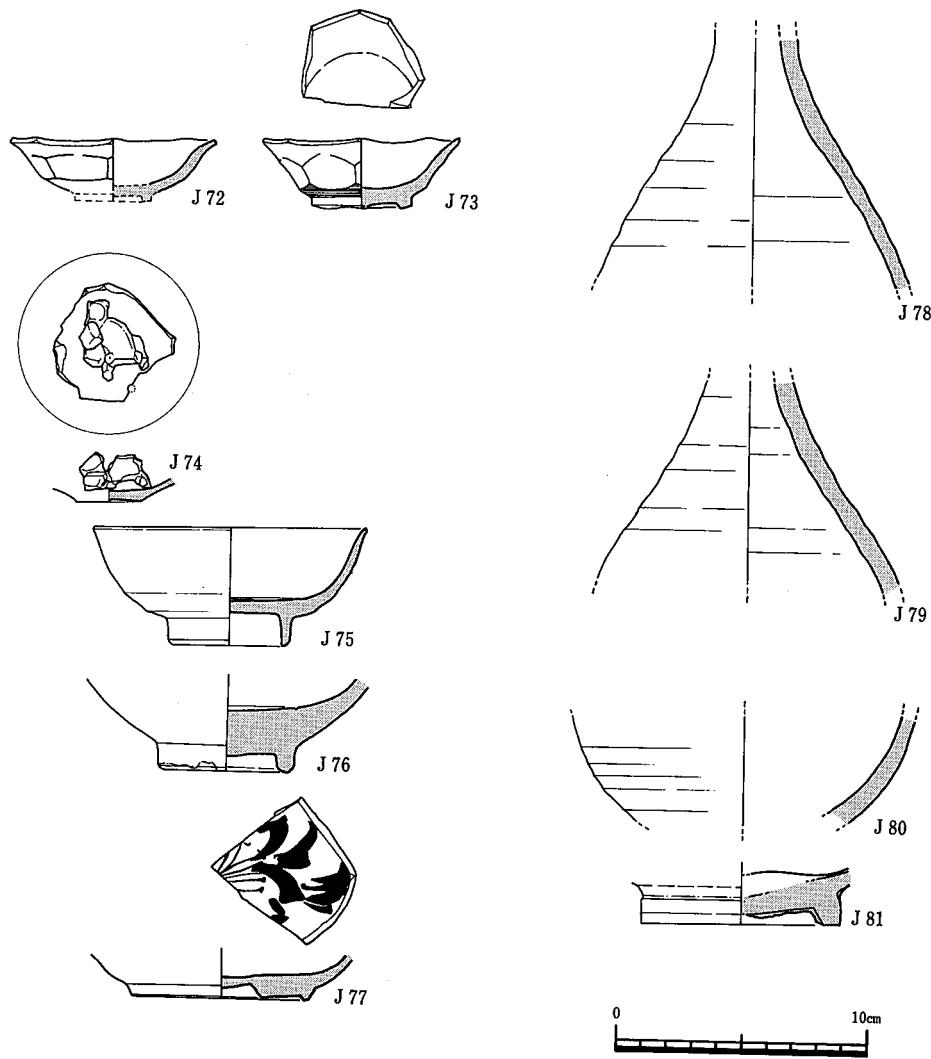


Fig. 72 D 地区敷石遺構出土磁器実測図(Ⅴ) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

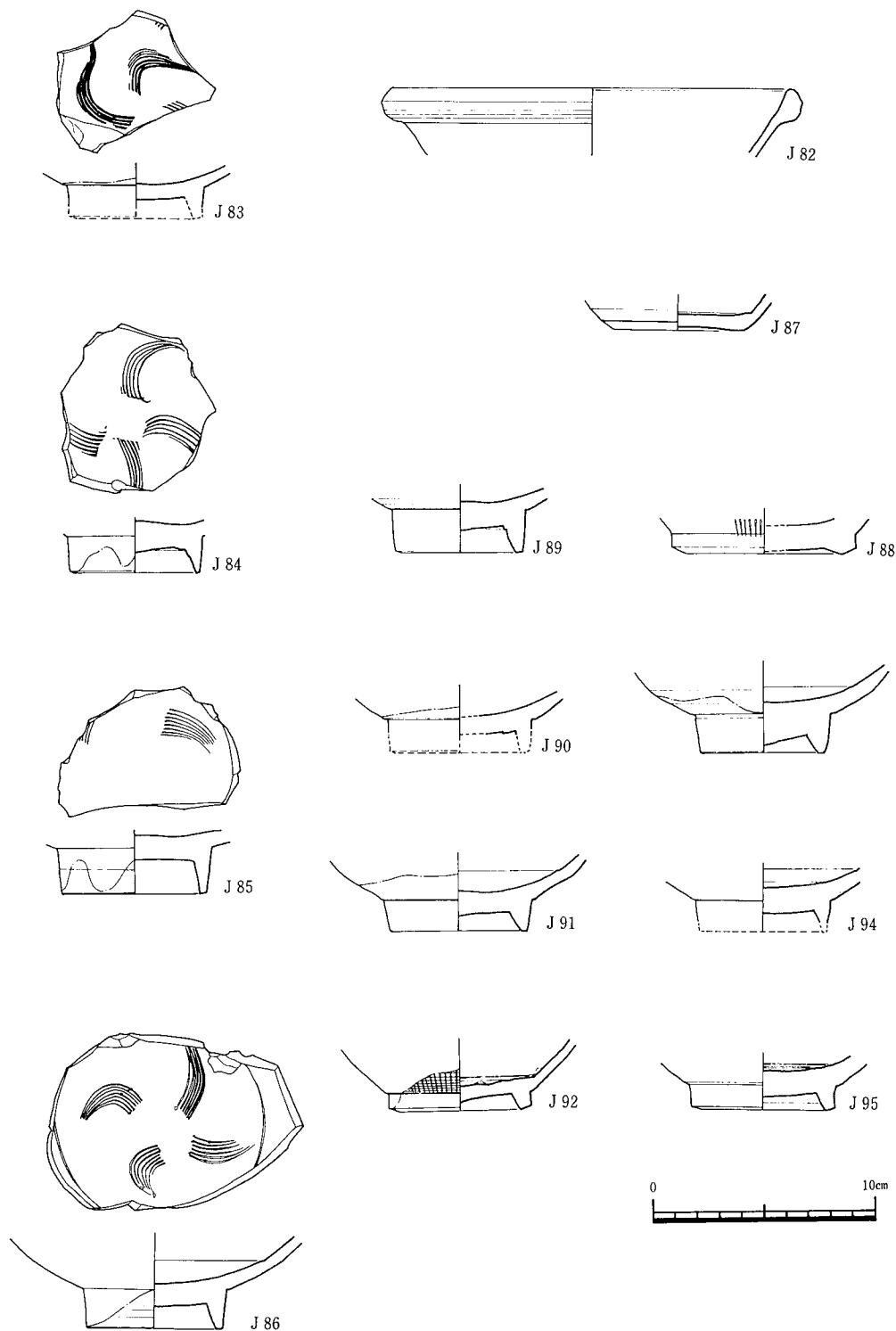


Fig. 73 D 地区第 I 溝状遺構出土磁器実測図( I ) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

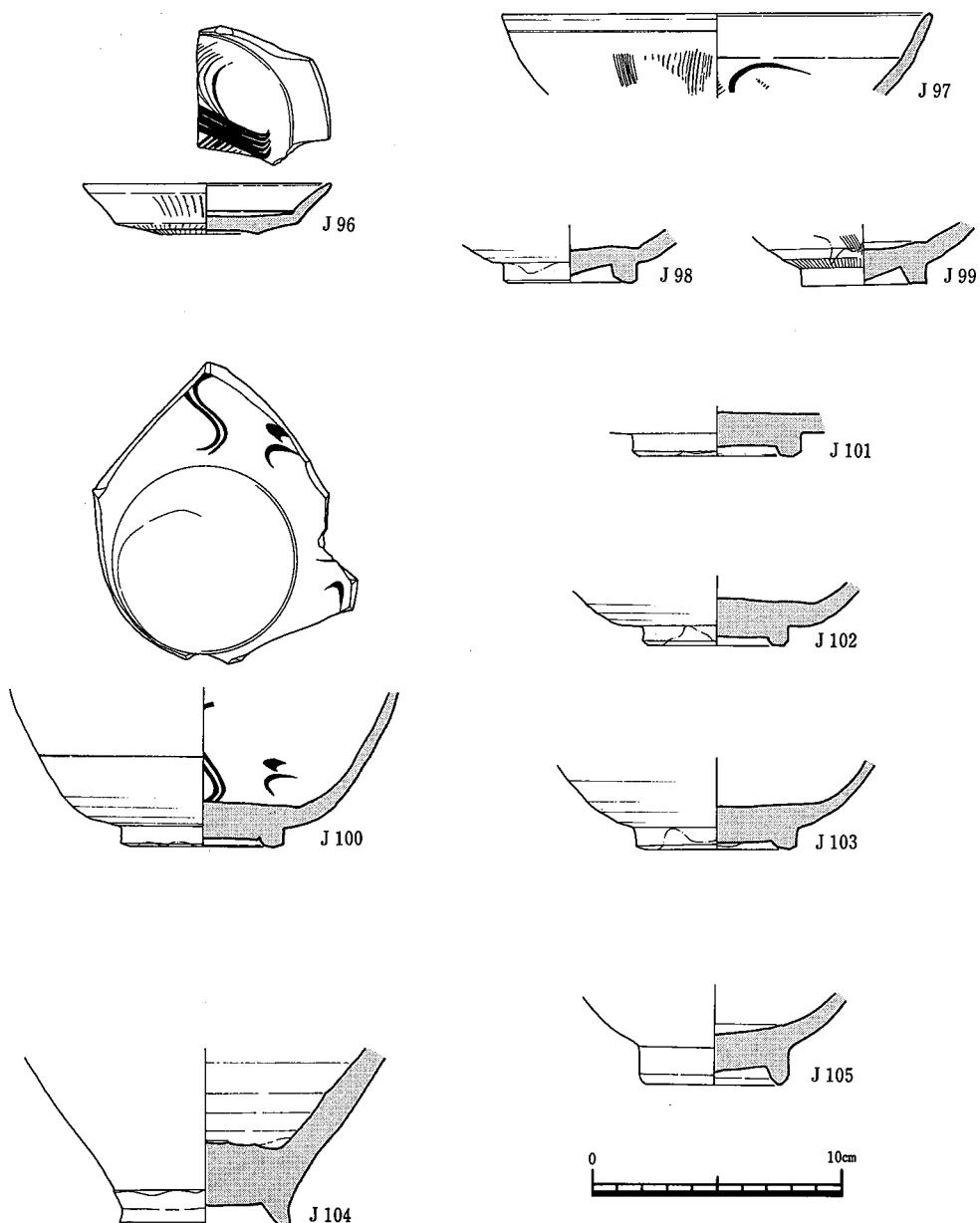


Fig. 74 D地区第I溝状遺構出土磁器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{20}$ )

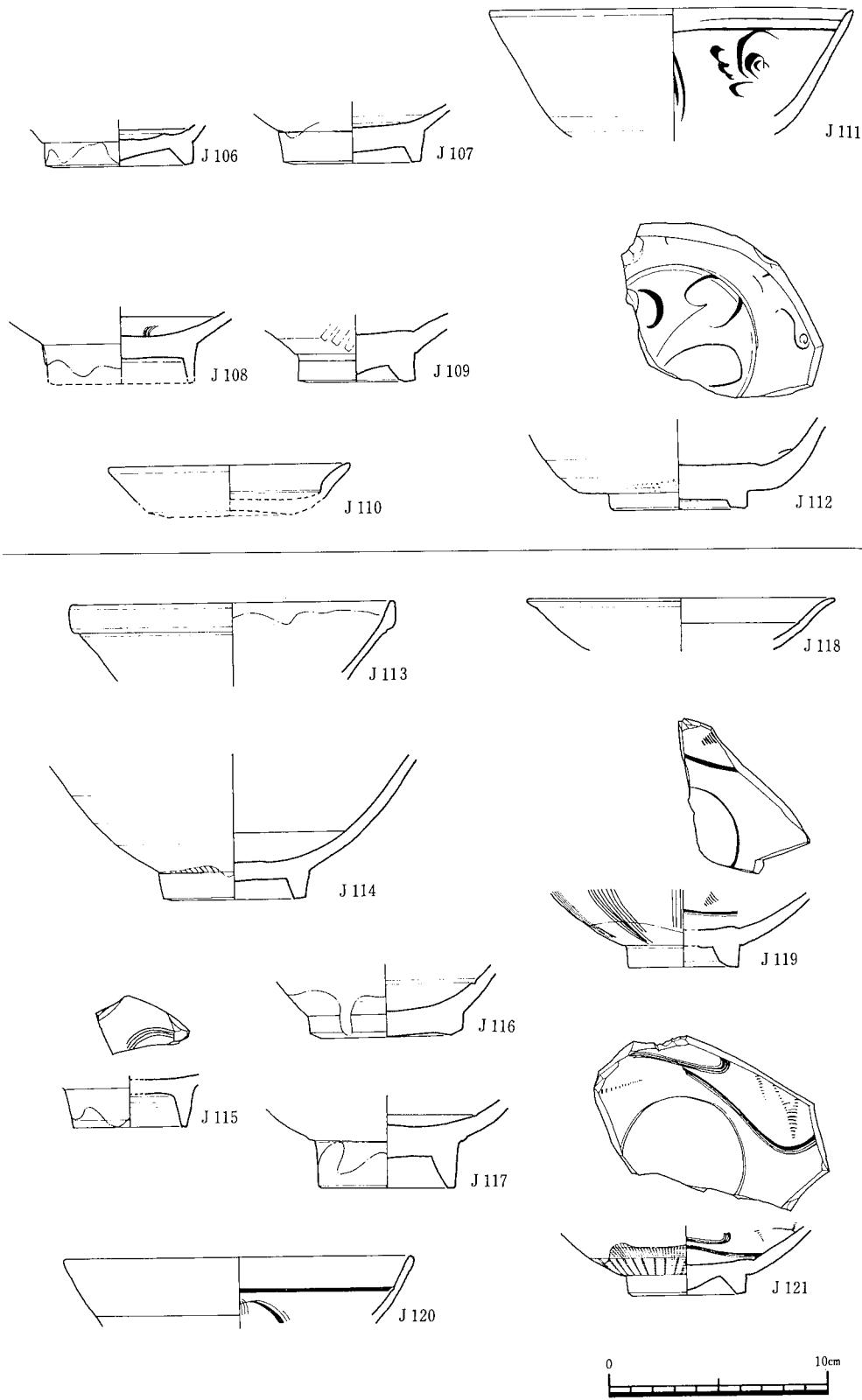
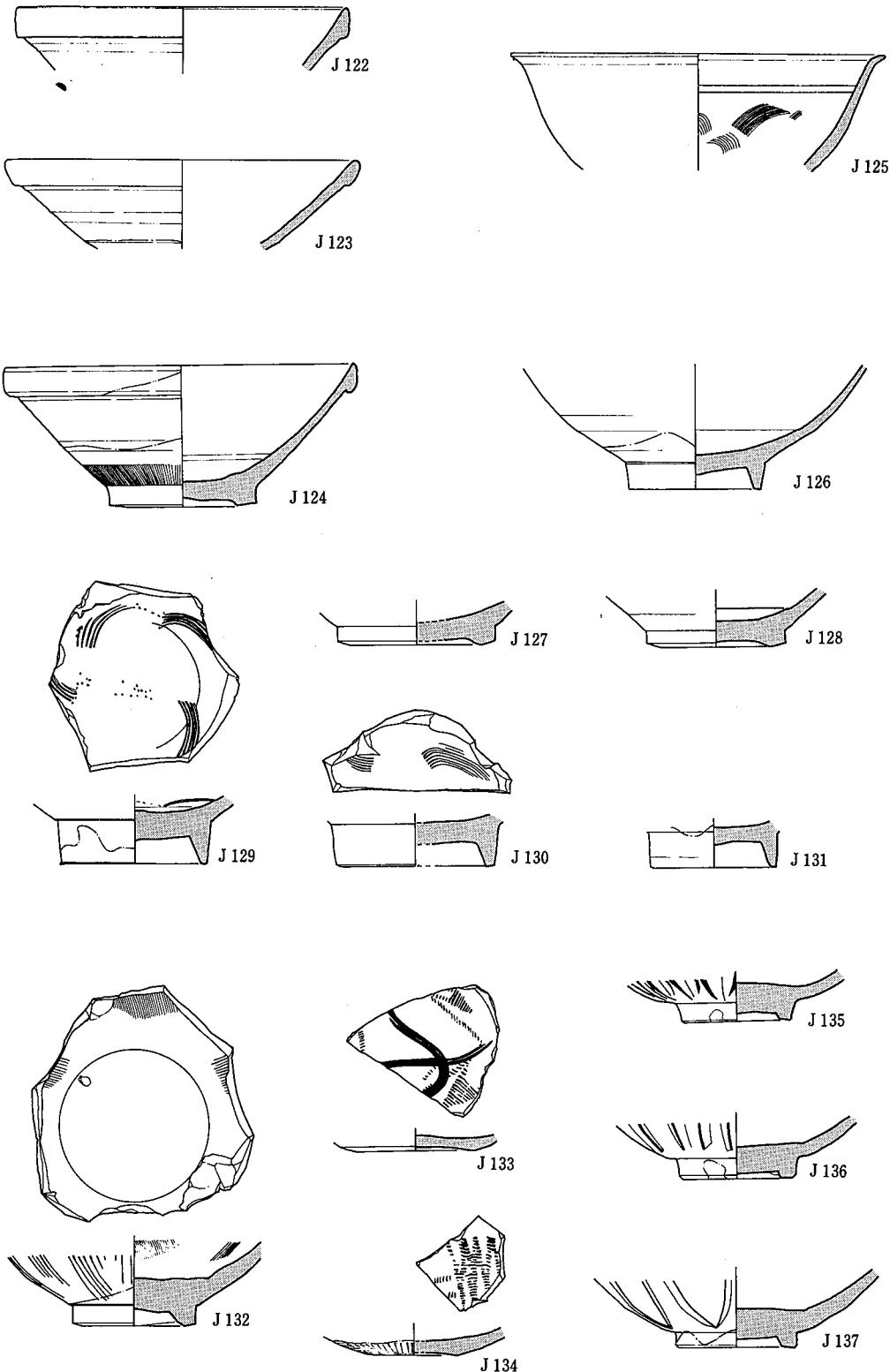


Fig. 75 D 地区第 II・III 溝状遺構出土磁器実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

Fig. 76 D 地区集石遺構出土磁器実測図( I ) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

0 10cm

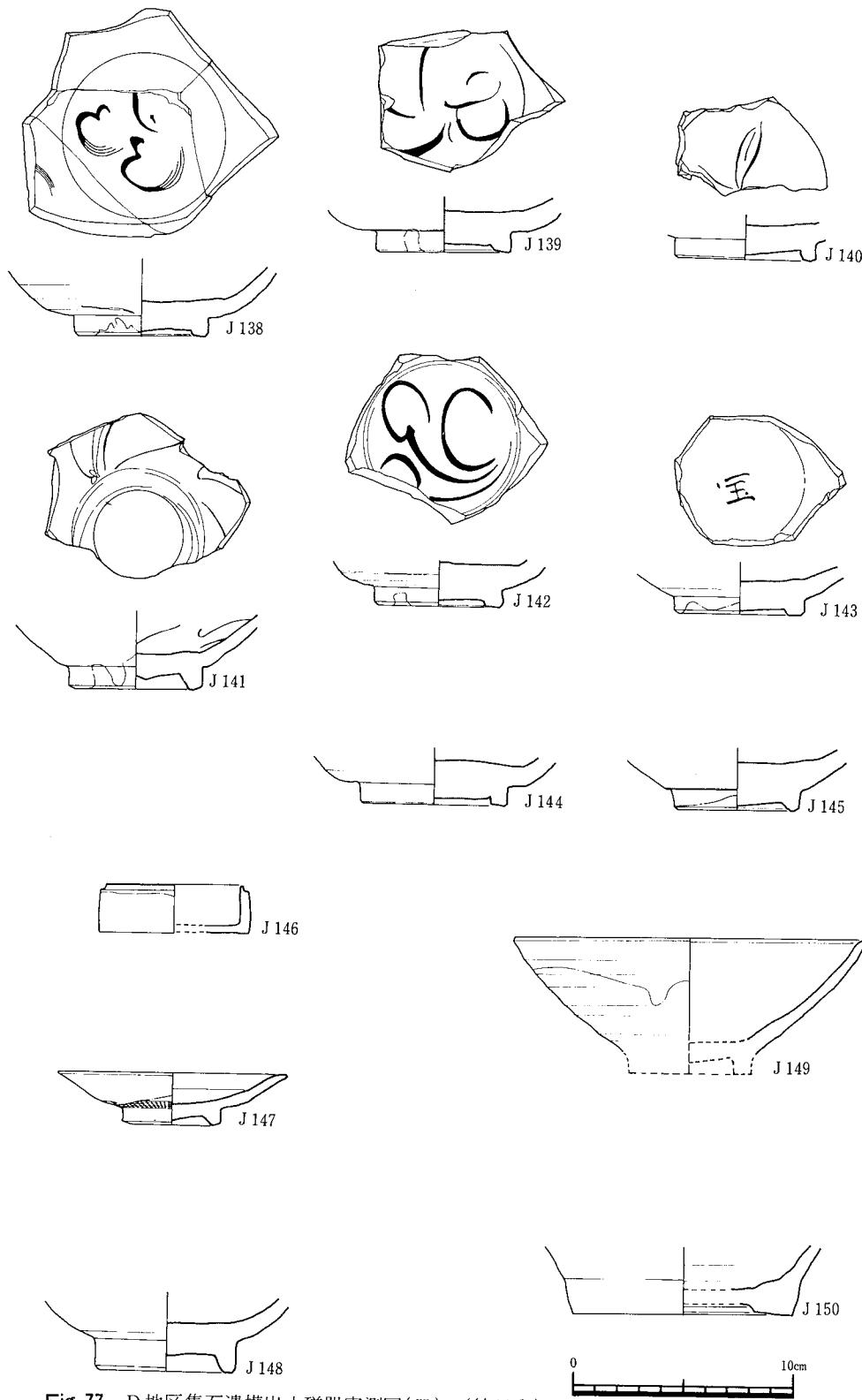
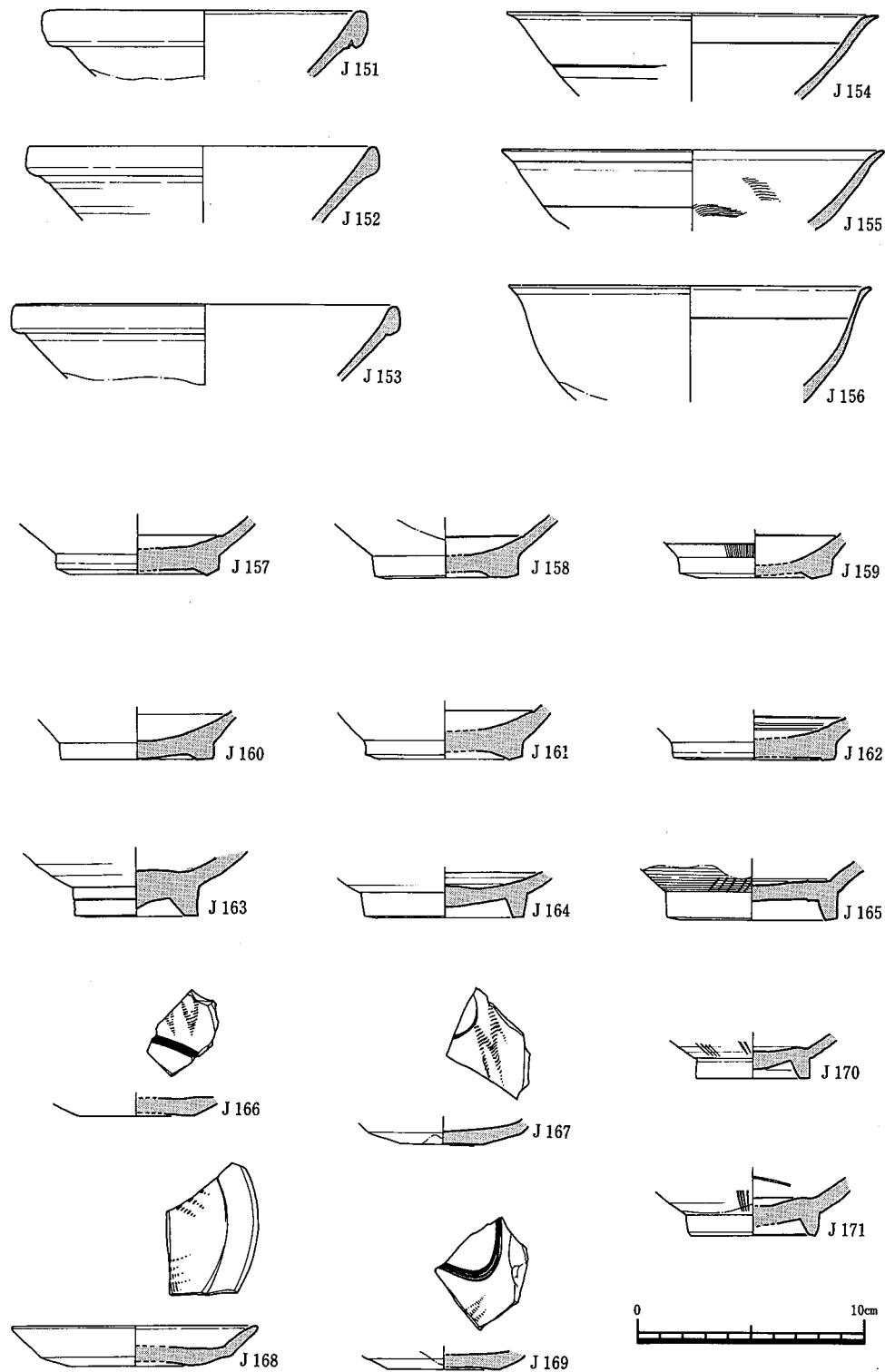


Fig. 77 D地区集石遺構出土磁器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

Fig. 78 D 地区表土出土磁器実測図( I ) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

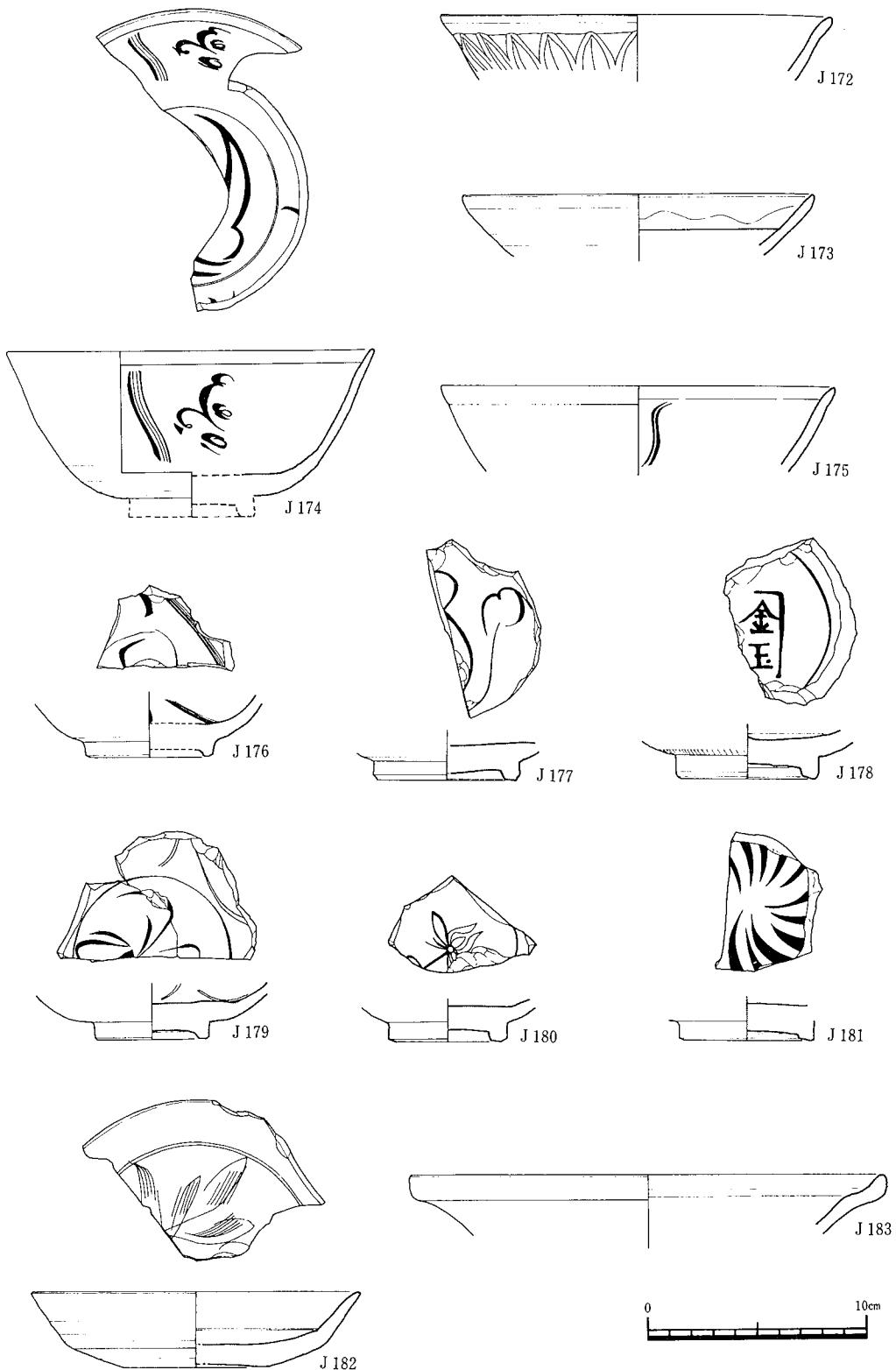


Fig. 79 D地区表土出土磁器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

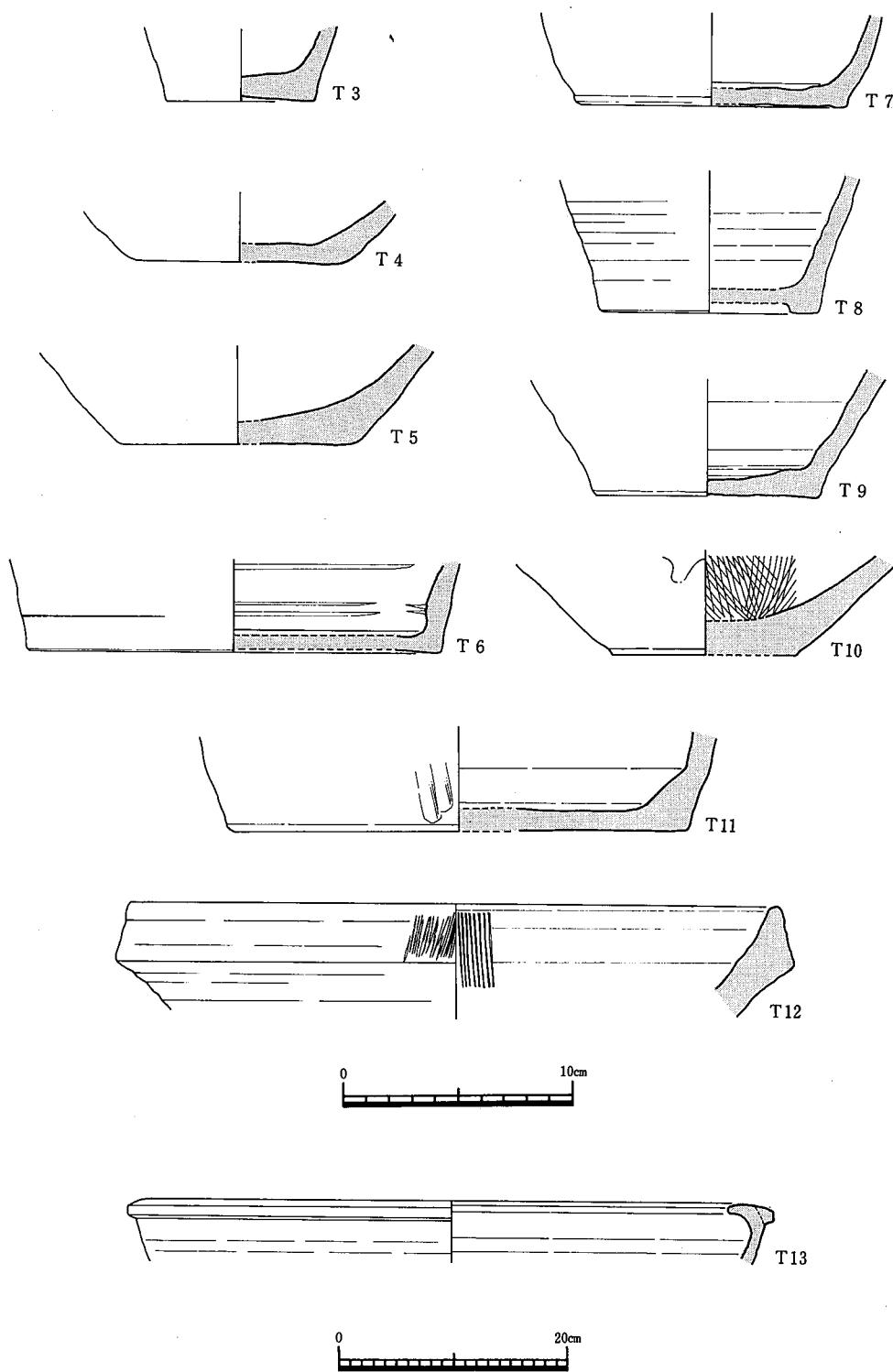


Fig. 80 D 地区出土陶器実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ 、 $\frac{1}{6}$ ）

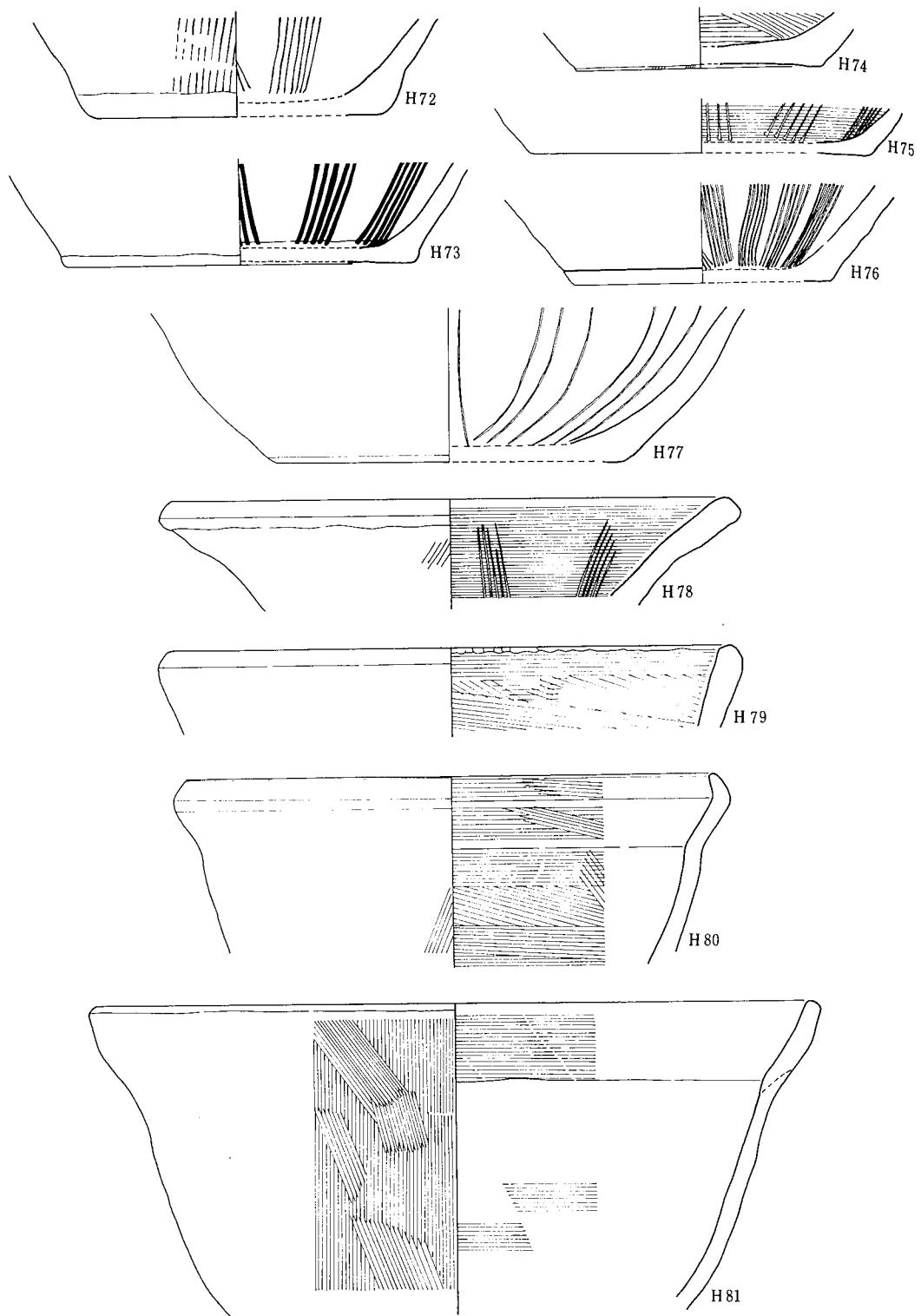


Fig. 81 D地区出土土器実測図( I ) (縮尺  $\frac{1}{3}$ )



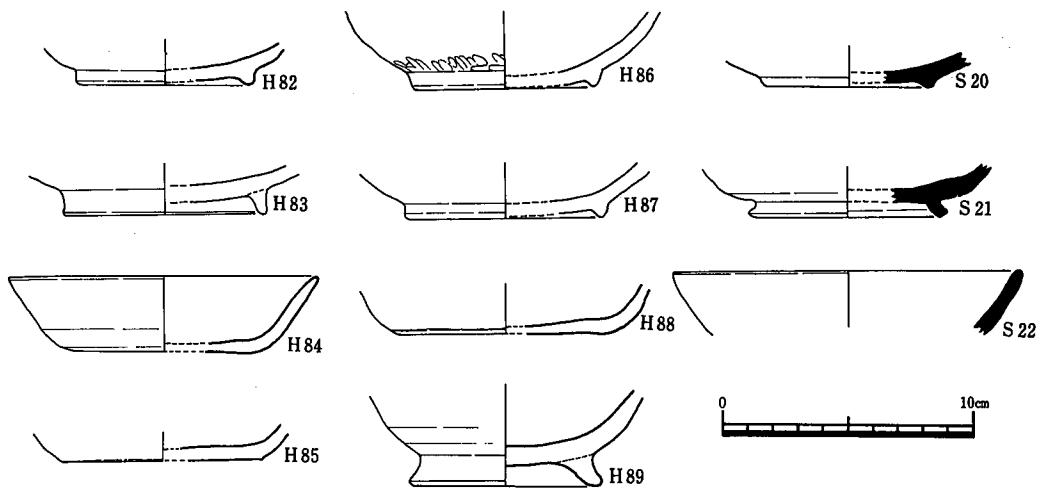


Fig. 82 D 地区出土土器実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

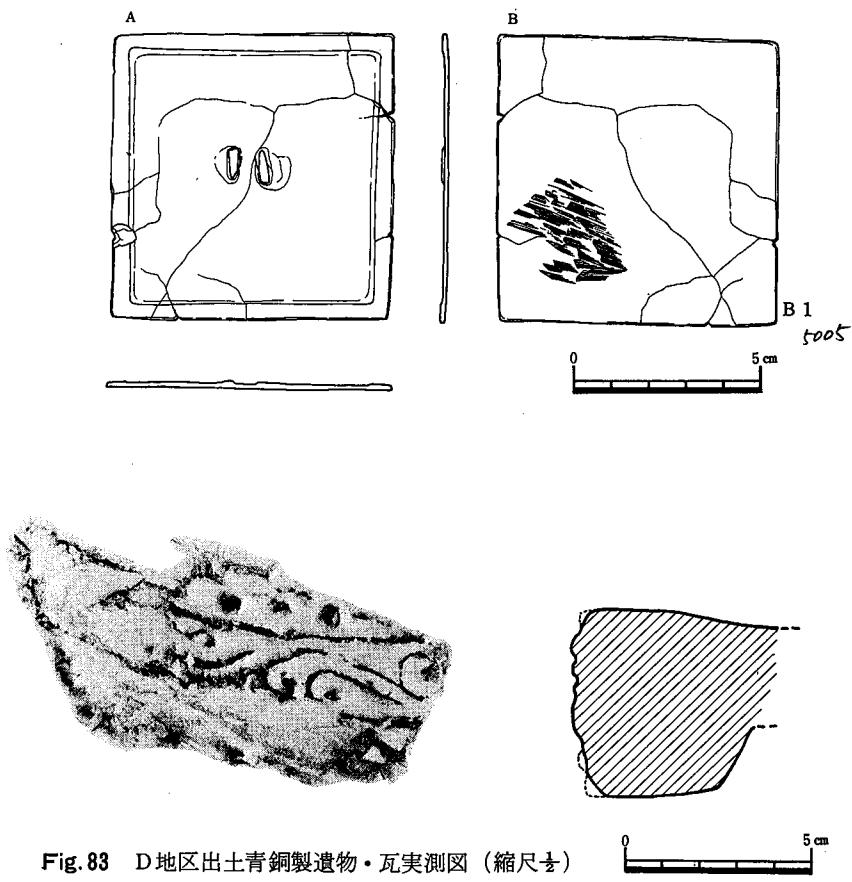


Fig. 83 D 地区出土青銅製遺物・瓦実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

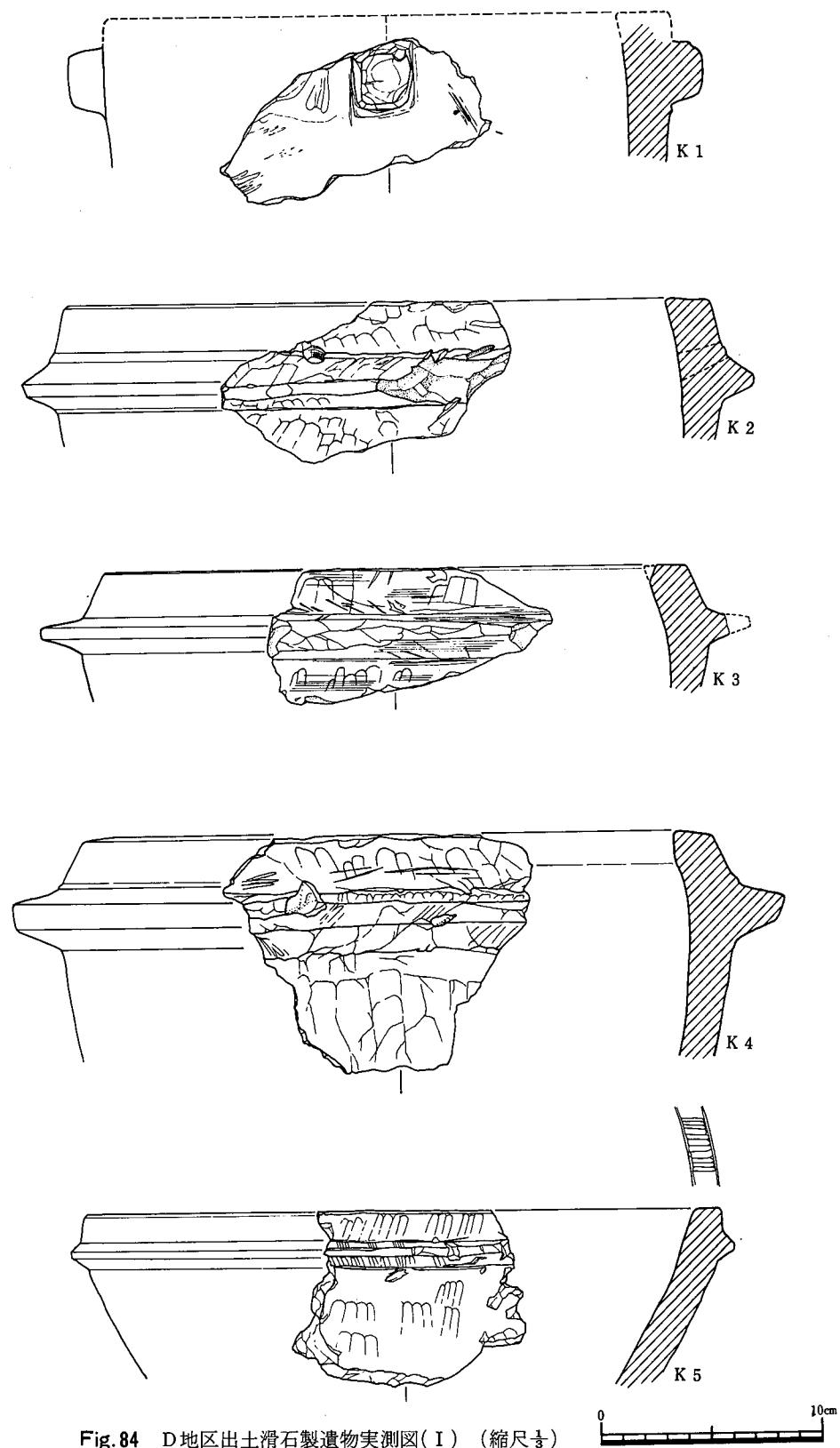


Fig. 84 D 地区出土滑石製遺物実測図( I ) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

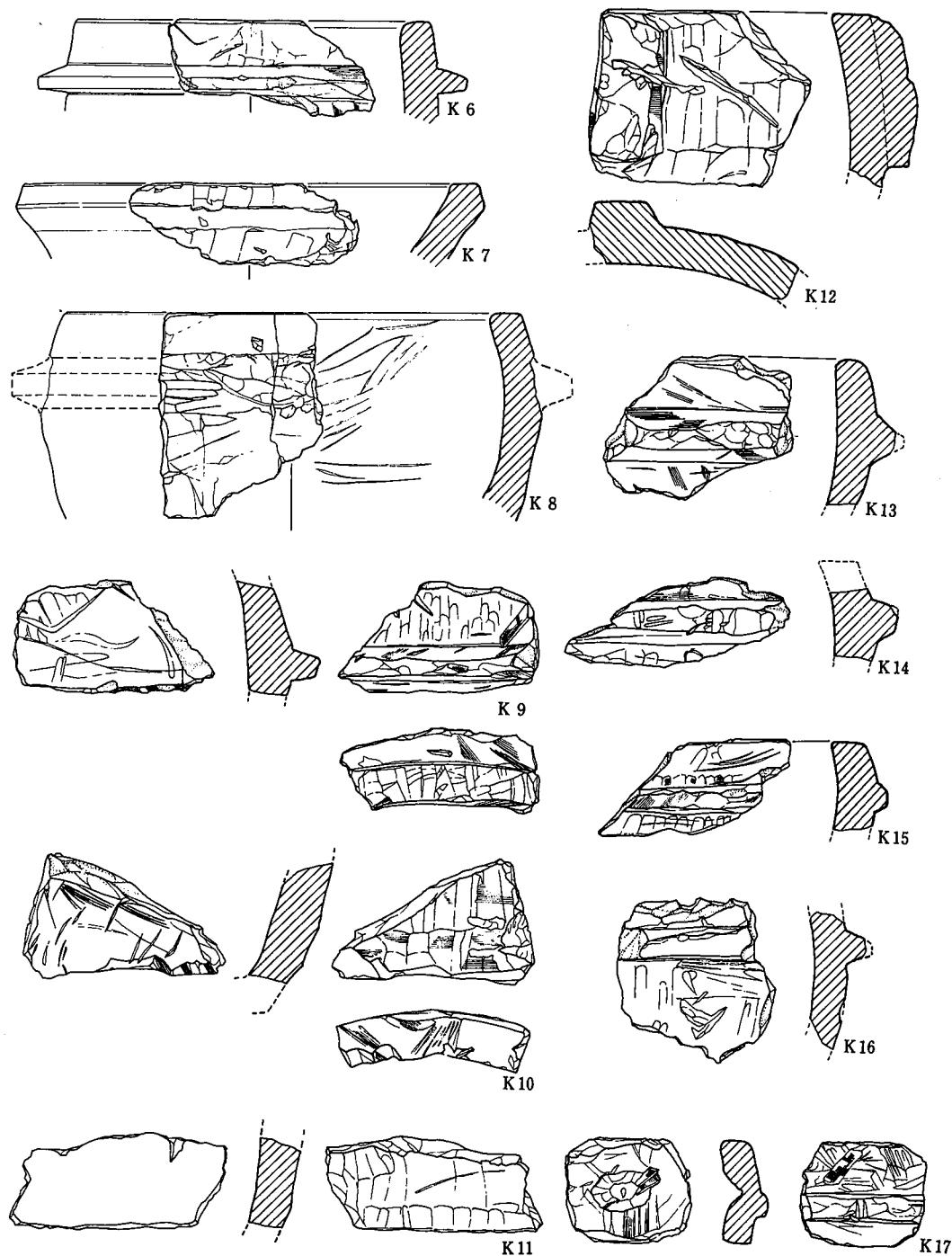


Fig. 85 D 地区出土滑石製遺物実測図(II) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )



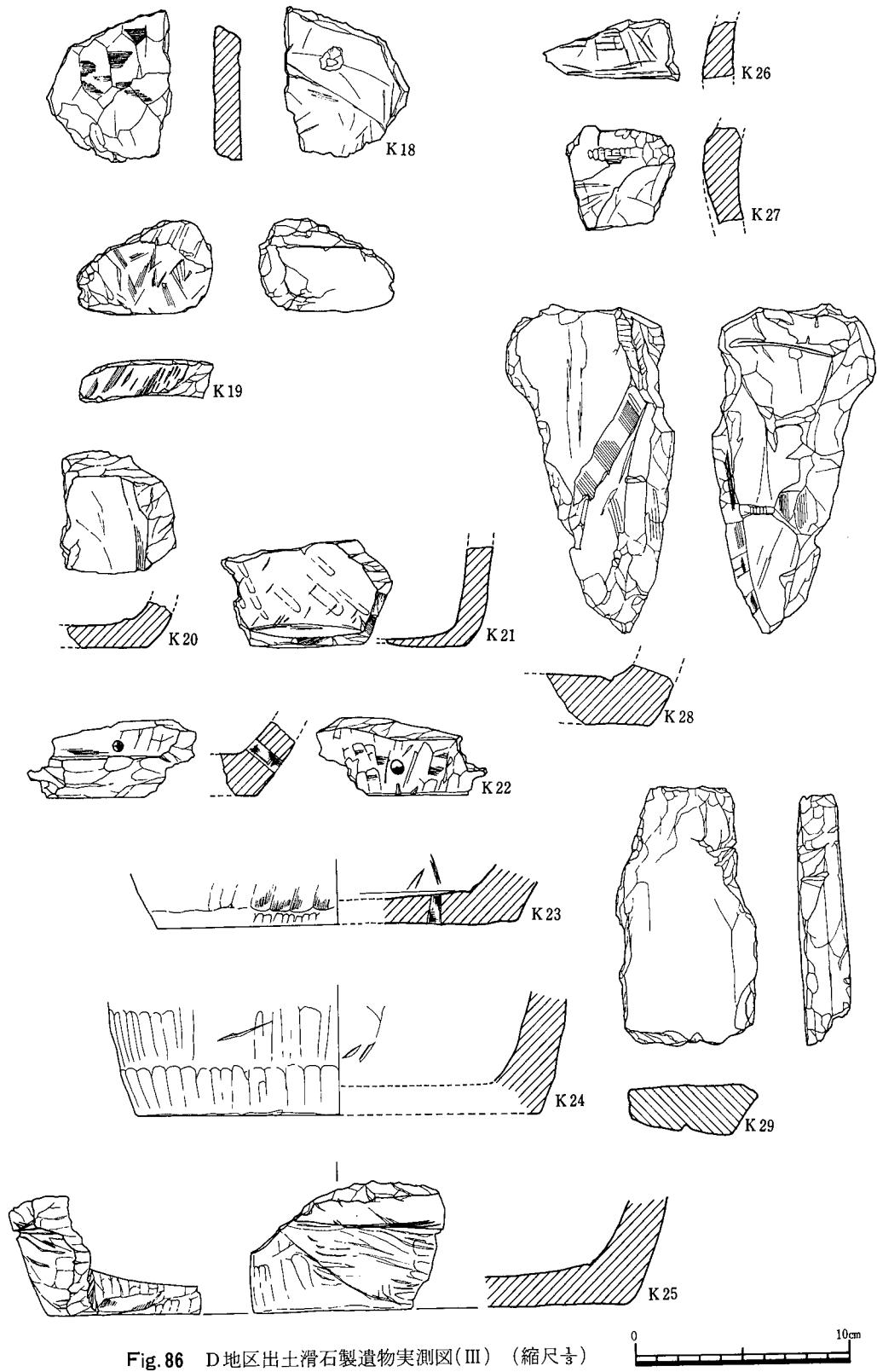


Fig. 86 D 地区出土滑石製遺物実測図(III) (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

0 10cm

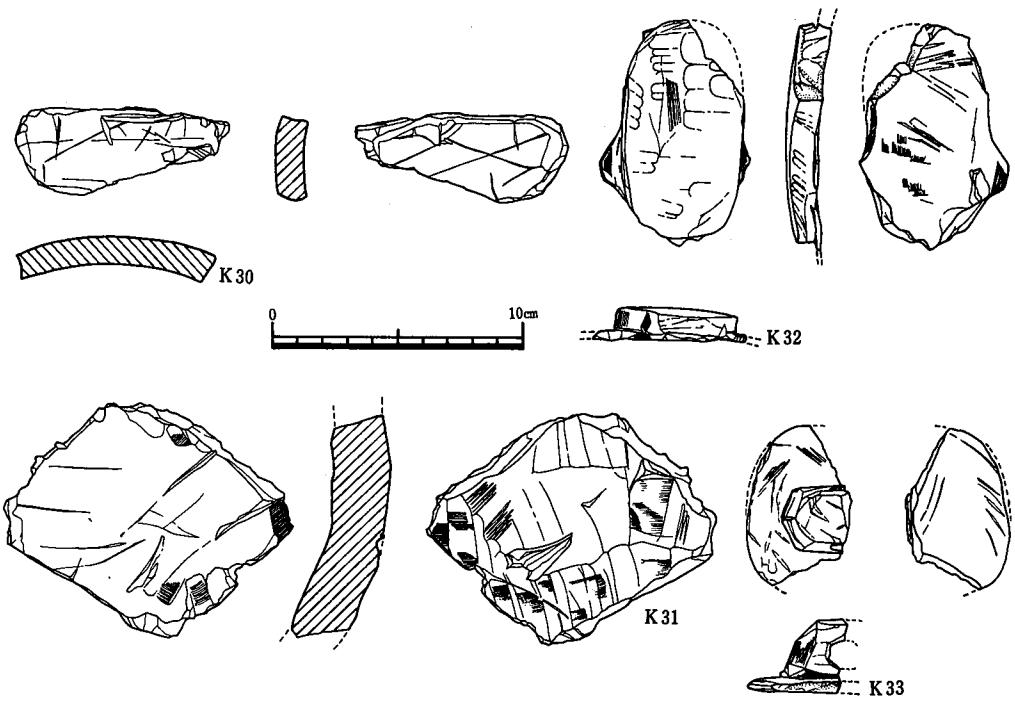


Fig. 87 D地区出土滑石製遺物実測図(IV) (縮尺 $\frac{1}{3}$ )

Tab. 20 D地区敷石遺構出土遺物一覧表(Ⅰ)

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	釉調	備考	Fig.
J-1	I-26	青磁	碗・口底欠	底径 9	底部、口辺部ともに欠く。	内面横ナデ、外面1cm幅の窪削り	茶灰色	良	釉剝離か?	越州窯?	68
J-2	F-26	白磁	碗・口辺	口径13.8	口辺部は肥厚、折りかえして玉縁状断面をなす。これらは、折りかえしの頗著なものと、まるみのあるもの、さらに体部が直線的なもの(J-3)とゆるく弯曲するものがある。	玉縁状の口縁は丁寧になれる。	黄白色	不良	全面に釉	J2~J6 白磁碗II	68
J-3	G-26	白磁	碗・口辺	口径15.1		口辺下まで窪削り頗著	白色	良	胎中位まで施釉	内面口辺下に砂付着	68
J-4	I-26	白磁	碗・口辺	口径13.7		口縁には一度に施釉され跡先が見られる	黄白色	不良	口辺下で一部土を見せる	J-13と共に	68
J-5	C-21	白磁	碗・口辺	口径15.7		口辺内面に一本の細沈線 内面ヨコナデ	白色	良	内外面ともに質乳	北溝	68
J-6	I-26	白磁	碗・口辺	口径16.0		内面、口辺ヨコナデ	灰白色	良	口辺内面は釉があつ		68
J-7	H-26	白磁	碗・口辺	口径16.1	口縁は、ほぼ水平に小さくおさめる。側部弧状的。	口辺内面にわざかに細沈線をいれる	灰白色	良	全面に釉	白磁碗I	68
J-8	D地区	白磁	碗・底部	高台径 6.3 高台高 1.3	高台の削り出しが深いもので高さが1.5cmを越し骨付がせまいものと、高さは高くなく骨付がほぼ水平のものがある。	見込内底に沈線をめぐらす	白色	良	高台脇は無釉	白磁碗I	68
J-9	D-25	白磁	碗・底部	高台径 6 高台高 1.3		まるみのある見込内底には沈線をめぐらす	白色	良	釉高台まで流れる。粗雑	白磁碗I	68
J-10	D-29	白磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.6		見込内底を体部との境に窪張	灰白色	良	釉高台まで流れる	白磁碗I	68
J-11	D-29	白磁	碗・底部	高台径 6.5 高台高 0.9		見込内底に沈線をめぐらす	粗悪	良	釉は見込みで他は露胎	白磁碗II	68
J-12	D-25	白磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.9		高台脇は放射状に削った後に窪削り	白色	良	釉は見込み質乳をもつ	白磁碗II	68
J-13	I-26	白磁	碗・口辺欠	高台径 6.7 高台高 0.8		高台面取り、窪削りとともに粗雑	黄白色	不良	高台脇無釉	生焼きで釉は白色の層をなす	68
J-14	I-26	白磁	皿・	口径 底径 器高 10.2 6.5 1.9	いわゆる口禿口縁の皿で、底部からの立ちあがりが大きいものと小さいものがあり前者は器高が高い。	内面横ナデ、外面窪削り	淡灰白色	良	底部まで釉かかる	井戸状造構の上部出土	68
J-15	E-24	白磁	皿・底部	底径 5.6		見込底と体部との境はするど段をなす	白色	良	全面に釉	白磁皿IV	68
J-16	D-19	白磁	皿・底部	底径 4.8		あげ底の底には渦巻状の沈線、見込内底に円闇	白色	良	全面に釉	白磁皿IV	68
J-17	I-26	白磁	皿・口辺欠	底径 7.0		見込内底に円闇	白色	良	全面にうすく釉かかる	釉に気泡	68
J-18	I-26	白磁	皿・底部	底径 7.0		見込内底に円闇	灰白色	良	全面に釉	白磁皿IV	68
J-19	D地区	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.1		高台脇は櫛目状文のころ	白色	良	現存部は無釉	J19~J26 青磁碗V	69
J-20	D-29	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.8		高台脇に櫛目のこる。	灰白色	良	外面露胎		69
J-21	I-26	青磁	碗・底部	高台径 4.7 高台高 1.0		外面に櫛目、見込内底に沈線	灰白色	良	外面露胎		69
J-22	F-26	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.8		見込体部に櫛描き、窪描きの文様をもつ	灰白色	良	高台脇露胎		69
J-23	D-20	青磁	碗・底部	高台径 4.9 高台高 0.7			灰白色	良	高台脇露胎		69
J-24	I-26	青磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 0.8			灰白色	良	高台に露先	高台内に砂付着	69
J-25	C-27	青磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 1.2			灰白色	良	釉高台に流れる		69
J-26	A~C-21	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.7			灰白色	良	釉高台に流れる	北溝	69
J-27	D-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 1.1	高台は直立し、うすく削り出す。	窪むつくり見込内底の各種窪み	灰白	良	釉高台まで流れる		69
J-28	F-26	青磁	皿・底部	底径 5.0	底部の厚さ、底径、および文様、釉調などはそれぞれ違いはあるがあげ底文様は窪描き櫛描きされている。	見込内底の文様は、窪描きの草葉状文が先	灰白	良	底部脇から土	J28~J40 青磁皿V	69
J-29	H-26	青磁	皿・底部	底径 5.0	器形は、あげ底の底部から体部は後をもって外反し、口縁はまるくねさめる。	底部脇の剥離部には櫛目	灰色	良	露先は暗緑色		69
J-30	D-26	青磁	皿・底部	底径 5.2	J36~37~40は見込内底に文様をもたない。	の調整痕あり	淡灰白色	良	底部には釉かからず、あげ底の底部は窪で搔き削る。		69
J-31	D-19	青磁	皿・底部	底径 4.9			灰白色	良	底部脇は土		69
J-32	D地区	青磁	皿・底部	底径 5.3			灰白色	良	回転窪切り後窪削り		69
J-33	E-24	青磁	皿・底部	底径 4		見込には、四本単位の櫛目文をえぐく	灰白色	良	底部無釉		69
J-34	E-22	青磁	皿・底部	底径 4.2			灰白色	良	底部無釉		69
J-35	I-26	青磁	皿・底部	底径 4.6		見込内底に窪描き文	灰白色	良	底部無釉		69
J-36	H-26	青磁	皿・底部	底径 3.9		外面窪削り、見込には沈線と段あり	灰白色	良	底部無釉		69
J-37	D地区	青磁	皿・底部	底径 6.0		底部窪切り痕のこり黄茶色を呈す。	灰白色	良	底部無釉質乳あり	敷石下	69
J-38	I-26	青磁	皿・底部欠	底径 12.0		見込に円闇	灰白	良	口縁部は白緑色を呈す		69
J-39	D-19	青磁	皿・底部欠	口径 12.6		見込内底に電光状文	灰白色	良	全面釉		69
J-40	D-27	青磁	皿・底部	底径 4.9		底部放射状に窪切りし、回転を加えて、窪切りする	灰白	良	底部無釉		69

Tab. 21 D地区敷石遺構出土遺物一覧表 (II)

(単位 cm)

遺物番号	グリット	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	施釉・釉色	備考	Fig.
J-41	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	鍋葉文をもつ一群であるが鍋葉文のつけ方は一様でなく陽刻と範片彫りによる沈線のみのものがあり、単弁と複弁さらに鍋がないものなど多様である	見込内底には、文様らしきものがあるが全形を知りえない	灰白	良	高台内にまで流れこむ	高台内は、れんが色	70
J-42	D-19	青磁	碗・口辺	口径 16		口辺部はうすくつられ、外面に単弁の鍋葉文をめぐらす	灰白	良	全面釉	J-41~44 青磁碗 I	70
J-43	I-26	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.8		外面に鍋葉文あり、間隔広く灰色に変化	灰白	良	高台面取りまで施釉・貴乳	側溝	70
J-44	D-28	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.7		鍋葉文は鍋に対して左右対称をなさない。	灰	良	高台まで流れれる	疊付に芽(?)の跡、赤茶色	70
J-45	D-27	青磁	皿・底部欠	口径 11	外面に単弁の鍋葉文をもつもので、いずれも沈線による。この皿の特徴はほぼ水平な口縁部にあり、上面が凹状のものと平坦であるみをもつのがある。	鍋葉文には鍋なく彫りもある。	淡灰白	良	釉厚くかかる	敷石下	70
J-46	E-27	青磁	皿・底部欠	口径 12		鍋葉文は二線によるがその幅は一様でない	灰白	良	釉厚くかかる	J-45~47 青磁皿 I	70
J-47	D-19	青磁	皿・底部欠	口径 13		二線の陰刻で鍋葉文をめぐらす。	灰白	良	口縁端斜線は、はげる		70
J-48	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.7	高台のつくり小さく、体部外縁はこまかく箇削り	秋の内底に片彫りで、体部に備描き文	灰白	良	高台の面取りまでかかる	青磁碗 IV	70
J-49	D-19	青磁	碗・口辺	口径 16	口縁部のみであるが、J-54~J-59のような底部がつくものと思われる。	現在部では文様なし	灰	良	黄をおびた灰緑色	J-49~59 青磁碗 III	70
J-50	D-19 20	青磁	碗・口辺	口径 15	口縁部のみであるが、J-54~J-59のような底部がつくものと思われる。	外面細沈線めぐる。見込に備描き文	灰	良	内面やや気泡外貴乳		70
J-51	D-19 20	青磁	碗・口辺	口径 17	内面横ナデ外面範削り、内面口辺下に沈線	白	良	外面のみ貴乳	範片彫りの文様	70	
J-52	D-19 20	青磁	碗・口辺	口径 17	内面、口辺は横ナデ、外は範削り	灰	良	口辺部の釉の厚い部分に気泡	「春文割」 範彫り?	70	
J-53	B-21	青磁	碗・口辺	口径 16.7	見込に片彫りの範描き文	灰白	良	口辺外面は釉が厚い	北溝、内外面釉色異なる	70	
J-54	H-26	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.7	あたつい底部に削り出しの浅い小さな高台がつきゆるやかに内弯する体部がつながる。	見込部体に備描き文	灰白	良	高台は土をみせ露は白黄色		70
J-55	A-C-21	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.8	見込内底が平坦なもの、凸状のものなど多様である。	内外面ともに交換なし、高台内は暗紫灰色	淡灰白	良	釉で淡紫色に変色している所あり	高台疊付部を仄く	70
J-56	D-19	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 0.9		高台の削り出し粗雑、外範削り	灰	良	釉高台内まで流れれる。	見込内底に砂付着	70
J-57	A-21	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.8		見込部に範描き文	白	良	貴乳	北溝	70
J-58	D地区	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0		高台の面取りやや粗雑	灰白	良	高台の釉端は赤褐色を呈する。		70
J-59	D-29	青磁	碗・底部	高台径 6.8 高台高 0.9		釉が高台と見込内底にあつたまる。	灰白	良	釉は高台まで流れこむ	北溝	70
J-60	G-26	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.0	高台ほぼ直立し、見込は円圈がめぐる。	見込の文様は、範状と筒状の施文具	淡黄	良	釉色苔色	J-60~J-71 青磁碗 III	71
J-61	D地区	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.7	ひくく小さい高台。	見込内底には文様なし	灰	良	釉は高台に流れれる		71
J-62	H-26	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.9	高台は重厚なつくり。	文様に備描き後に範を用いる。	灰	良	施釉丁寧	外面の範削の痕跡著	71
J-63	D地区	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.6	高台の削り出し粗雑で面取り不完全。	見込内底の範描き文、円圈も不鮮明	灰白	良	高台内まで流れる。施釉粗雑	外面範削り	71
J-64	D-19	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.2	見込内底は範描き文体部は範描き文。	外縁約5mmの幅で削り痕のこ。	白	良	疊付まで流れれる		71
J-65	D-27	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.8	高台ややひくく疊付は斜めに削りおどす。	見込内底に極細線の花文が刻まれ沈線がめぐる。	灰	良	高台内に釉だまり	高台内に砂	71
J-66	E-22	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.8	高台内は範切り痕がよくのこり山形断面をなす。	見込の内底に範描き文円圈なし。	灰	良	疊付は無釉	高台の面取り不完全	71
J-67	D-29	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	底部厚く高台は小さい。	片彫りの文様は六弁の花文か?	灰	良	高台面取りまで施釉		71
J-68	D-27	青磁	碗・底部	高台径 6 高台高 0.9	高台やや高く、うすく削り出す。	外面範削り、見込内底に範描き文、粗雑	灰白	良	疊付高台内にまで流れれる	高台内に砂付着	71
J-69	D-19	青磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 0.6	高台内はわずかに山形断面をなす。	体部外面に備目	灰白	良	高台まで完全にからず		71
J-70	E-24	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.9	底部は厚く、高台はひくい。	主文様は範描き文で備目状文もみられる	灰	良	施釉雑		71
J-71	D地区	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.8	高台はまるみがあるが釉だまりのため。	内面ナデ外面範削り	灰	良	高台まで流れれる		71
J-72	I-26	白磁	皿・底部欠	口径 8.2	口径をにするが、つくりや軸は、まったく形制を一にする。口縁部六花形をなすものと思われ、ひくく小さい高台がつく。他に例を知らない。	高台内底は、輪状に無釉で同心円状の凹凸がある。高台は、直立しており、鋭い削り出しがな。	白	良	高台底無釉こまかい貴乳	白磁皿 V	72
J-73	E-26	白磁	皿・半欠	口径 7.9 高台高 4.0		まるみのある高台、疊付高台内は、赤銅色に変化	淡灰白	良	高台底無釉やや貴乳	白磁皿 V	72
J-74	E-24	白磁	蓋・	径 7	頭部を欠くが狹犬が把手となっており、頭の前に小孔がある。	見込内底は、輪状に無釉で同心円状の凹凸がある。高台は、直立しており、鋭い削り出しがな。	白	良	裏面は糸切り	白色釉白磁 V	72
J-75	E-21	離?	碗・完形	高台径 10.8 高台高 4.4		見込内底は、輪状に無釉で同心円状の凹凸がある。高台は、直立しており、鋭い削り出しがな。	灰白	良	疊付は軸からず赤銅色、口縁部は軸からずが赤銅色		72
J-76	E-26	青磁	碗・口辺欠	高台径 5.4 高台高 1.1		まるみのある高台、疊付高台内は、赤銅色に変化	白	良	釉厚い。部分的に白緑色の斑点	明代青磁皿	72
J-77	D-21	白磁	?・底部	高台径 7.2 高台高 0.5	蛇目高台	見込の文様は染付、かなり粗雑	白	良	蛇目高台のみ無釉	染付	72
J-78	I-25	天目	瓶・頸部	現存部高 10	いわゆる高麗瓶と呼ばれる高麗天目瓶である。内外面横十字窓がある。他例からしてJ-80が体部、J-81が底部をなすものと思われるが現存部は接合しない。口辺部は朝麗状に開くのである。	見込内底には、輪状に無釉で同心円状の凹凸がある。高台は、直立しており、鋭い削り出しがな。	灰	良	内外面らせん状に貴乳	高麗	72
J-79	I-26	天目	瓶・頸部	現存部高 8			灰白	良	不規則に貴乳	高麗	72
J-80	I-26	天目	瓶・体部	径 13.6	球形の体部	外面範削り	灰	良	外面の釉剝離	高麗	72
J-81	I-26	天目	瓶・底部	高台径 8 高台高 1.5	ぶ厚い高台を削り出す	見込内底に釉厚くかかる	灰	良		高麗	72

Tab. 22 D地区第I・II・III溝出土遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	施釉・釉色	備考	Fig
J-82	J-29	白磁	碗・口辺	口 径 20	玉縁状の口辺、鋸部は直線的	I辺部の整形粗面で緩線めだつ。	白	良	I辺部に骨乳	白磁碗II	73
J-83	F-29	白磁	碗・底部	高台径 6 高台高 1.4	はぼ直立する高台、高台内の施切りも深い。	見込内底には描画文	灰白色	良		J 83-86 白磁碗I	73
J-84	F-29	白磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 1.7	高台の削り出しはJ-85と似て浅く内部は、ありあがる。	見込内底の文様は六瓣の輪状具で描がく	灰白	良	露先は高台に達する	J 82-J 105 第I溝	73
J-85	H-29	白磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 2.1	高台の削り出しは深く見込内底はほぼ平坦	見込内底の文様は八瓣の輪状具で描がく	白	良	高台に露先		73
J-86	G-29	白磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.8	高台のつくりはJ-85とあり、平頭でない。	見込には段があり、七瓣の輪状具を用いる。	淡黄白	良	高台は完全に施釉されず		73
J-87	J-29	白磁	皿・底部	底 径 6.0	はるかに厚い壁をもつて器形が小さく、蓋はあらわい。	底部近くに深い浅線がめぐり見込には施釉がある。	白	良	うすい輪かけ白磁皿IV	露胎部は肌色を呈する	73
J-88	I-29	白磁	碗・底部	高台径 8.4 高台高 0.9	高台径やや大きく、高台の削り出しも深い。	見込内底には砂付着、高台脇腹目	黄白	良	高台脇腹部	白磁碗II	73
J-89	G-29	白磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 1.9	高台の施切り粗面で底部中心はあつくなる。	高台と高台脇の境はするので切りこみをいれる。	淡黄白	良?	施釉は見込内底のみ、小孔無数にあり、釉ある時は焼成のためか?		73
J-90	F-29	白磁	碗・底部	高台径 6.3 高台高 1.5	高台内は施切りの際の段がごこ。	高台内は施釉付着	灰白	良	高台脇の一部から無釉	見込には砂付着	73
J-91	J-29	白磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.4	見込には沈窓があり、さらにはわざかに段をもつ。	高台・脇とともに整形粗であり見込にもキズ。	灰白	良	高台脇は無釉	白磁碗I	73
J-92	H-29	白磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.8	器厚はうすいぐりくらで焼成など粗面	見込内底に蛇目状に無釉が施釉のこの周側には砂付着	灰白	良	施釉は腰までか?	J 92-J 95 白磁碗III	73
J-93	G-29	白磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 1.7	高台の削り出し浅く、高台内は断面山形となる。	見込に沈窓めぐる	淡黄灰	良	高台脇に露先	見込内底に施釉以前の砂	73
J-94	J-29	白磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 1.4	高台と体部との堀にはきれこみ	見込沈窓にわざかに段がみられる	灰白	良	高台脇は露胎	白磁碗I	73
J-95	H-29	白磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 1.1	豊付斜めに面取り	見込内底に蛇目状に無釉	白	良		高台内に砂付着	73
J-96	F-29	青磁	皿・	口 径 10 厚 磨 4	円窓をもつて見込には飾引き、かなり裂けり	外面、輪状のもので割りその後削り	灰白	良	底部無釉、文様、口縁などでうすく青緑色に変色		74
J-97	F-29	青磁	碗・口辺部	口 径 17.2	外面・口辺に施法の沈窓がめぐり、その下に描書き文内面口辺に沈窓見込部に草文部による毛光文	口縁端やや釉はほじ	灰黄白	良	釉に気泡あり		74
J-98	H-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.8	高台内は断面山形にのこる。	豊付の面取りは粗雑	灰白	良	見込圓窓は深く種類いい	J 97-J 99 青磁碗V	74
J-99	H-29	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.8	見込内底は、円窓めぐりかなり凹凸をもつ。	高台脇は土をみせ飾目文(描書き手)	灰白	良	内面のみ釉		74
J-100	G-29	青磁	碗・口辺部欠	高台径 6.6 高台高 0.8	高台の削り出し浅く、底部あれあ。	外面高台脇に施削り痕よのこる	灰白	良	高台に完全にかかる	青磁碗V	74
J-101	F-29	青磁	碗・底部	高台径 6.8 高台高 1.0	高台ぶ厚くひくいくつりをなす。	高台内は施切り	灰白	良	骨乳あり、暗茶色に変色	かなり風化をうける	74
J-102	H-29	青磁	碗・底部	高台径 5.9 高台高 0.8	高台ぶ厚く、豊付は内傾する。	外面削り痕よくのこる	灰白	良		J 101-103 青磁碗III	74
J-103	F-29	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.8	青のひくい高台は塗法とい。	外面削り高台面取り不規則	灰白	良	釉は高台まで流れ	高台内に砂厚く付着	74
J-104	H-29	青磁	壺?底部	高台径 6.8 高台高 1.4	ぶせい底部には粗雑な削り出の高台がつかぐ。	見込内底には粘土が付着	灰白	良	高台は露胎	青磁壺	74
J-105	F-29	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 1.5	高台付はまるみがあつて背が高い。青磁碗IV。	見込内底には円窓があり刻印。(頬氏)か?	淡灰白	良	釉厚く骨乳がある	骨付は赤銅色	74
J-106	H-29	白磁	碗・底部	高台径 6.8 高台高 1.1	高台内の施切りは断面山形となる。	見込内底には蛇目状に無釉	淡黄白	良	釉高台まで流れ	白磁碗III	75
J-107	H-29	白磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 1.4	高台の背は高いが削り出しは浅い。	見込内底に蛇目状に無釉	灰白	良	高台無釉	白磁碗II	75
J-108	E-29	白磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 1.8	高台細く背が高い。	見込の沈窓不明瞭	灰白	良	釉高台まで流れ	見込溝状の櫛目文?	75
J-109	E-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	見込文様なくわざかに段をもつ。	高台面取りやや丸みをもつ	灰	良	釉高台内まで流れ	釉のうすい部は白色	75
J-110	H-29	青磁	皿・口辺	口 径 11	見込に沈窓	I辺部は白黄緑色に変色	灰綠	良	I辺部綾線は白黄緑色	青磁皿V	75
J-111	H-29	青磁	碗・底部欠	口 径 16.6	見込内部を欠くのがわゆる「舟文削り彫り文」	施釉、整形とともに丁寧で高台脇に削り痕を残す	灰白	良	I辺外面で釉あつい	青磁碗V	75
J-112	I-29	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.8	ぶあつい底部に削りの浅い高台をつける。	ほぼ平坦な見込内底には施描きの草花文	灰白	良	釉は豊付まで	高台内の草花を呈する	75
J-113	F-29	白磁	碗・底部欠	口 径 14.8	玉縁状口縁はうすいつくりをなす。	I辺部の整形痕はほとんど消える	淡黄白	良	I辺内面一段厚くかかる	輪鉢乳あり、白磁碗II	75
J-114	G-29	白磁	碗・口辺欠	高台径 6.6 高台高 1.3	豊付ほぼ水平	高台脇露胎の部は櫛目の整形痕	白	良	高台は露胎	白磁碗I	75
J-115	G-29	白磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 1.8	せまい豊付をもつ高台は細く高い。	見込内底に櫛目文	白	良	釉高台まで流れ		75
J-116	G-29	白磁	碗・底部	高台径 7.0 高台高 1.0	高台の削り出し横幅に浅く1mm以下である。	見込には深い彫りの沈窓がめぐる	灰白	良	釉は豊付まで流れ		75
J-117	G-29	白磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 2.2	背の高い高台を削り出しているが粗雑。	見込、沈窓めぐる	淡黄白	良	施釉高台脇まで流れ	J 115-J 117 白磁碗I	75
J-118	G-29	白磁	?・口辺	口 径 14	I辺部のつくりは白磁碗に似似する。あるいは肌か?	I辺内面に沈線	灰白	良	全面施釉	白磁I	75
J-119	H-29	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 1.0	高台は綿柔に削り出しており面取りもたしか。	見込に沈窓、外面は描書き文	灰白	良	全面釉	高台脇は土を露呈色を呈する	75
J-120	G-29	青磁	碗・口辺部	口 径 16	I辺部内外面で段をなす。内面のそれは沈窓となる。	見込には沈描き文	灰	良	全面釉	口縁端まるくおさまる	75
J-121	G-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	高台内の施切りは断面山形をなす。	外前の整形は、櫛目後面削り	灰白	良	高台脇は露胎	11号棺墓址	75

Tab. 23 D地区集石遺構出土遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	釉調	備考	Fig.
J-122	J-29	白磁	碗・口辺	口径 15	玉縁状口縁をもつ	口辺下部で釉が完全にかかっていない部がある	灰白	良		J 122～J 124 白磁碗 II	76
J-123	J-29	白磁	碗・口辺	口径 16	玉縁状口縁をもつ	外面の箝削り、内面の横ナデ痕よくのこる	淡灰白	良	高台脇は釉からず		76
J-124	J-29	白磁	碗・	口径 15.8 器高 6.3 高台径 6.8	玉縁状口縁をなし、窓ですべてく切りこむ	高台脇に横目のこり、外の窓削り痕よく残る	淡灰白	良	高台脇は無釉	見込に沈圈	76
J-125	J-29	白磁	碗・底部欠	口径 17	ほぼ水平に外反する口縁を有する。口辺下内面沈縁	内面横ナデ、外面窓削り口辺平坦部は窓か?	白	良	全面釉	見込に細かい描文	76
J-126	J-29	白磁	碗・口辺欠	高台径 6.0 高台高 1.2	高台はほぼ垂直にび疊付は水平で幅がせまい	見込内底には段がめぐり文様なし	白	良	乳白色、高台脇は土	J 125・J 126 白磁碗 I	76
J-127	J-29	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.8	見込の沈圈みとめられず	内面のみ釉	灰白	良	青みをおびた灰白色釉	J 127・J 128 白磁碗 II	76
J-128	J-29	白磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.7	高台内の窓切りは、ややするどきに欠ける	見込に沈圈がめぐる	白	良	高台脇は土		76
J-129	J-29	白磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 1.9	背の高い高台をもつ、施釉つくりとも粗雑	見込に 5 本単位の横描き文をいれる	白	良	露先は、高台中位	J 129～J 131 白磁碗 I	76
J-130	J-29	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 1.9	高台は背が高いが疊付は幅が広い	見込に時計まわりに横描き文をもつ	白	良			76
J-131	J-29	白磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 1.6	ほぼ垂直の背の高い高台	高台内の窓切りは粗雑で箝状の痕跡のこる	白	良	高台露胎		76
J-132	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	外面描手文、高台の面取りは粗雑	高台内の窓切りは、山形断面の頂点をさらに切りとる	淡茶	良	高台脇は土	見込に小孔	76
J-133	J-29	青磁	皿・底部	底径 5.4	あげ底の底部は窓切り後、窓削り	外面全体は窓削りで段をなし、その接線は釉がはげる	灰	良	底部のみ無釉	J 132～J 134 青磁碗 V	76
J-134	J-29	青磁	皿・底部	底径 4	あげ底、露胎部は横目後に窓削り	粗雑な電光状文	淡灰白	良			76
J-135	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.9	ぶあつい底部に削り出しの浅い小さい高台がつく	鍋葉文は、高台近いため全形を知りえない	灰白	良	施釉粗雑	J 135～J 137 青磁碗 I	76
J-136	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	底部はほぼ平坦、高台は小さい	外面の鍋葉文は片彫りで割りつけは不規則	灰	良	高台は一部土をみせる	高台内に砂付着	76
J-137	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.7	肉厚な底部にぎんぐりした高台を削り出す	鍋葉文の鍋は不鮮明	灰	良	高台まで流れる		76
J-138	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 0.9	高台の削り出しは浅い外面に、亀裂あり	見込内底、体部に横描き	灰白	良	高台内まで流れる	高台部で粗雑となり、黄緑色	77
J-139	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0	高台の削り出しするどい	見込の文様、沈圈とともに不鮮明。文様は草花か	灰白	良	釉は高台面取りまで	J 138～J 145 青磁碗 III	77
J-140	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.9	厚い底部には、するどい削り出しの高台をつける	見込内底の文様は彫りが浅い	灰	良	高台面取りより上まで施釉		77
J-141	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 1.0	見込内底、高台内など	見込の文様は、するどい窓状のものでつけられる	灰白	良	高台脇は露胎		77
J-142	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	底部は厚く、ぎんぐりした高台をつける	見込内底に花文を窓片彫り	灰白	良	釉は高台まで	疊付には黒褐色の小斑点	77
J-143	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.0 高台高 0.8	高台の削り出し浅く、太いくりをなす。	見込内底の文字は、白黃色で明瞭さを欠く	灰	良	釉質乳をもち黄緑色をなす		77
J-144	J-29	青磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 0.9	ぶ厚い底部をもつ	見込の沈圈には、とくに釉が厚い	灰白	良	釉は高台まで		77
J-145	J-29	青磁	碗・底部	高台径 5.6 高台高 0.9	かなりぶ厚い底部をもつ	内外面ともに凹凸がめだつ	灰黄	良			77
J-146	J-29	白磁	合子	口径 6.2 器高 2.2 底径 6.8	蓋受け部をつくる	疊付部は無釉	白	良	釉には質乳をもつ	白磁 V	77
J-147	J-29	白磁	皿	口径 10.4 器高 2.4 高台径 4.4	削り出しの高台より外反しながら横ナデの口邊でおさめる	高台内山形断面の窓切りをなす	淡灰白	良	高台脇無釉	白磁皿 I ?	77
J-148	J-29	青磁	碗・底部欠	高台径 6.4 高台高 1.4	まるみのある高台	高台内には窓切り痕が残り、赤銅色に変化	灰	良	白黃緑色に変化	青磁碗 VII	77
J-149	J-29	青磁	碗・底部欠	口径 16	やや直線的に体部外反しまるくおさめる	内面、口辺は横ナデ、外面は窓削り	灰白	良	高台脇は露胎	露先は暗茶色に変色	77
J-150	J-29	青磁	壺？底部	高台径 10	壺の底部か？	内面横ナデ、外面窓削り	灰青	良	釉は高台外まで	J 149～J 150 青磁 VIII	77

Tab. 24 D地区表土出土遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	グリッド	種類	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	釉調	備考	Fig.	
J-151	F-30	白磁	碗・口辺	口径 14	玉縁状口縁をもつ	玉縁の折りかえし顯著	白	良	高台脇は露胎	釉には小孔がめだつ	78	
J-152	C-27	白磁	碗・口辺	口径 15.2	内外面より丁寧なつくりをなし、玉縁状口縁下端は釉が厚くなまり、窓削り時の形とは変形している。		白	良		J 151～J 153 白磁碗Ⅱ	78	
J-153	G-29	白磁	碗・口辺	口径 16.8	玉縁状口縁をもつ		白	良	高台脇は露胎		78	
J-154	表採	白磁	碗・口辺	口径 16.4	直線的な体部に細く平坦な口辺をつける	口辺内面下に沈線をめぐらす。外面窓削り	灰白	良	現存部全面に釉	J 154～J 156 白磁碗Ⅰ	78	
J-155	F-29	白磁	碗・口辺	口径 17	体部は、やや直線的に外反し、細い口辺でおさめる	口辺外面に細沈線、見込に櫛描き	灰白	良			78	
J-156	G-28	白磁	碗・口辺	口径 16	まるみのある体部にやや平坦的な口辺をつける	口辺内面に沈線	灰白	良	高台脇は土をみせる		78	
J-157	F-30	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.9	高台の面取りは他に比べ一面多い	見込に沈めぐる	白	良	高台脇から露胎	J 157～J 159 白磁碗Ⅱ	78	
J-158	F-30	白磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 1.0	高台の面取りに特色があり質付が広い面をつくる	外面窓削り、見込に沈めぐる	黄白	良	高台脇から露胎		78	
J-159	D-19	白磁	碗・底部	高台径 6.8 高台高 0.9	高台脇に櫛目	見込に沈闇	灰白	良	高台脇から露胎		78	
J-160	E-29	白磁	碗・底部	高台径 6.6 高台高 0.7	質付はほぼ水平	見込に沈闇	灰白	良	見込内底に砂付着		78	
J-161	G-29	白磁	碗・底部	高台径 7 高台高 0.8	高台の削り出しある みをもつ	見込に沈闇	灰白	良	高台脇から露胎		78	
J-162	D-22	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 0.7	高台小さく、削り出し は 1 mm	見込に、いく条かの細沈線がめぐる	灰白	良	高台脇より露胎		78	
J-163	H-28	白磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 1.3	背の高い高台には沈線があげ くり、内は山形断面	見込円底には三ヶ所に砂付着	灰白	良	高台脇は露胎	白磁碗 I	78	
J-164	G-25	白磁	碗・底部	高台径 7.2 高台高 1.1	質付ほぼ水平	見込内底に蛇目状の無釉 がある	淡黄白	良	高台脇は露胎	J 164～J 165 白磁碗Ⅲ	78	
J-165	F-30	白磁	碗・底部	高台径 7.6 高台高 1.2	高台脇は櫛目後窓削り	見込内底輪状の無釉部は 正円でない	淡黄白	良	高台脇は露胎		78	
J-166	J-34	青磁	皿・底部	底径 5	底部窓削り	見込に電光状文	灰白	良	底部釉かからず	J 166～J 169 青磁皿 V	78	
J-167	H-26	青磁	皿・底部	底径 3.6	径の小さなあげ底の底 部は窓切り後窓削り	電光状文	灰白	良	底部無釉		78	
J-168	表採	青磁	皿・	口径 10.8 器高 1.8 底径 5.0	10.8 器高 1.8 底径 5.0	底部あげ底で窓切り	見込には電光状文を配す る	灰白	良	底部無釉	釉厚くかかり 部分的に質乳	78
J-169	F-24	青磁	皿・底部	底径 5.0	ややあげ底	電光状文	灰白	良	底部無釉		78	
J-170	表採	青磁	碗・底部	高台径 5.0 高台高 0.9	疊付水平	高台脇には猫搔手文	灰白	良	高台脇は露胎、質乳	J 170～J 171 青磁碗 V	78	
J-171	D-26	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.9	見込内底はややくぼむ	見込部に櫛目文外面猫 搔手文	灰白	良	高台より露胎	釉先は白緑色 を呈す	78	
J-172	B-12	青磁	碗・口辺	口径 18	口縁部は、やや外反し まるくおさめる	外面に鎮葉文	灰	良	釉は内外面 ともに厚い	口辺部釉うすく 茶色を呈する	79	
J-173	E-29	青磁	碗・口辺	口径 16	極端に外反する口辺を もつ	口辺内面に沈線がめぐる	淡黄白	良	釉、内面口辺 下に厚く流れ る	青磁碗 III	79	
J-174	F-10	青磁	碗・底部欠	口径 16.8 器高 7.5	小さな高台とぶあつい底部 をもつものであろう	見込、口辺は横ナデ、口 辺外面は窓削り後横ナデ	淡灰茶	良	釉は質付 までもかかる	いわゆる「寿文 割区窓切り」	79	
J-175	5分櫛縫 葵紋	青磁	碗・口辺	口径 18	まるみのある口辺は、 やや外反する	口辺部外面ともに細沈 線、見込に櫛描文	灰	良	外面とも に縦形の質乳		79	
J-176	表採	青磁	碗・底部	高台径 5.8 高台高 0.7	高台は、小さく削り出 す	見込に櫛描文	灰白	良	灰青色透明	J 176～J 180 青磁碗 III	79	
J-177	表採	青磁	碗・底部	高台径 6.4 高台高 0.9	質付は平坦をなさず、 粘土が付着する	見込内底に花文を窓描き する	灰	良	釉は、高台内 まで流れこむ		79	
J-178	表採	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 1.1	高台の面取り多く、や まるみをもつ	「金玉(満堂)」の刻印	灰白	良	高台内まで 流れる		79	
J-179	表採	青磁	碗・底部	高台径 5.2 高台高 0.8	高台内の窓切りは段を もつ	見込内底と体部に文様	淡灰青	良	釉は高台面 取りまで	外面の釉は 淡黄緑色	79	
J-180	E-25	青磁	碗・底部	高台径 5.4 高台高 0.9	見込には円圈あり	文様は蓮華(?)の 花芯、彫りは浅い	灰	良	釉は高台面 取りまで	かなり厚い 施釉	79	
J-181	F-30	青磁	碗・底部	高台径 6.2 高台高 0.8	底部は厚いつくりをな す。	見込の片彫菊花文は彫り が浅く統一性がない	灰白	良	釉は高台面 取りまで	青磁碗 IV	79	
J-182	G-10	青磁	皿・	口径 15 器高 3.4 底径 6.6	あげ底から稜をもつて 口辺部へとつながる	見込には、わずかに段を もつ、内底に草花文	白灰	良	底部無釉	青磁皿 III	79	
J-183	A-12	青磁	皿・口辺	口径 21.8	口辺部を、ほぼ水平にわりま ざるくおさめる。外面とも文様なし。		灰	良	全面釉	青磁 I ?	79	

Tab. 25 D 地区出土陶器一覧表

(単位 cm)

遺物番号	遺構	グリッド	器種・器部	法量	形態・手法の特徴	胎土・焼成	色調	備考	Fig.
T-3	第I溝	G-29	底部	底径 6.5	あげ底の底部は中心部の厚さ 0.8mm 内面横ナデ、外面は範削りか	灰褐色、焼成良	灰茶褐色		80
T-4	第I溝	G-29	底部	底径 9	外面横ナデ内面は二次的な 条痕つく	灰色、精良堅緻	灰白色	瓦質土器とすべきか?	80
T-5	表 採	D地区	底部	底径10.4	内外面横ナデ、内面磨滅	小石をもつが堅緻	灰黒色	炻器?	80
T-6	表 採	D地区	底部	底径18.2	あげ底、内面横ナデ、外面範削り、 内面の沈線は棒状の押さえでつける	灰色、緻密	黒灰色	須恵質?	80
T-7	表 土	E-24	底部	底径 12	底部やあげ底内外面ともにナデ痕 をのこす	灰色、焼成良	底部まで釉 かかる。茶色	陶器	80
T-8	南北敷石	I-26	底部	底径 9.6	内外面横ナデ、削り出しで高台をつ くる盤付は水平	灰色、焼成良 堅緻	外面灰黒色 内面黒茶色		80
T-9	第I溝	G-29	底部	底径 9.9	内外面とも横ナデ、底部内面凹凸め だつ	赤黄褐色や 砂粒をもつ	赤黄褐色		80
T-10	第II溝	I-29	摺鉢?底部	底径 8.2	底部糸切りか? 外面横ナデ、内面 櫛目を重ねる	灰茶褐色、緻密	灰茶色の露先あ るいは自然釉か	焼成良	80
T-11	集 石	J-29	底部	底径 20	体部は内外面ともに横ナデ、底部内面は範 で押さえられる。体部外縁の指圧痕あり	内面ともに 暗褐色	外面や光沢あり		80
T-12	東西敷石	D-28	摺鉢?口辺部	口径 28	内外面とも横ナデ、口辺外面に刷毛 目、内面に櫛目	口辺部折りか えし頬著	内面灰茶褐色 外面灰茶褐色	敷石中より出土 青磁類共伴	80
T-13	柱 穴	G-15	口辺部	口径56.6	口辺部外面に折りかえし、口唇状断 面をなす	茶色、焼成良	内面釉か り茶色		80
T-2	柱 穴	J-34	? 底部	底径 15	内外面横ナデ、底部は平底か?	一部膨張し、 き裂あり	土は赤茶色	紫草重寶と 同一柱穴	66

Tab. 26 D 地区出土土師器、瓦質土器一覧表

(単位 cm)

遺物番号	遺構	グリッド	器種	器部	法量	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.
H-72	第I溝	J-29		底部	底径 13	底部平底か? 外面櫛目を横ナデで消す。 内面横ナデ後端目	灰白色		内面灰白色 外面黒色	瓦質	81
H-73	第I溝	G-29		底部	底径18.4	底部端は上方へ折りかえす。内面5 本単位の櫛目	砂粒少	良	黒褐色	外面煤付着	81
H-74	南北敷石	G-26		底部	底径11.2	外面横ナデ、内面刷毛、やあげ底	白灰色	堅緻	白灰色		81
H-75	表 土	F-30		底部	底径 20	外面磨滅、内面は横刷毛後5本単位 の櫛目(上から下への方向)	黄褐色	良	黄褐色		81
H-76	表 採	D地区	摺鉢?	底部	底径 12	内面横ナデ後6本単位の櫛目	砂粒	堅緻良	黒灰色	炻器?	81
H-77	南北敷石	I-25	?	底部	底径 16	内外面ともかなり磨滅し整形、調整 痕不明、内面3本単位の沈線	や軟質	良	内面灰色、 外面灰黑色	井戸状遺構の 上部より出土	81
H-78	東西敷石	D地区	?	口辺	口径25.8	口辺部は刷毛を横ナデで消す、内面 刷毛後に櫛目	黄白色	良	黄白色		81.
H-79	東西敷石	D-29	?	口辺	口径 26	内面口縁端には浅いぎざみをいれる 内面刷毛目	黄白色	良	黄白色	敷石列の東側 溝より出土	81
H-80	南北敷石	D-27	土壙	底部欠	口径24.4	口辺と口辺下まで横ナデ、底部にかけて 指または範押さえ、内面粗い刷毛目	灰白色	良	内面は黒 色	敷石の東側 の溝中出土	81
H-81	南北敷石	I-26	土壙	底部欠	口径 33 器高 17	内面磨滅のため不明瞭だが横刷毛? 外面は刷毛	茶褐色	良	外面煤付着	井戸状遺構の 上部より出土	81
H-82	第I溝	G-29	椀	底部	高台高 7.2	内外面磨滅すすみ調整痕不明	良	良	内面灰黑色	瓦質	82
H-83	集 石	J-29	椀	底部	高台径 8.2	やや背の高い貼りつけ高台をもつ、 内面は範みがきか?	良	良	内面灰色 外面灰黑色		82
H-84	表 土	J-30	皿	底部欠	口径 12.5 器底径 7.2	内外面横ナデ、底部切りはなし不明	良	良	灰黃褐色		82
H-85	東西敷石	D地区	皿	底部	底径 8.0	内外面横ナデ、底部は糸切りか?	良	良 堅緻	黄褐色		82
H-86	第I溝	G-29	椀	底部	高台径 7.2	内面はかなり磨滅、外面高台ちかく は範みがきか?	良	良	内面淡灰黑色 外面灰白色		82
H-87	第I溝	G-29	椀	底部	高台径 8.2	内面剥離して不明だが範みがきか? 外面横ナデ	良	良	灰色		82
H-88	表 土	J-29	皿	底部	底径 8.4	底部糸切りか? 内外面横ナデ	良	良 堅緻	灰黃褐色		82
H-89	南北敷石	G-26	椀	底部	高台径 3.8 高台高 1.2	高台内ナデ、高台は貼りつけである が、貼りつけ部は横ナデで消える	良	良	内面灰黑色 外而赤黄褐色		82
S-20	第I溝	G-29	椀	底部	高台径 6.8	高台内はナデ、外面横ナデ、高台は 部分的に範削り	良	堅緻	灰白色	須恵質	82
S-21	表 土	F-30	椀	底部	高台径 8	高台貼りつけ、内外面横ナデ	良	良	灰色	須恵質	82
S-22	第I溝	G-29	椀	口辺部	口径 14	口辺部端はこまかい綾がつく	良	堅緻	灰色	須恵質	82

Tab. 27 D地区出土滑石製遺物一覧表

(単位 cm)

遺物番号	遺構 (層位)	グリッド	器種	器部	法量	形態の特徴	手法・加工の特徴	備考	Fig.
K-1	北溝	C-21	鍋	口辺部	口径27.2	口辺下にこぶ状把手	のみ痕のこらず		84
K-2	集石	J-29	鍋	口辺部	口径 29	口辺下に鋸をめぐらす	加工痕顯著、外よりの穿孔あり	鋸下に煤付着	84
K-3	集石	J-29	鍋	口辺部	口径26.6	口辺下に鋸をめぐらす	荒削りを研磨で消す	石材軟質	84
K-4	柱穴	E-23	鍋	口辺部	口径28.6	口辺下に鋸をめぐらす		柱穴の礎盤	84
K-5	東西敷石	D-21	鍋	口辺部	口径 29	鋸は小さい	外面に上下方向のみ痕	鋸下に煤付着	84
K-6	南北敷石	F-26	鍋	口辺部	口径 16	鋸両基部はするどい沈線	鋸は横方向の研磨	内面なめらか	85
K-7	南北敷石	F-26	鍋	口辺部	口径 21	口辺下に鋸をもたない	わずかにのみ痕のこる	煤の付着多し	85
K-8	第Ⅰ溝	E-29	鍋	口辺部	口径20.4	鋸は削りとられる	外面よく研磨	鋸下は黒色	85
K-9	南北敷石 土表上	D-27	鍋	口辺部	口径不明	口辺下に鋸めぐる	外面のみ痕、各面再加工	鋸下は黒色	85
K-10	表土	G-29	鍋?	底部?	厚さ約2	-一面のみ再加工	外面のみ痕	外面黒色	85
K-11	第Ⅰ溝	G-29	鍋?	体部?	厚さ約1.6	再加工なし	外面のみ痕	周囲はすべて欠損	85
K-12	表土	H-28	鍋	口辺部?	厚さ約1.6	長方形の把手(?)	外面わずかにのみ痕	煤の付着なし	85
K-13	表土	F-26	鍋	口辺部	口径不明	口辺下に鋸をめぐらす	再加工なし	鋸下は灰黒色	85
K-14	第Ⅰ溝	G-29	鍋	口辺部	口径不明	鋸は幅広のつくり	鋸に再加工顯著	鋸下は黒色	85
K-15	第Ⅲ溝	F-29	鍋	口辺部	口径不明	鋸は小さいつくり	のみ痕幅小さい	再加工なし	85
K-16	表土	D地区	鍋	口辺部	口径不明	口辺下に鋸めぐる	外面再加工、磨滅はげしい	石材軟質	85
K-17	東西敷石	D地区	鍋	口辺部	厚さ約1.2	小さい鋸	内面より穿孔、貫通せず	側面すべて再加工	85
K-18	表土	E-28	鍋	体部?	厚さ約1.2	石鍋の体部か	外面に亀甲状のみ痕	内面の孔は未穿孔	86
K-19	東西敷石	D-21	鍋	体部?	厚さ約1.5	石鍋の体部か	外面わずかにのみ痕	鋸著な再加工痕なし	86
K-20	柱穴	D-32	鍋	底 部	底径不明	平底	鋸著な再加工痕なし		86
K-21	表土	D地区	鍋	底 部	底径不明	平底	側面に再加工	外面、底部に煤痕	86
K-22	柱穴	D地区	鍋	底 部	底径不明	平底	底部外面にのみ痕	底部近くに穿孔	86
K-23	集石	J-29	鍋	底 部	底径 17	やや凹凸のある平底	外面にのみ痕底部に小孔	煤の付着なし	86
K-24	南北敷石	F-26	鍋	底 部	底径 19	平底?	外面にのみ痕、底部内面荒削りのまま		86
K-25	第Ⅰ溝	G-29	鍋	底 部	底径 27	平底	底部外面放射状のみ痕	再加工顯著	86
K-26	表土	D地区	鍋?	体部?	厚さ約1.3		内外面ともに調整すむ	鋸下の一部?	86
K-27	表土	D地区	鍋?	体部?	厚さ約1.6		磨滅すすみ原体面のこざず		86
K-28	集石	J-29	鍋?	底部?	底径不明	平底?	体部へのたちあがりにのみ痕	再加工	86
K-29	表土	D-19			厚さ約2				86
K-30	第Ⅰ溝	F-29	鍋?	体 部	厚さ約1.3		のみ痕	外面煤付着	87
K-31	第Ⅰ溝	G-29	鍋?	体 部?	厚さ約 2		外面あらいのみ痕	外面黒色	87
K-32	表土	D地区			厚さ約1.2		のみ痕		87
K-33	表土	D地区			厚さ約0.5	原形は現存部の相似形か?	内外面ともによく研磨		87
K-34	第1号 住居跡	I-34	紡錘車		厚さ 1.2	上部直径 2.5cm 下部直径 3.0cm	重さ19.6g		52

## 5. D地区出土の石器

D地区の層位の状態は、概要でものべたごとく上面が削平された状態が考えられるため層位的に把握することができなかったが、表土層中及び遺構内から石器が多数出土している。時期的には、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺物である。旧石器時代の遺物として台形様石器・ナイフ形石器・彫器・細石

刃・細石核再生剥片・残核

細石核等の出土、縄文時代の遺物として石簇・縦長剥片・Scraper等の出土がある。このほか旧石器・縄文の時期のどちらとも考えられるものにScraper・折断・切断剥片・縦長剥片等がある。

弥生時代の遺物として石斧5点、石庖丁片1点、の出土がある。Fig.88の1は、扁平片刃石斧で、敲打の部分をのこしながらも刃部の破損状態等から製品として使用した可能性を持つ。石質は凝灰岩である。

2は、今山の玄武岩を石材として使用した大型蛤刃石斧の先端部のみのもので刃部・胴部は破損している。

製作工程は、1の場合第4工程で使用し、2の場合第5工程の全工程を終了。

第1工程は、荒割り、第2工程は、整形剝離、第3工程は敲打、第4工程は局部磨製、第5工程は全磨製で完成品

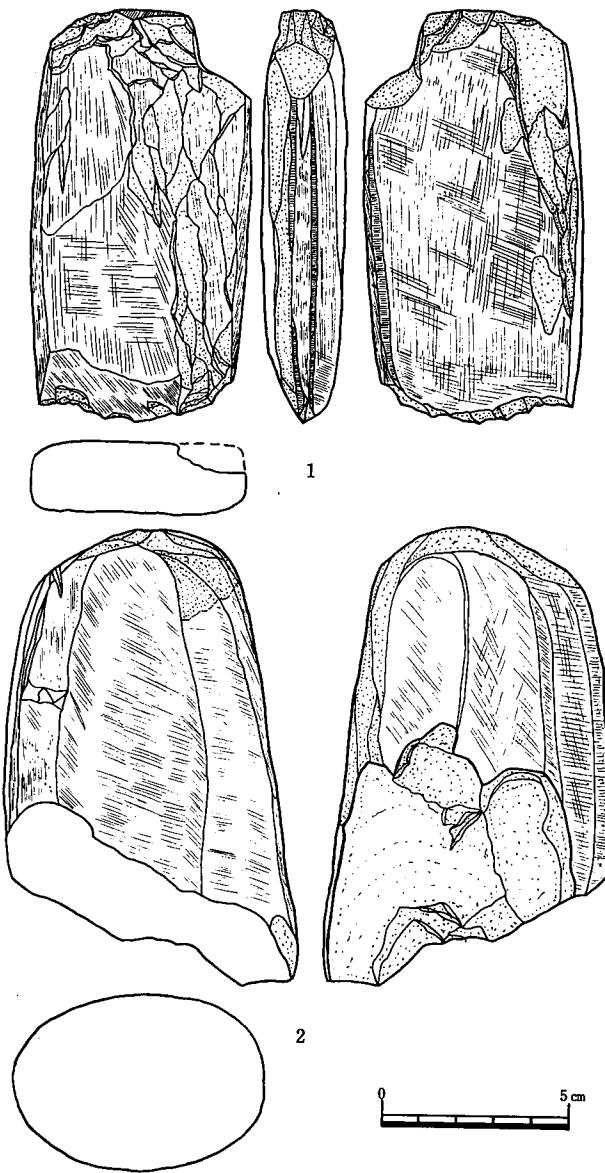


Fig. 88 D地区出土石器実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$ )

## 第 V 章 E 地区の調査

### 1 概 要

蒲田遺跡発掘調査直前に踏査した際に発見した遺跡で、崖の部分の赤褐色粘質土層(Ⅲ層)中で細石刃、剝片が採集され、本調査の発掘が大いに期待された。昭和47年8月15日～9月15日の第一次調査、昭和48年3月5日から30日までの第二次調査を別府大学考古学研究室橋昌信助教授、学生8名とE地区担当者により縄文、旧石器時代遺物包含層の発掘調査を遂行した。

発掘調査を実施した地点は、標高40m前後の独立丘陵上に位置する。この独立丘陵の尾根を境に行政区画がなされ、南側は、粕屋郡に属し、一方の北側は、福岡市に編入されている。尾根の南側半分は、数年前の土砂採集のために現在は14m近くの断崖となっているが、以前は、緩やかな斜面が開け、その斜面には、三基の古墳が存在していたという。現在では、古墳のおもかげは無論のこと、旧地形の様子を窺うのも困難なほどの変貌ぶりである。北側は急角度で標高約20mの水田に続き、この部分に涌水がある。この北と南の地形の違いは、そのE地区を考察するうえで大きな意味をもつものと思われる。

発掘調査は、東西に延びた尾根の頂上部よりやや北側によった尾根上に占地する古墳(2・3号墳)の墳丘下、およびそれに隣接した地点において実施した。古墳の調査進行状況を考慮し3号墳の東側から2号墳の手前までに4×20mのa、bトレーナーを設定し、さらにそれを2×2mの小グリッドに区画して発掘を行ない、第二次調査は、2号墳の完全な調査終了後にその直下を東西に15から23、南北にAからEまでの2×2mを一樹とするグリッドを設定し、II層上面より5cm掘りを行なっていった。その結果II層が上下に区別され、遺物の広がりも把握することができた。2号墳の版築された盛土中に旧石器時代、縄文時代の遺物が含まれておらず古墳建築の際II・III層の土を盛土に使用している。これらの状態から最も良好な状態は、むしろ南側で破壊された部分に生活が営まれていたと考えられる。東側のb-1でII層からの掘りこみによって、ほぼ橢円形をした土塙が1基検出され、その中より弥生式土器が出土した。

この土塙墓は、斜面に位置することから台地の残存部の拡張を行なったが、その形跡は、まったく認められず、むしろこれも南側(破壊された台地)の可能が強い。また東南部の断面に住居跡と思われる掘り込みを調査終了後発見し、弥生時代の住居跡・土塙墓・甕棺墓が破壊された部分に存在していたことが判明した。この点行政区画のちがいとはいえない種々な遺跡の複合遺跡であったことを思うと南側がおしまれてならない。

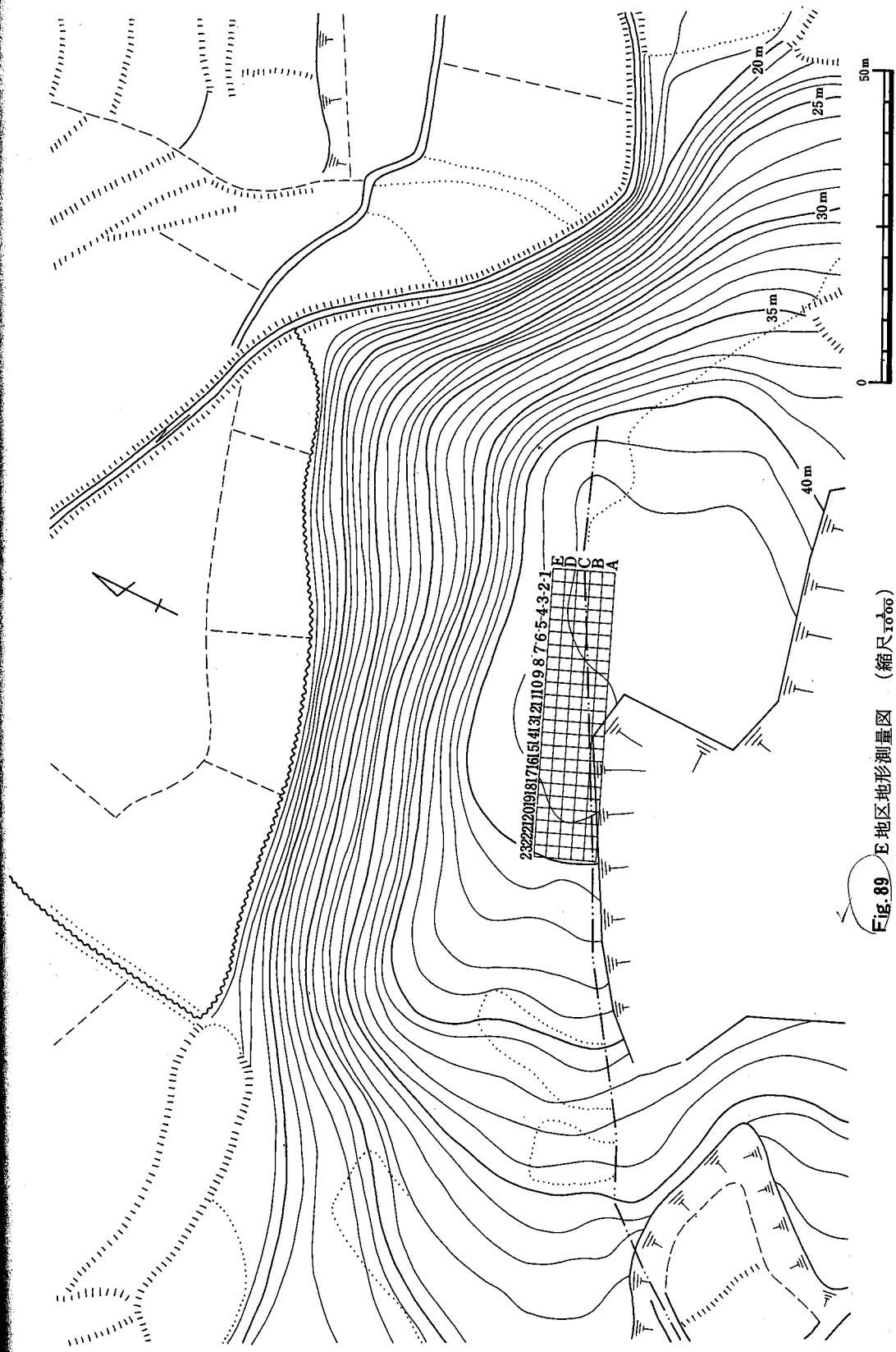


Fig. 89 E 地区地形測量図 (縮尺 $1:5000$ )

金牛(二)

## 2. 旧石器時代、縄文時代の石器

### 層位について

Fig.90の断面でみられるごとくI層は、耕作土層(20cm)、II層が上下に区別でき褐色粘質土層(上面25cm、下面15cm)、III層が赤褐色粘質土層(20cm)、IV層が風化礫を含む黄褐色粘質土層である。これらの土層は、花崗岩風化土層で形成されている。II層の上面が、縄文時代の遺物包含層でII層下面・III層の10cm程度までが旧石器時代の遺物包含層である。

### 層位別の石器の広がりについて (Fig.90)

II層上面の遺物の広がりは、4つのブロックに区別できる。A-22のMicro-Bladeを中心としたグループ、A・B・C・D-18を中心としMicro-Blade・二次加工石器・石簇・石核再生剝片石核のグループ、B・C・D-17を中心とし、Micro-Blade・石簇・二次加工石器のグループ、B-16を中心とし、Micro-Blade・石簇・二次加工石器のグループの4つに分布していた。

II層下面の遺物の広がりは、3つのブロックに区別できる。A-21・22を中心に折・切断剝片・Micro-Blade・二次加工石器のグループ、B-20を中心にScraper・二次加工石器・Micro-Blade・ナイフ形石器のグループ、B-18を中心にMicro-Blade・Micro-core・折・切断剝片のグループの3つに分布することになるが、II層下面は、遺物数がII層上面、III層より少量である。

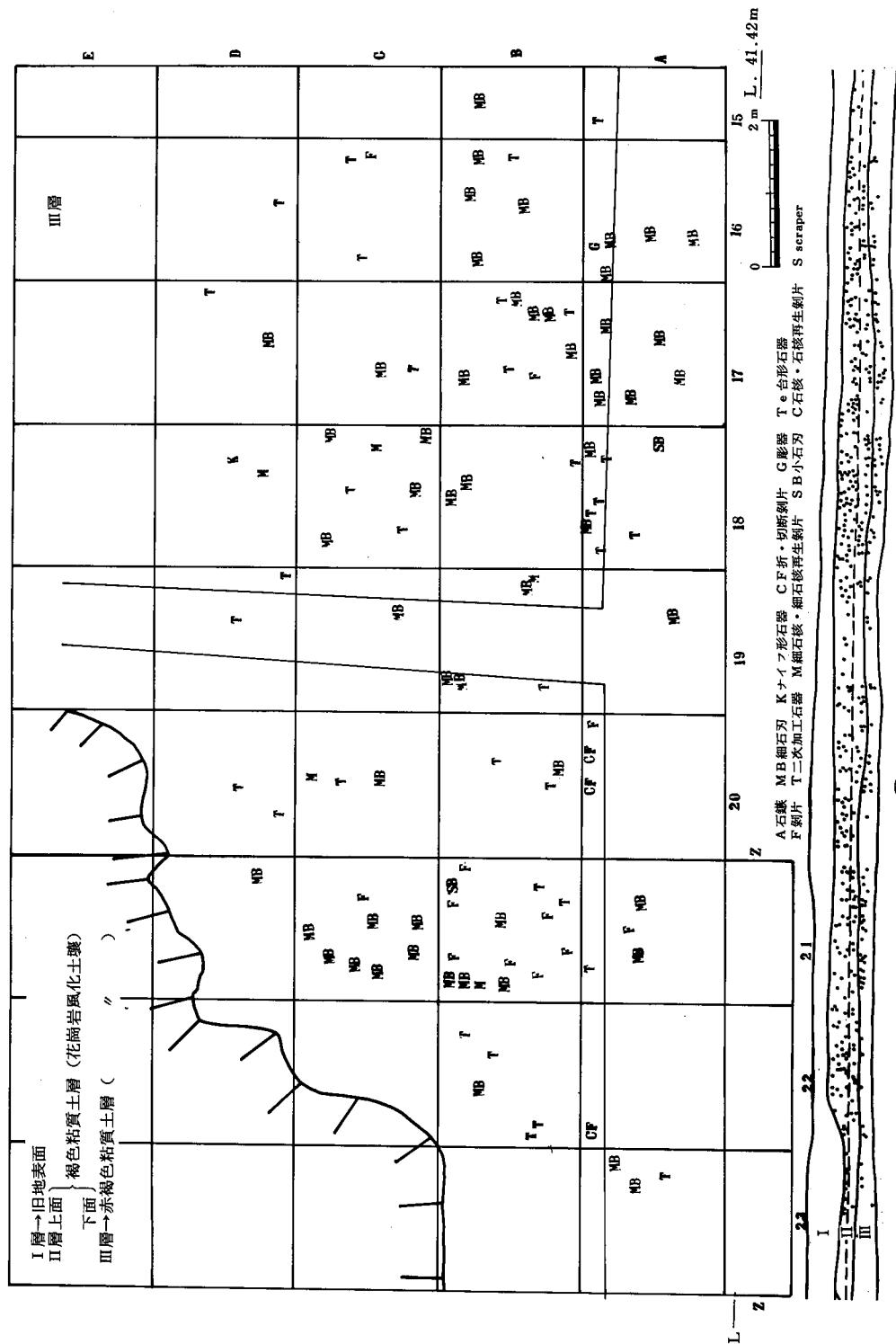
III層の遺物の分布は、4つのブロックに区別できる。C-20・21を中心としたMicro-Blade・剝片・二次加工石器・細石核再生剝片のグループ、A-17、B-17を中心とし、Micro-Blade・二次加工のグループ、B-21、C-21を中心としたグループで、剝片・二次加工石器・Micro-Bladeのグループ、C-18を中心としたグループで、細石核再生剝片・Micro-Blade・二次加工石器・ナイフ形石器のグループである。これらII層上面・下面・III層の分布状態は、以上のように11のグループに区別できた。ただII層上面の分布状態で石簇と細石刃、台形石器、ナイフ形石器の出土状況が異なる。つまり石簇がほとんど10cm程度に包含されるのに対して、細石刃、台形石器、ナイフ形石器はII層下面に近い状態で出土する事実が明らかとなった。またB-18のII層下面で、台石と思われる礫が出土している。形態は、逆台形を示し石材は硬質砂岩。(PL.54下段右)

Tab. 28 E地区出土打製石器一覧表

層位\器種名	細石刃	細石核	細再生剝片	石核	石生核剥再片	チ形石器	台様石器	彫器	ドリル	石簇	二加工次器	scraper	残核	縦剝長片	横剝長片	小石刃片	碎	計
I層	72	2		16	2	4	6	1		68	209	7	1	14	2	17	1000	1421
II層上面	224	3	3	5	2	4	3	2		99	204	12	4	51	3	22	1851	2492
II層下面	42	5	8	5	6	3	4	3			19	9	2	46	15	4	127	298
III層	381	4	4	3	3	4		2			39	4	2	14	13	26	194	693
計	719	14	15	29	13	15	13	8		167	471	32	9	125	33	69	3172	4904

II 层上面





## 石器について

### E 地区 I 層出土石器について

概要でもふれたごとく E 地区では、2 号墳・3 号墳の下に縄文・旧石器時代の遺物が含まれているため 2・3 号墳を調査したのちに発掘調査を行なったが、古墳の盛土中より多くの遺物の出土をみた。また 2 号墳の最下層は黒色の腐植土であり、これを旧地表面としてとらえ、この旧地表面と盛土を I 層の遺物として図示した。（付図Fig.10・11）

#### 石鏃（付図Fig.10-12~41）

86 点中 30 点を図示した。A 地区の石鏃と同様に種々の形態を持つが、鋸歯鏃と称せられる石鏃が多い。特殊な形態を持つ石鏃 41 は、脚部が全体の 5 分の 1 程度しかなく脚部と胴部の接点には抉込部がある。またこの E 地区の石鏃は、大型の石鏃が多くそれも先端部の鋭利な形態を持つ。また未製品とも考えられる鏃 32・33 の 2 点があるが未製品と断定はできない。

#### 剝片、石核、折・切断剝片（付図Fig.10-42~51 Fig.11-1~15）

剝片は、縦長剝片（42・43・44・45・47・49・50）7 点と横長剝片（46・48）2 点とに区別でき、縦長剝片は、剝離面の打撃方向が一方向のみで、打面は、平坦打面と調整打面とに区別できる。横長剝片は、離面観察によると 2 方向の打撃方向を持ち、打面は平坦打面と調整打面を持つ 2 つに区別が可能である。51 の石核の石材は珪化木である。一応剝離面状態から一定の法則を持った石核であり、打面は、平坦打面に部分的に調整を加えてゆく方法を持つ。

切断剝片（1～9）は、3・7 をのぞいた 7 点が末端部を切断する形態を持つ。しかし、3 は、頭部を切断、7 は、側面を切断するという特殊な場所を行なっている。折断剝片（10-15）はすべて縦長剝片を折断している。12 は接合資料であるが、これは、剝片の形態から折断したと思われる。またこれらの中で裏面からの打撃・半割工程を行なった状態を示している折断剝片もみられる。

#### 二次加工石器とスクレーパー（付図Fig.11-16~30）

二次加工石器（16～24）でサイドに二次加工のあるものは、16・19・21・22・23・24 でエンドに加工のあるもの 18、頭部にあるもの 17、周辺部にあるもの 20 と区別ができる。スクレーパーでは、エンド・スクレーパーが、25・27・29・30 でサイドスクレーパーは、26・28 である。

#### ドリルと彫器（付図Fig.11-31~36）

31 がドリルで先端部断面が台形を示す。彫器は、32 が 4 打、33 が 2 打、34・35 が一打、36 が 4 打による彫刻刀面を持ち、形態・技術はおのおの相違がみられる。

#### 細石刃（付図Fig.11-37~55）

19 点の細石刃しか図示していないが、E-I 層中には多数の細石刃が出土した。

### 台形様石器とナイフ形石器 (付図Fig.11-56~62)

台形様石器としたが、中には、台形状石器として区別した石器 (56・58・59) がある。つまり台形様石器として上げられるのは57の1点のみである。ナイフ形石器は、60・61・62の3点であるが、60は背のみに、61は、刃部をわずかにのこし、62は背と基部の一部にそれぞれ刃潰し加工を加える形態を持つ。

### 細石核再生剝片・石核再生剝片・石核 (付図Fig.11-63~78)

細石核再生剝片 (63・66・67・69~76) は、3つに区別できる。正面再生剝片と呼ぶ剝片 (63) と側面再生剝片 (70・71・73) と打面再生剝片 (66・67・69・72・74・75・76) であるがこれについてはVII章でのべたい。石核再生剝片も同様の区分ができる。正面再生剝片 (64・65) と68の側面再生剝片である。石核 (77・78) は、一定法則を持つ石核である。

## E地区 II層上面の石器について

### 石鎌について (付図Fig.12-1~19)

図示した石鎌は、19点であるが、II層上面では、99点出土している。形態的には、A地区・E地区のI層と同様に種々のタイプに区別できるが、特徴のある石鎌は、1・5・6にみられる2cm未満の石鎌、12・16の先端部・脚部に特徴をもつ石鎌、また14の石鎌形態は、I層の石鎌 (Fig.11-41) にみられた形態と同様で脚部が全体の5分1程度しかない特徴を持つ。

### 石鋸状石器と剝片 (付図Fig.12-20~27)

石鋸状石器 (21) は、石鋸とは区別しなければならない。それは、刃部の抉込部が少しく鋸状は示すが、他の遺跡で見られる刃部状態とは異なるからである。しかし石鋸的要素は多い。

剝片は、縦長剝片と折断剝片・切断剝片とに区別できる。22・23は、縦長剝片であり、剝離方向は、一方向。切断剝片は、20・27の2点、折断剝片は、24~26の3点である。

### 二次加工石器・彫器・スクレーパー・ナイフ形石器 (付図Fig.12-28~48)

二次加工石器 (28~31・34・39) は6点出土している。スクレーパーと同様の用途であろう。むしろサイド・スクレーパーの中に組み入れられるべきものであろう。彫器 (32・33・36・42) は、すべて2打による彫刻刀面を持つ。しかし32は、彫器とも残核とも思われたが、擦痕があることと、2本の彫刻刀面があるため彫器とした。スクレーパーは、サイド・スクレーパー (35・37) の2点、エンド・スクレーパーは、40の一点である。41のナイフ形石器は背面のみに刃潰し加工を行なっている2×1.2×0.4cmの小型のナイフ形石器である。

### 小石刃と細石刃 (付図Fig.12-43~83)

小石刃 (43~51・81) は、10点出土している。側面に細かな剝離があるものや折断されているものもある。細石刃 (52~80・82・83) は、31点図示している。その形態は、さまざまである。頭部がカットされているもの、中間部だけのもの、末端がないものとがある。

細石核と細石核再生剝片・石核と石核再生剝片 (付図Fig.12-84~99)

細石核再生剝片 (84~87・89~91・96) は、8点、細石核残核 (93・95・98) は、3点、石核再生剝片 (88・94・97) は、3点、石核は、94・99の2点出土している。これらの細石核・細石核再生剝片・石核・石核再生剝片については、別章で詳細にふれてみたい。

### E地区 II層下面出土の石器について

剝片と折・切断剝片・スクレーパー・ドリル・彫器 (付図Fig.13-1~21)

剝片 (1・2) は、縦長剝片である。1の胴部に抉込の剥離がある。切断剝片 (5~7) は、3点、折断剝片 (9・10・13) は、3点で折・切断剝片とも縦長剝片を素材としている。彫器 (11・12) は、1打と2打による彫刻刀面を形成している。スクレーパーは、エンド・スクレーパー (14・16・17・19・20) の5点、サイド・スクレーパー (3・4・8・15・18) の5点。

台形様石器・ナイフ形石器・尖頭状石器・小石刃・細石刃 (付図Fig.13-22~34・37~70)

台形様石器は、台形状石器 (23) と台形様石器 (22・24~28) に区別できる。ナイフ形石器は、29~34の6点である。これについては、別章で。尖頭状石器は、39の1点であるが、剝片尖頭器の先端部であろう。しかし石簇の可能性もある。小石刃は、37・38の2点。細石刃は、40~70の31点である。中間部が多く、次に末端をカット、頭部の順。

細石核と細石核再生剝片・石核と残核 (付図Fig.13-35・36・71~28)

細石核再生剝片 (71~77) は7点、細石核は、80~82の3点、石核が36、残核が3点出土。

### E地区 III層出土の石器について

剝片と折・切断剝片・二次加工石器とスクレーパー・彫器と打器 (付図Fig.14)

剝片は、縦長剝片 1・3~6・8~12・18~20の13点で剝離方向は、一定している。横長剝片 2・7・16・17の4点で、横剥ぎではなく横長剝片であろう。折断剝片は、21~23の3点で、切断剝片は、24~29・31・32の8点であるが、31は縦割りである。二次加工石器は、31であるが、折・切断剝片の中にも二次加工の加えてあるものもある。スクレーパーは、エンド・スクレーパーが、25・37の2点、サイド・スクレーパーが13・33・34・36の4点出土している。彫器は、5打による彫刻刀面を持つ (38)。40の打器は、両端に打撃痕がある。

小石刃と細石刃・細石核再生剝片とナイフ形石器 (付図Fig.14-14・15、39・41、42~66)

小石刃は、39・41の2点である。打撃方向は一定している。このほかにも図示していないが24点出土している。細石刃は、42~58の17点図示している。頭部6点、中間部9点、頭部カットが2点である。細石核再生剝片は、59・60の2点が側面再生剝片、15が打面再生剝片である。61は、細石刃に側面に直角に近い剝離面がある。14・62は、細石核の残核である。63~66はナイフ形石器であるが、これらの石器等については、別章でのべてみたい。

### 3. 土 塙

#### 土塙出土状況 (Fig. 91 PL.36)

E地区のもっとも東側にあたるb-1グリッドで検出されたもので、平面プランは橢円形で長径110cm、短径80cm、深さ30cmをはかる。壁は、ほぼ垂直をなし、北に片寄って、長径45cm短径38cmの橢円形に掘りこまれており、深さは、約20cmである。土塙のほぼ中央部より、横になつた甕が出土した。この甕は、押しつぶされたような状況を示し、しかも塙底に密着していることから土塙と同一の時期のものと考えられる。

#### 出土土器 (Fig. 91)

土塙内より出土した甕は、小破片となっており、胴部の一部を復原できなかった。焼成は良好であるが、砂粒をかなり多く含み、内外面ともに砂粒が露出している。口径は、28.5cmをはかり、口縁には、わずかに刻み目が認められる。胴下半部から底部へは、風化していないといふこともあって、丁寧な調整痕がのこる。底部は、あげ底で、ほぼ中央部に、焼成前の穿孔がみられる。器高は茶褐色を呈する。遺構実測図より、甕の器高は、35cm前後と推定される。したがって、Fig. 91の土器実測図はさらに上下方向にのばさねばならない。これらのことから弥生時代前期の土塙墓と考えられる。

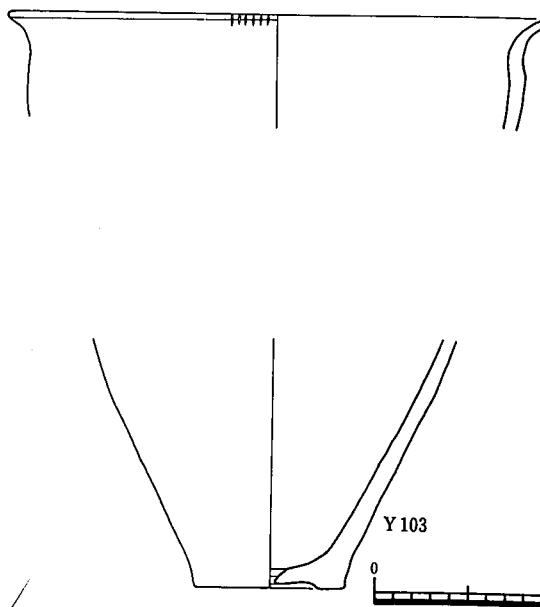
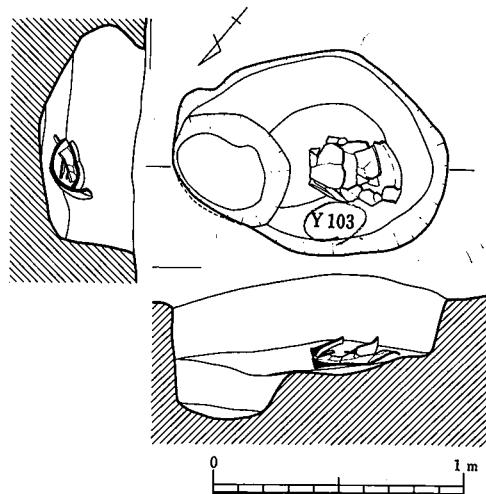


Fig. 91 E地区土塙(縮尺 $\frac{1}{30}$ )、土塙出土土器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

## 4. 蒲田2・3号墳 72/4

蒲田2・3号墳は、標高約40mを計るかけづか山のほぼ頂上に位置する。このかけづか山頂上部を福岡市と粕屋郡との境界線が走り、南半が粕屋郡、北半が福岡市に属する。本墳調査開始前、すでに粕屋郡側は10数mにわたって土取りのため切り落とされていた。ために、境界線上に位置する2・3号墳はその半分以上を切り取られ、原形を失っていた。しかし、すでに切り取られた粕屋郡側にも少くとも3基以上の横穴式石室を持つ古墳があったことが、昭和32年に撮影された写真によって確認された。<sup>(註)</sup>蒲田2・3号墳は、この古墳群の北端部を占める古墳である。

調査は、平板測量の結果ではその中心部はすでに破壊された可能性を示したが、埋葬主体部の確認を急ぐことから開始した。しかし、当初の予想通り、主体部は全くその形をとどめず、ただ、その中央にあたる部分に若干の、石室構築に使用されたと考えられる石組みが存在していた。この石組みは、 $1.5\text{m} \times 0.5\text{ m}$ ほどの大きさの石を中心に、人頭大の石を集めた状態であった。大形の石材は1個のみで、これに続く石材は見当らなかったが、出土の位置からして石室の腰石として使用されたものと考えてよかろう。

墳丘は、石室構築とともに土を盛り上げ、その状態は墳丘断面に如実に現われていた。土層図の最下層の黒色土層は、草木葉をその表面にのせており、この層とこの上層との境は明瞭で、簡単にはがれた。このことから、本墳の築造に際してはこの部分には何らの手を加えず、盛土をのせたことがうかがえた。墳丘裾部などに特別の加工痕・周溝などの施設も認められなかった。しかし、盛土を

盛る過程においては、

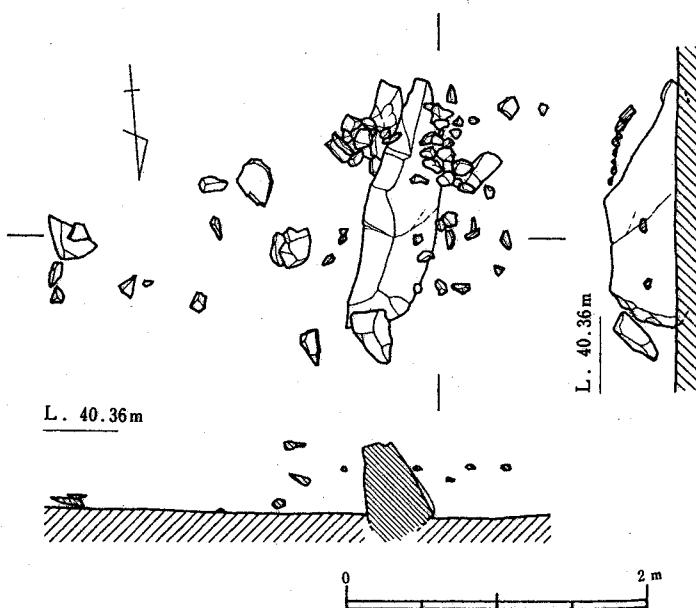
墳丘内部に二重の石列

をめぐらしていること

が知られた。

まず第一は、墳丘の  
ほぼなかばに、人頭大  
の石を幅2m～3mに  
わたって、直径約14m

くらいの円形にめぐら  
している。西側の、本  
墳の最も低い場所では  
3～5段の石垣状に積  
んだ部分もあるが、他

Fig. 92 蒲田2号墳石室実測図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

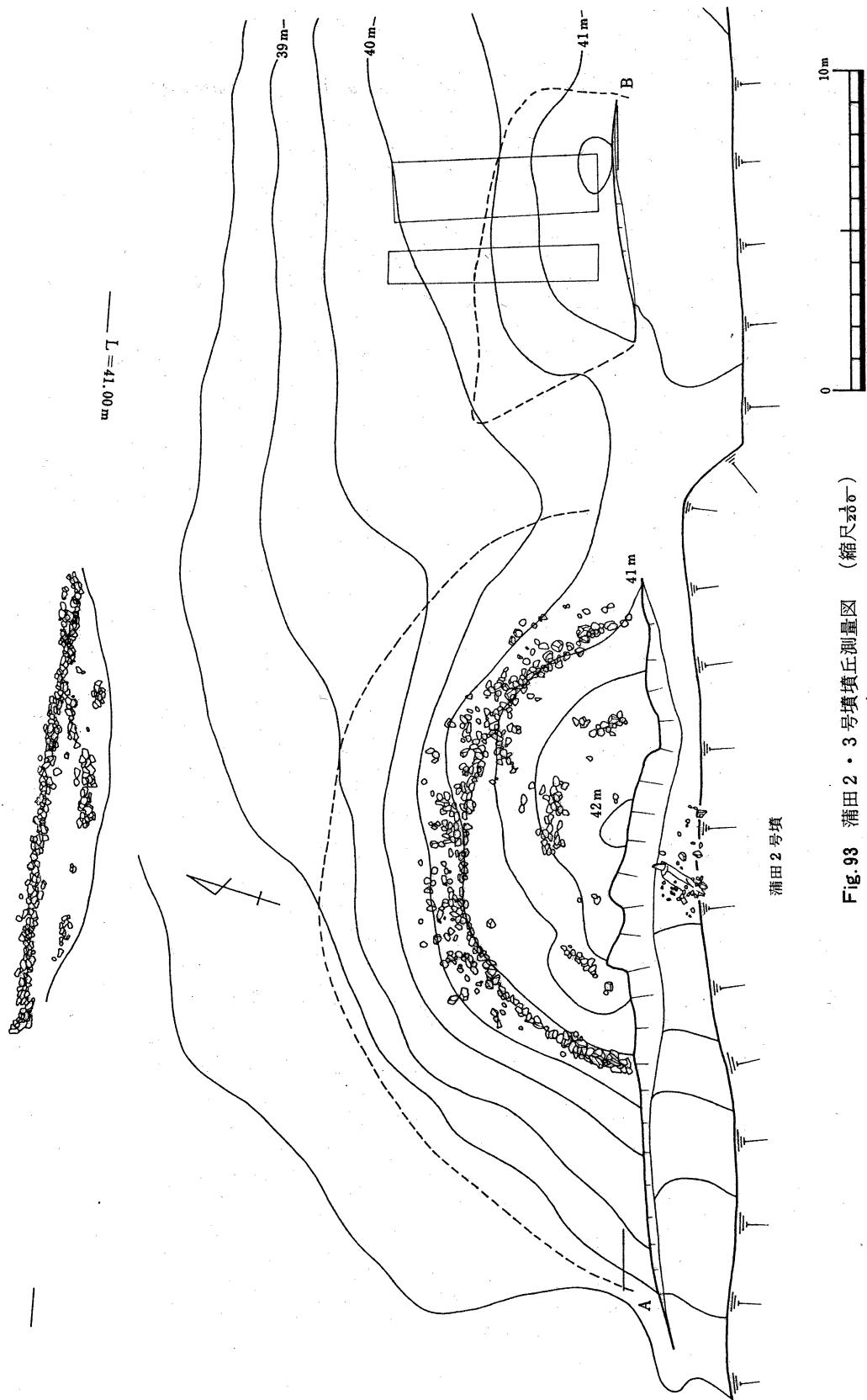


Fig. 93 蒲田2・3号墳丘測量図 (縮尺 $\frac{1}{200}$ )

178  
179

の部分は積み上げたというより、寄せ集めたという感が強いが、当初、積み上げたものが崩れ落ちた可能性も考えられる。なお、この石列は水平にめぐるものではなく、地山の傾斜と同じくらいの傾きを持ち、石列の東西の高低差は約1mを計る。

第二は、墳頂近くにめぐるもので、これも人頭大の石を用い、雑然とした感じである。この石列の直径は8m前後と思われる。

本墳丘からは、石器、弥生式土器、須恵器などの出土をみたが、須恵器以外は本墳との直接の関係は認められない。これらの遺物は第V章の「旧石器時代・繩文時代の石器」の項に詳述する。

以上の如く、本墳の調査の結果、蒲田2号墳は、

1. かけづか山南斜面に位置するかけづか山古墳群の最北端部に占地し。
2. 直径約22m、高さ2.5m以上の墳丘を持つ。
3. 墳丘内に二重の石列を持つ。
4. 横穴式石室を埋葬主体部とするであろう、円墳であることを確認した。

なお、蒲田3号墳は調査の結果、古墳とは無関係であることが判明した。

(注) 昭和32年11月、内海克久氏の撮影による。

Tab.29 蒲田2号墳墳丘出土遺物一覧表

(単位cm)

遺物番号	出土地点 (層位)	器種	器部	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
Y 104	墳丘東北部	甕	口辺部	口径31.2	逆L字形の口縁や突帯などはY110やY111に同じであるがやや下方に傾斜する。	砂粒 良	淡黄褐色		口縁上面、 外面丹塗り。	
Y 105	東西断面	高杯	口辺部	口径19	現存部は、口辺部のみであるが四形の杯部をもつ高杯であろう。口辺部は、やや傾斜するが平坦な面をつくる。丹塗り痕のこらす。	砂粒 良 軟質	淡黄褐色			
Y 106	Iトレンド 表土	甕	口辺部	口径32	いわゆる歛形の誇張された口辺部をもつ。 外面面剥離すすみ調整痕不明な部が多いが、口辺下外面は横ナデか?	砂粒少 良 堅緻	暗褐色			
Y 107	墳丘表採	甕	口辺部	口径37		外外面砂粒露出。横面の粘土接合部は調整不完全	砂粒 良	黄褐色		
Y 108	南東部断面		底部	底径 5.4	あげ底の底部をもち、ぶあついづくりをなす。	調整不明	細砂粒 良	黄茶褐色		
Y 109	南西部断面		底部	底径 7.2	ややあげ底	外外面ともに磨滅	砂粒 良	黄褐色		
Y 110	C17グリッド II 層	甕	口辺部	口径29	逆L字形の口辺部をもち、口辺部直下に断面M字形の突唇をめぐらす。口辺端に斜めの刻み目、丹塗り痕は外面のみ。	砂粒少 良	赤褐色		C20グリッド 出土土器片と接合	
Y 111		甕	口辺部	口径30	口辺端を欠くがつくりはY 110と同一、丹塗り痕も同じように外面のみに認められる。内面、口辺平坦部は不明。	精 良	良	赤褐色		
H 90	墳丘下 黒色土層	甕	口辺部	口径30	いわゆる二重口縁土器の口辺部で短かい頸部からやや外反する立ちあがりは平坦な口縁でおさめる。外外面とも口辺部は丁寧な横ナデ頸部下内面はヘラ削り後刷毛目をいれる。底部破片によると、まるみのある底部で、内外面ともに上下方向に刷毛目をいれる。	精 良 軟質	淡茶色	PL-39		
S 23	墳丘表採	杯		口径11.6 器高 4.4	内傾する立上り端部は丸くおさめる。底部半分ほどをへら削り。内面底部にタタキ痕。	砂粒 堅緻	灰茶褐色			
S 24	墳丘北東部 盛土中		口辺部	口径11.6	外反する口縁部を折り返して外方にふくらませ、わずかに内側にもふくらむ。ヘラ記号の一部が残っている。	良 堅緻	外面灰黑色 内面灰茶色			
S 25	墳丘北東部 盛土中	高杯	脚部	底径 7.4	無蓋高杯の脚で、内部にしほり目が認められる。	良 堅緻	灰黑色			
J 189	表土	碗	全形	口径15.6 器高 6.5 高台径5.4	錫葉は、不鮮明な陰刻で釉はうすく、錫葉文の練線、口縁部などはげて変色。見込内底は釉厚く濃緑色を呈する。細かな質孔。	灰色 緻密	良	濃緑灰色		

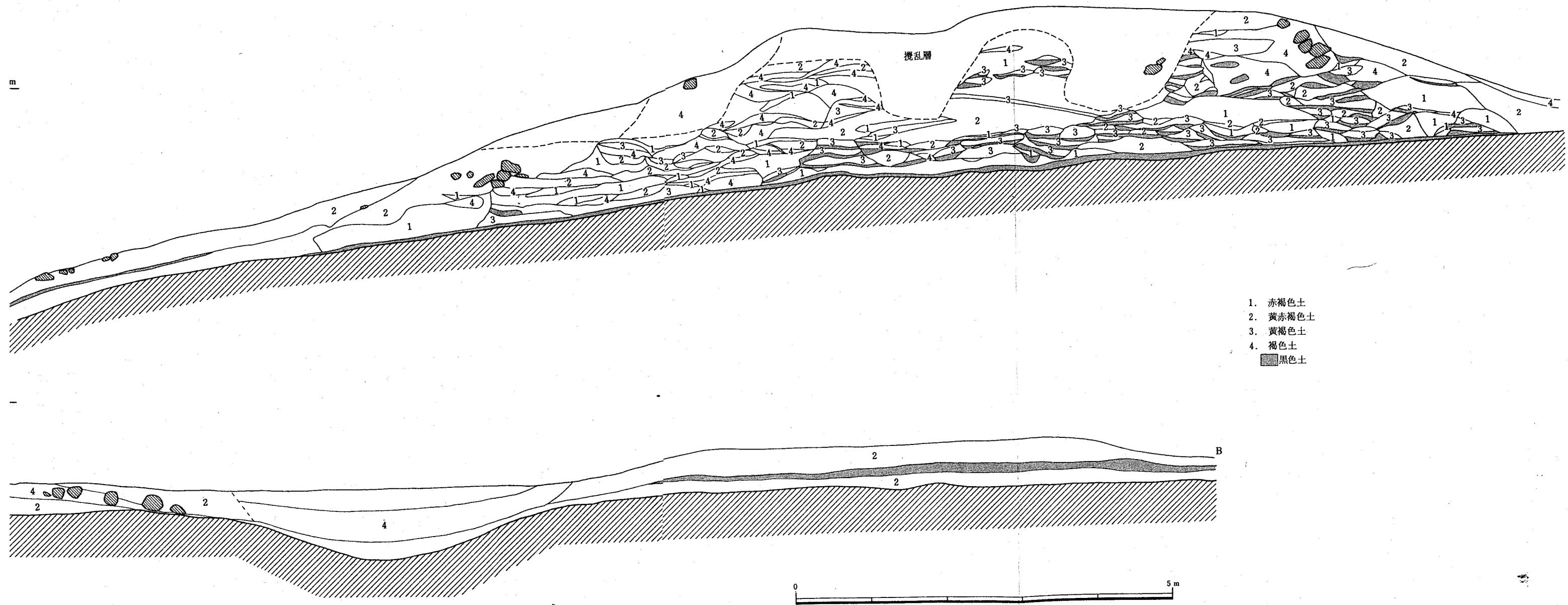


Fig.94 蒲田2号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

129

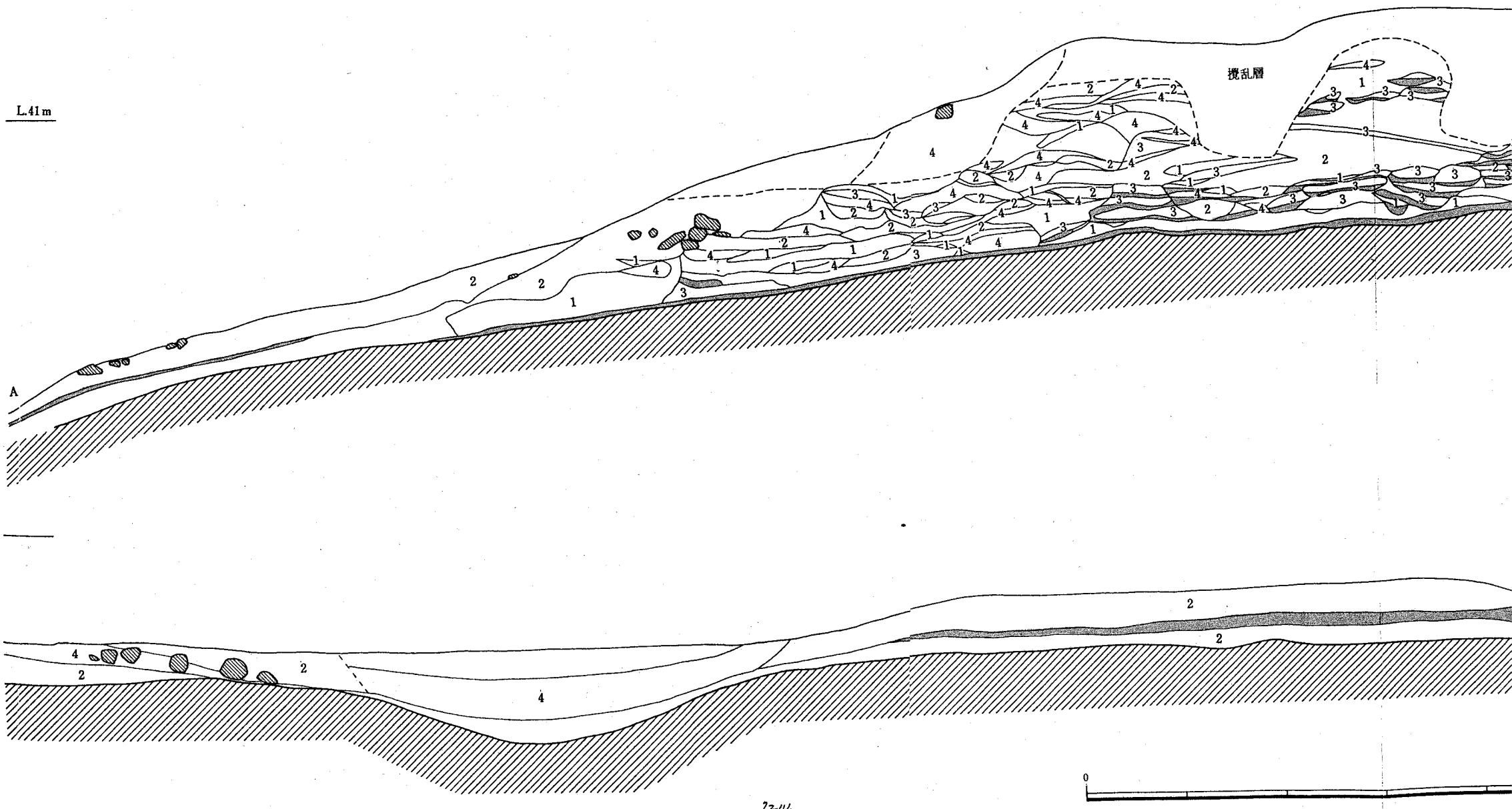


Fig. 94 浦田2号墳墳丘断面図 (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

179

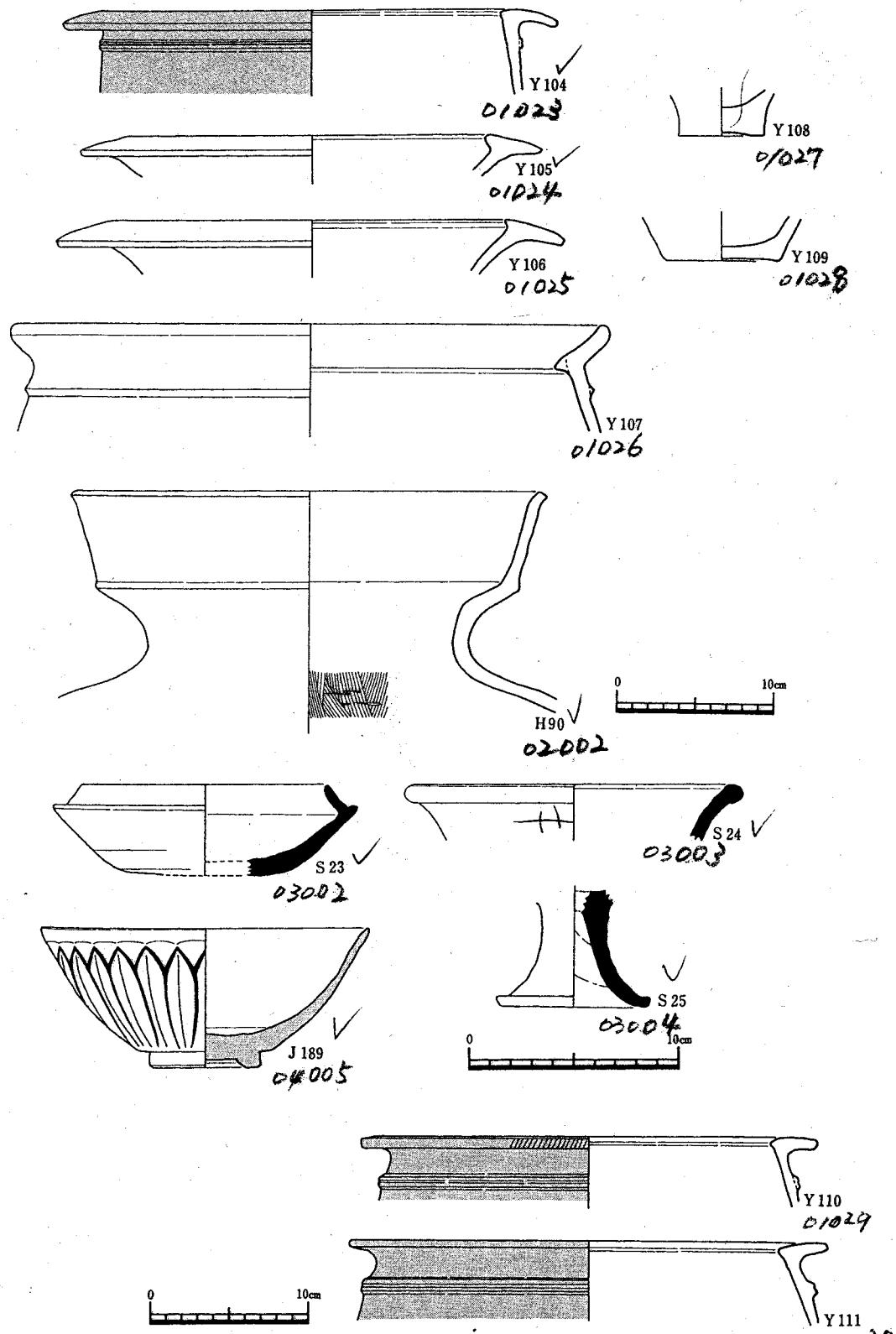


Fig. 95 蒲田2号墳墳丘出土土器、E地区出土土器実測図 (縮尺  $\frac{1}{2}$ 、 $\frac{1}{4}$ ) 7214

## 5. かけ塚山古墳群出土の遺物

ここに紹介する遺物は、本調査以前にすでに宅地造成によって破壊されたかけ塚山古墳群中の1基から採集された資料で、調査中に平ノ内幸治氏より寄贈を受けたものである。採集した氏によれば、本資料は、昭和45年の夏頃、かけ塚山の最高所にあった破壊された古墳石室の羨道部床面付近からまとめて出土したとのことで、他の古墳の遺物混入は考えられない。また石室の形態は、玄室部はすでに石材は抜き取られていたことから明らかではない。遺物の多くは細片となっており、図示しうるものが少ないが、遺物の組み合わせはきわめて興味深いものがあり、かけ塚山古墳群の一端を知るうえで貴重であろう。

(1・2) 鉄地金銅張りの磯金具で、周縁の一部を欠失するが全形をよくとどめる。手法・法量の類似から対になるものとみてよく、3が後輪磯金具と考えられることから、3と同一鞍橋に着装されたものと思われる。上面にややふくらみをもつ5mmほどの金銅張り鉄地に、縁金具を置き鉢を付す。

(3) 鉄地金銅張りの後輪の磯金具で1・2と同形のもの。軸は鉸具を欠失し座金のみ残存する。

(4) 二条線づくりの引手。

(5) 直径10cm前後の円形品の破片である。上面は面取りが施されているが、下面は剥離した状態で蒲鉾形断面をしめす。

(6・7) 鉄小札で、6は長さ5cm、円頭形をしめいや反りをもつ。

(8) 破片の円周・傾斜・鉢の間隔などから横矧板鉢留胃と推定される。

(9・10) 横矧板鉢留短甲と推定される。両者とも側縁は右斜めをしめすが、円周カーブは弱く、胴上部にあたるものであろう。

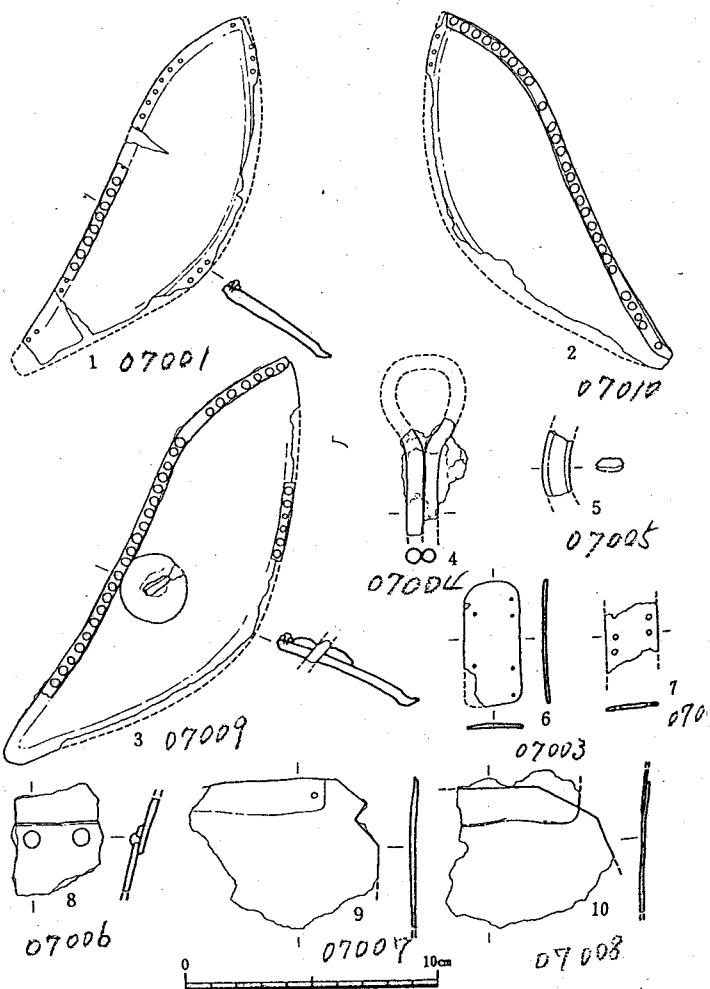


Fig. 96 かけ塚山古墳群出土遺物実測図 (縮尺1/2)

72/4



Fig. 97 かけ塚山古墳群全景（昭和32年11月撮影）

1886



Fig. 98 石室（かけ塚山古墳群）

1884

## 第IV章 F地区の調査

### 1. 概 要

F地区は福岡市東区蒲田字祝田、字沖田に位置する標高11~14mの水田地帯である。

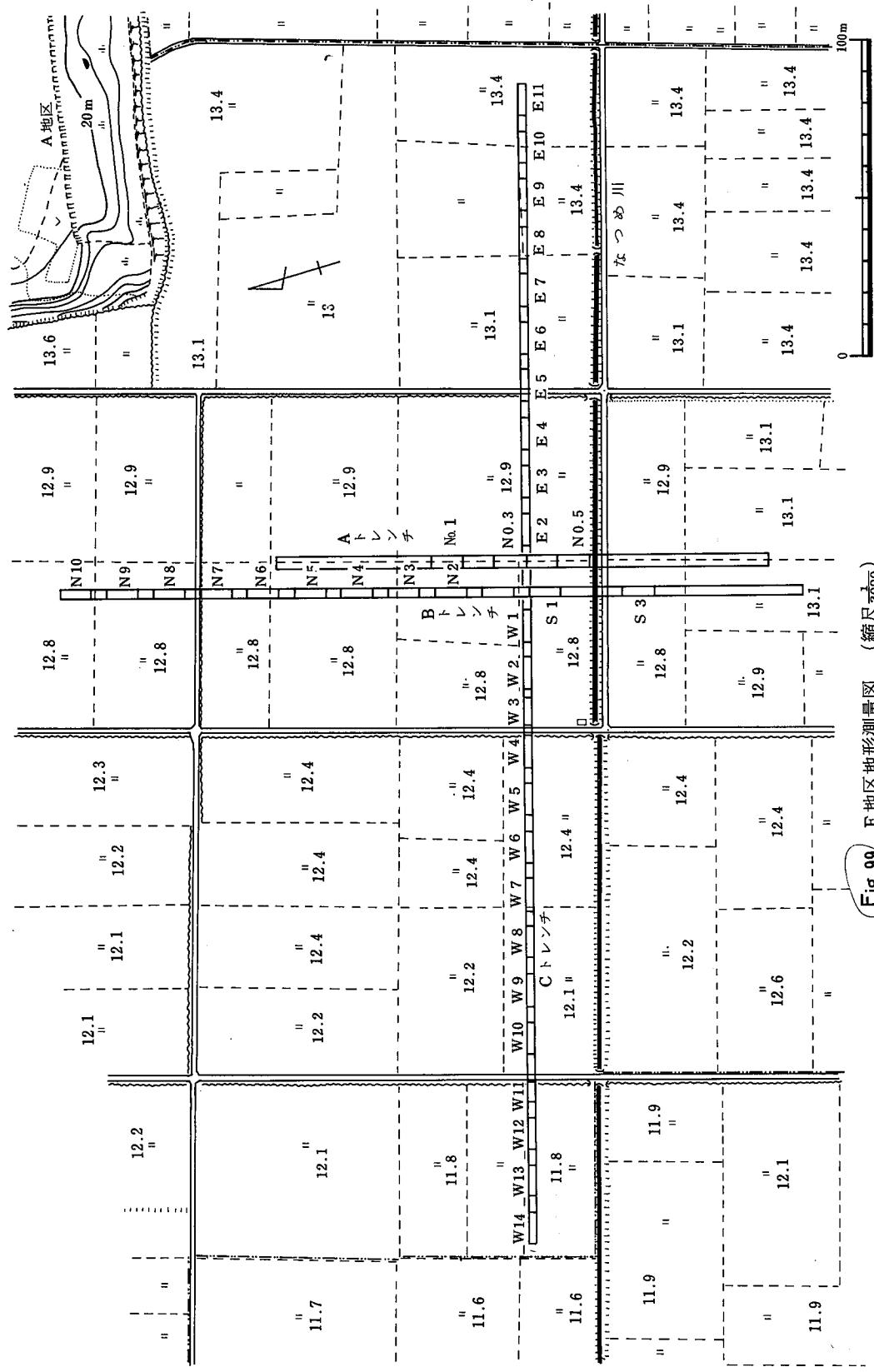
当地区は、九州縦貫自動車道福岡東インターチェンジと国道201号線福岡東バイパスの建設地にあたり破壊されるため発掘調査を行なった。福岡平野の東部で比較的古代の条里制がのこっているのではないかという予想のもとに実施した。当水田地帯は大正年間に耕地整理が行なわれ、現在の農道の大部分は、その折に取り付けられている。また、北方にある台地（蒲田遺跡A地区）の西端部を削り、水田に客土したとのことで、発掘調査の途上で上層から黒曜石片、弥生式土器片、磨製石斧、須恵器片、青磁器片などが出土した。

発掘調査は農道に平行に、長さ200m余、幅3~4mのA・Bトレンチと、これに直交する長さ360m余、幅3mのCトレンチを設定し、1973年（昭和48年）1月16日に開始した。発掘調査に際しては湧水に対処するため、各トレンチに幅5mの壁を残しながら作業をすすめた。そのためA、B、Cトレンチを掘り進め、No.1小トレンチ名を付して発掘作業の助けとした。

発掘調査は、Aトレンチを掘り進め、No.1小トレンチの北側で溝状の落ち込みと集石遺構が確認されたため、No.3、No.5各小トレンチの発掘と並行してBトレンチを掘り進めた。その結果、A-No.1トレンチの西のB-N2トレンチの北側に溝状の落ち込みを確認した。さらにA-No.1トレンチとB-N2トレンチの溝状遺構の延長線上で、Bトレンチの西側にトレンチを入れてみたが、溝状遺構は確認できたかった。発掘期間の関係もあって、すぐにCトレンチの発掘調査にとりかかった。A・Bトレンチと同様に5mの壁を残しながら掘り進めたが、特別注意をひくような遺構は確認できなかった。2月28日調査を終了した。

#### 石器について（付図Fig.10-10・11、Fig.15-2）

10の石器は、IV層出土の石核で、一打による平坦打面と自然面を持つ。打撃方向は、4方向を持ち、一面をのぞいてその打面はすべて自然面である。一定方向による剝離工程のため背面は、自然面を持つ。この石核は一定方向による連続的に回転してゆく剝離方法を持つ。つまりこの石核の場合、時計回りの回転により行なわれ、終了剝離は、下位からの剝離である。ネズミ色の色彩を持つ黒曜石である。風化は、かなり進んでいる。11は、III層出土の台形様石器である。縦長剝片素材とし、主要剝離面側と表面からの打撃によって両端を折断し、片面に二次加工を加えている。刃部は、片方からの細かな剝離によって刃部を形成している。形態的には大型の台形様石器である。2は、滑石製の撥形石斧で断面は、橢円形を示す。製作工程は、第4工程である。刃部には滑石製という軟質の石質であるため剝離痕が認められる。表面は、荒削状態、裏面は細かな敲打がみられる。



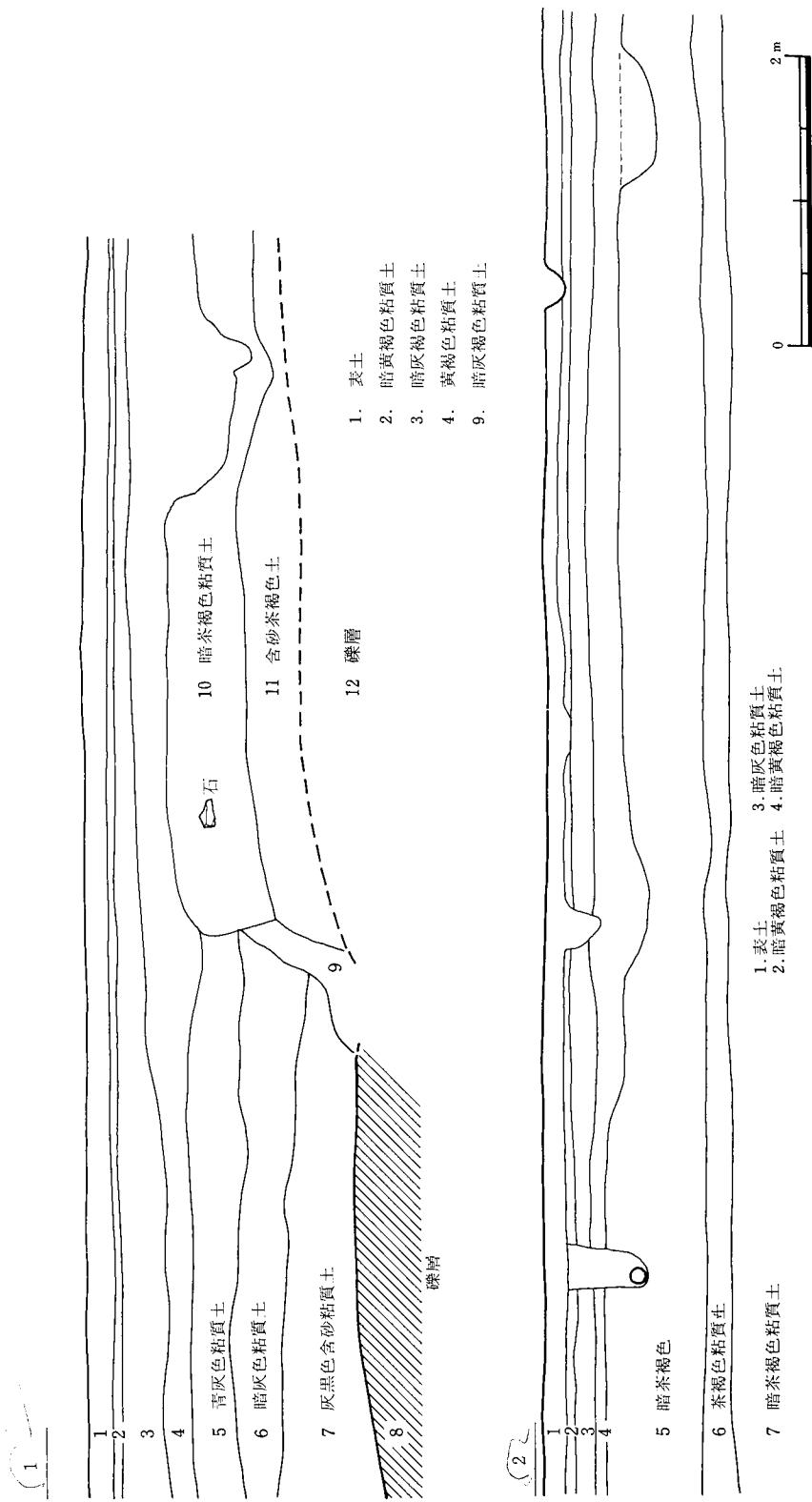


Fig. 100 F 地区トレンチ土層図 (1. A - No.1 トレンチ 2. B - N2 トレンチ) (縮尺 $\frac{1}{50}$ )

## 2. 土層と遺構

土層の状態は調査地点によって多少の相違はあるが、1～4層までの層序関係はほとんど同じで、下記のとおりである。

- 1層 表土（耕作土）
- 2層 暗黄褐色粘質土（鋤床層）
- 3層 暗灰褐色粘質土（暗灰色あるいは、暗灰黒色粘質土）
- 4層 黄褐色粘質土（地点によっては灰色あるいは灰白色粘質土）

5層以下は、地点によって土層にかなりの違いがみとめられるが、全体を通じて現在の地表面下約2mからは砂層になっている。

A-No.1 トレンチにおいては、5層・6層が青灰色を呈した粘質土層で、以下は砂層へと続いている。溝状の遺構は現水田面下約60cmの10層の暗茶褐色粘質土層から掘り込まれ、上面の幅約1m、深さ約50cmである。A-N0.1 B-N2で検出された溝状遺構は、完全に発掘調査することができなかったが、方向は現在の区画と一致し、遺跡の中央を流れる「なつめ川」とほぼ平行に走っていると考えられる。これらのことから、この暗茶褐色粘質土層が、ある時期の水田面と何らかのかかわりあるいはあったと考えるが、時期を決定できるような伴出遺物はなかった。

### 集石遺構

A-No.1 トレンチで検出された遺構である。

第10層の暗茶褐色粘質土中にあって、大小さまざまな河原石を約1m四方の範囲にわたり、平らに、堅固に敷きつめてある。石の下からは、灰と木炭が検出されたが、直接、時期を決定できるような伴出遺物はなかったが、層位関係からみて溝状遺構との関係が考えられる。

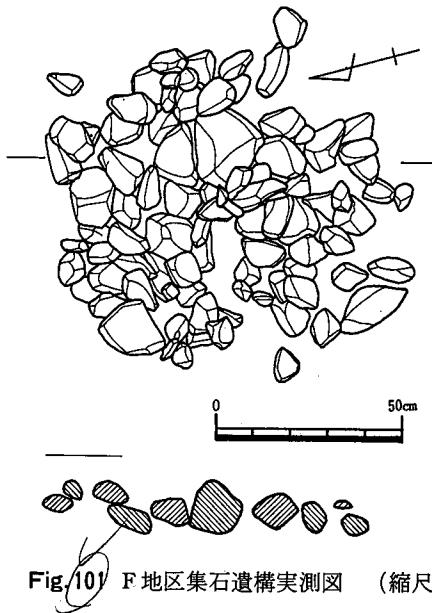


Fig.10 F地区集石遺構実測図 (縮尺 $\frac{1}{20}$ )

## 第VII章 石器について

### 1. 石鏃形態分類について

蒲田遺跡出土の石鏃総点数は、427点である。前にものべたごとくこれらの石鏃は、多種多様の形態を持つわけであるが、その特徴的な形態を示す点を一つの基準として、素材・形態・技術・先端部・脚部・脚部抉込部を総合し、特に形態と技術と脚部抉込の形態・先端部の状態に重点をおき分類基準とした。なおこの分類は、現在まで発表されている石鏃の形態分類とは、多少異なるものである。

石鏃I型→三角形の形態を持つ。このI型は、脚部・先端部の形態で3つに区分できる。

(付図Fig.4・7・9・10・12) 表参照。

①脚部にわずかな抉込部がみられ、先端部は尖るもののが主体的。15点。 ②脚部が直線的な形態を持ち、先端部が尖る。12点。 ③脚部が丸みを持つ形態で先端部も丸みを持つ。12点。

石鏃II型→剝片鏃と称せられる石鏃で抉込部の形態で5つに区分できる。(付図Fig.4・7・9・10・12) 表参照。

①周辺のみに剥離がみられ、脚部抉込部は楕円形に近い形態。2点。 ②片面はすべて二次加工がなされるが、裏面は、わずかな剥離しかみられない。1点。 ③脚部がふぞろいの形態を示す扁脚鏃と称せられるもので、抉込部がわずかなものと深く抉込部のあるものがあり、先端部は、尖る例が多い。11点。 ④片方が破損しているがむしろ脚部がふぞろいの石鏃である。ただこの石鏃が未製品なのか、また別な器種かな、不明である。7点。 ⑤剝片の部分が大部分で形態的にはふぞろい。5点。

石鏃III型→鋸歯鏃（有刺形鏃）を第III型とした。この中で4つに区分できる。(付図Fig.4・7・10・12) 表参照。

①先端部と脚部がほぼ半々を示し脚部抉込は深く梯形を示す。脚部は内彎し脚部末端が丸みを持つ。9点。 ② ①とほぼ似かよっているが脚部形態が①より抉込部が深く末端部が尖る。5点。 ③ ①②と同様の形態を持つが脚部が平坦面を持つ。3点。 ④先端部のみの資料であるが、脚部から先端部にかけてほそく、断面は丸みを持ち、先端部は鋭利である。12点。

石鏃IV型の特徴は、脚部が全体の長さの約2分1ほどあり、先端部の鋭利な点を上げることができ、これは、長脚鏃と称せられているものである。細分すると3つにわけられる。(付図Fig.10・12) 表参照。

①脚部が内彎する形態を持つが、脚部と胴部との境でわずかに外彎するため先端部の角度は鋭角になる。脚部は丸みを持ち抉込部は、長楕円形を示す。5点。 ②脚部の抉込部が3分の2ほどで、脚部は直線的な側邊を形成し、長楕円形の抉込部を持つ。1点。 ③脚部抉込形態が、

梯形を示す点と、側辺部が直線上を示す形態で、抉込が2分の1ほどをしめる。2点。

石簇V型→従来鍬形と称せられてきた石簇である。細分すると3つに区分できる。(付図Fig.4・9・10・12)表参照。

①脚部の側辺が内弯する形態を持ち、脚部の末端部は、平坦である。5点。②脚部の側辺は直線的であるが、脚部の末端部が平坦と抉込部が円形を示すため末端が広い状態を持つ。6点。

③側辺部は、直線的であり、脚部は、尖る形態を持つ。2点。

石簇VI型→この特徴は、脚部にみられ全体の5分の1程度しかなく、脚部と胴部との境には、抉込部があり、脚部抉込は、橢円形である。先端部は、尖る形態か丸みを持つ形態であるが、脚部と胴部の境にわずかな抉込があるため胴部は、ふくらみをもつ形態となる。5点。

(付図Fig.4・10・12)表参照。

石簇VII型→この特徴は、先端部・脚部・全体の形態にある。先端部は丸みを持ち、脚部抉込部は、橢円形か梯形を示す。全体的な形態として横幅の広い寸胴であり、断面形態は、薄いレンズ状を示す。(付図Fig.4・10)表参照。8点。

石簇VIII型→VIII型の特徴は、抉込部の中央に小さな舌を持つことが特徴である。形態的には、わずかな抉込部を持ち先端部は丸みを持つ。(付図Fig.4・7)表参照。4点。

石簇IX型→細石簇をIX型とした。(付図Fig.4)表参照。2点。

石簇X型→この特徴は、脚部がふぞろいで、従来扁脚簇と称せられる石簇。(付図Fig.4・7・9・12)表参照。12点。

石簇XI型→形態的には、二等辺三角形に抉込がある状態を示す。脚部抉込部は、梯形を示す。先端部は、尖る形態。細分すると2区分。(付図Fig.4)表参照。

①脚部側辺が内弯する形態を持ち、脚部末端部が丸みを持つか尖る。10点。②脚部側辺が直線的であるため横に広い形態を持ち、末端部は、尖る形態を持つ。8点。

石簇XII型→この石簇は、脚部抉込部に特徴があり、形態的には、二等辺三角形を示す。脚部抉込部は、三角形を示し、わずかな抉込しないため横幅の広い形態(付図Fig.4・10・12)7点。

石簇XIII型→大型石簇で、脚部が全体の3分の1未満で、脚部抉込部が梯形を示す。横幅が広く、先端部は尖っている。(付図Fig.7・10・12)表参照。9点。

### 石簇の破損部分について

石簇のどの部分が破損しているかという問題が生じた時の資料にその部分と点数を記しておきたい。①完形品76点、②先端部のみ破損22点、③脚部のみ破損52点、④先端部、脚部破損22点、⑤半割状態17点、⑥胴部中途より、下部破損43点、⑦先端部と片方の脚部破損34点、⑧片方の脚部のみ破損81点、⑨脚部(片方)のみ現存80点、総計427点。また先端部と脚部との破損の数は、先端部の破損78点、脚部の破損176点である。

## 折・切断剝片と台形状石器・台形様石器について

従来、旧石器時代の遺物の中で特に台形石器製作過程においてタルドノア技法か、上場技法と称せられる折断技法が問題にされたことがある。しかし上場技法の場合、接合する資料を示し、その折断した剝片が、プロト台形石器としてとらえられると考えている。これに対しタルドノア技法は、日本においてその資料は発見されていはず、その存在は、不明確である。しかしながら製作技法上の切断・折断技法の有無に対してあまり重要視されていないのが現状であろう。この問題を一つのテーマとして発掘調査を行なってみた。その結果、折断剝片と切断剝片の二種類に区別することができた。折断剝片の場合、その折断方法は、剝片の稜から打撃による折断が主体であるが、裏面・横位からの打撃による折断もみられる。つまり折り取るといつても打撃によるもので（これは実験の結果によるもので、目的的に折り取ることは可能であった）決して打撃なしでは、目的的に折断することは不可能であった。また、裏面・横位と正面からの打撃による面を観察してみれば、正面であれば直角に近い状態である。が、裏面・横位からのものは、step-flaking的な状態が残ることが観察できる。一方切断剝片を観察してみるとノッチ状の剝離がみられ切断剝片の断面を見るならば両端に剝離が認められる。つまりノッチのはいった部分に目的的に打撃を行なって折り取る方法が観察できる。以上のことから蒲田遺跡の場合明らかに折・切断技法が存在したことが明らかになった。しかし切断技法が、タルドノア技法と同一のものか否かは、より多くの資料により判断する必要がある。

台形状石器→折・切断剝片の中で、両端を切・折断した剝片で台形の形態を示すものがある。これをプロト台形石器として規定されるか否かという問題が提起できる。これを一つの技法として台形石器の範中に組み入れる場合、その刃部となる部分を観察しなければならない。刃部の部分に使用痕的刃こぼれがあるか否かが問題になる。一応ここでは、台形石器の範中に組み入れ、台形状石器と称しておきたい。

台形様石器の形態分類（付図Fig.- 4・5・6・7・8・9・10・11・13）表参照

- 1類→枝去木型に類似する形態を持ち、横長剝片を素材とする。側面形成は、bluntingではなく薄く剥ぐ方法である。刃部の部分は、素材の面をそのまま残す。
- 2類→大型に属し、側面形成は、大まかな剝離によるものと折断した面を持つ。
- 3類→両側辺にbluntingを加えた小型の台形石器。縦長剝を素材としている。
- 4類→片面は、blunting、他の片面は、切・折断面のままで、小型と中型の台形様石器。
- 5類→両側面とも切・折断した状態で、形態的に台形石器に酷似する。台形状石器と称した石器である。ただ基部の部分と考えられる部分には、まったく使用痕的刃こぼれはなくすべて刃部と思われる部分にある。また基部と思われる部分は、何の加工も認められない。

## 石核と細石核・再生剝片の区分とナイフ形石器

### 石核について

石核は大別して3つに区分ができる。(付図Fig.7・8・10・12)

a類→8-50で示すごとく上下に一打による平坦面を持つが、下位からの剝離工程は、まったく認められず、すべて上位からのものである。この意味は、剝片の状態をあらかじめ規定するための下位の打面か、もしくは、終了形態が上位からの剝離のみであったかの2つである。またこの石核は、背面にも剝離工程を行なった形跡を持ち、この背面も上下の平坦打面を持つが、その部分は、正面観からみた場合両左右に打面が形成されている。つまりこの石核は、正面の剝離工程終了後に背面の剝離工程を行なっている。

b類→打面がすべて平坦打面(自然面か一打による平坦面)であり、剝片の離面状態は、打面から行なわれている。しかしこれらの石核から剝離された剝片は、決して良質のものではないが1つの法則性を持った剝離がなされている。つまり左右の剝離から中央部への剝離という1つのパターンがあり、側面形成もすべて打面からによる剝離がなされたことを物語っている。

(付図Fig.7-11・59、10-51、12-99)

c類→打面は、一打か自然面による平坦打面であり、一方向からの剝離工程をくり返すため背面は自然面を持つ。剝離方向は、3方向が示されているが、その中でも上下の剝離方向が主体をしめる。つまり下位から横位、そして上位からの剝離工程をくり返すため側面形成はまったくみられない。これも1つの法則性を持った石核といえる。(付図Fig.7-10,8-50・53,10-10)

以上3類のほかに石核再生剝片があるが、この石核再生剝片をみると1つの法則性を持った石核が存在していたことを物語り、それもBladeを剝離した可能性を持つ石核が存在していたことが明らかである。

### 細石核について

細石核を形態的に区別すると、舟底形細石核(半舟底も含む)と角錐形(角柱形を含む)の2つに区分できるが、細石核再生剝片からみて舟底・半舟底の形態を持つ細石核が主体的。また残核からも同様の結果がえられた。

### 再生剝片について

再生剝片には、細石核再生剝片と石核再生剝片があるが、どの部分を再生された剝片であるかについては、両者は、同一の再生がなされている。この再生剝片を区別すると4つになる。

1. 打面再生剝片→打面の再生を目的として目的的に剝離された剝片である。34点出土しているが、この剝片が剝離された打撃方向は、石刃剝離面に対して横位・正面・背面の3か所からの剝離方向を持ち、剝離角度は、打面を一線上におくなれば斜めの角度を持つ。1つの疑問点は、打面再生は、何を意味するものかであろう。打面が自然面を持つ例、一打による平坦

打面を持つ例、調整剝離はあるが、step-flakingによって打面からの剝離が困難である例の場合で、確実な剝離工程が不可能な状態になった時に行なうことによって新しい打面を形成しなおしていると考察できる。

### 2. 側面再生剝片→側面の形成・再生を目的に剝離された剝片。

剝片が剝離された打撃方向は、下位・打面・横位と3方向から剝離されている。この側面再生剝片の剝離された目的は、側面の自然面を剝離し、新しい側面を形成する場合と石刃剝離工程で新しく側面を形成しその部分にも石刃剝離を行なっていくための形成であろう。

### 3. 正面再生剝片→step-flaking等により次の剝離が困難をきたした場合。

この剝片の目的は、step-flakingによって生じた剝離面を新しく再生するためのものである。

剝離の打撃方向は、打面、下面、横位の方向から剝離されている。

### 4. 残核→上記の1～3までの再生剝片が剝離された石核で再生の困難なものである。また末端部の残核もある。これも一種の再生剝片と考えられるものであろう。

#### ナイフ形石器について

38点のナイフ形石器が出土している。形態的には、多種多様であるがその特徴についてのべることはさけ、層位的に考察するならば、A地区I層より17点出土しているが、1点だけ中型に属するだけで、後は小型である。A地区II層下面に小型が2点出土し、II層上面には出土していない。III層でも2点の小型が出土している。E地区のI層から小型が3点、II層上面から1点、下面6点でいずれも小型に属する。III層のナイフ形石器は4点出土しているが、これらは、1点をのぞいて中型に属する。このことからE地区のIII層とII層下面との素材・技術・形態の相違が明らかである。A地区は、II層下面、III層とも小型でありE地区ほどの相違はみられない。

#### 磨製石器と磨製石製品について

磨製石器は、石斧・石庖丁・磨製石鏃が各地区から出土している。石斧は、大形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・撥形石斧・蛤刃石斧・扁平両刃石斧の5つに形態的に区分できる。石庖丁の形態は、すべて刃部外彎形を示す。ただ1点未製品があるが、この製作工程は、一部研磨が開始されていることから、研磨にはいる直前の石器であろう。磨製石鏃は、2点とも全磨製で、朝鮮式磨製石鏃と称せられる石器である。磨製石製品は、紡錘車・砥石がある。このほかすり石と考えられる石器と、扁平礫の両端に抉込部を持つ石舞がある。

#### E地区出土石器総数

E地区出土石器で、表に記入していない石器は、I層の不定形剝片1538点・折断剝片94点・切断剝片20点、II層上面では、不定形剝片106点・折断剝片64点・切断剝片25点・石鋸状石器1点、II層下面では、不定形剝片14点・尖頭器1点・折断剝片15点・切断21点、III層では、不定形剝片87点・折断剝片137点・切断剝片11点の合計2134点で総数は、7038点である。

Tab. 30 蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覧表

器種名 地区	細石刃	細石核	細石核 再生剝片	石核	石核再 生剝片	ナイフ 形石器	台形 様石器	彫器	ドリル	石鏃	二次加 工石器	Scra- per	残核	縦長 剝片	横長 剝片	小石刃	碎片	計	
A 地区	143	13	32	25	31	25	24	10	1	246	1066	45		193	21	55	6886	8816	
B 地区	2				1		1				13	8		5		5	305	341	
D 地区	2	2		20	1	2	2	1			14	41	4		2	1	1	69	218
E 地区	719	14	15	29	13	15	13	8		167	471	32	9	125	33	69	3172	4904	
F 地区				1			2				1			2			6	12	
計	866	29	47	76	45	43	42	19	1	427	1592	89	9	327	55	130	10438	14291	

## II層下面とIII層との時期区分

II層下面とIII層との区別は、ナイフ形石器が小型から中型の形態変化と製作技術の多少の相違である。また細石核では、II層下面が舟底形・角錐形を示すのに対してIII層は、半舟底の形態である。台形様石器の出土をみてみると台形様石器が出土している層序は、II層下面までIII層には、まったく認められることや、石核・石器の組み合せからみても、層位的にも、時期的に区別される可能性が多分にある。また細石核再生剝片・石核再生剝片よりその剝離技術を考えてみると、これら再生剝片は、P.149で述べたごとく4つに区分が可能であるが、これを剝離技術の点から考察すると、一定方向から剝離した離面を持つタイプと上下二方向から剝離した離面を持つタイプが判明した。また打面形成は、平坦打面のもの・平坦打面であるが剝片を離面する直前に調整を加えたもの・自然面を打面としたもの・調整打面を持つものとに区別できる。II層下面是、平坦面に調整を加えたもの・平坦打面・調整打面を持ち、III層は、一打による平坦打面・自然面を打面としたものに区別できる。また石核再生剝片・細石核再生剝片の形態から石核復原を考えると、角錐形・半舟底形・舟底形・半円錐形・円錐形が可能である。

### A・E地区にみられる石器の出土量に対する考察

旧石器・縄文時期の石器を総合すると石器の総数は、14291点となりあまりにも多量の出土である。それを細分したのがTab. 1・Tab. 28・Tab. 30で示した点数でこの量的な石器数でも1つの考察ができる。また石材として最も多量に使用されたのは、黒耀石(Obsidian)であるが、この黒耀石でも、佐賀県の腰岳、長崎県の東浜・針尾島、大分県の姫島と各地の原産地の黒耀石が使用されている。特に佐賀県の腰岳産は、全石器の90%をしめている。この点と他の多くの資料で考えてみると、少なくとも8つの生活の跡が考えられ、縄文時期の石鏃の量、剝片・削片の量からみて石器製造を行なった場所と考察できる。また旧石器時代の遺物量からも生活跡が考察でき、E地区のブロックからも石器製造場所としても考察できる。しかしながらそれらしい遺構の確認は、残念ながらできなかった。この点、柏屋郡の台地(南側)の破壊がおしまれてならない。

打面を持つ例、調整剝離はあるが、step-flakingによって打面からの剝離が困難である例の場合で、確実な剝離工程が不可能な状態になった時に行なうことによって新しい打面を形成しなおしていると考察できる。

#### 2. 側面再生剝片→側面の形成・再生を目的に剝離された剝片。

剝片が剝離された打撃方向は、下位・打面・横位と3方向から剝離されている。この側面再生剝片の剝離された目的は、側面の自然面を剝離し、新しい側面を形成する場合と石刃剝離工程で新しく側面を形成しその部分にも石刃剝離を行なっていくための形成であろう。

#### 3. 正面再生剝片→step-flaking等により次の剝離が困難をきたした場合。

この剝片の目的は、step-flakingによって生じた剝離面を新しく再生するためのものである。

剝離の打撃方向は、打面、下面、横位の方向から剝離されている。

#### 4. 残核→上記の1～3までの再生剝片が剝離された石核で再生の困難なものである。また末端部の残核もある。これも一種の再生剝片と考えられるものであろう。

#### ナイフ形石器について

38点のナイフ形石器が出土している。形態的には、多種多様であるがその特徴についてのべることはさけ、層位的に考察するならば、A地区I層より17点出土しているが、1点だけ中型に属するだけで、後は小型である。A地区II層下面に小型が2点出土し、II層上面には出土していない。III層でも2点の小型が出土している。E地区のI層から小型が3点、II層上面から1点、下面6点でいずれも小型に属する。III層のナイフ形石器は4点出土しているが、これらは、1点をのぞいて中型に属する。このことからE地区のIII層とII層下面との素材・技術・形態の相違が明らかである。A地区は、II層下面、III層とも小型でありE地区ほどの相違はみられない。

#### 磨製石器と磨製石製品について

磨製石器は、石斧・石庖丁・磨製石簇が各地区から出土している。石斧は、大形蛤刃石斧・扁平片刃石斧・橢形石斧・蛤刃石斧・扁平両刃石斧の5つに形態的に区分できる。石庖丁の形態は、すべて刃部外縁形を示す。ただ1点未製品があるが、この製作工程は、一部研磨が開始されていることから、研磨にはいる直前の石器であろう。磨製石簇は、2点とも全磨製で、朝鮮式磨製石簇と称せられる石器である。磨製石製品は、紡錘車・砥石がある。このほかすり石と考えられる石器と、扁平盤の両端に抉込部を持つ石鍤がある。

#### E地区出土石器総数

E地区出土石器で、表に記入していない石器は、I層の不定形剝片1538点・折断剝片94点・切断剝片20点、II層上面では、不定形剝片106点・折断剝片64点・切断剝片25点・石鋸状石器1点、II層下面では、不定形剝片14点・尖頭器1点・折断剝片15点・切断21点、III層では、不定形剝片87点・折断剝片137点・切断剝片11点の合計2134点で総数は、7038点である。

Tab. 30 蒲田遺跡各地区出土の打製石器一覧表

地区	器種名	細石刃	細石核	細石核 再生剝片	石核	石核再生 剝片	ナイフ	台形 様石器	彫器	ドリル	石鏃	二次加 工石器	Scra- per	残核	縦長 剝片	横長 剝片	小石刃	碎片	計
A 地区	143	13	32	25	31	25	24	10	1	246	1066	45		193	21	55	6886	8816	
B 地区	2				1		1	1				13	8		5		5	305	341
D 地区	2	2		20	1	2	2	1			14	41	4		2	1	1	69	218
E 地区	719	14	15	29	13	15	13	8			167	471	32	9	125	33	69	3172	4904
F 地区				1			2				1			2			6	12	
計	866	29	47	76	45	43	42	19	1	427	1592	89	9	327	55	130	10438	14291	

## II層下面とIII層との時期区分

II層下面とIII層との区別は、ナイフ形石器が小型から中型の形態変化と製作技術の多少の相違である。また細石核では、II層下面が舟底形・角錐形を示すのに対してIII層は、半舟底の形態である。台形様石器の出土をみてみると台形様石器が出土している層序は、II層下面まででIII層には、まったく認められることや、石核・石器の組み合せからみても、層位的にも、時期的に区別される可能性が多分にある。また細石核再生剝片・石核再生剝片よりその剥離技術を考えてみると、これら再生剝片は、P.149で述べたごとく4つに区分が可能であるが、これを剥離技術の点から考察すると、一定方向から剥離した離面を持つタイプと上下二方向から剥離した離面を持つタイプが判明した。また打面形成は、平坦打面のもの・平坦打面であるが剝片を離面する直前に調整を加えたもの・自然面を打面としたもの・調整打面を持つものとに区別できる。II層下面是、平坦面に調整を加えたもの・平坦打面・調整打面を持ち、III層は、一打による平坦打面・自然面を打面としたものに区別できる。また石核再生剝片・細石核再生剝片の形態から石核復原を考えると、角錐形・半舟底形・舟底形・半円錐形・円錐形が可能である。

## A・E地区にみられる石器の出土量に対する考察

旧石器・縄文時期の石器を総合すると石器の総数は、14291点となりあまりにも多量の出土である。それを細分したのがTab. 1・Tab. 28・Tab. 30で示した点数でこの量的な石器数でも1つの考察ができる。また石材として最も多量に使用されたのは、黒耀石(Obsidian)であるが、この黒耀石でも、佐賀県の腰岳、長崎県の東浜・針尾島、大分県の姫島と各地の原産地の黒耀石が使用されている。特に佐賀県の腰岳産は、全石器の90%をしめている。この点と他の多くの資料で考えてみると、少なくとも8つの生活の跡が考えられ、縄文時期の石鏃の量、剝片・削片の量からみて石器製造を行なった場所と考察できる。また旧石器時代の遺物量からも生活跡が考察でき、E地区のブロックからも石器製造場所としても考察できる。しかしながらそれらしい遺構の確認は、残念ながらできなかった。この点、柏屋郡の台地(南側)の破壊がおしまれてならない。

## 第VIII章 おわりに

蒲田遺跡出土の石器について明確にできた点とこれからの問題点にふれてみたい。

1. この遺跡は、花崗岩風化土よりなる土層である。ゆえに粘質土層と称しているが、それは、肉眼的、体験的結果によるもので学術的な研究の結果ではない。
2. 旧石器時代と縄文時代の遺物包含層を把握できた。
3. 時期的には、2つ考えられるが、石器を一時期多量に製作した可能性を持つ遺跡で、石器出土総点数は、14 291点出土している。
4. 後期旧石器時代終末期の遺物包含層をA・B・E地区の3か所で把握でき、縄文時代の包含層も同時に把握できた。
5. 後期旧石器時代の終末期の場合に、A、E地区とも2つの時期を持つ可能性がある。
6. 折・切断剝片のその実態を明らかにできたと同時に規定の問題が生じてきた。
7. 石核再生剝片・細石核再生剝片の細分化（打面・側面・正面再生剝片）と規定の問題。
8. 台形様石器と台形状石器の存在と規定の問題。
9. 石鏃形態分類の規定問題。

以上が蒲田遺跡の石器について明確になった点であるが、このほかにも、石器の組成について、石器分布のブロックについて、石器の詳細な説明、出土遺物の実測図、周辺関連遺跡との対比による編年的な位置づけ等多くの問題を取り組みたかったが、この報告書では、より多くの資料をのせることを目的としたため、これらの多くの問題は、後日機会があれば述べてみたい問題ばかりである。

弥生時代の遺構・遺物は、A・D・E地区で検出されたが、いずれも葬送に関連するものである。台地西端部に位置するA地区第1地点では、L字状の溝状遺構に埋まれた部分から、甕棺墓・土塙墓が発見され、台地のほぼ中央部には、有茎磨製石鏃を出土した土塙墓をはじめとして数基の土塙墓、台地東部のD地区でも、甕棺墓と土塙墓が検出された。したがって同一台地上に3か所の墓地が存在していることが知られた。台地中央部の土塙墓群の時期については、有茎磨製石鏃の類例より、弥生前期末といらむの推測が可能であろう。第1地点の甕棺は、中期中葉・中期後葉・後期前半の3時期にわたっている。これに対し、D地区の甕棺は、中期中葉・中期後葉の2時期で、後期前半まで下がるものはないようである。したがって、すくなくとも弥生中期中葉から後葉にいたる時期に、台地の東西両端に、墓地が形成されていたことになる。第1地点、D地区ともに、祭祀と思われる遺構が付随しており、特に、第1地点では、溝中より多量の遺物が出土したが、これらは、甕棺の示す時期と差なく、ある一定期間の行動結果としてとらえられよう。ただ、これがどのような意識の反映であるか、またその意識の反映が、甕棺墓の内で、どのような現象として表出されるか問題となろう。したがってA地区第1地点甕棺、土塙墓とD地区甕棺、土塙墓とは、結果としての差としてとらえるばかりでなく、意識の差として把握されねばならないであろう。

古墳時代の遺構は、蒲田1・2・3号墳に代表されるが、これらは、すでに詳述したので、ここでは、古墳時代の住居跡とその出土遺物について記す。住居跡は7基検出され、第5・6号住居跡で切り合い関係がみられる以外は、遺構の重複はない。遺物は、第1・2・4・5・6号住居跡より多量に出土しており、椀、杯、甕、壺形土器の器種が知られ、同一器種における分類は、各住居跡出土遺物にも矛盾なく該当させることができた。特に良好な須恵器を出土した第2号住居跡では、土師式土器の器種も豊富で、共伴した須恵器から、ある程度の年代推定が可能である。須恵器では、遅くとも5世紀終末から6世紀初頭が考えられよう。後世の柱穴が重複していたために、住居跡に伴う柱穴と後世の柱穴とが混在し、住居跡の主柱穴の認定には困難をきわめた。また住居跡内においても、主柱穴の存在が疑問とされるものがあり、上部構造、さらには住居跡外の柱穴も注意する必要があろう。

中国産磁器類を出土する遺構を、敷石・溝・集石遺構などに分けて記したが、前述したように、構造・機能的に関連していることが、発掘調査の進展に伴い明瞭となった。南北敷石・東西敷石は、ともに両側に小溝を持つ（東西敷石の東半分は、南側の小溝はない）が、南北敷石東側構は、北より右まわりに、東西敷石南側溝→第II溝→集石→南北敷石東側溝とつながり、南北敷石→東西敷石→第II溝→集石、東西溝北側溝→第I溝→集石遺構と、各々つながる。これらの遺構は、結果としての関連性が認められるにすぎず、その性格、機能（意識・原因）についてはなんら触れることはなかった。南北敷石は、東西敷石が平坦部をなすのに対して、蒲鉾状に、中央部が高くなっている。発掘時は、敷石両側部にも中央部敷石と同一レベルで、多量の石が存在していた。さて、敷石遺構の機能であるが、単なる区画とするか、あるいは区画の意も合わせ持つ道路、さらには、溝などが考えられる。これら種々の推測は、各々単独にありえず、またその推測の肯定・否定両面の性格を持っており、单一的には解明しがたいであろう。たとえば、台地上における区画とすれば、その対象とする・なるものの存在を明確にする必要がある。敷石を溝とすれば、当然のごとく排水という機能が最優先せねばならない。しかし、敷石の両側には小溝を持っており、敷石遺構自身には、排水の機能はなく、また、敷石の必要性もない。ただ、敷石遺構の両側溝は、充分に排水機能を持っている。特に東西敷石の北側溝は、東西両端部が高く、D-24グリッドにむかって低くなり、北溝へのびており、明らかに排水を目的としている。また道路とするには、石に高低があり、また東西敷石は、台地と並行しており、敷石部も平坦であることから、道路の可能性はあるが、南北敷石には、その積極的な資料を欠く。いずれの説も、推測の域を出るものではない。敷石の性格、機能については、決定的な説はなく、類例遺跡の増加に期待せねばならないが、遺構の規模・石の量などから、遺構掘削時には、集中的な労働力を必要としていることは明らかである。どの説にしても、敷石遺構のみを説明しうるにすぎず、本遺跡の全体におよぶところの性格、機能規定とは言いがたいのではあるまいか。中国産磁器類など多量な遺物は、敷石・集石などの遺構に関連する

別な遺構の存在を推測させるが、わずかに建物2棟を検出したにすぎない。しかし柱穴群の密集や、盤石などの状況からさらにその数は多かったものと思われる。

中国・朝鮮産磁器類は、白磁を5類、青磁を8類に分類した。敷石・集石・溝状遺構は、これら分類された磁器類のほとんどを持っており、蒲田遺跡の特徴と言え、また越州窯産の青磁を1点しか持たないことも特徴としてあげねばならない。特に高麗天日の瓶は優品で、遺構の時期推定に貴重である。宋錢の出土例は、多くの遺跡で知られ、時期推定の有効な遺物であり本遺跡出土の崇寧重寶も、柱穴群、さらには敷石遺構などの上限を指す一資料であろう。したがって、本遺跡の時期は、12世紀初頭鋳造の崇寧重寶、14世紀中ごろから製作されたという黒高麗、明代の青磁類、さらに井戸状遺構出土の土師皿・青磁などから、すくなくとも12世紀から15世紀の時期が考えられる。

このように、出土遺物から、ある程度の年代が推測されえるが、あまりにもその幅が大きく各遺構・遺物ともにさらに細かな分析・考察等を必要とし、文献的な裏づけ、周辺遺跡との関連など、その背景も問題とせねばならない。しかし、本遺跡のある多々良平野周辺については意欲的な注目すべき調査・考察も行なわれているが、西の早良平野、福岡平野に比較して、極端に少なく、いまようやくその端緒についたばかりといえる。したがって本遺跡の性格は、地域・地方史と遊離した関係で語りえるにすぎず、いましばらく類例遺跡の増加を待ちたい。

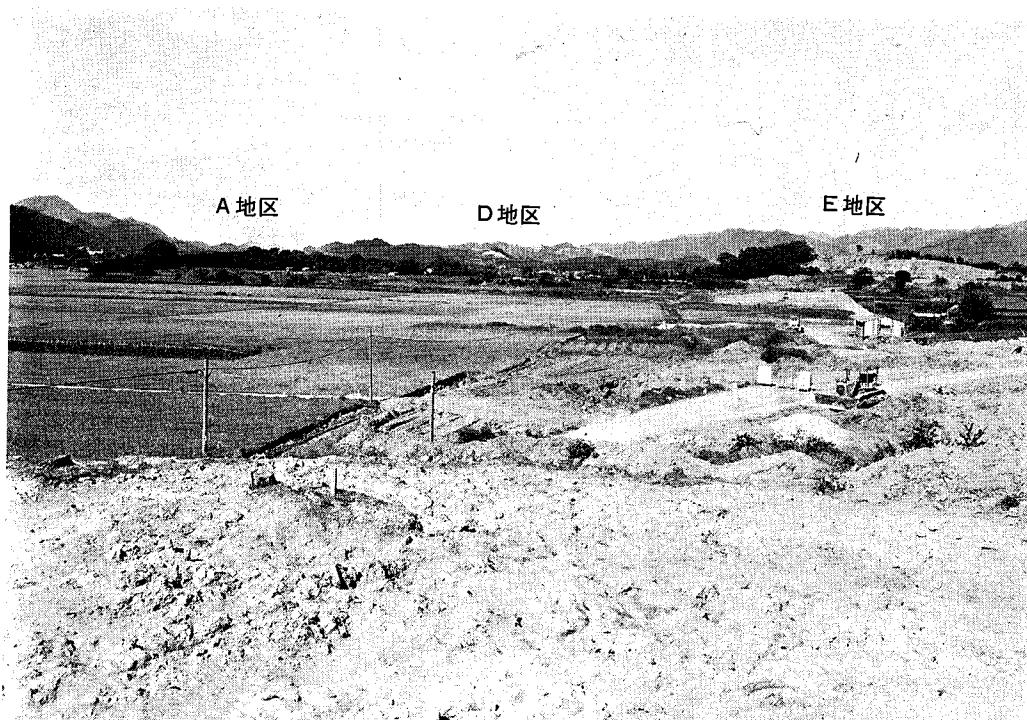
昭和47年4月から開始した発掘調査は、昭和48年8月に終了した。1年5か月という長期間の発掘作業であったが、建設工事と並行しての作業であったために、A・D・蒲田1号墳と各地区同時に着手するという不規則な作業をしいられ、各地区で原則とした全面発掘・最深部までの追求発掘も、やむなく断念せざるをえないことばかりか、充分な検討を加えての発掘作業をも許さない状況もあった。また、資料整理・報告書作成時にも、各々が新たな遺跡の発掘調査を担当することになり、本報告書作成にあたっての共同討議に徹底さを欠き、用語・内容の不統一・重複という結果となった。これは担当者の怠慢でもあり、本市の文化財行政の実態でもある。さらに印刷費の高騰も影響して、ページ数に著しい制限が加わり、遺構・遺物の説明、考察に多くの枚数をかけることができなかった。しかし、報告書という目的から、事実の報告につとめ、このため遺物台帳の表とできるだけ多くの実測図とを組みあわせることにした。この方法は、窮余の一策という感がないでもないが、一試行として認めていただければと思う。このような苦言を書くことは、今までご協力、ご尽力いただいた多くの人たち、そして遺跡・遺物に対して、裏切ることになり心からお詫びをし、反省したいと思う。かくして九州縦貫道は、3月13日に開通し、蓮華草につつまれていたあの静寂な蒲田遺跡は、いまはもうどこにもない。しかし、文化財行政、とくにその活用の問題は、いまこそその出発にあり、決意を新たにしている。

# 図版



1. 蒲田遺跡全景（航空写真）昭和47年8月撮影

2903



2. 蒲田遺跡遠景（西尾山古墳群より）

2904

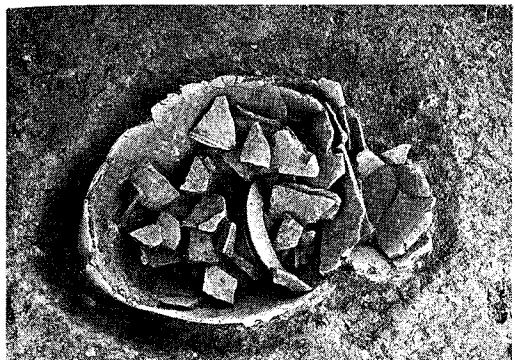
P L. 2 A 地区第 1 地点



1. A 地区第 1 地点全景



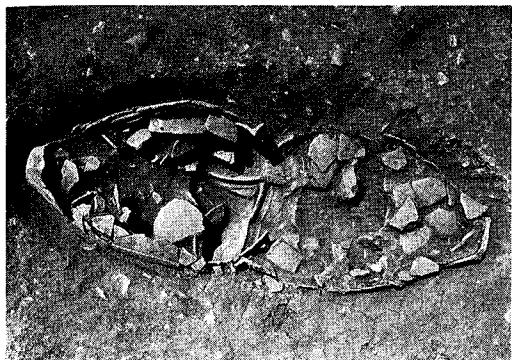
2. A 地区甕棺墓出土状况（第 2 ~ 4 · 6 号甕棺墓）



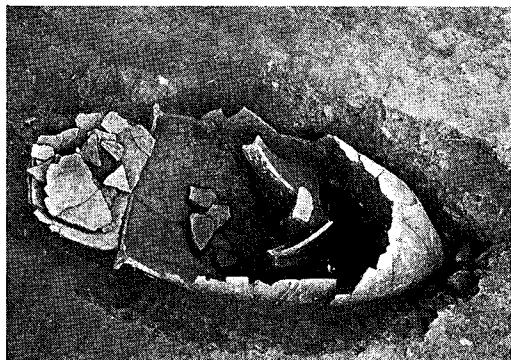
1. 第 1 号甕棺墓 1440



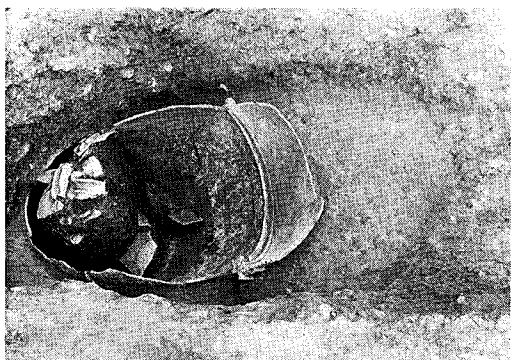
2. 第 2 号甕棺墓 1448



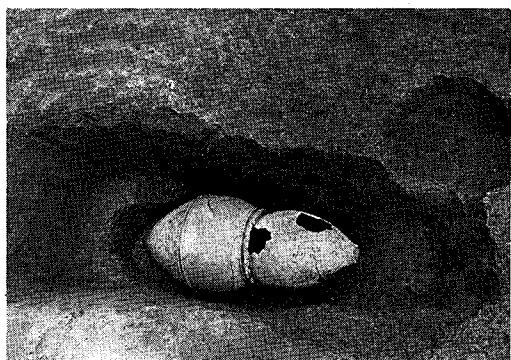
3. 第 3 号甕棺墓 1459



4. 第 4 号甕棺墓 1453



5. 第 6 号甕棺墓 1455



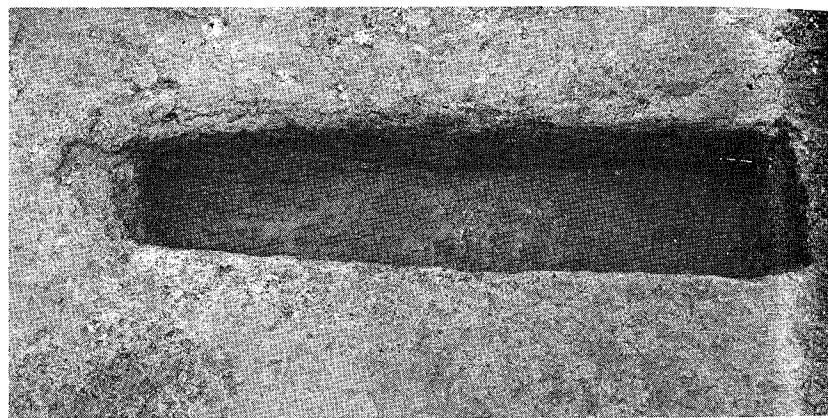
6. 第 7 号甕棺墓 1503

A 地区第 1 地点第 1 ~ 4 • 6 • 7 号甕棺墓

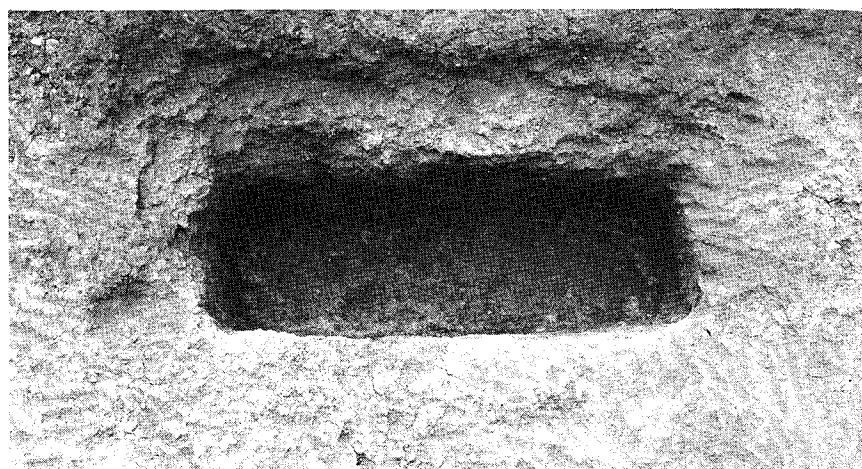
P L. 4 A 地区第 1 地点



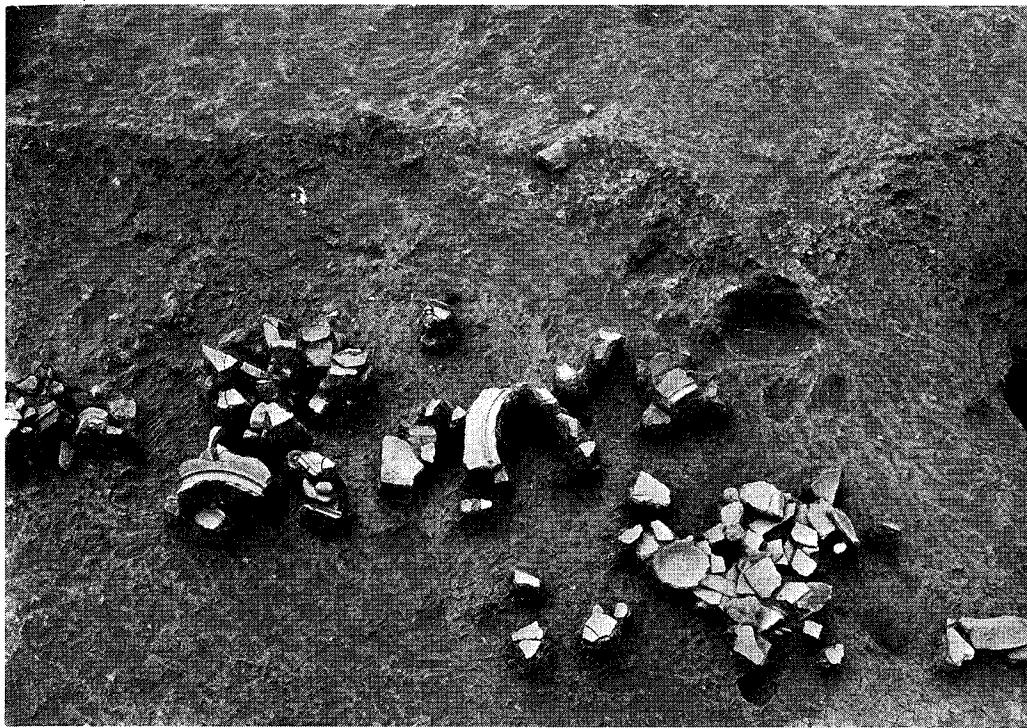
1. 第 1 号土塚墓（木棺墓）



2. 第 2 号土塚墓



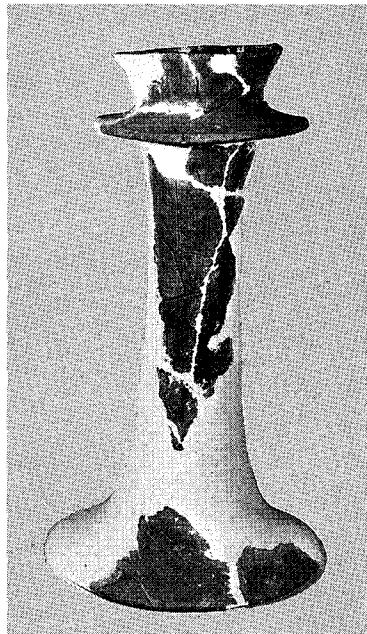
3. 第 3 号土塚墓



1. 溝状遺構内土器出土状況 (G-5 グリッド) 1528



2. 溝状遺構内土器出土状況 (H-5 グリッド) 1702



3. 筒形土器 (Y31) 0/031  
2170

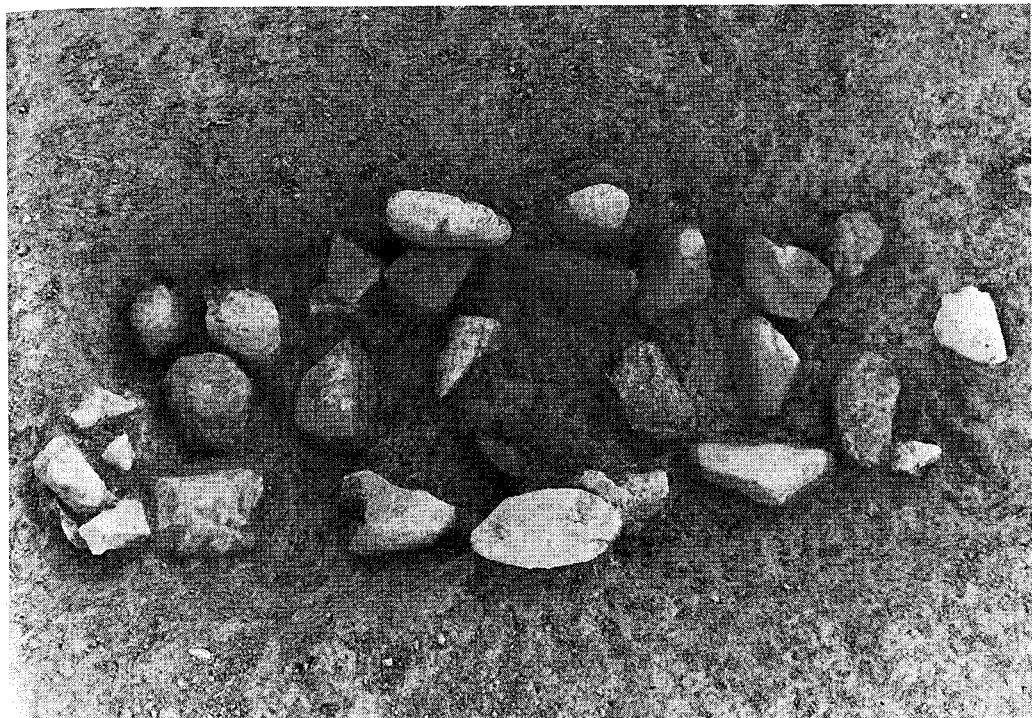
P L. 6 A 地区第2地点



1. A地区第2地点全景（航空写真）



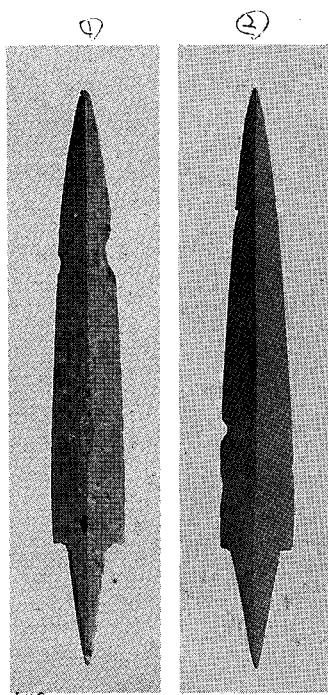
2. A地区第2地点土塚墓出土状況（第1・2号土塚墓）



1. 第 1 号土塚墓 890



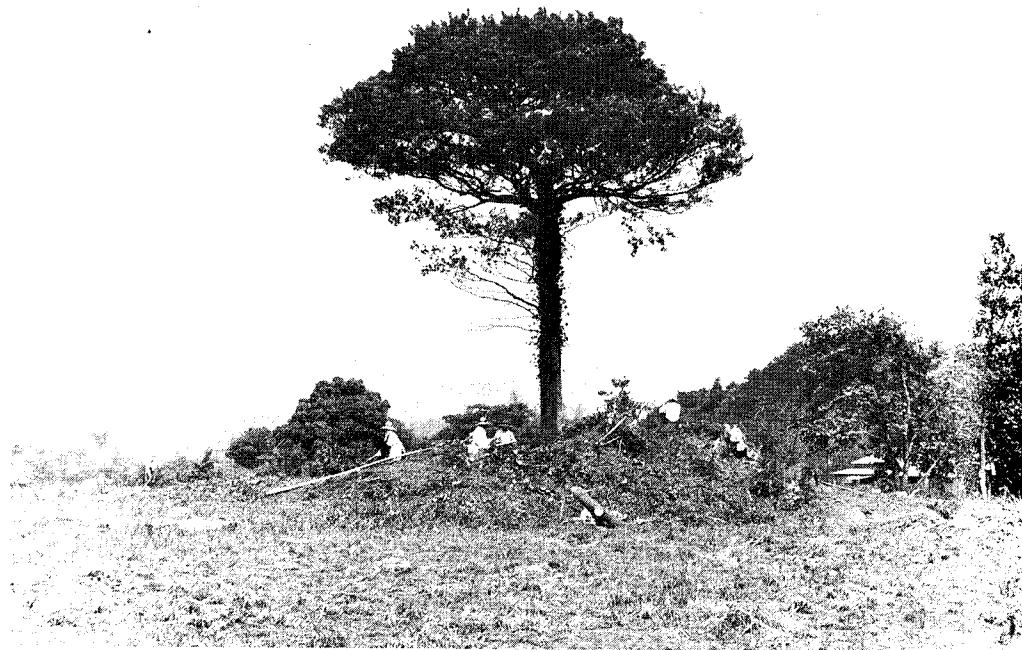
2. 第 2 号土塚墓内磨製石簇出土状况 653



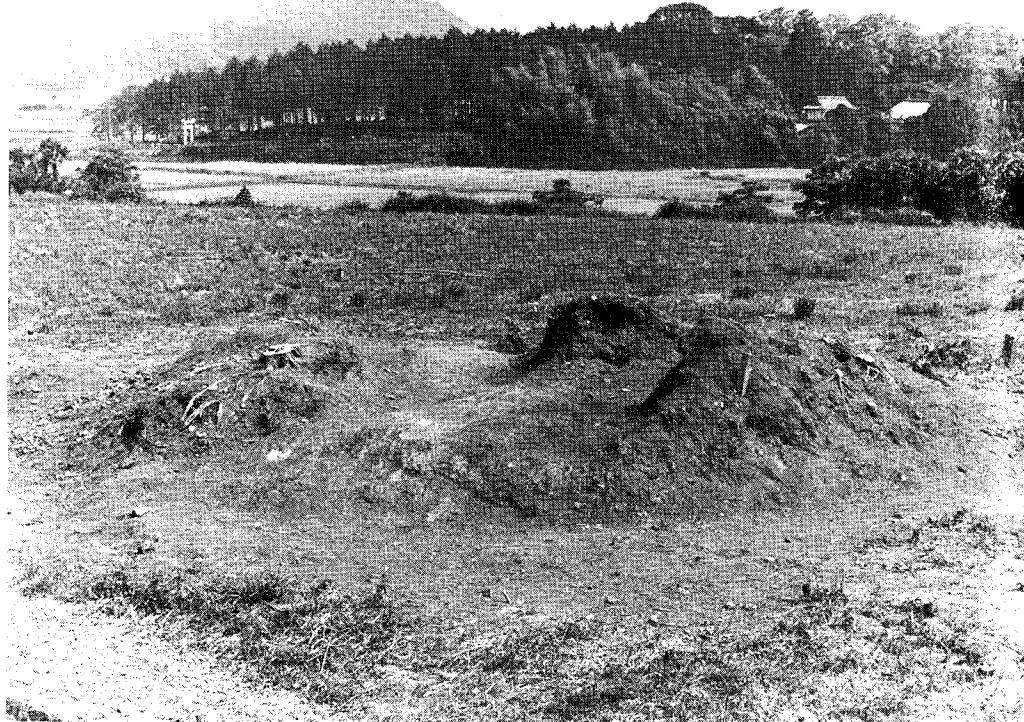
3. 磨製石簇

6110  
621310767

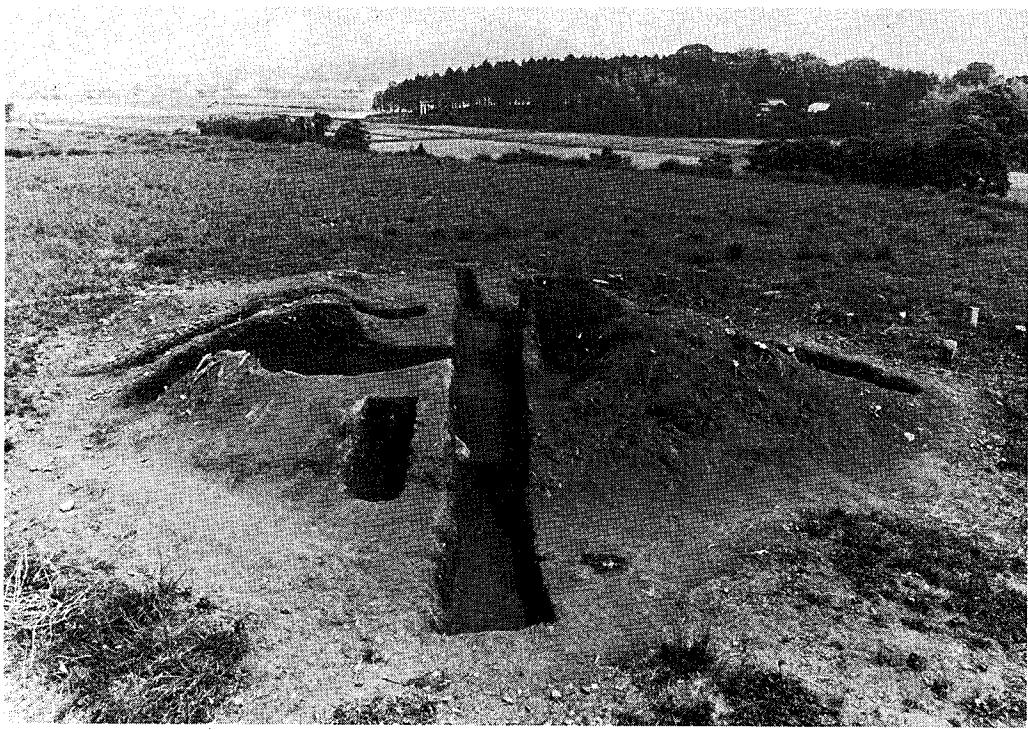
6115  
721310765



1. 蒲田1号墳全景（発掘調査前）



2. 蒲田1号墳全景（正面は部木八幡古墳群）



1. 蒲田1号墳全景 1-8



2. 蒲田1号墳南北トレンチ東壁断面 147

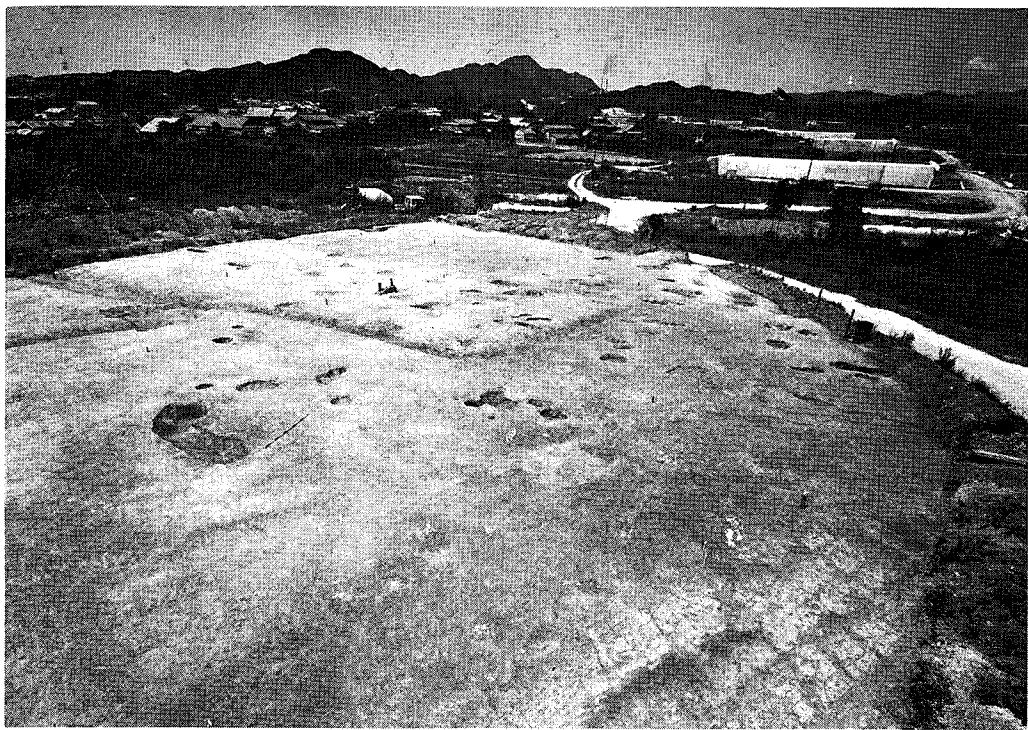
P L. 10 B 地区



1. B 地区全景 (航空写真)

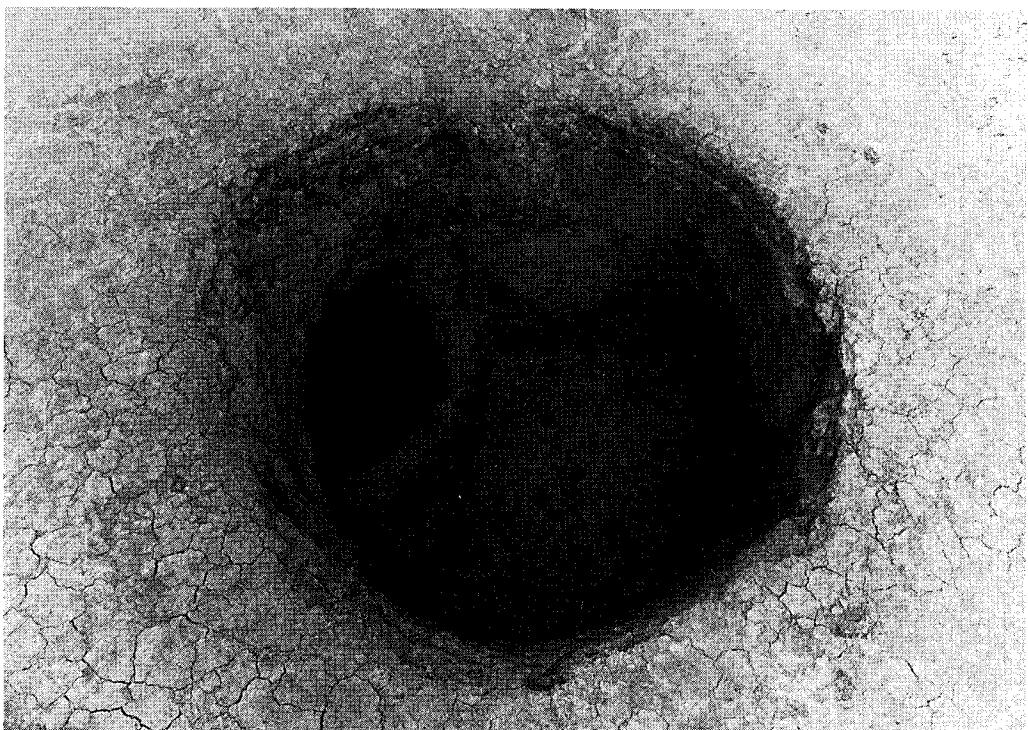


2. B 地区遺構出土状況①



1. B地区遺構出土状況②

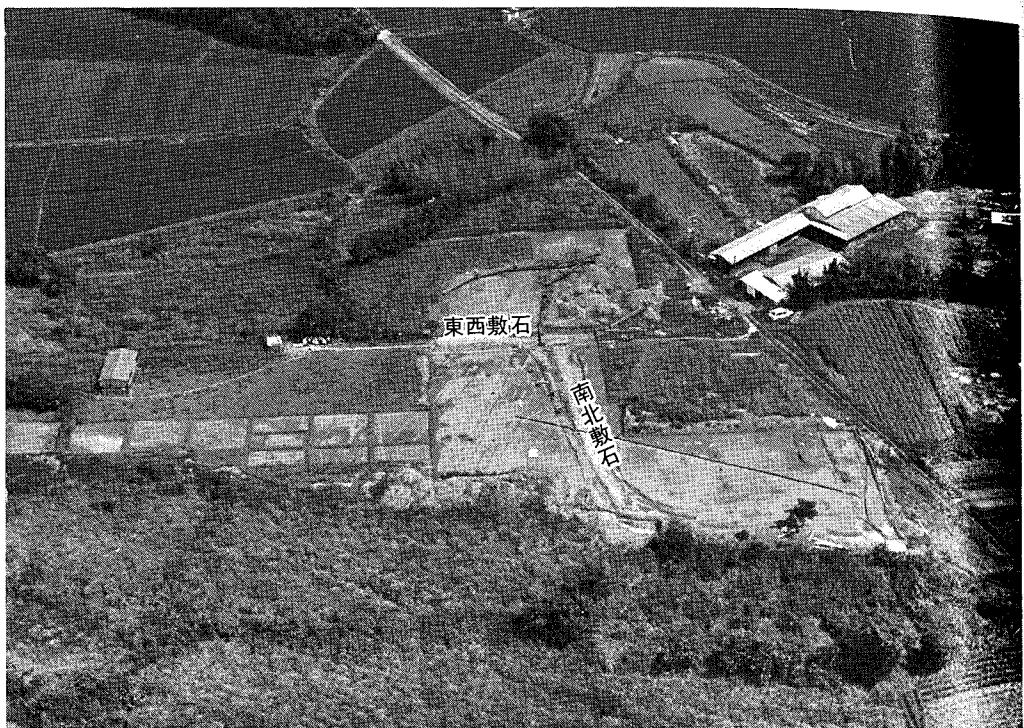
2898



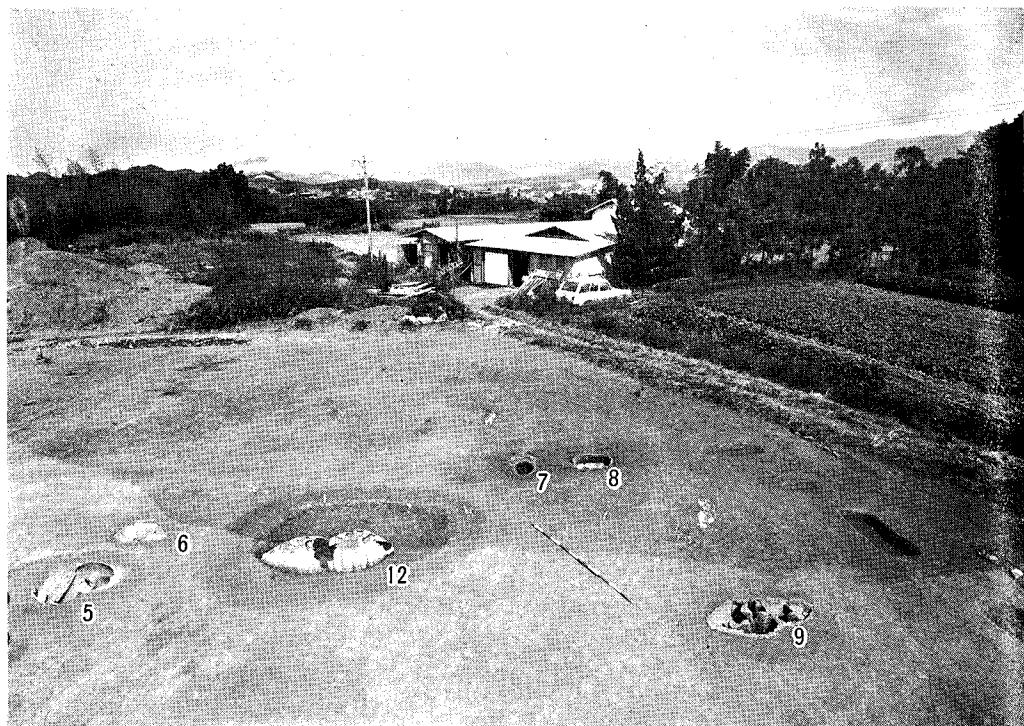
2. 土塚(47号土塚)

1833

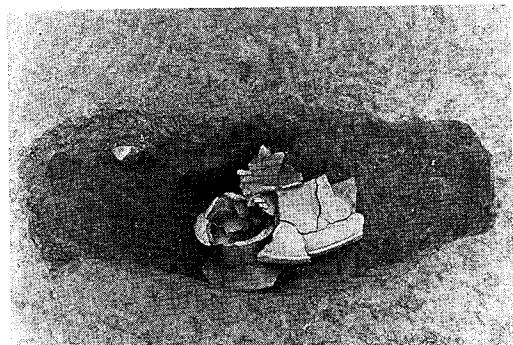
P L. 12 D 地区



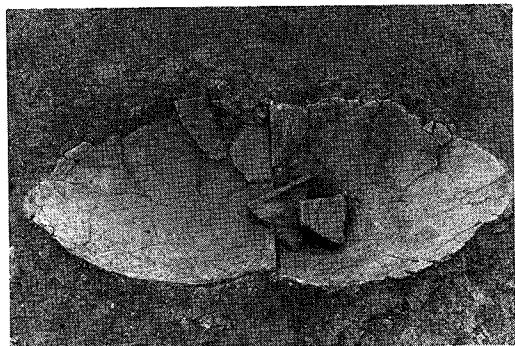
1. D地区全景（航空写真）



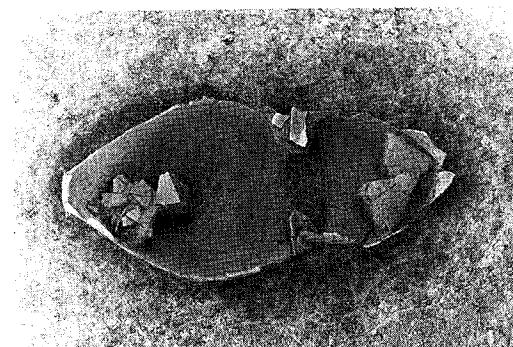
2. D地区甕棺墓出土状況（第5～9・12号甕棺墓）



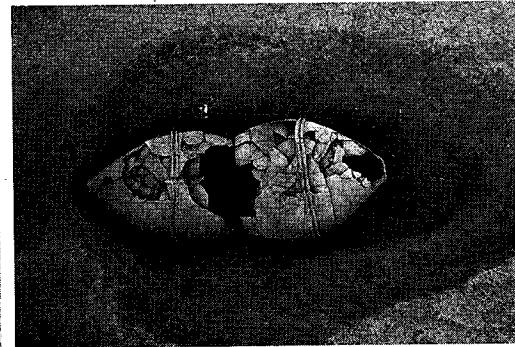
1. 第1号甕棺墓 1-7



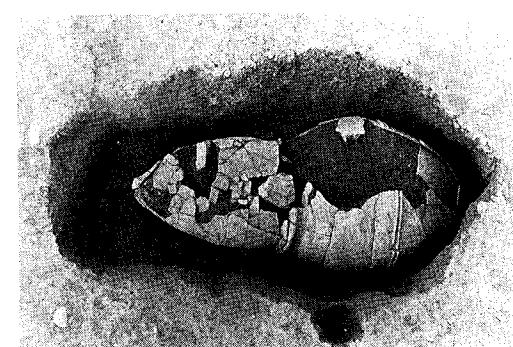
2. 第2号甕棺墓 108



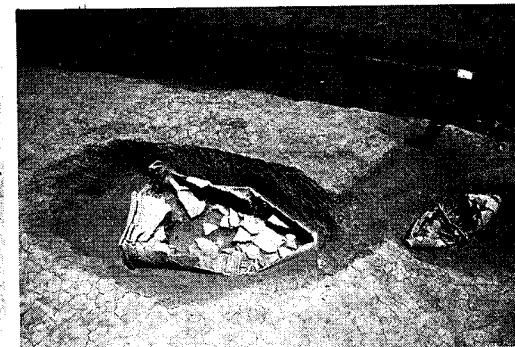
3. 第9号甕棺墓 736



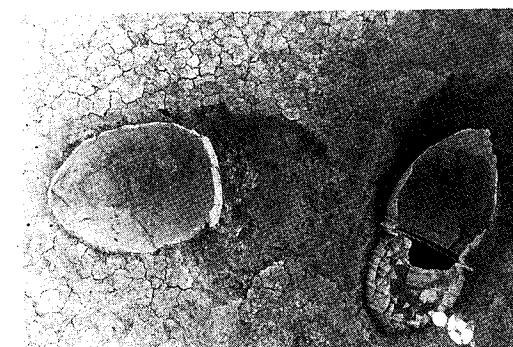
4. 第12号甕棺墓 247-2



5. 第13号甕棺墓 113



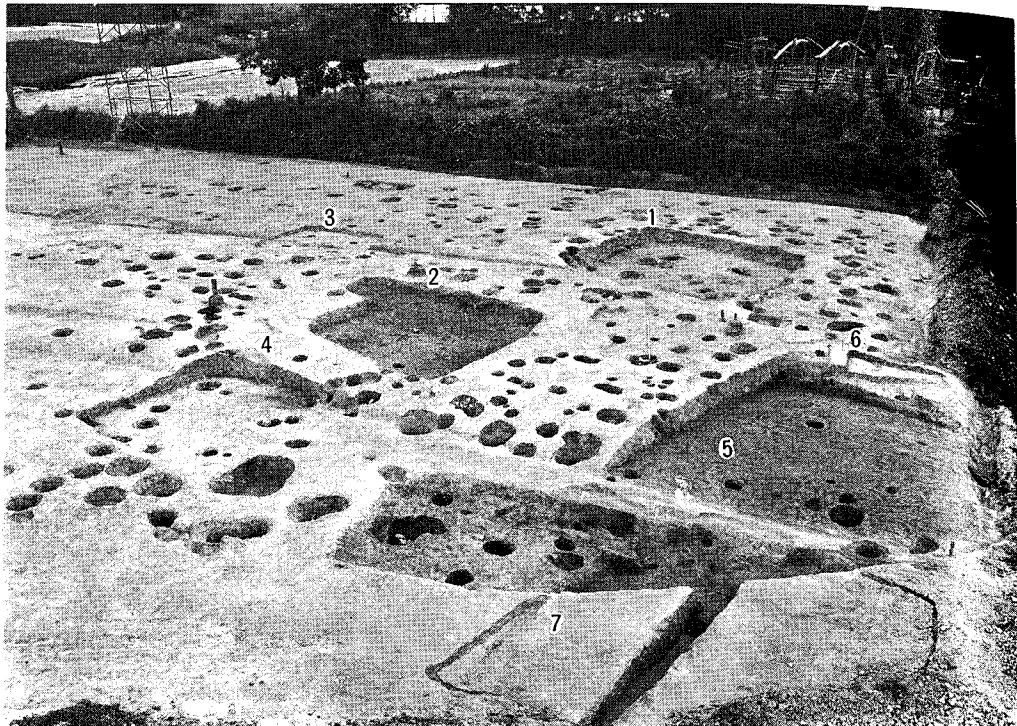
6. 第14·15号甕棺墓 123



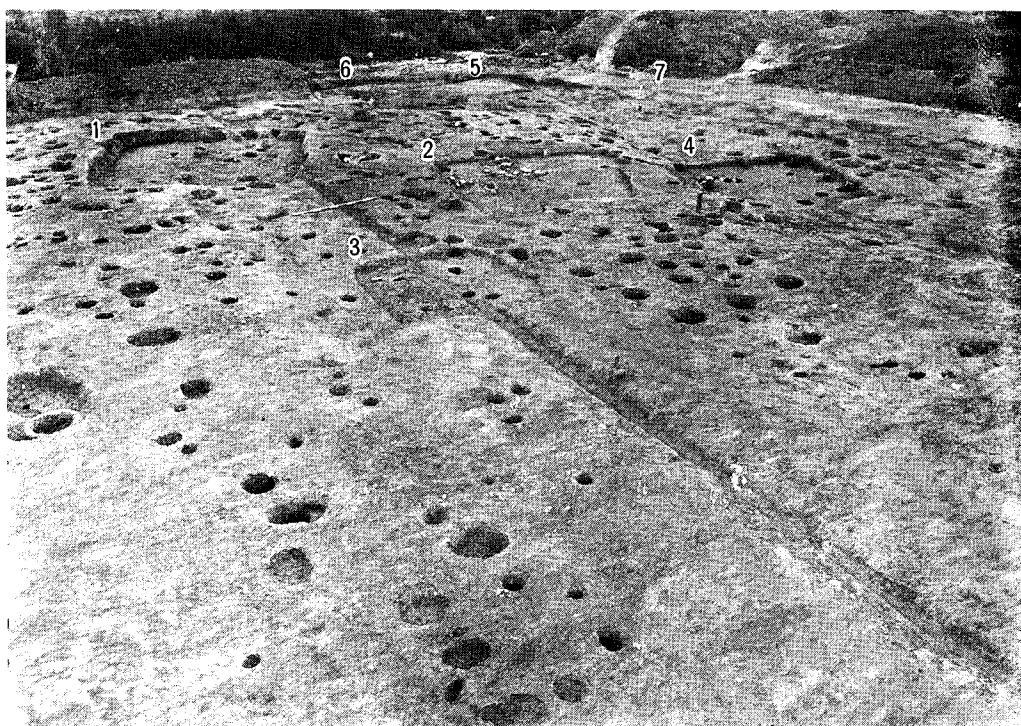
7. 第7·8号甕棺墓 556



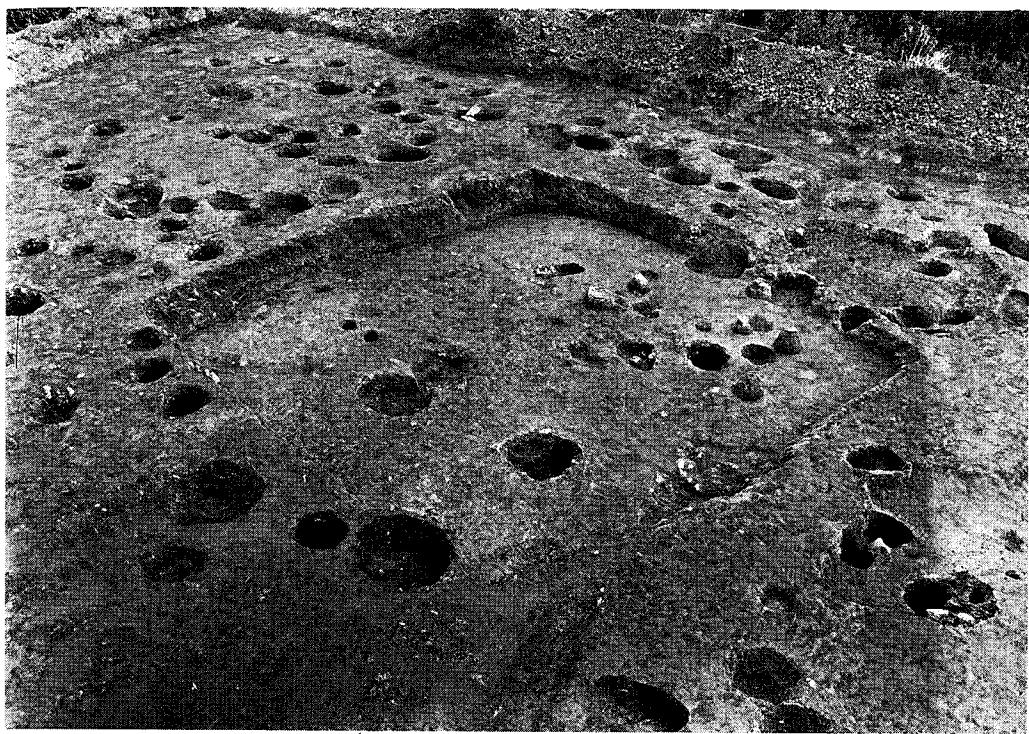
8. 第7号甕棺（下棺）



1. D地区住居跡全景①（南より）



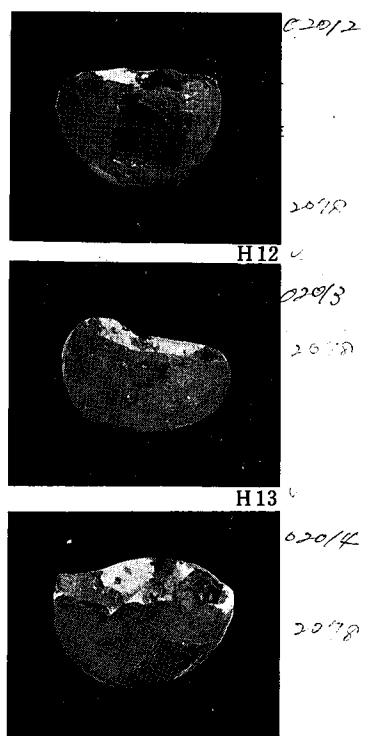
2. D地区住居跡全景②（北西より）



1. D地区第1号住居跡 1:250



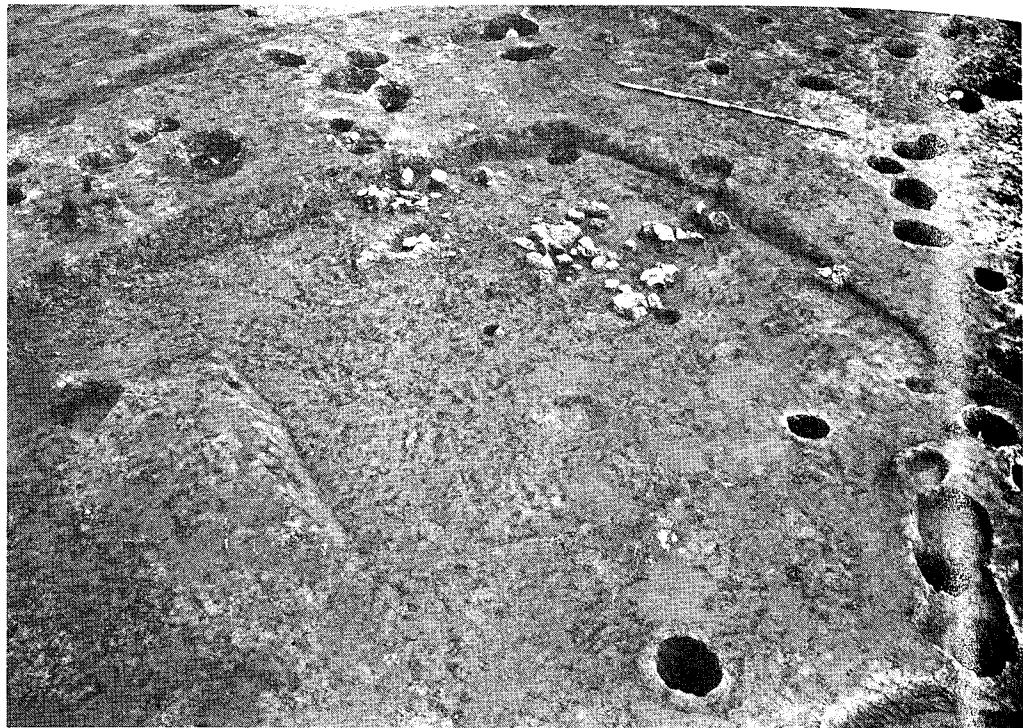
2. D地区第1号住居跡出土遺物  
02093



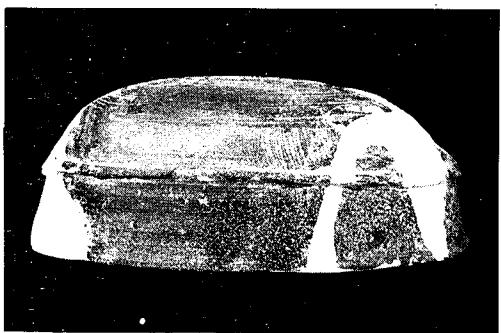
2024 H193 V

H14 V

P L. 16 D 地区



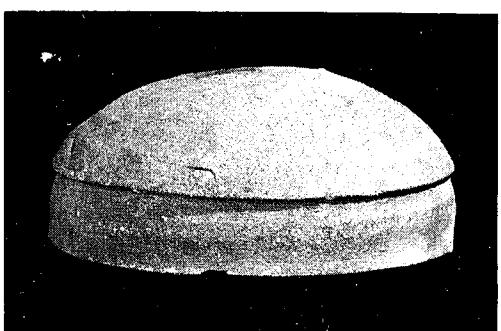
1. D 地区第 2 号住居跡



S 2



S 3



S 4



S 6

2. D 地区第 2 号住居跡出土遺物 ( I )



02017

2055

H17 ✓



02018

2056

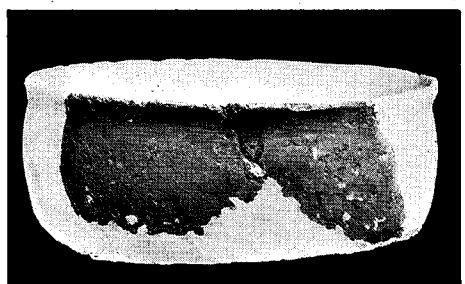
H18 ✓



02020

2147

H20 ✓



02022

2156

H22 ✓



02023

D 地区第 2 号住居跡出土遺物(II)

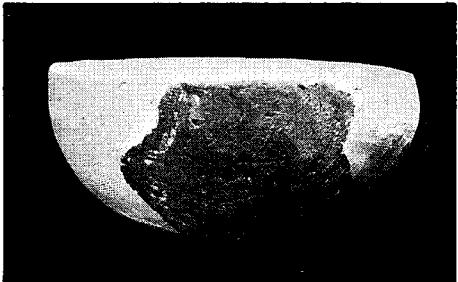
H23 ✓



02024

2046

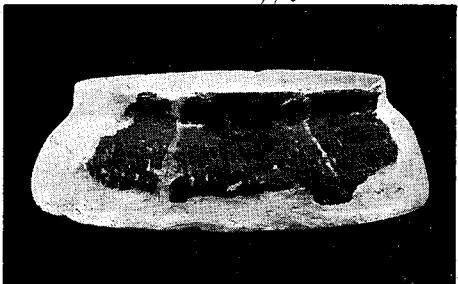
H24 ✓



02025

29/3

H25



02026

2155

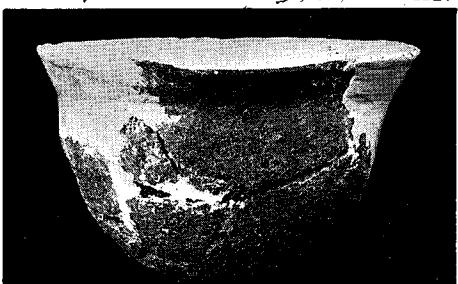
H26 ✓



02027

2157

H27 ✓

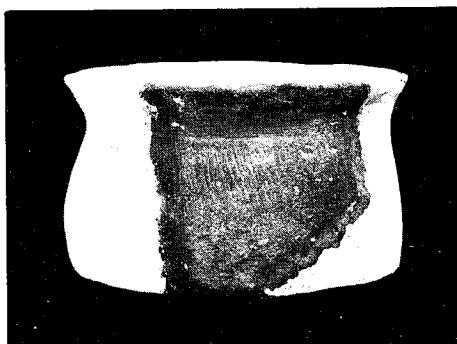


02028

2159

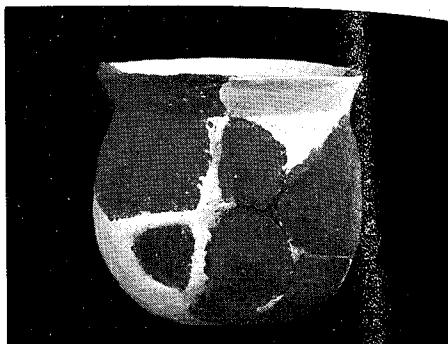
H28 ✓

P L. 18 D 地区



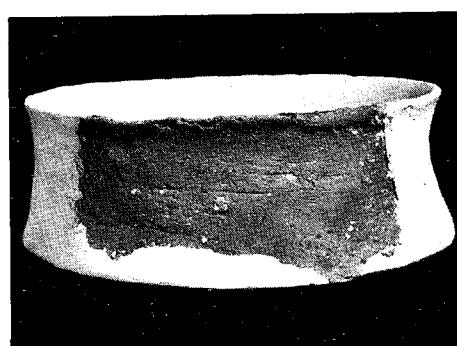
02029

H29



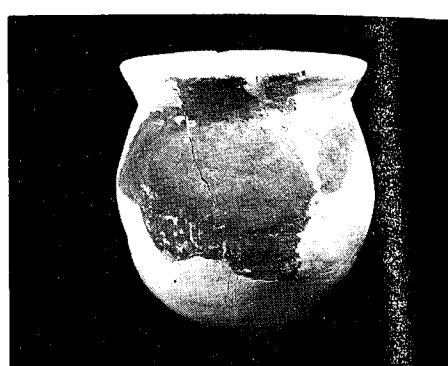
02029

H30

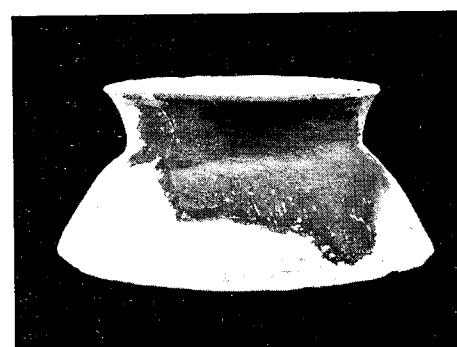


02029

H36

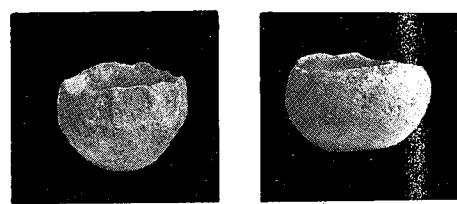


H35



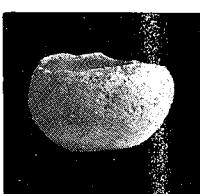
02029

H37



02029

H40



H41

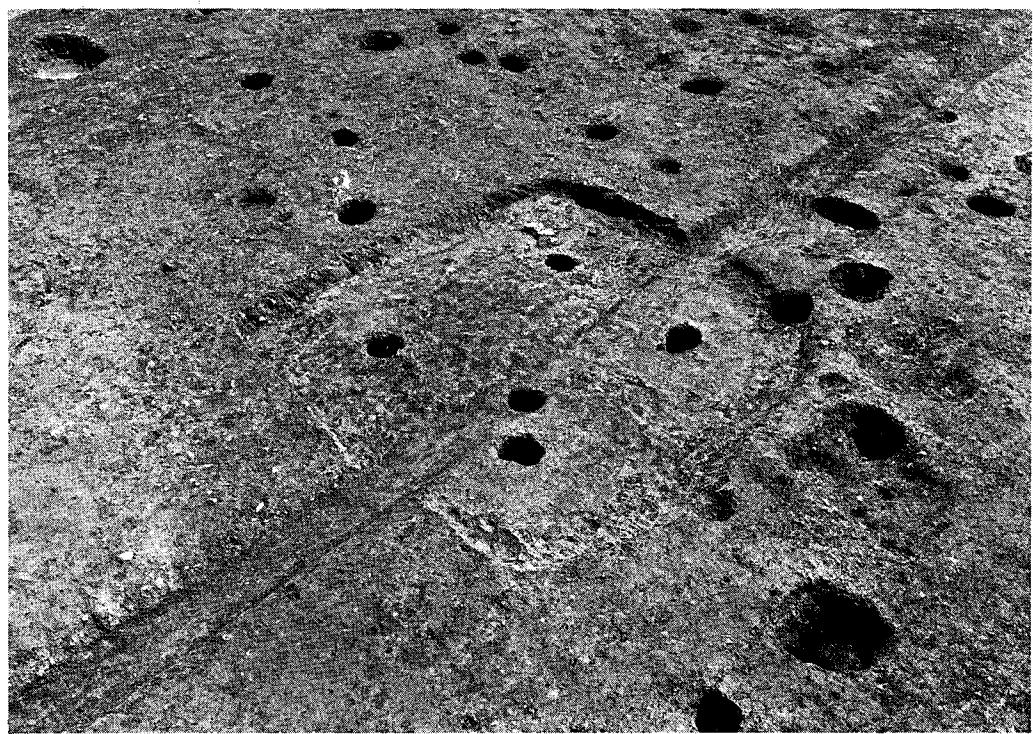


02029

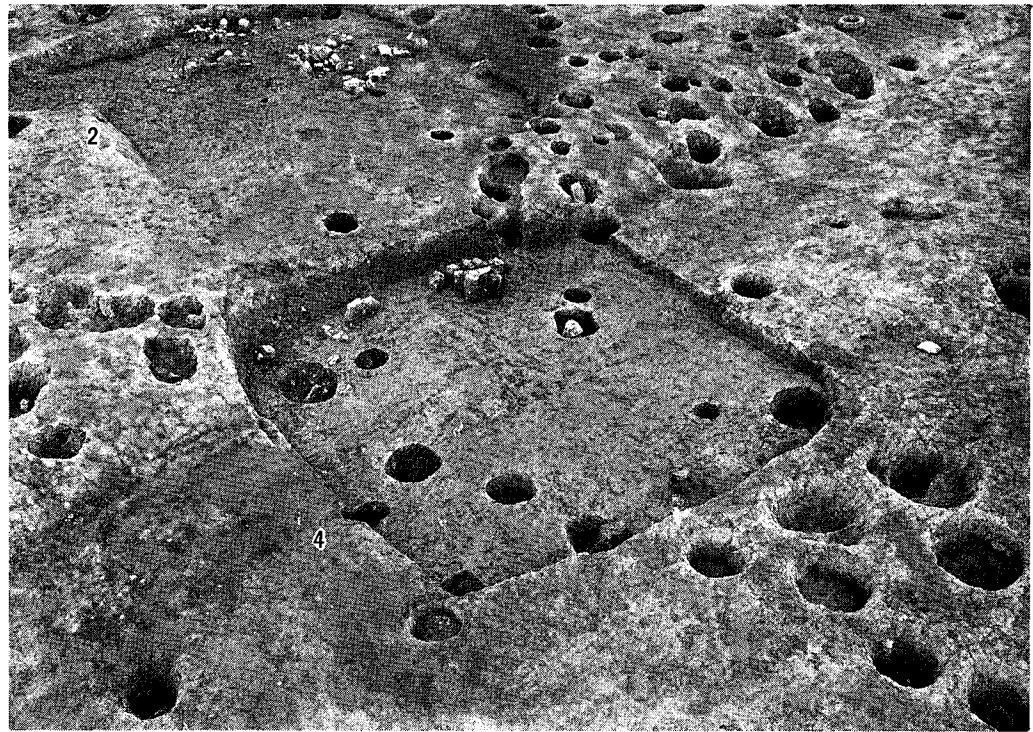
D 地区第 2 号住居跡出土遺物(III)



H42



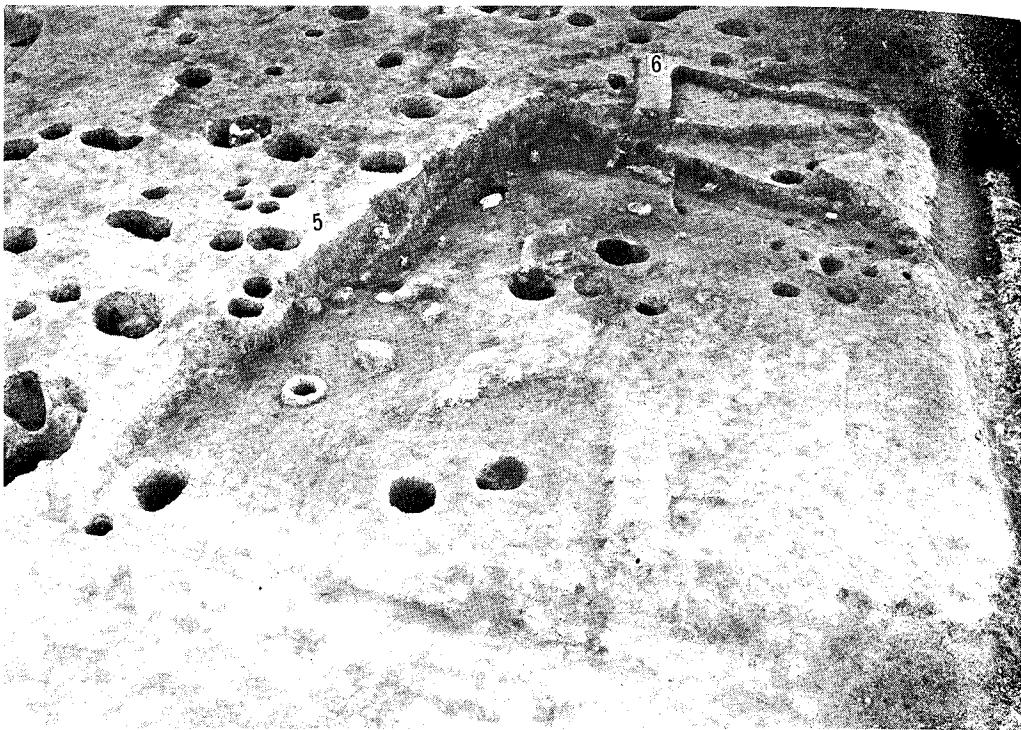
1. D 地区第 3 号住居跡



2. D 地区第 4 号住居跡

1278

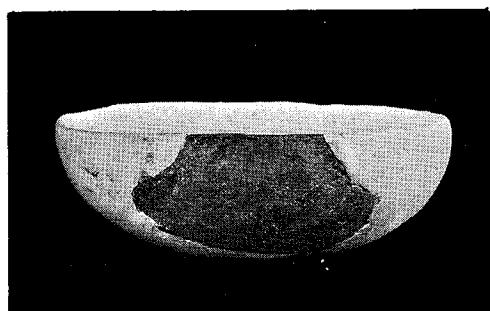
P L. 20 D 地区



1. D 地区第 5 · 6 号住居跡



2. D 地区第 7 号住居跡



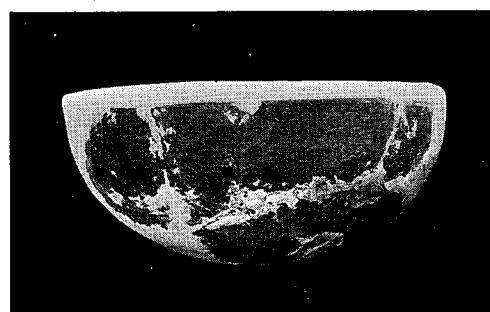
02046 2058 H46 ✓



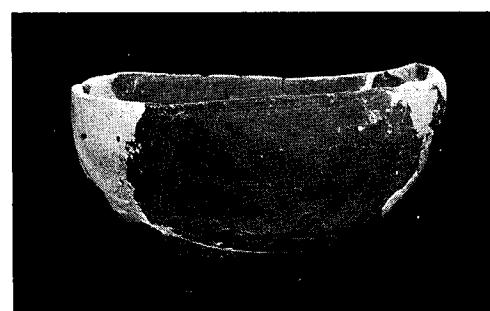
02051 2043 H51 ✓



02047 2037 H47 ✓



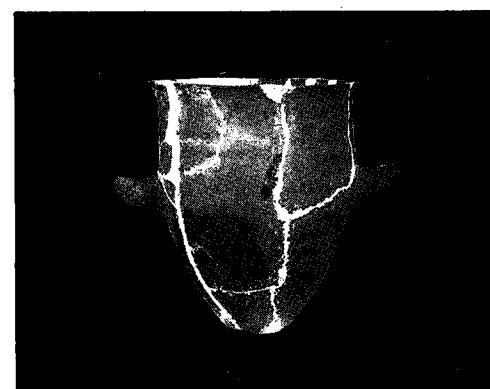
02052 2025 H52 ✓



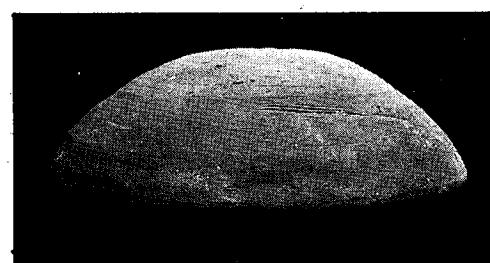
02048 2042 H48 ✓



02054 2063 H54 ✓



02061 2171 H61 ✓



03018 2035 S12 ✓



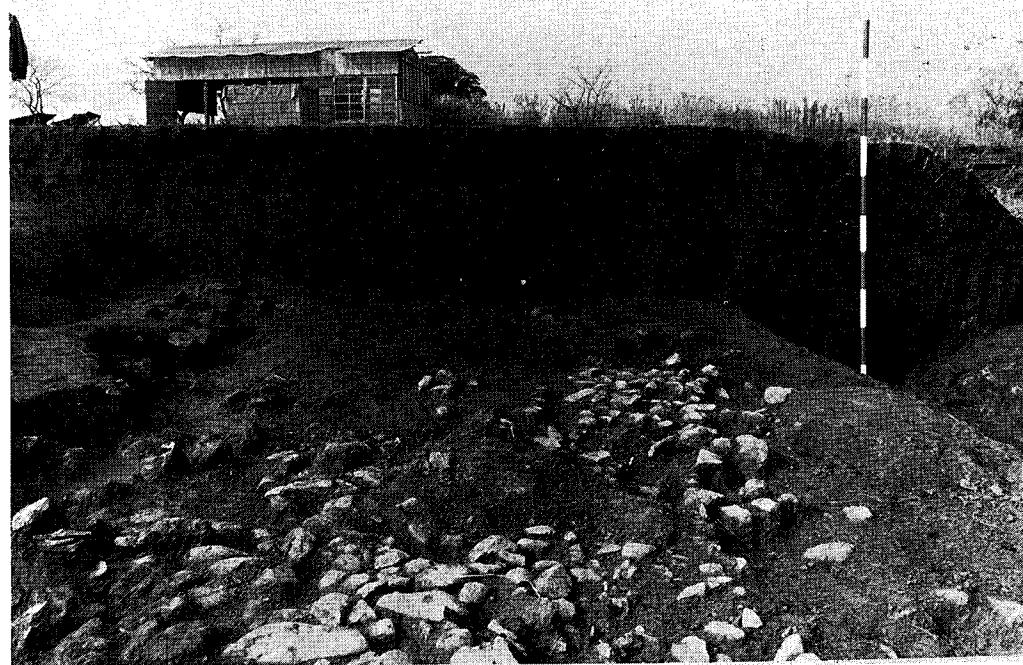
1. D地区南北敷石遺構①（北より）



2. D地区南北敷石遺構②（南より）



1. D地区東西敷石遺構（西より） 1128

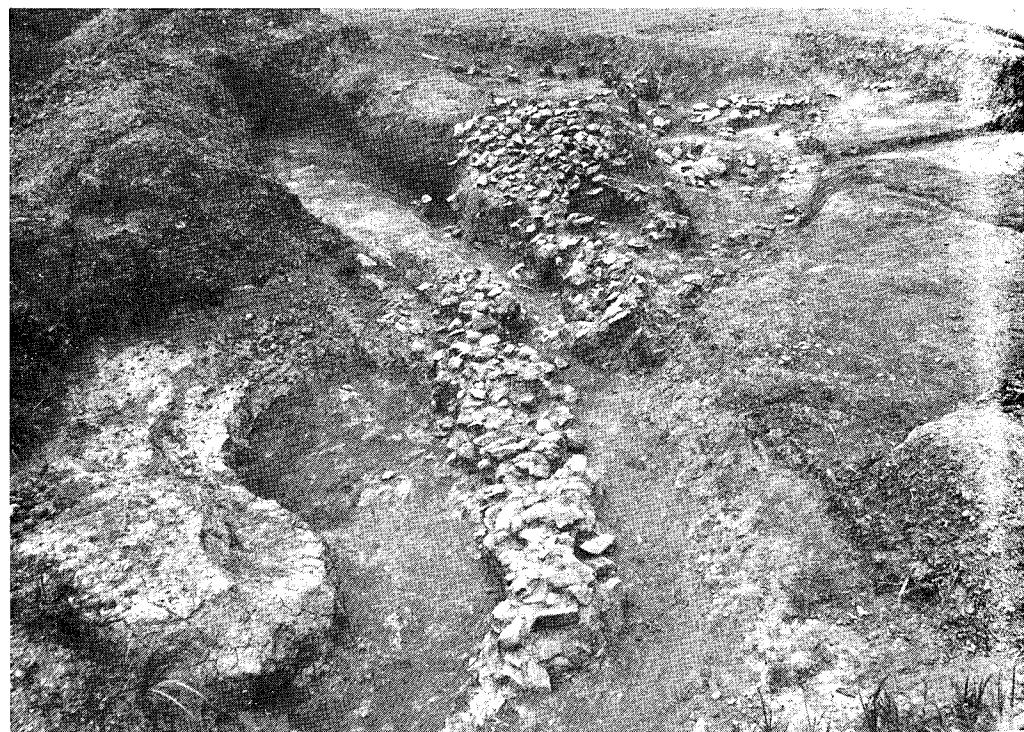


2. D地区東西敷石遺構検出状況

835



1. 東北敷石北溝

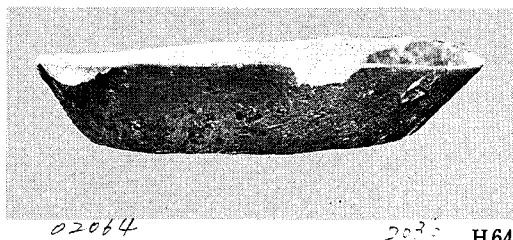


2. 集石遺構

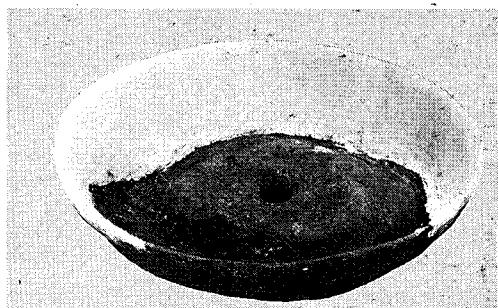
2933



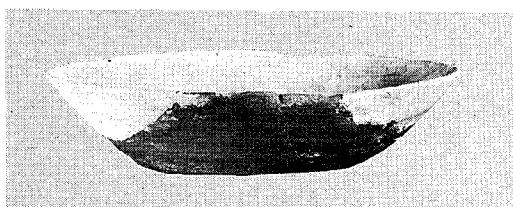
1. D地区井戸状遺構 608



02064 2033 H64



02063 2039 H63



02065 2033 H65

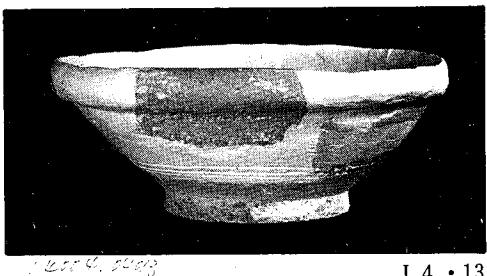


02066 2033 H66

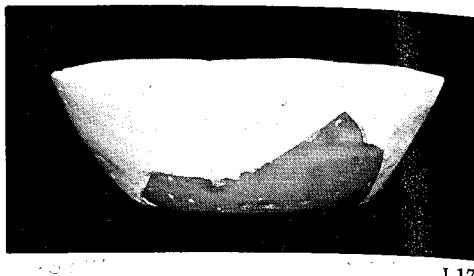


02081 2033 H81

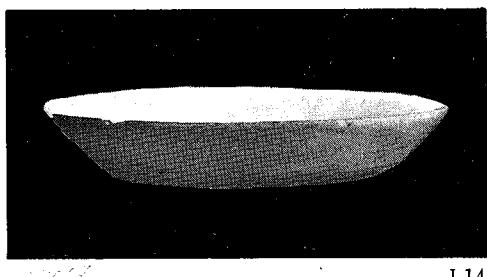
P L. 28 D 地区



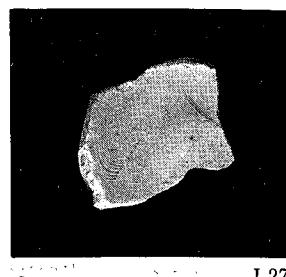
J 4 • 13



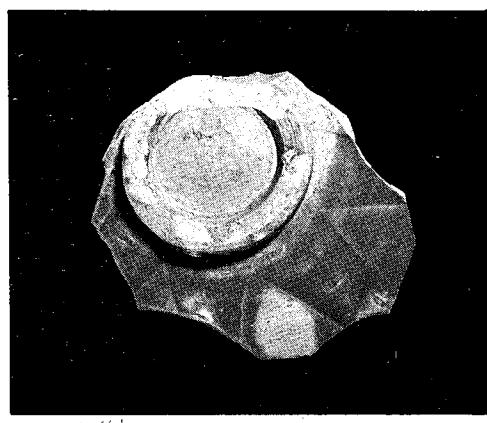
J 17



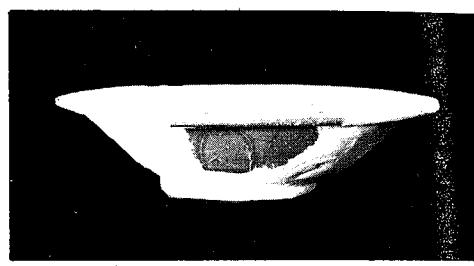
J 14



J 27



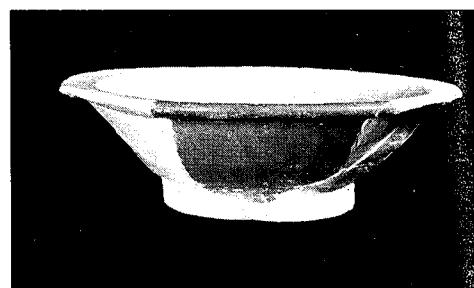
J 43



J 46

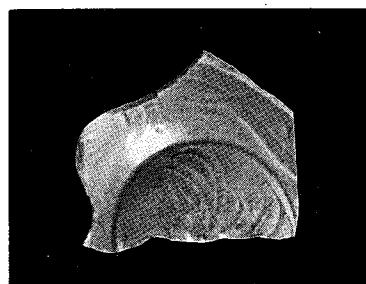


J 44

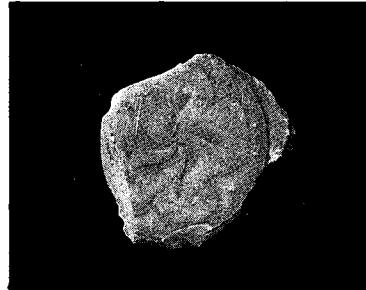


J 45

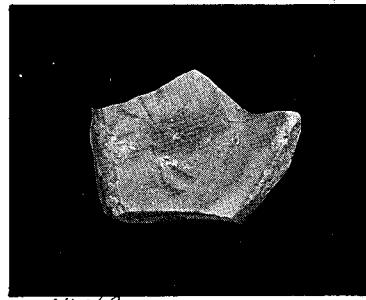
D 地区敷石遺構出土遺物( I )



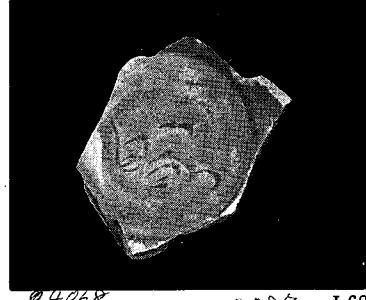
2087 J 64



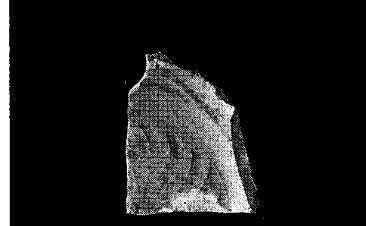
2085 J 67



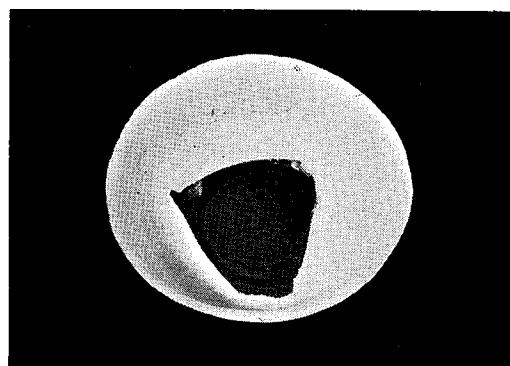
2087 J 69



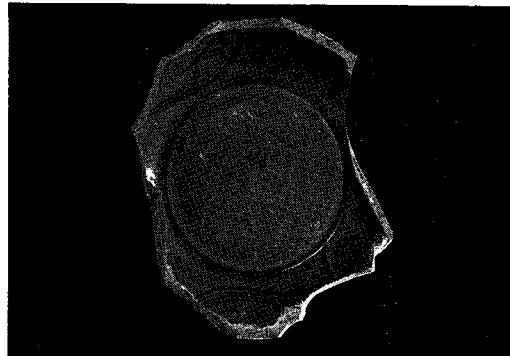
2087 J 68



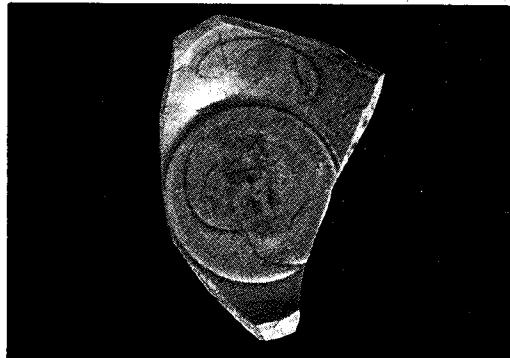
D地区敷石遺構出土遺物(II) J 48  
2086



2151 J 62



2087 J 61

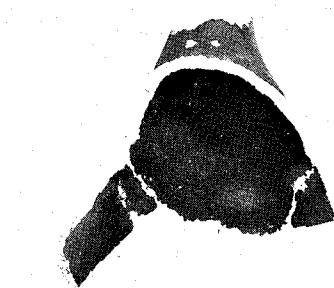


2087 J 60



2161 J 74

P L. 30 D 地区



J 78

J 78



J 79

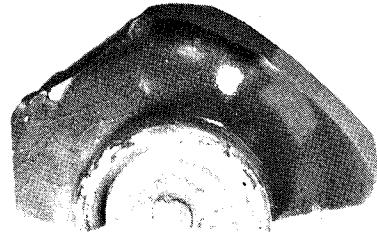


J 80

J 80



J 81



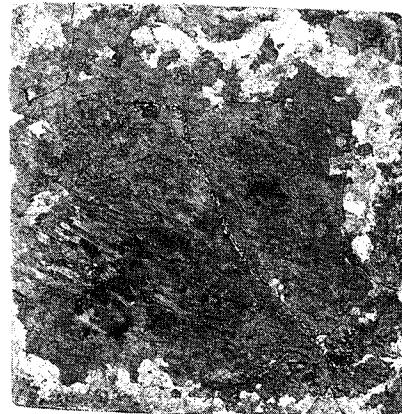
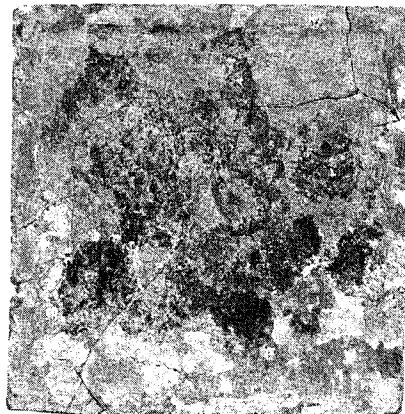
J 76

J 76

J 76

J 77

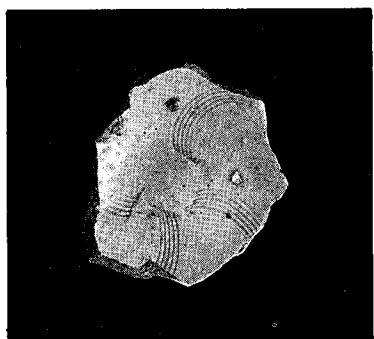
J 77



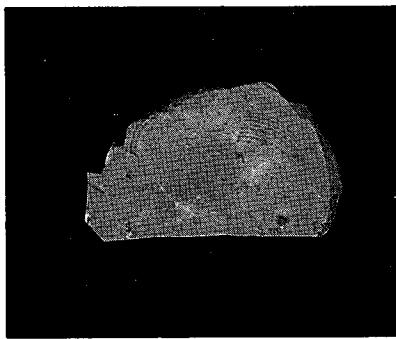
D 地区敷石遺構出土遺物(III)

J 75

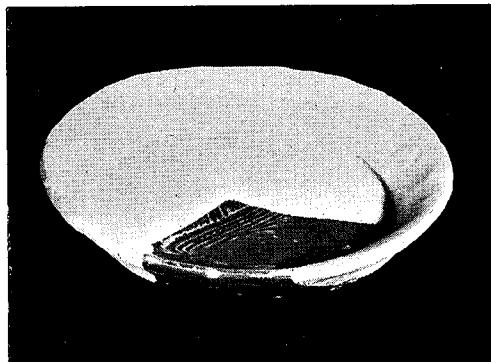
B 1



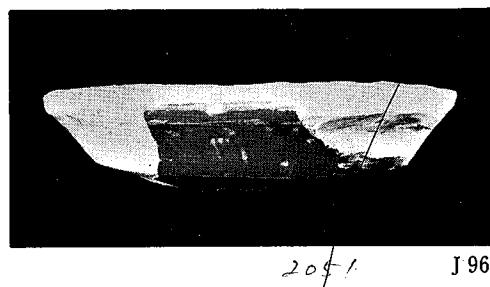
2088 J 84 ✓



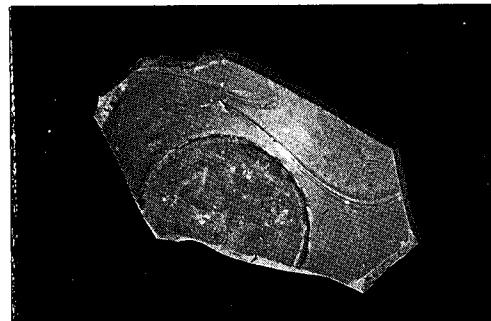
2088 J 85 ✓



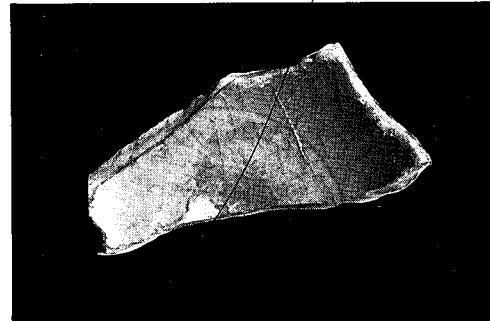
2089 J 96 ✓



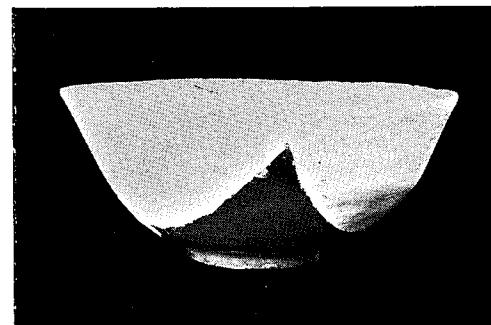
2091 J 96 ✓



2089 J 121 ✓



2091 J 105 ✓



J 100 ✓

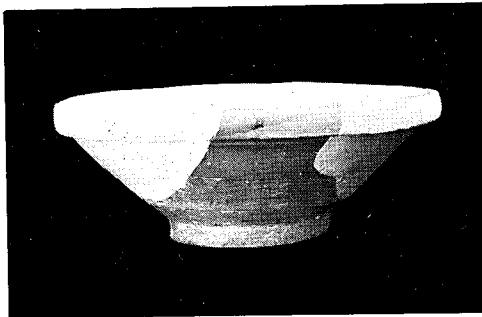
D地区溝状遺構出土遺物

2023



2086 J 112 ✓

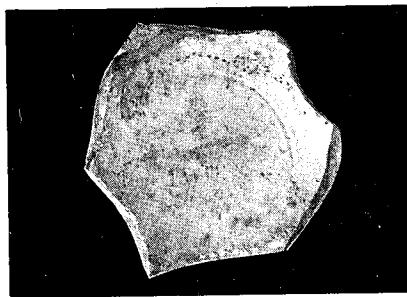
P L. 32 D 地区



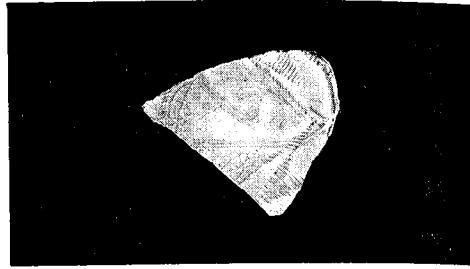
J 124



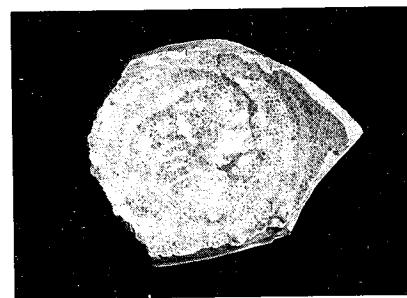
J 130



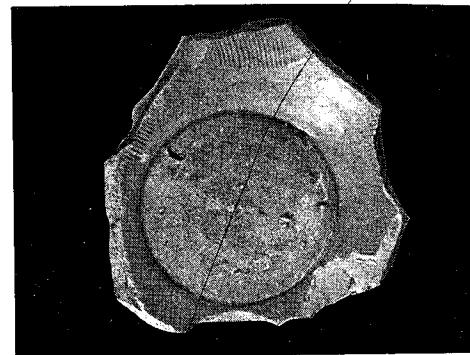
J 129



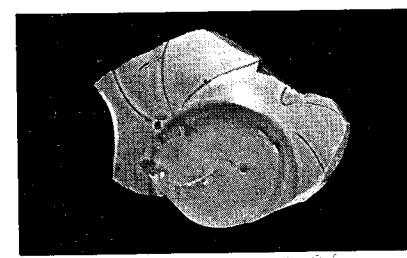
J 133



J 143



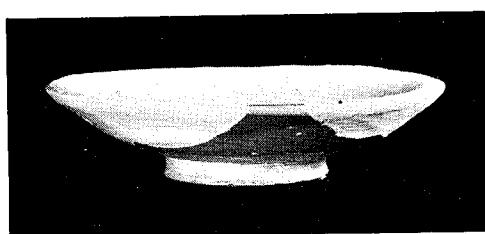
J 132



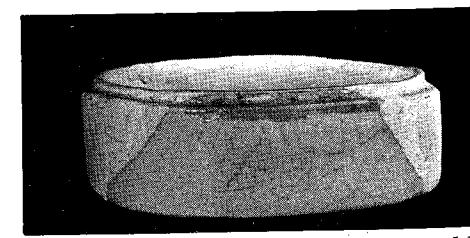
J 141



J 142

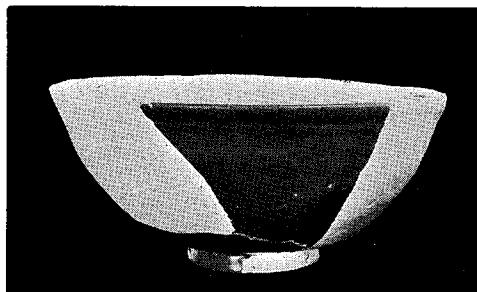


J 147

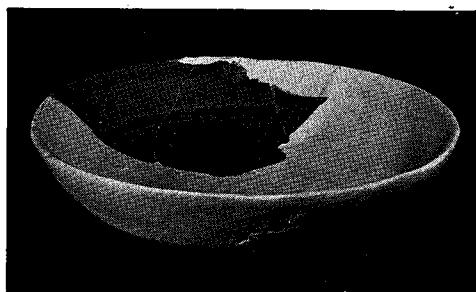


J 146

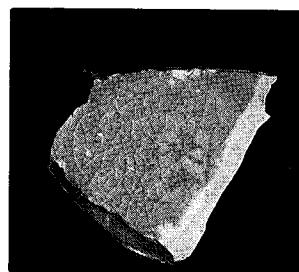
D 地区集石遗構出土遺物



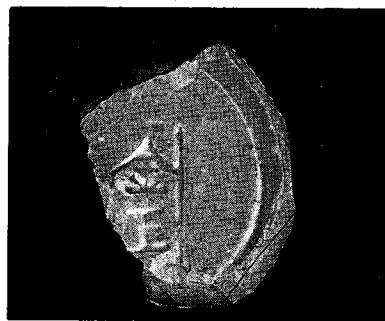
2087 J 174 ✓



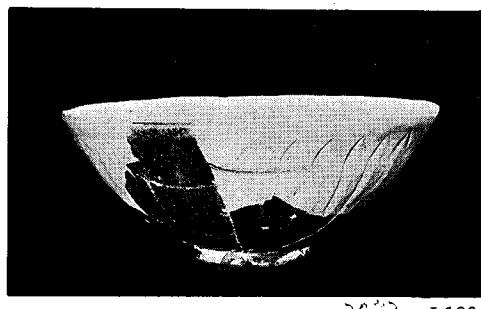
2081 J 182 ✓



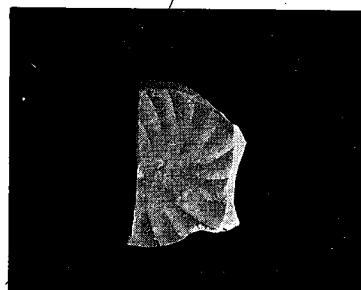
刻印「長命□□」?  
2091 04.92 J 190.



2091 J 178 ✓



2082 J 189 ✓



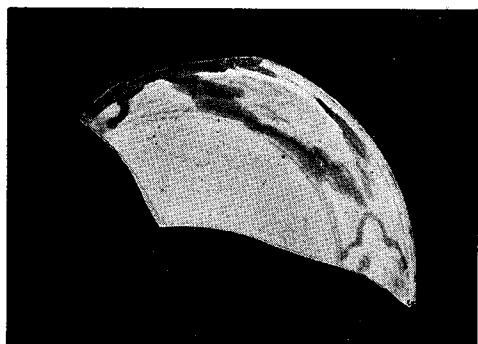
2086 J 181 ✓



D 地区表土出土遺物 2090

54.31 ✓

J 191

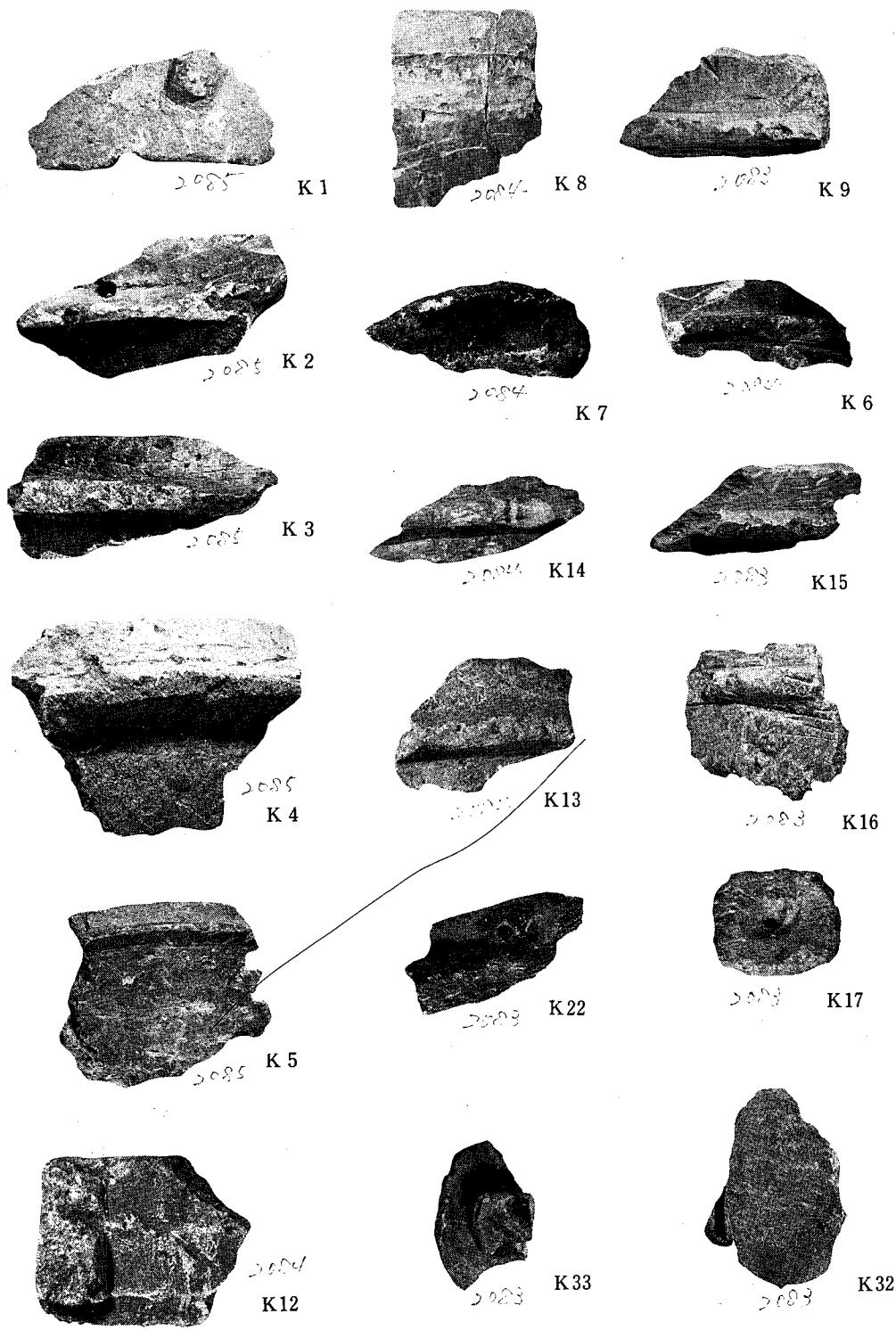


2090

04.92 ✓

J 192

P L. 34 D 地区

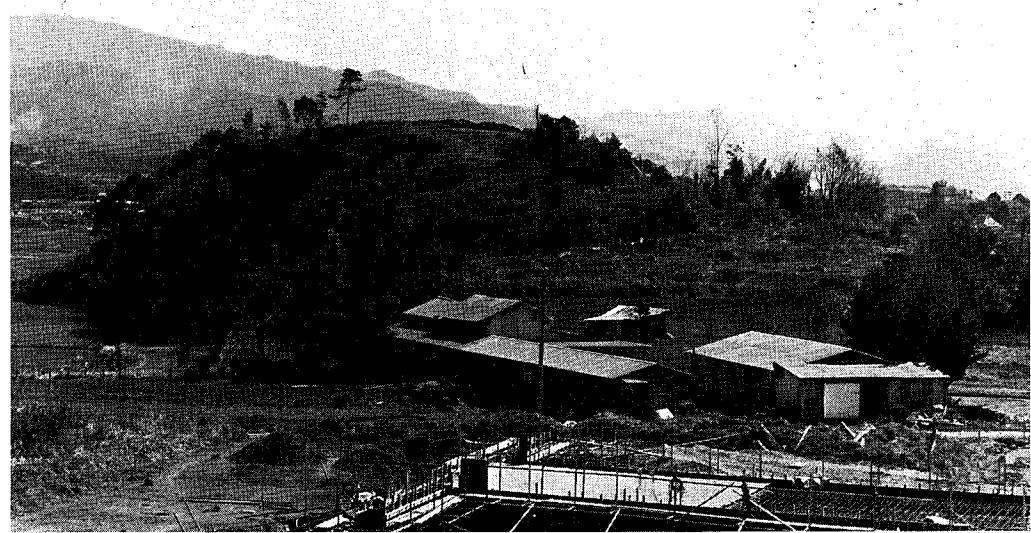


D 地区出土滑石製遺物



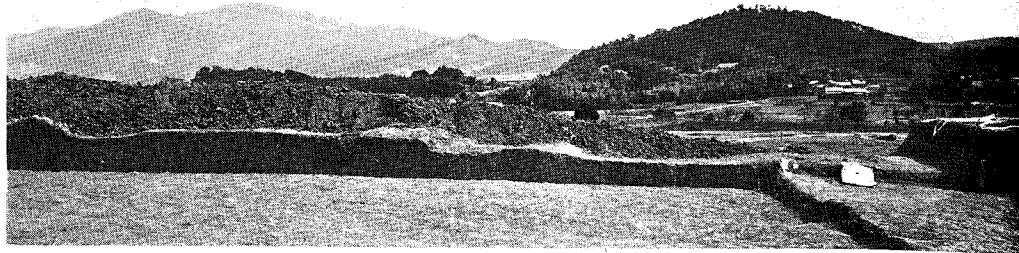
1. E 地区全景 (航空写真)

2909



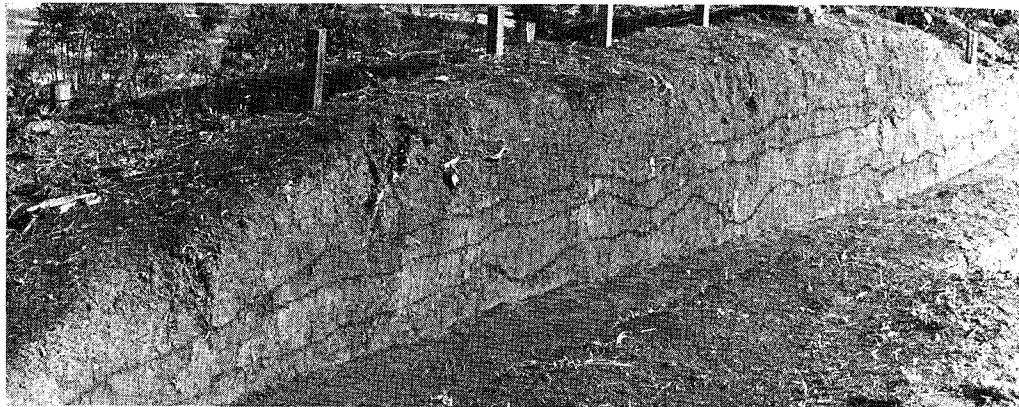
2. E 地区遠景 (西より) 1154

P L. 36 E 地区

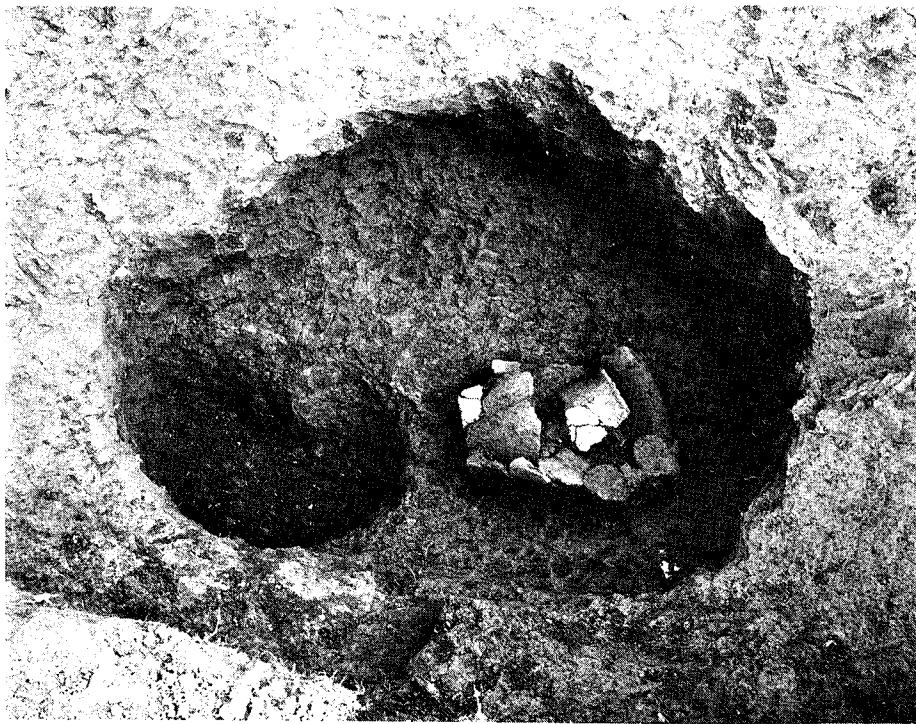


1. E 地区断面① (北より)

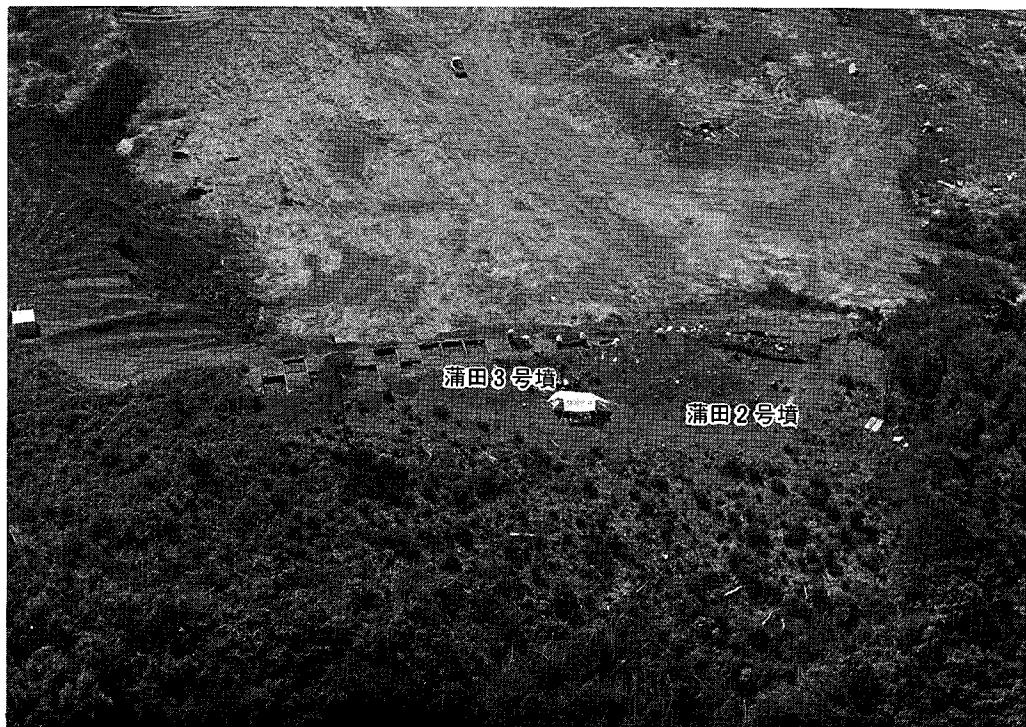
2877



2. E 地区断面② (南より)

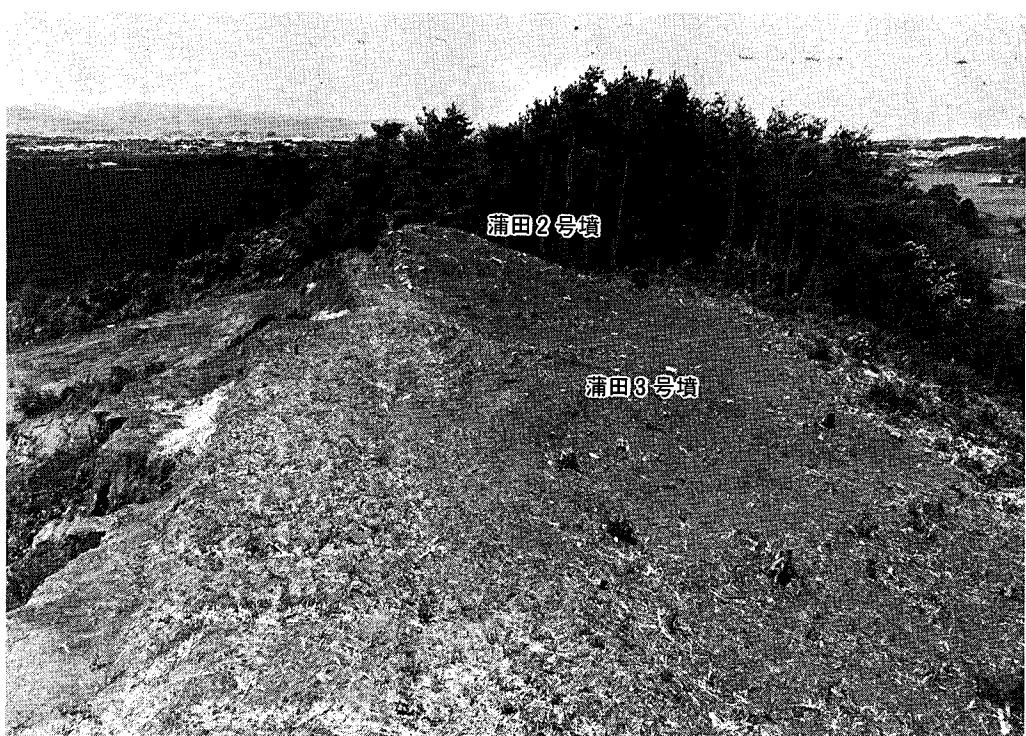


3. E 地区土塙



1. 蒲田2・3号墳全景①(航空写真)

2910



2. 蒲田2・3号墳全景②(発掘調査前)

325

P L. 38 蒲田 2・3号墳



1. 蒲田 2号墳石室



2. 蒲田 2号墳墳丘断面

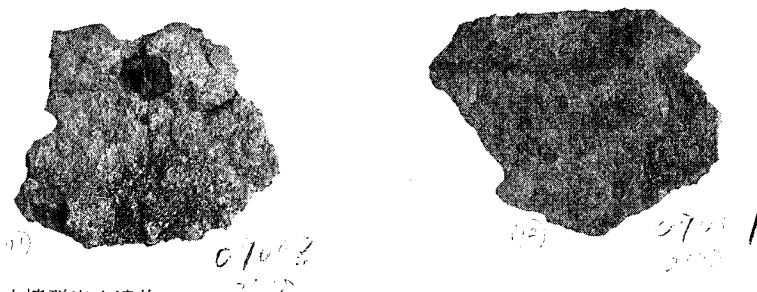
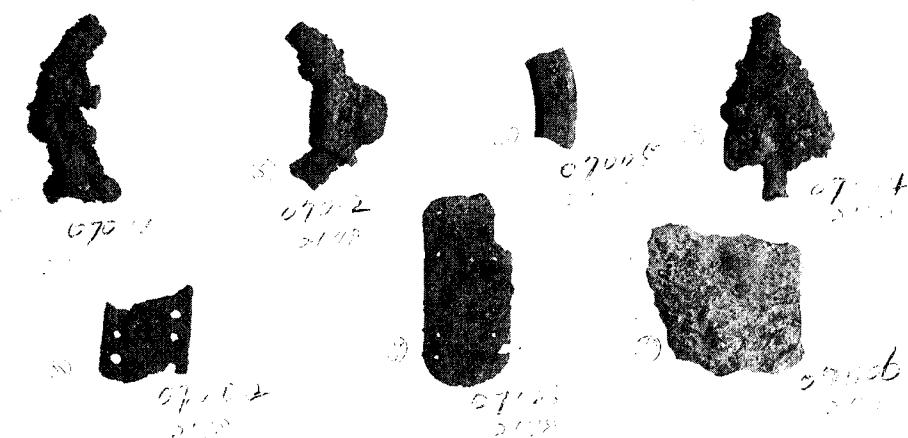
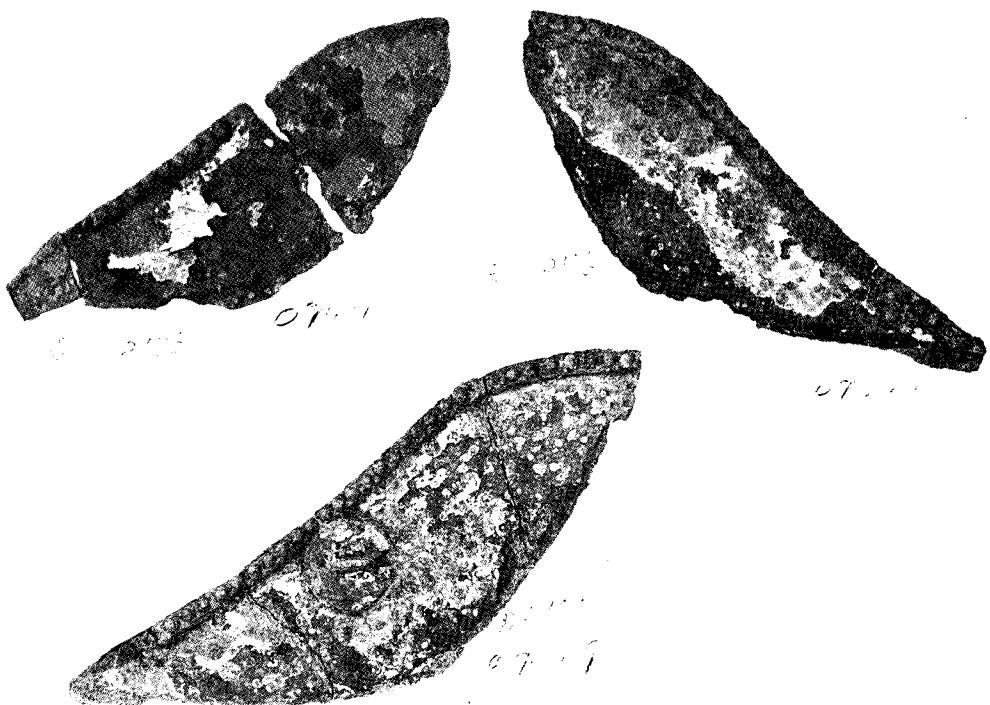


1. 蒲田2号墳墳丘列石 626

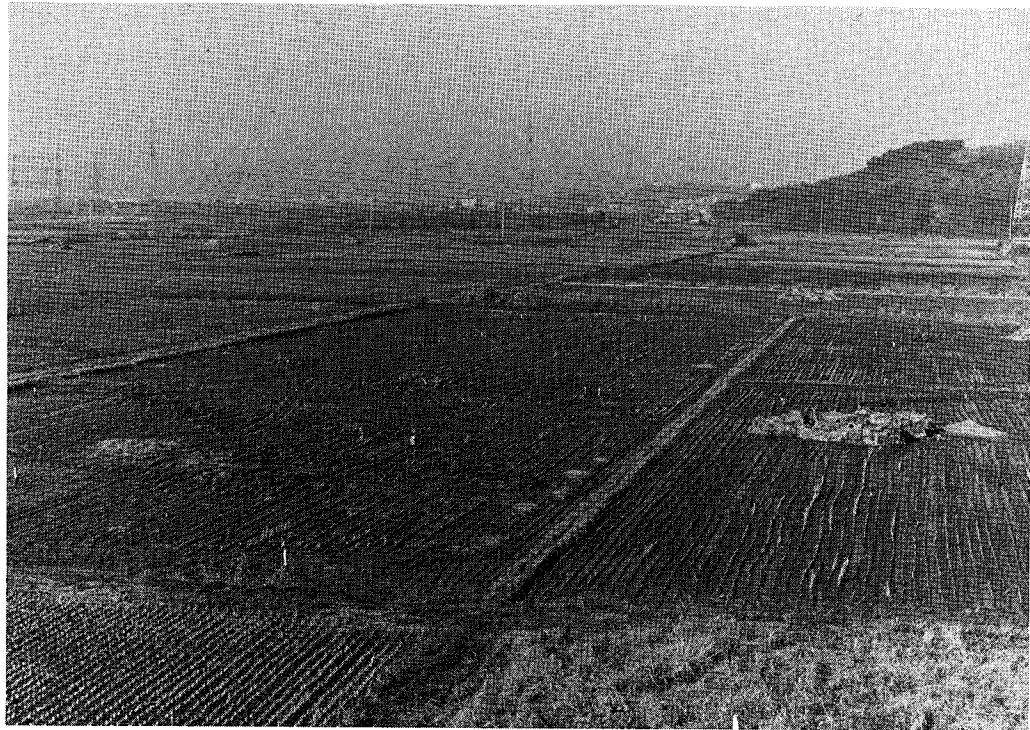


2. 蒲田2号墳墳丘出土遺物 (H90) 862

P.L. 40 かけ塚山古墳群



かけ塚山古墳群出土遺物



1. F地区遠景 88.4.7

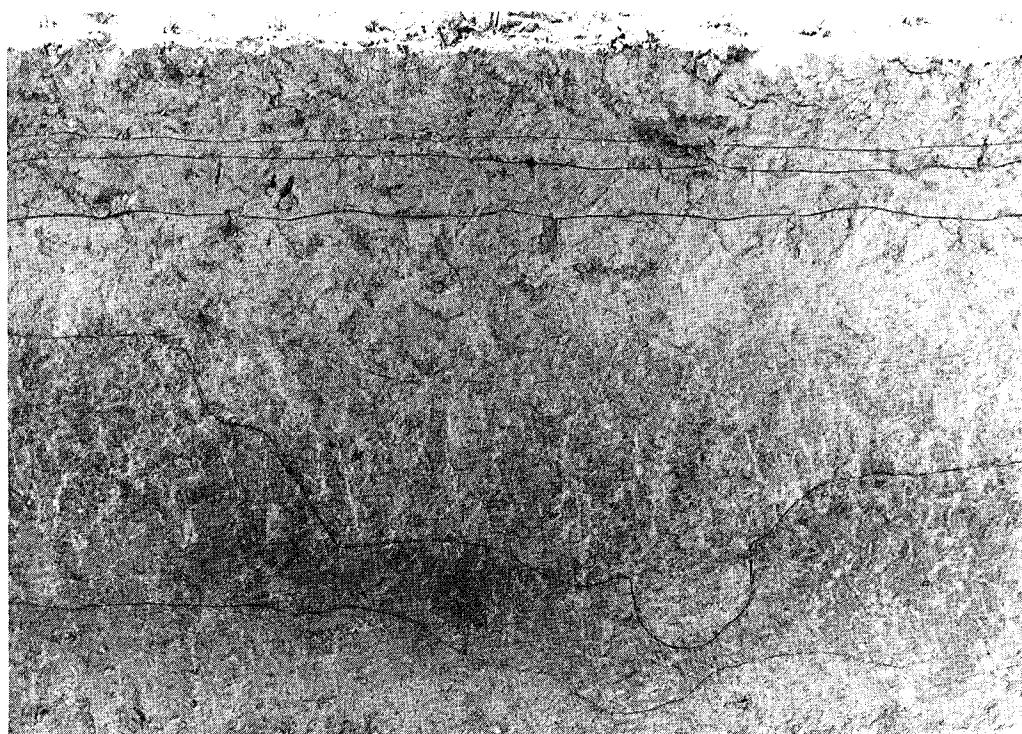


2. F地区発掘区遠景 (正面は部木八幡古墳群のある森) 9.2.7

P L . 42 F 地区



1. F 地区No.1 トレンチ断面①



2. F 地区No.1 トレンチ断面②



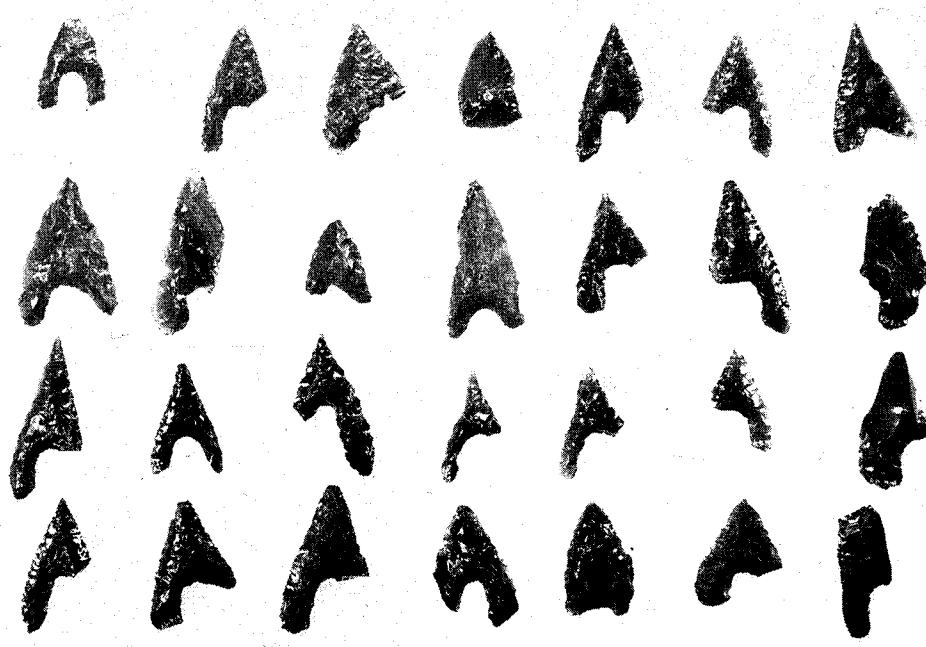
1. F 地区No. 5 トレンチ断面

2911



2. F 地区集石遺構 876

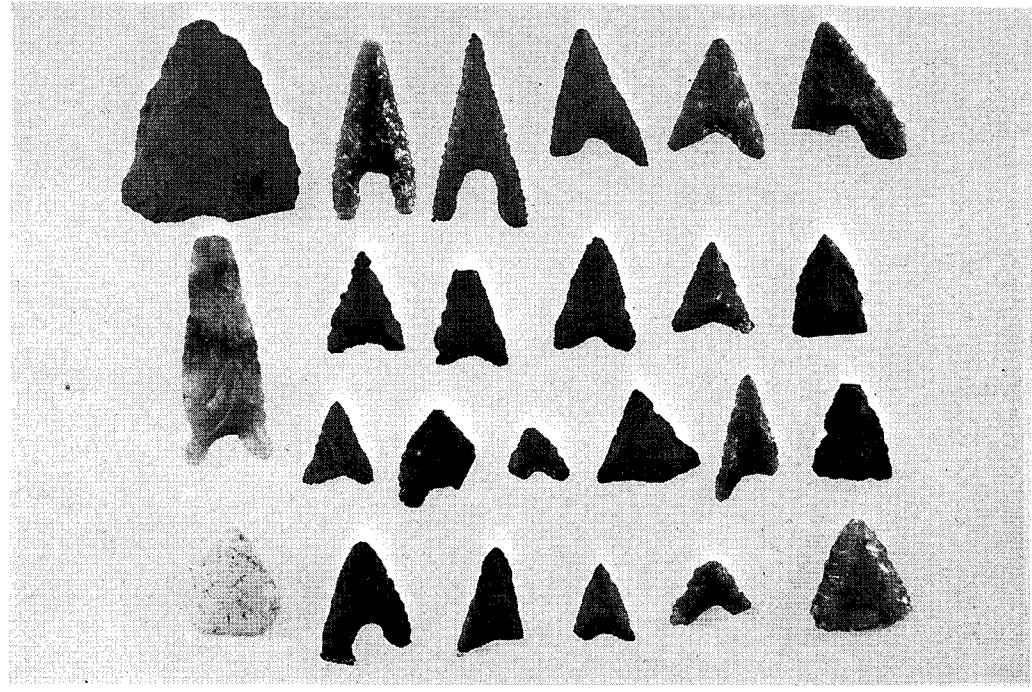
P L. 44 石器



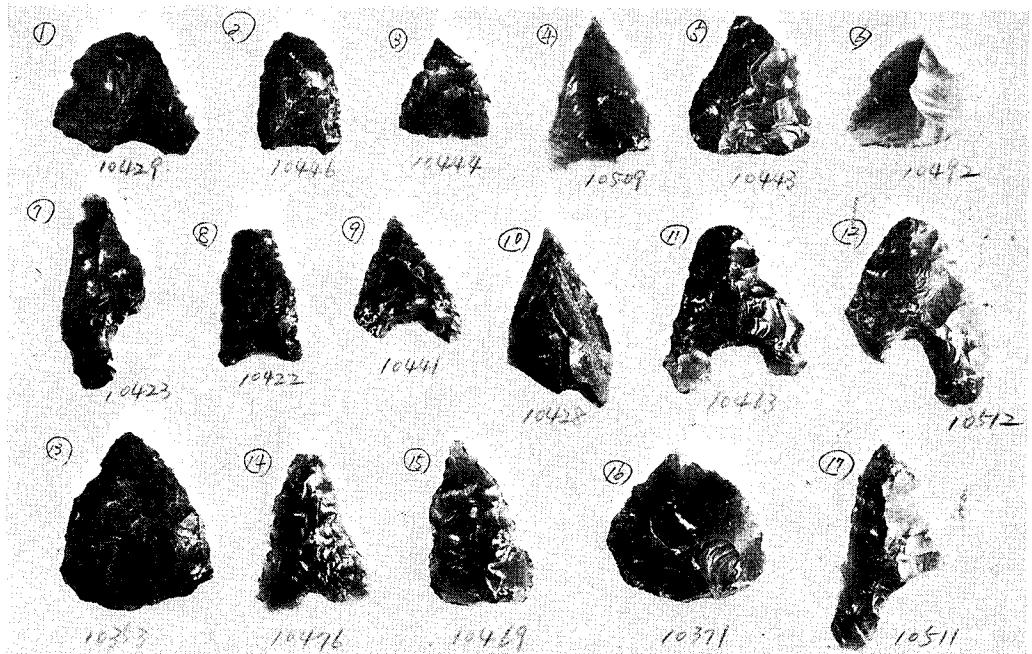
2249



石簇(I) — A、B、D、E 地区出土 —

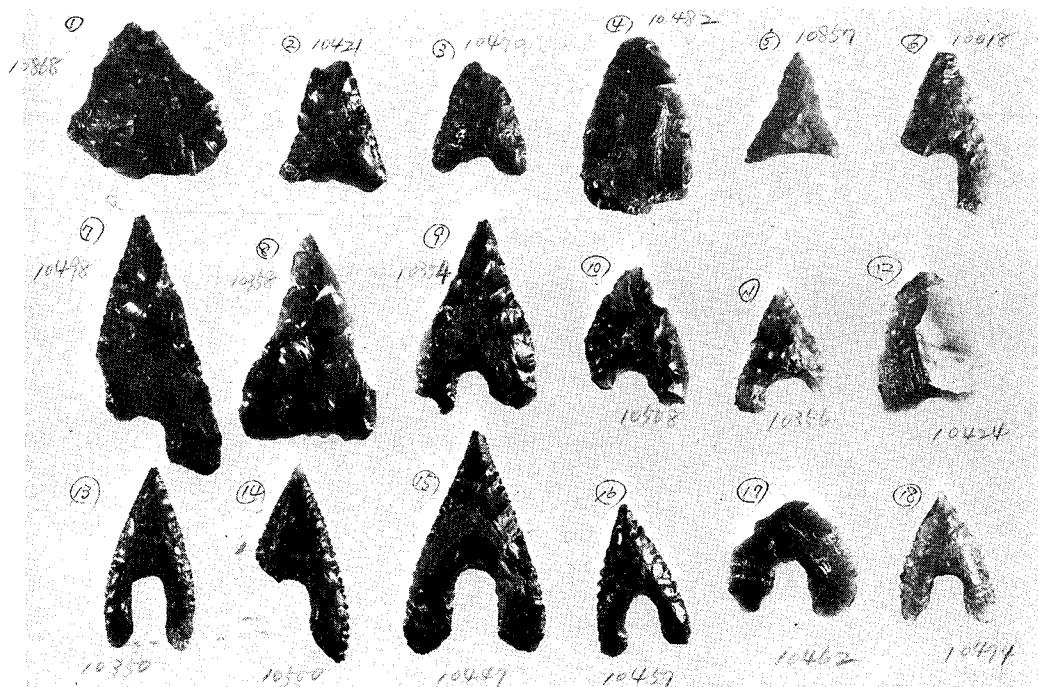


2240



石簇(II) - A、B、D、E 地区出土 -

2246



1. 石簇(III) - A、B、D、E 地区出土 -

2247

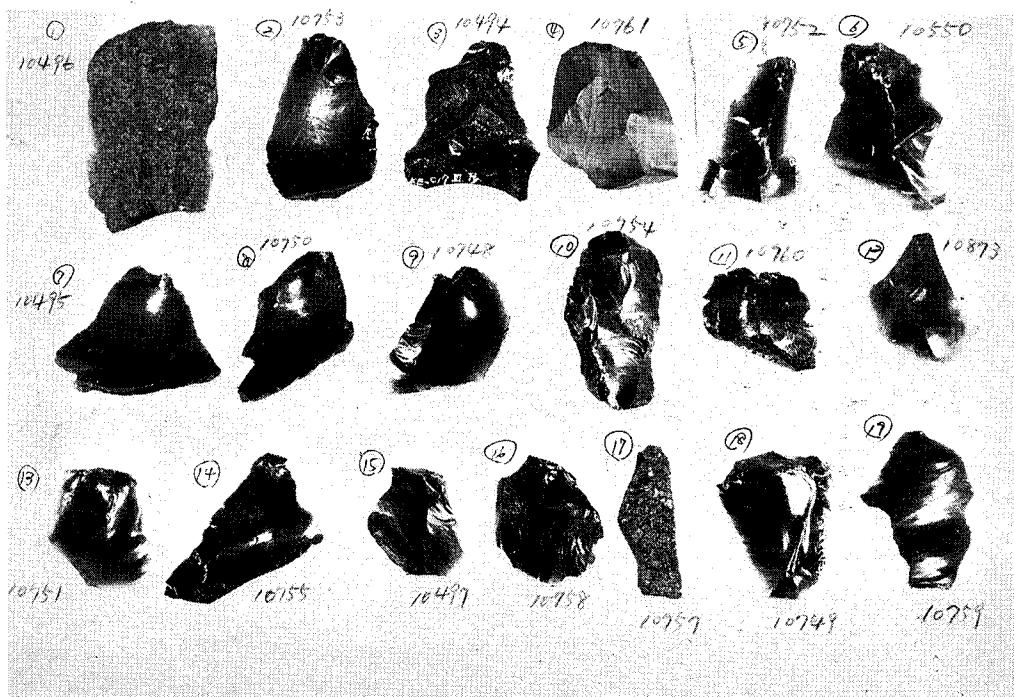


2. 縱長・横長剝片(I) - A、B、D、E 地区 I 層出土 -

2336



2337



縦長・横長剝片(II) - A、B、D、E地区II・III層出土 -

2317

P L. 48 石器

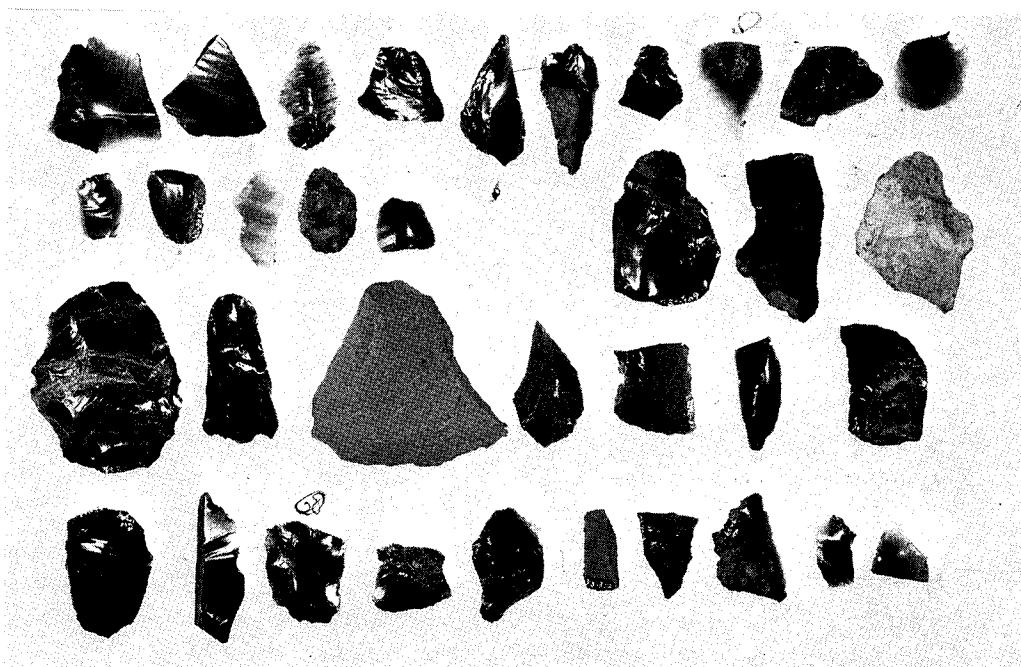


折断·切断刮片 - A、B、D、E 地区出土 -

2287



2373



2335

搔器・削器 - A、B、D、E 地区出土 -

P L. 50 石器



1. Scraper - A、B、D、E 地区出土 -

23.4



2. 石鋸状石器・揉錐器・彫器・尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 - A、B、D、E 地区出土 -



1. 台形石器・彫器・揉錐器 - A、B、D、E 地区出土 -

2387



2. ナイフ形石器 - A、B、D、E 地区出土 -

2388

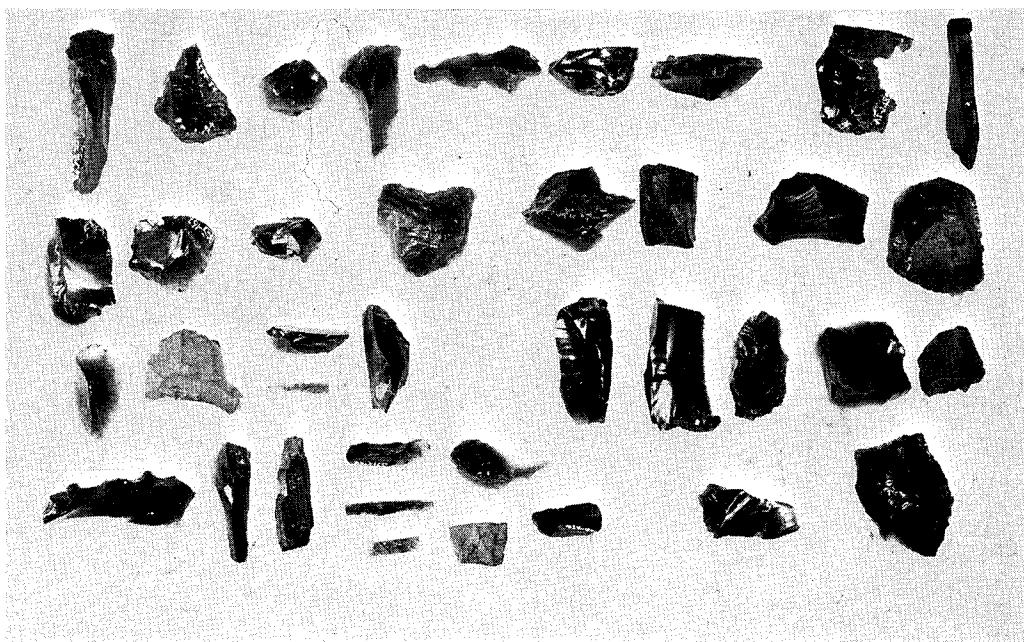
P L. 52 石器



1. 小石刃・細石刃(I) - A、B、D、E 地区出土 -

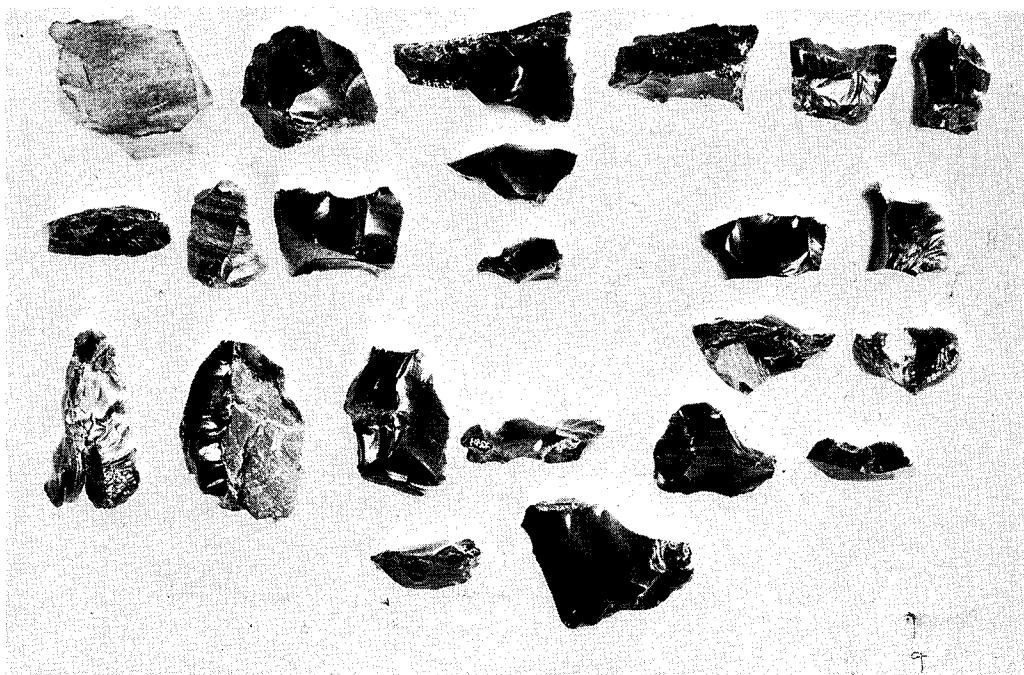


2. 小石刃・細石刃(II) - A、B、D、E 地区出土 -



1. 細石核再生剝片 — A、B、D、E 地区出土 —

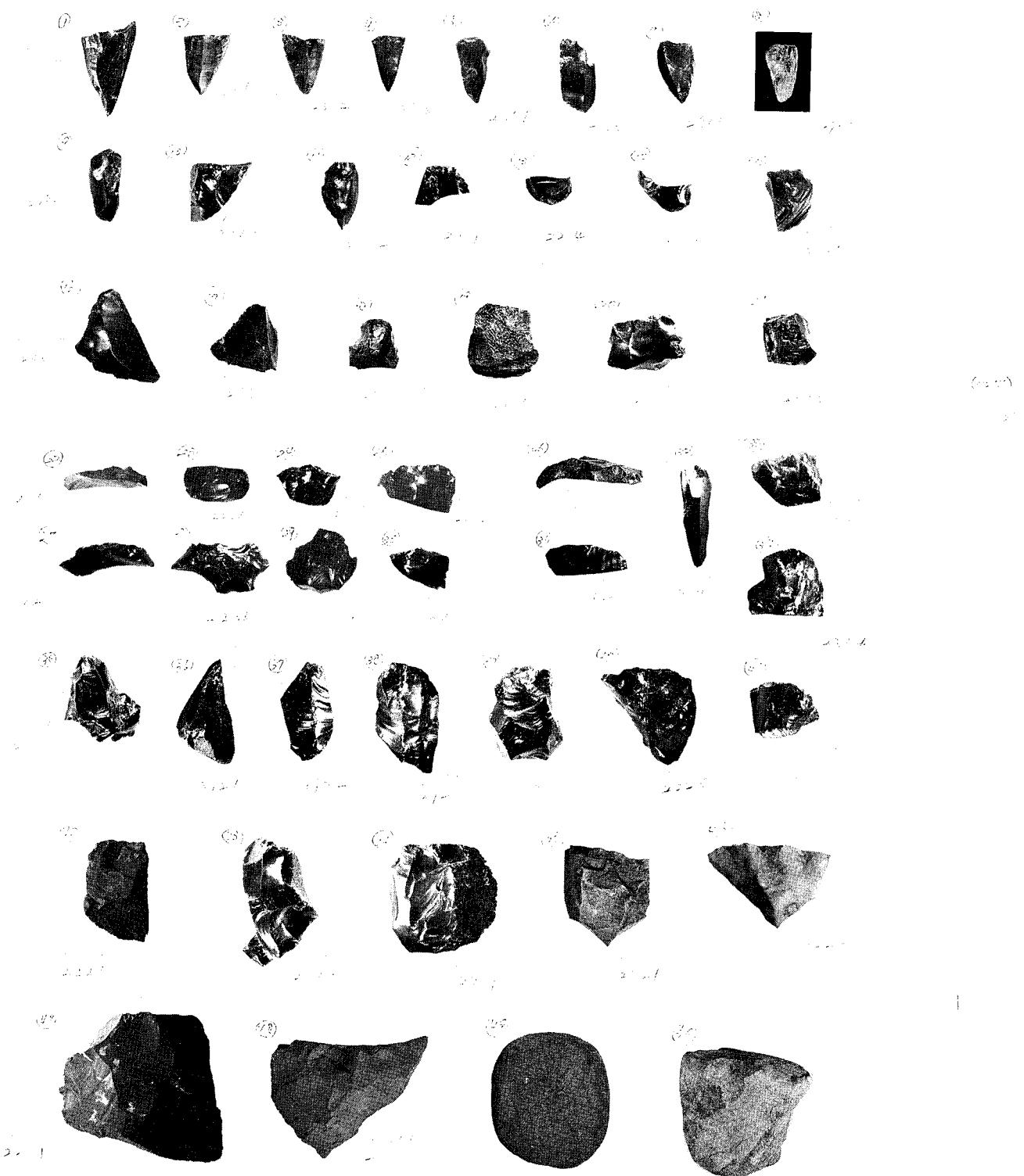
2269



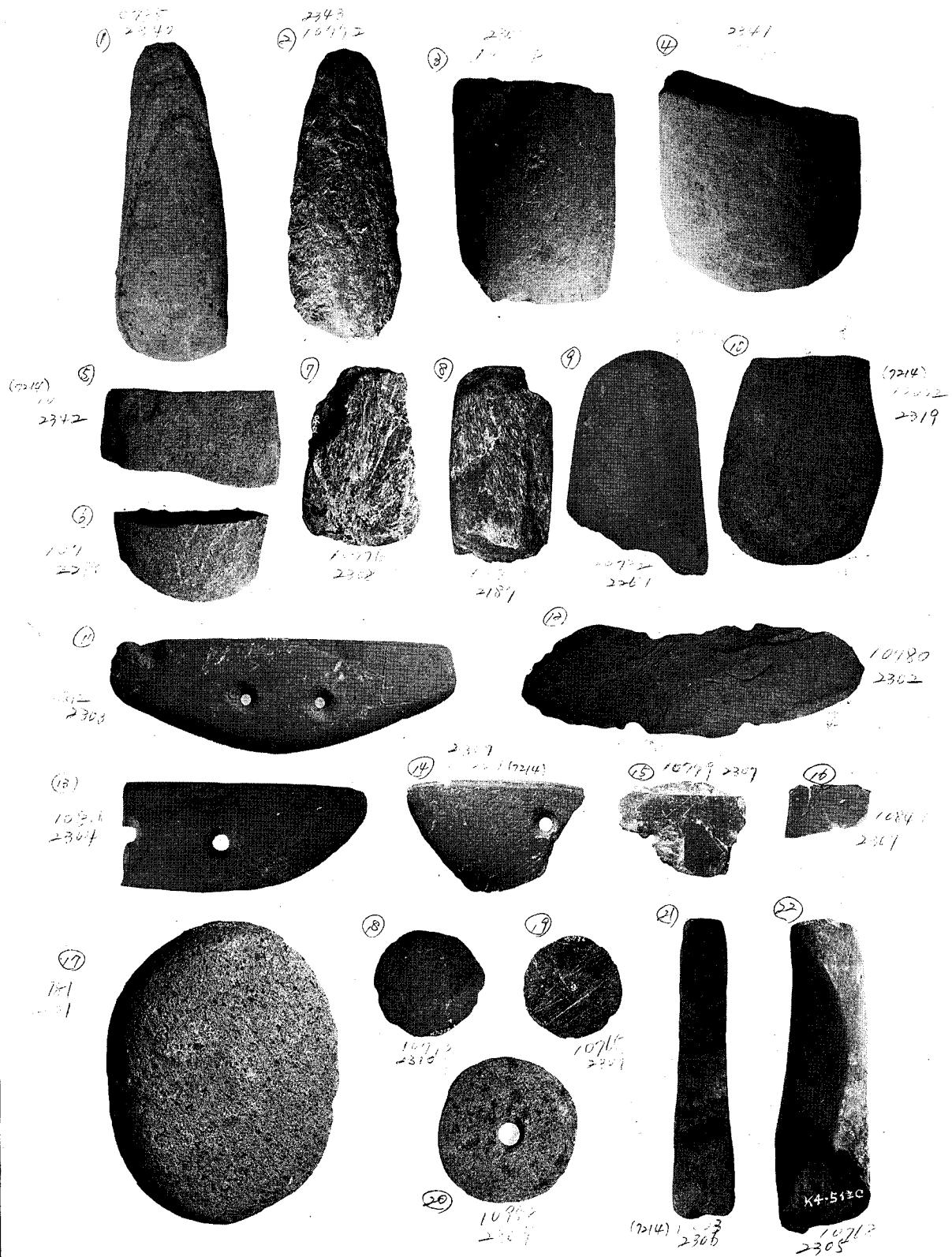
2. 石核再生剝片 — A、B、D、E 地区出土 —

2268

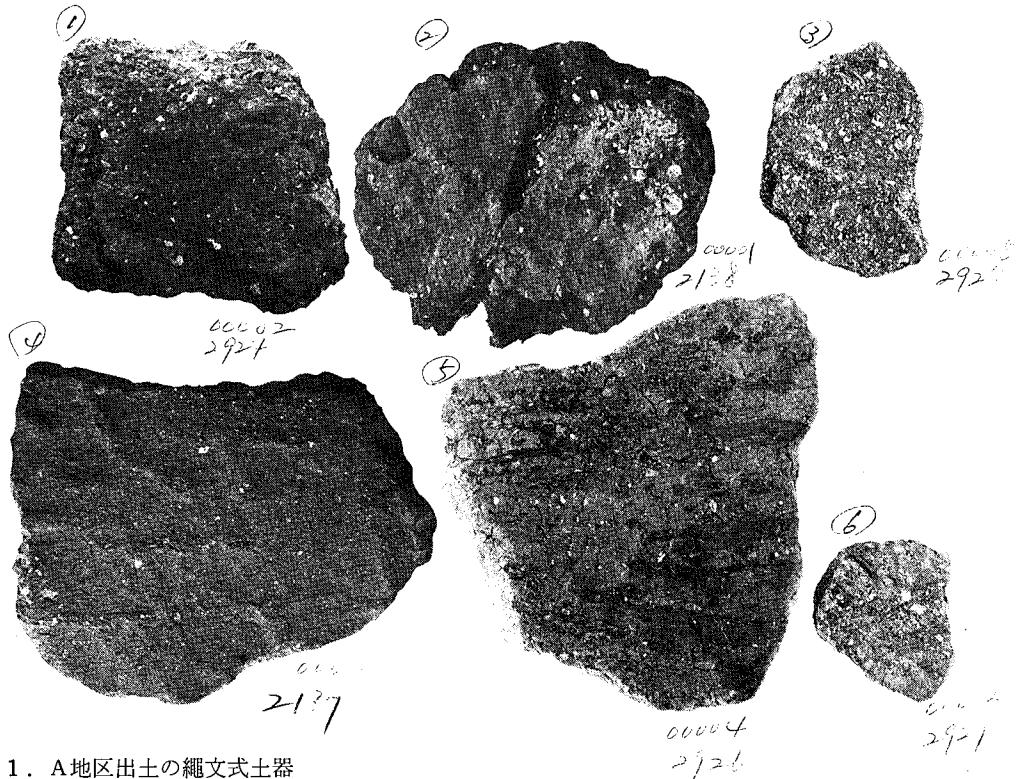
P L. 54 石器



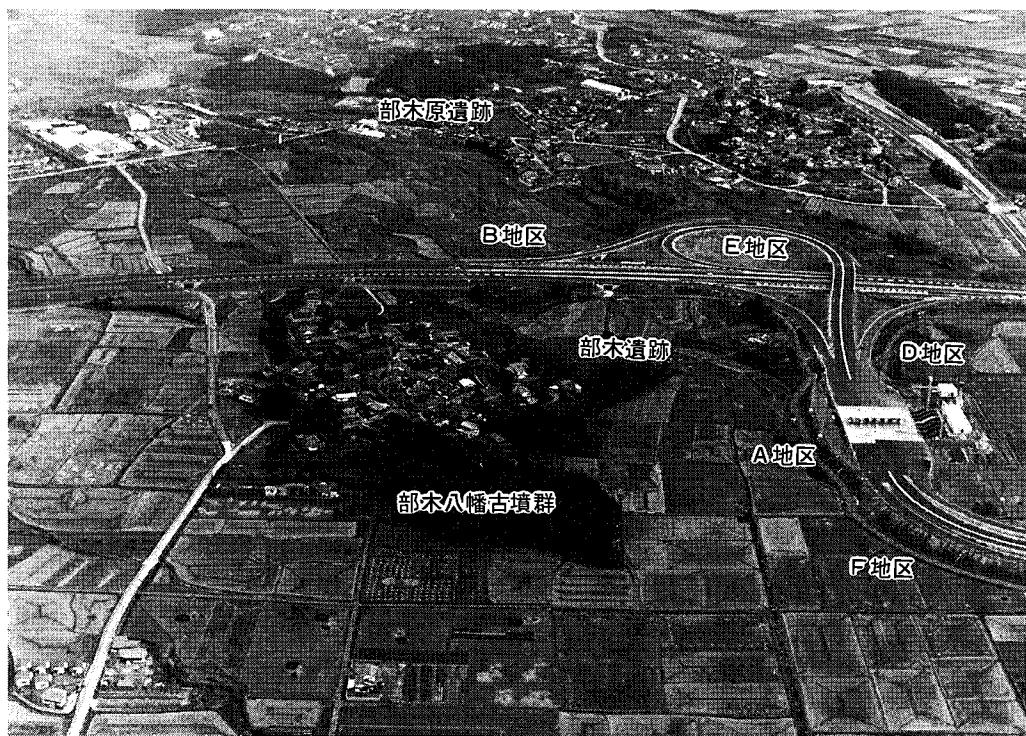
細石核・細石核再生剝片・石核・石核再生剝片 - A、B、D、E 地区出土 -



磨製石器・石製品 - A、D、E、F 地区出土 -



1. A地区出土の縄文式土器



2. 福岡東インターチェンジ全景（航空写真）昭和49年11月撮影

2912

**九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告**

**蒲田遺跡 258**

**福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集**

**1975年（昭和50年）3月31日**

**発行 福岡市教育委員会  
印刷 (株) チューエツ**